鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　33

平成28年度発掘調査報告

（第２分冊）

米　町　遺　跡

名越ヶ谷遺跡

北条小町邸跡

長谷小路周辺遺跡

台　山　遺　跡

平成29年３月

鎌倉市教育委員会

米町遺跡（大町二丁目 2340 番 1 地点） 1 面遺構 3 （井戸・南から）

長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目 194 番 71） Ⅱ区古代竪穴住居全景（北西から）

ご あ い さ つ

本市は、市域のおおよそ６割が埋蔵文化財包蔵地であり、多くの市民が埋蔵文化財の眠る土地で生活を送っています。

近年、古い家屋や店舗の建て替えに伴い、埋蔵文化財に影響を及ぼす工事が増加し、長い年月地下で眠っていた文化財が失われることも増加してきています。

私たちが日々の生活を送っていく上で、やむを得ず失われる埋蔵文化財について記録を保存し後世に残すことは、現在を生きる私たちの責務であると言えます。

鎌倉市教育委員会では、昭和５９年度から個人専用住宅等の建設に係る発掘調査を実施しています。本書は平成１８・２０・２２・２３・２５・２７年度に実施した、個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査１１ヶ所の調査記録を掲載しています。

本書が、武家政治発祥の地として知られ、今なお観光・文化都市として栄える鎌倉の歴史を解き明かす一助となればと願う次第です。

最後になりましたが、調査の実施に当たり、関係者の皆様に発掘調査に対し深いご理解を賜るとともに、調査の期間中、さまざまなご協力をいただきましたことを心からお礼を申しあげます。

平成 29 年 3 月 31 日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成２８年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
2　本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第１分冊に掲載した表のとおりである。
3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第２分冊）

例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅱ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅲ

７　米町遺跡（No.245）大町二丁目２３４０番１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第二章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第三章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第四章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第五章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
付　編　米町遺跡の寄生虫卵分析・花粉分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

８　名越ヶ谷遺跡（№231）大町六丁目１５０６番１１の一部地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第二章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第三章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
第四章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
第五章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

９　北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目４０３番１４地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
第二章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第三章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第四章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
第五章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120

１０　長谷小路周辺遺跡（№236）由比ガ浜三丁目１９４番７１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第二章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第三章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170

１１　台山遺跡（№29）山ノ内８６０番２地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
第二章　調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
第三章　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221

第四章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 221
第五章　調査成果のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 231
付　編　台山遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析・・・・・・・・・・・・・・・ 232

平成28年度の緊急発掘調査地点（1～4）
本書掲載の平成18・20・22・23・25・27年度発掘調査地点（①～⑪）
※遺跡名は第1分冊の一覧表を参照

鎌倉市全図

米町遺跡（No.245）

大町二丁目 2340 番 1 地点

例　言

1．本報告は、鎌倉市大町二丁目 2340 番 1 において実施した米町遺跡（鎌倉市 No.245）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は平成 23 年 4 月 25 日から同年 7 月 8 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、57㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員　　押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調　査　員　　渡辺美佐子、岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作　業　員　　沼上三代治、佐藤美隆、鈴木啓之、江津兵太
（公益社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者　押木弘己、岡田慶子、吉田桂子、佐藤千尋（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

4．本報告の執筆と編集は、押木が行った。

5．本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。

6．本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前に打設された鎌倉市 3・4 級基準点データを基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正値となっていない。

7．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＫＭ１１０１」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、 筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明　2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：愛知県　2012『愛知県史』別編窯業 3　中世・近世常滑系

目　　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 5

第二章　調査の方法と経過…… 5

第１節　調査に至る経緯

第２節　調査の方法

第３節　調査の経過

第三章　基本土層…… 8

第四章　発見された遺構と遺物…… 12

第五章　調査成果のまとめ…… 28

付　編　米町遺跡の寄生虫卵分析・花粉分析…… 47

挿図目次

図１　調査地点の位置 …… 6
図２　調査区配置図 …… 7
図３　調査区壁断面図 …… 9
図４　１面 全体図 …… 13
図５　１面 遺構３（井戸） …… 14
図６　２面 全体図 …… 16
図７　3a 面 全体図・炉穴個別図 …… 18
図８　3b 面 全体図 …… 20
図９　４面 全体図 …… 21
図 10　出土遺物（1） …… 22
図 11　出土遺物（2） …… 23
図 12　出土遺物（3） …… 24
図 13　出土遺物（4） …… 25
図 14　出土遺物（5） …… 26
図 15　出土遺物（6） …… 27
図 16　周辺調査地点および道路推定ライン … 28

表　目　次

表１　出土遺物観察表 …… 31
表２　出土遺物カウント表 …… 38

図版目次

図版１…… 51

1. 現地調査前（北東から）
2. 調査地から祇園山を望む（Ⅱ区調査時・南から）
3. Ⅰ区 表土掘削後（北東から）
4. Ⅰ・Ⅱ区 表土掘削状況（西から）
5. Ⅰ区 攪乱１（南西から）

6. Ⅰ区1面（北東から）
図版2　Ⅰ区Ⅰ面 遺構3（井戸・4面調査時）①
…… 52
1. 井戸枠検出状況（南から）
2. 井戸枠 土台材上かわらけ出土状況(東から)
3. 井戸枠 南壁（北東から）
4. 井戸枠 北壁（南西から）
5. 井戸枠 南西隅の支柱（東から）
6. 井戸枠 北西隅の支柱（南から）
図版3　Ⅰ区Ⅰ面 遺構3（井戸・4面調査時）②
…… 53
1. 井戸枠 北西隅の土台材（南東から）
2. 井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材(南から)
3. 井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材(南から)
4. 調査区東壁での土層断面（北西から）
5. 井戸枠内と裏込め土 土層断面（北西から）
6. 中世基盤層～波食台岩盤 土層断面(北東から)
図版4 …… 54
1. Ⅰ区2面（北東から）
2. Ⅰ区2面遺構47（南東から）
3. Ⅰ区3面プラン確認後（北東から）
4. Ⅰ区3面プラン確認後（東から）
5. Ⅰ区3面上遺物出土状況（南東から）
図版5 …… 55
1. Ⅰ区3面（北東から）
2. Ⅰ区3面土間状整地面（北から）
3. Ⅰ区3面土間状整地面の断面（北東から）
4. Ⅰ区3面土間状遺構・炉址の断面(北東から)
5. Ⅰ区3面炉址の断面（北東から）
6. Ⅰ区3面炉址南半部（北東から）
7. Ⅰ区3面炉址掘り方（北東から）
図版6 …… 56
1. Ⅰ区3面遺構214b 遺物出土状況（南東から）
2. Ⅰ区3面遺構214b 遺物出土状況（南東から）
3. Ⅰ区3面遺構214b（南東から）
4. Ⅰ区3面遺構214b 断面（北西から）
5. Ⅰ区3面遺構214b 断面（南東から）
図版7 …… 57
1. Ⅰ区大雨後（2011年5月30日・西から）
2. Ⅰ区3b面（北東から）
3. Ⅰ区4面（北東から）
4. Ⅰ区西壁断面（南東から）
5. Ⅰ区北壁断面（南西から）
図版8 …… 58
1. Ⅱ区攪乱1（北東から）
2. Ⅱ区1面（北東から）
3. Ⅱ区1面　東西道路（北西から）
4. Ⅱ区2面（北東から）
5. Ⅱ区2面東西道路・遺構214（北西から）
6. Ⅱ区2面遺構215（南西から）
図版9 …… 59
1. Ⅱ区3面（北東から）
2. Ⅱ区3面東西道路・遺構214b（南西から）
3. Ⅱ区3b面（北東から）
4. Ⅱ区3b面東西道路・遺構214b（南西から）
図版10 …… 60
1. Ⅱ区3b面下（北東から）
2. Ⅱ区4面（北東から）
3. Ⅱ区4面遺構259（北東から）
4. Ⅱ区4面遺構259 断面（北東から）
5. Ⅱ区4面下（北東から）
図版11 …… 61
1. Ⅱ区4面遺構300(4面下調査時・北東から)
2. Ⅱ区4面遺構300(4面下調査時・北東から)
3. Ⅱ区4面遺構300 断面（北東から）
4. Ⅱ区4面遺構300 断面（南西から）
5. Ⅱ区北壁断面（南西から）
図版12～17　出土遺物…… 62

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

米町遺跡は、鎌倉市街地の南東部に位置し、東西 700 m、南北 200 mの広がりをもつ。本地点は遺跡範囲内で 16 例目の調査地となる（図１－地点ａ）。地形的には滑川の支流である逆川の右岸（北岸）に位置し、北の山稜（祇園山）裾部から逆川に向かう微高地上に立地している。現地表の標高は、7.9 m。

調査地の北には長谷・笹目から名越方面へと通じる東西道（県道鎌倉葉山線）が走る。中世から都市鎌倉の基幹道であったと考えられ、奈良時代の宝亀二年（771）以前の東海道駅路に前身を求める見方もある（藤沢市教育委員会 1997）。中世の道路名称については定説がないものの、「大町大路」とする理解が一般的かと思われる。遺跡名の「米町」は『吾妻鏡』建保元年（1213）五月二日条に「若宮大路米町口」「米町辻」などとあり、後述する町屋免許の記事などとともに、鎌倉時代に遡る地域名であることを示している。時代は下り、明応年間（1492 ～ 1501）の製作とされる「善寶寺寺地図」には「置石」（段葛）の東に滑川に架かる橋（延命寺橋）と町屋らしき家並みが続き、そこに「米町」の注記がみえる。政権都市としての役割を終えた戦国時代においても、「米町」が一定の賑わいをもつ地区であったことを示す貴重な史料である。

鎌倉時代、建長三年（1251）と文永二年（1265）の二回、鎌倉の商業地区を規定する通達が出されたことは有名であるが、そこには「米町」や異称の「穀町」として当地区も挙げられている。詳細な範囲は定かでないが、鎌倉中期には米町が幕府の公認を受けるだけの商業地に成長していたことを物語っている。

図１－地点ｂでは庶民の家屋と考えられる簡素な板壁建物の建ち並ぶさまが見て取れ、傘轆轤や製作途上の草履芯など手工業者の存在を窺わせる遺物が出土している。これらは主に鎌倉中・後期に属しており、史料が示す町屋的活動を裏付ける成果となった。一方で、当地区には御家人の邸宅が存在していたことを史料は伝えており、一概に庶民（≒商工業者）の居住・活動の場という要素だけで当地を語ることはできない。地点ｄでは溝と柱穴列（塀）によって区画された空間に多数の井戸が穿たれており、区画の面積や井戸の規模が大きい点、そして常滑突帯付三耳壺などの優品も含む出土遺物から、寺院地または屋敷地としての性格が考えられている。この点も史料が示すとおりで、当地区の中世景観は屋敷・寺院地と庶民の居住地とが混在して形づくられていたのであろう。

なお、本編の第１章および第５章には、前稿（押木 2011）を再構成した文章を掲載した。記載内容には前稿からの変更点もあるが、本報告の内容を以って正式な見解に改めたい（参考文献は第五章末に掲載）。

第二章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では最大深度 3.85 mの地盤改良工事（柱状改良）を基礎工事として行うことから、市教委では平成 22 年 11 月 24・25 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下 50cm で中世の遺物包含層を確認し、地表下 56 ～ 116cmの間に中世を中心とする 4 枚の遺構面が検出されたことから、工事の実施に先立っては本格的な発掘調査を実施する必要があると判断した。

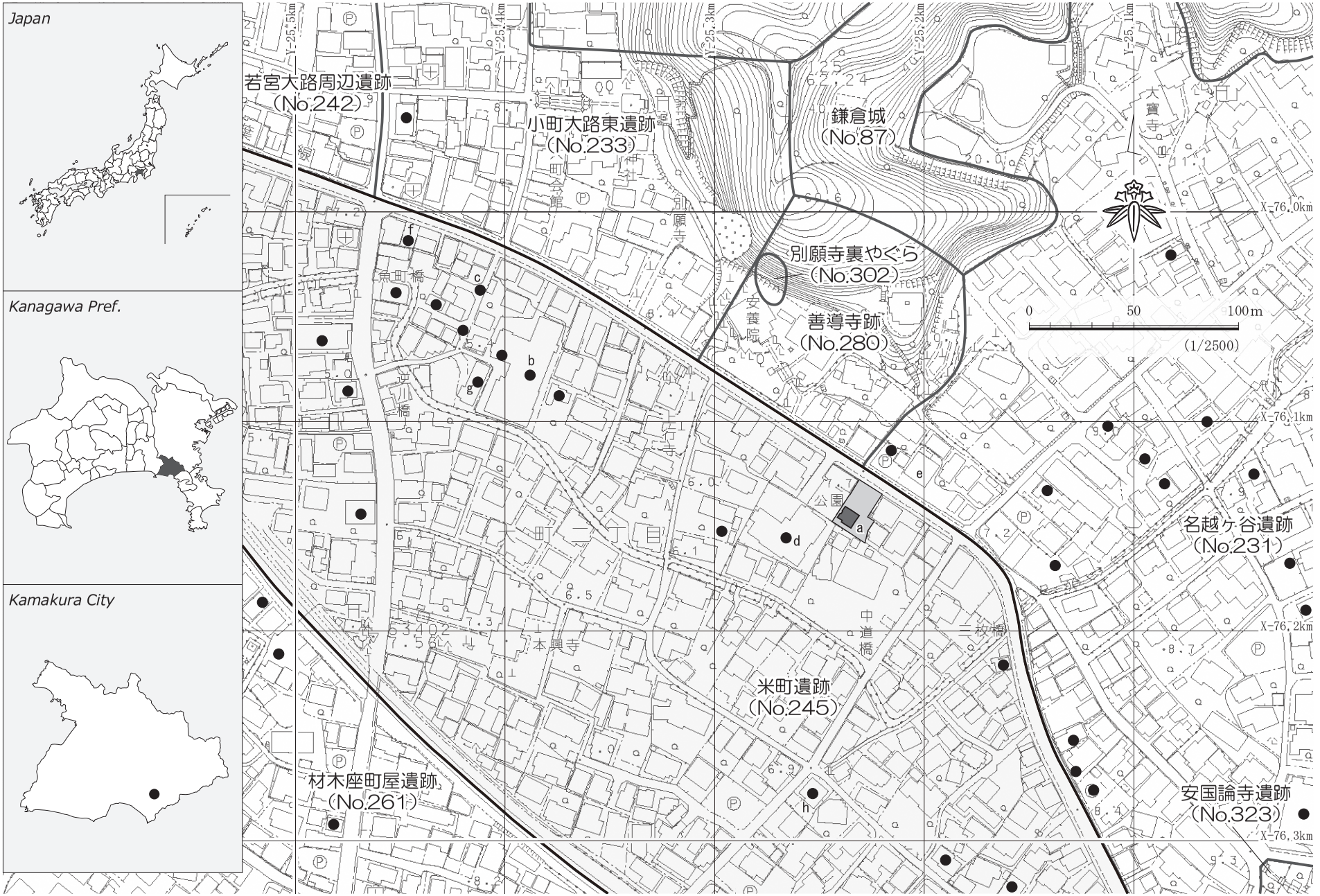

Japan
Kanagawa Pref.
Kamakura City
若宮大路周辺遺跡
(No.242)
小町大路東遺跡
(No.233)
鎌倉城
(No.87)
別願寺裏やぐら
(No.302)
善導寺跡
(No.280)
名越ヶ谷遺跡
(No.231)
米町遺跡
(No.245)
材木座町屋遺跡
(No.261)
安国論寺遺跡
(No.323)
0
50
100m
(1/2500)
Y-25,5km
Y-25,4km
Y-25,3km
Y-25,2km
Y-25,1km
X-76,0km
X-76,1km
X-76,2km
X-76,3km

図１　調査地点の位置

現地調査は平成 23 年 4 月 25 日～ 7 月 8 日の約二ヶ月間をかけて実施した。調査範囲は当初 73.11 ㎡を予定していたが、隣地境の崩落防止など安全面への配慮から、最終的な面積は 55.99㎡に縮小した。

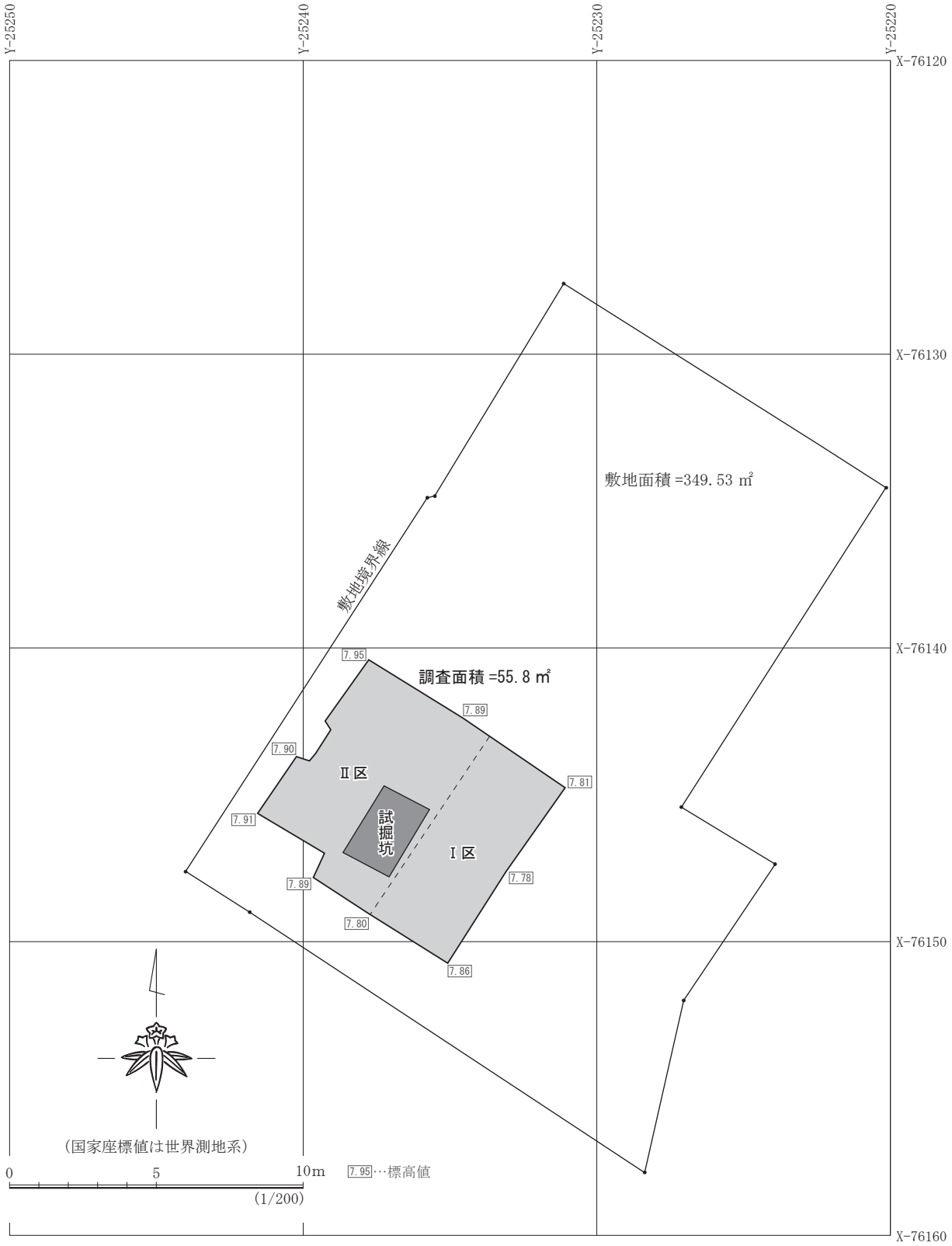


図２　調査区配置図

第２節　調査の方法

掘削に伴う残土置き場を確保する必要から、調査区は東側のⅠ区と西側のⅡ区とに分け、Ⅰ区→Ⅱ区の順に調査を進めた。確認調査の結果を受け、地表下 50cm までは重機で掘削し、以下は人力での掘削に移行した。なお、現地では検出した遺構面を問わず遺構番号１～ 100 までをⅠ区に、200 以降をⅡ区に振り分けた。本報告では番号の改称は行わず、現地調査時のものを使用する。

今回の調査では、中世に帰属する５枚の遺構面を確認し、順次、写真撮影と測量図の作成を行った。測量に当たっては国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は市道上の鎌倉市３級基準点「53402」と、同４級基準点「UO033」の二点間関係をもとに開放トラバース法によって行った。両基準点の座標値は旧測地系に準じていたため国土地理院が公開する Web 版「TKY2JGD」を用いて世界測地系座標値に変換した後に測量・移設に当たった。標高は３級基準点「53402」（7.580 m）を起点として、直接水準測量を行って調査敷地内の測量杭に移設した。この時点では同年３月 11 日に発生した東日本大震災に伴う地殻変動に対応した補正測量が進んでいなかったため、本報告では未補正の座標値を提示している。

第３節　調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。重機での表土掘削はⅠ・Ⅱ区を合わせて平成 23 年４月 25 日に実施し、翌 26 日に調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。両区とも遺構の確認と掘削、図面の作成および写真撮影など記録作業を進めた。Ⅰ区は６月９日に、Ⅱ区は７月６日に調査を終了した。７月８日には調査用具を撤収して、現地での全調査工程を完了した。

出土品および記録類の基礎整理は平成 25 年度に行い、報告書作成に関わる作業は平成 27 年度の後半から 28 年度前半にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課分室において断続的に行った。

第三章　基本土層

本調査地点は鎌倉市街地の南西部に位置し、北は丘陵尾根（祇園山）に、南は逆川で画された微高地に立地している。この逆川北岸（右岸）一帯の丘陵裾部は縄文海進期に侵食・形成された波食台岩盤を基盤とし、その上に厚さ 60 ～ 80cm ほどの砂層が堆積している（図 3-Ⅳｅ～Ⅳｃ層）。この上位に褐色砂質土（Ⅳｂ層）および黒褐色粘質土（Ⅳａ層）が堆積する。Ⅳａ層には少量の中世遺物が混入しており、Ⅳｂ層を中世基盤層（中世地山）とすることができる。波食台岩盤の上面は標高 5.4 m 付近で、Ⅳａ層上面は 6.45 m～ 6.6 m前後で確認され、南に向けてわずかに低くなる。Ⅳａ層の上位には中世の盛土整地層および遺構埋土が堆積している（Ⅲ層）。Ⅲ層は標高 7.6 m前後まで１m強の厚さを持ち、この中で人為的土地改変が幾度も繰り返された結果、100 層以上の細別層を確認することとなった。大きく捉えると、Ⅳ層上面（４面）も含め計５枚の遺構面の重なりを確認している。Ⅱ層は中世の遺物包含層であるが、上面が削平で失われているとすれば、中世後期の遺構面構築土であった可能性も考えられる。

Ⅰ層は近世～近代の堆積層で、Ⅱ層以下に比べ、明るい褐色を呈する砂質土である。0 層は砕石層で、この上にアスファルトが貼られ駐車場として利用されていた。現地表面の標高は 8.0 m弱を測る（図２）。

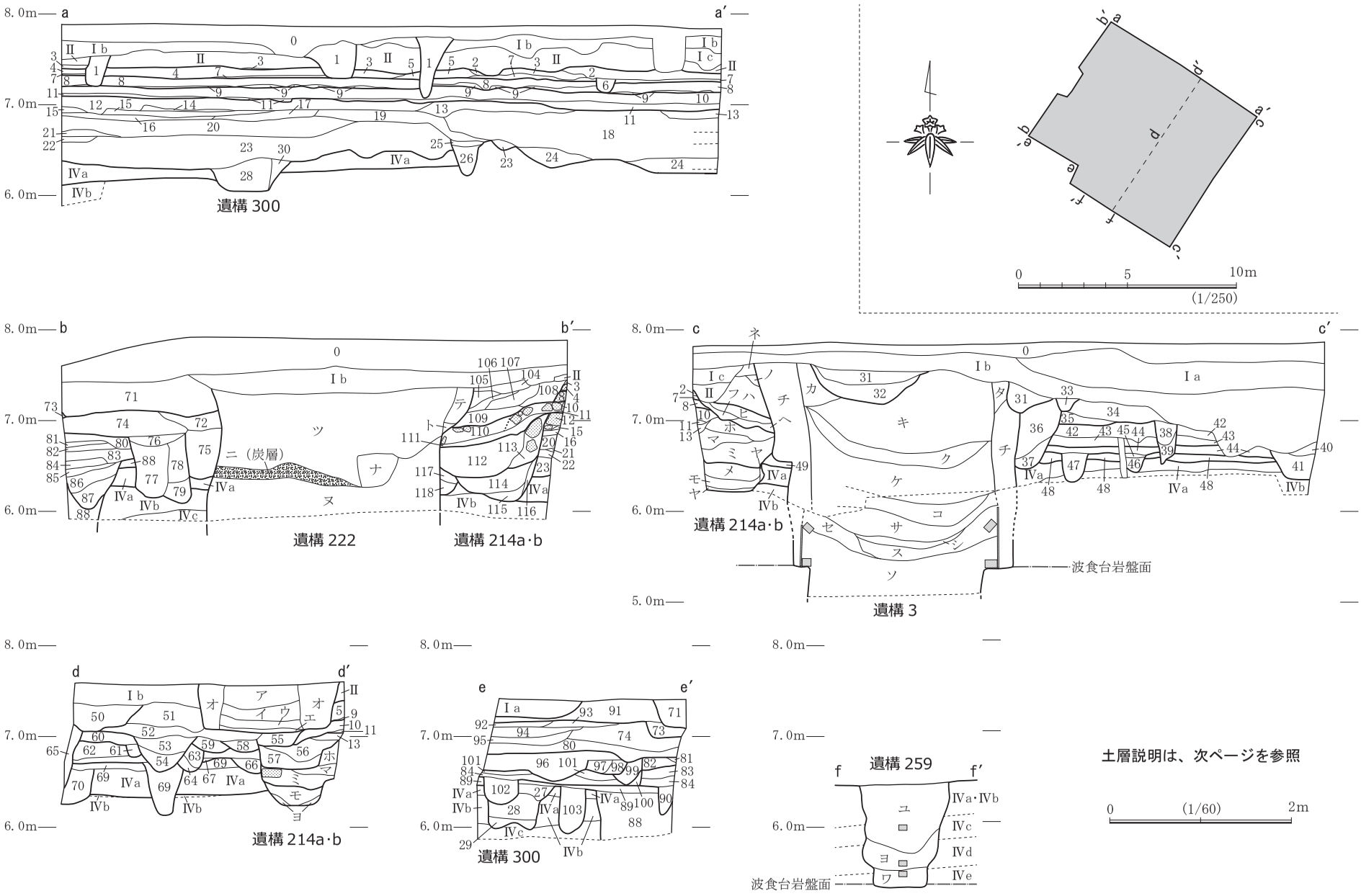

遺構 300
遺構 222
遺構 214a·b
遺構 214a·b
遺構 3
遺構 214a·b
遺構 300
遺構 259
波食台岩盤面
波食台岩盤面
0 5 10m
(1/250)
0 (1/60) 2m
土層説明は、次ページを参照

図３　調査区壁断面図

基本土層説明

0	砕石	
Ⅰa	暗褐色土	砂質土。拳大の泥岩ブロック多い。近世以降。
Ⅰb	暗褐色土	砂質土。近世以降。
Ⅰc	暗褐色土	砂質土。近世以降。
Ⅱ	褐色土	1 ～ 3mm 大の泥岩粒と拳大の泥岩ブロック密。締まりあり。中世～近世の整地層か。
Ⅲ	中世層	中世の遺構面および遺構覆土、遺物包含層の総称。100 層以上に細別。
Ⅳa	黒褐色土	粘質土。締まり強い。中世基盤層。
Ⅳb	褐色土	砂質土。締まりややあり。
Ⅳc	暗黄灰色砂	やや粗粒。締まりあり。
Ⅳd	暗黄灰色砂	粗砂。5 ～ 10mm の泥岩粒少量。
Ⅳe	黒色砂	微細砂。締まり弱い。

中世層（Ⅲ層） 土層説明

1	暗褐色土	1 ～ 5cm の泥岩粒多い。
2	褐色土	1 ～ 5cm の泥岩粒やや密。
3	褐色土	砂質土。混入物殆どなし。
4	明黄褐色土	人頭大の泥岩ブロック並置。道路構築土。
5	褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒多い。締まりあり。
6	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
7	褐色土	砂質土。混入物なし。締まりややあり。
8	明黄褐色土	人頭大の泥岩ブロック並置。道路構築土。
9	褐色土	砂質土。混入物なし。締まりややあり。
10	明黄褐色土	人頭大の泥岩ブロックを並置。道路構築土。
11	褐色土	砂質土。混入物なし。
12	明黄褐色土	人頭大の泥岩ブロックを並置。道路構築土。
13	暗褐色土	砂質土＋粘質土。泥岩ブロック少量。
14	灰褐色土	砂質土。混入物なし。締まりややあり。
15	灰褐色土	砂質土。1 ～ 2cm の泥岩粒少量。
16	灰褐色土	砂質土。混入物なし。
17	暗灰褐色土	砂質土。1cm 以下の泥岩粒少量。
18	褐色土	砂質＋粘質土。1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
19	褐色土	砂質土。粘質土ブロック少量、泥岩ブロック微量。
20	黒灰色土	砂質土＋粘質土。
21	黒褐色土	粘質土。5mm 大の泥岩粒微量。
22	黒褐色土	粘質土。混入物なし。締まり弱い。
23	暗褐色土	砂質土 1cm の泥岩粒少量。粘性ややあり、締まり弱い。
24	黒褐色土	粘質土。1cm の泥岩粒、炭粒ごく微量。締まり弱い。
25	黒褐色土	粘質土ベース。砂粒、炭粒少量。
26	黒褐色土	粘質土。2 ～ 3cm の泥岩粒少量。
27	黒褐色土	粘質土。1mm 以下の白色・褐色粒子少量。粘性強く、締まりあり。
28	黒褐色土	粘質土。1mm 以下の白色・褐色粒子ごく微量。粘性強く、締まりあり。
29	灰褐色土	微細な砂質土。粘性ややあり。
30	黒褐色土	粘質土。砂質土少量。
31	暗褐色土	砂質土。1cm 以下の泥岩粒少量。
32	暗褐色土	砂質土。3cm 大の泥岩粒少量。
33	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
34	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒、炭粒少量。締まりあり。
35	暗褐色土	1cm 大の泥岩粒少量。
36	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
37	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒微量。
38	暗褐色土	1 ～ 3cm の泥岩粒多い。締まり弱い。
39	暗褐色土	1cm の泥岩粒微量。締まり弱い。
遺構 47 40	暗褐色土	1cm の泥岩粒微量。締まり弱い。
遺構 47 41	暗褐色土	1cm の泥岩粒少量。締まり弱い。
42	暗褐色土	3 ～ 5cm の泥岩粒多い。締まりあり。
43	褐色土	砂質土。1cm の泥岩粒少量。
44	黒褐色土	粘質土。1cm 以下の泥岩粒少量。土間状遺構と同レベル。
45	黒褐色土	粘質土。砂粒、炭粒少量。締まりややあり。
46	黒褐色土	粘質土＋砂。1cm 大の泥岩粒少量。
47	暗褐色土	粘質土＋砂。締まりややあり。
48	黒褐色土	粘質土。砂粒、炭粒少量。締まりあり。
49	黒褐色土	粘質土。砂粒、炭粒微量。Ⅳa 層より締まり弱い。
50	暗褐色土	砂質土。2 ～ 3cm の泥岩粒少量。
51	暗褐色土	砂質土。1cm 大の泥岩粒少量。締まりややあり。
52	暗褐色土	3 ～ 5cm の泥岩粒多い。
53	暗褐色土	1cm 大の泥岩粒やや多い。締まり弱い。
54	暗褐色土	1cm 大の泥岩粒少量。締まり弱い。
遺構 214a① 55	褐色土	砂質土。3cm 大の泥岩粒ごく微量。2 面道路側溝か。
遺構 214a② 56	褐色土	砂質土。混入物殆どなし。締まりやや強い。
遺構 214a② 57	褐色土	砂質土。2cm 大の泥岩粒ごく微量。56 層より締まり弱い。
58	褐色土	砂質土。混入物殆どなし。
59	暗褐色土	2cm 大の泥岩粒少量。
60	褐色土	3 ～ 5cm の泥岩粒が主体。締まり強い。
61	暗褐色土	2 ～ 3cm の泥岩粒やや多い。締まりあり。
62	暗褐色土	2cm 大の泥岩粒少量。締まりややあり。
63	褐色土	砂質土。1cm 大の泥岩粒ごく微量。
64	褐色土	砂質土。1cm 大の泥岩粒微量。63 層より色調やや暗い。
65	暗褐色土	砂質土。2cm 大の泥岩粒少量。
66	暗褐色土	1cm 大の泥岩粒微量。
67	黒褐色土	砂質土。炭粒微量。粘性、締まりややあり。
68	暗褐色土	1 ～ 2cm の泥岩粒やや多い。締まり、粘性ややあり。
69	明黄褐色土	1 ～ 4cm の泥岩粒密。3 面土間状遺構の構築土。
70	黒褐色土	炭粒微量。Ⅳa 層より締まりやや弱い。
71	黒褐色土	砂質土。拳大の泥岩ブロック少量。締まり弱い。
72	暗褐色土	1 ～ 2cm の泥岩粒少量。
73	暗褐色土	1cm 以下の泥岩粒少量。締まりややあり。

74　黄褐色土　1cm の泥岩粒主体。締まりあり。
75　暗褐色土　5cm ～拳大の泥岩粒やや多い。締まりあり。
76　暗褐色土　1cm 以下の泥岩粒少量。
77　暗褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック多い。
78　暗褐色土　1cm 以下の泥岩粒やや多い。
79　黒褐色土　粘質土。炭粒少量。
80　暗褐色土　1cm 以下の泥岩粒多量。締まりややあり。81　灰褐色土　砂質土。混入物なし。
82　暗褐色土　拳大の泥岩粒多い。締まりあり。
83　黄褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック主体。締まり強い。
84　暗褐色土　砂質土。1 ～ 3cm の泥岩粒微量。締まりややあり。
85　黒褐色土　粘質土。1cm 以下の泥岩粒少量。
86　黒褐色土　粘質土。締まり弱い。
87　灰褐色土　微細な砂質土。締まり弱い。
88　黒褐色土　炭粒微量。粘性強く、締まりややあり。
89　明黄褐色土　1cm 大の泥岩粒密。3 面土間状遺構の構築土。＝69 層と同一層か。
90　暗褐色土　砂質土。5mm 大の泥岩粒ごく微量。粘性ややあり。
91　暗褐色土　1cm 以下の泥岩粒少量。締まり弱い。
92　明黄褐色土　拳大の泥岩ブロック主体。締まり強い。
93　暗褐色土　1cm 以下の泥岩ブロック主体。締まりあり。
94　明黄褐色土　泥岩の粒・ブロックによる整地層。締まり強い。
95　暗褐色土　1cm ～拳大の泥岩少量。締まりややあり。
96　明黄褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック主体。締まり強い。
97　灰褐色土　砂質土。混入物なし。締まりややあり。
98　暗褐色土　拳大の泥岩ブロック少量。締まりややあり。
99　暗褐色土　3cm 大の泥岩ブロックやや多い。締まりややあり。
100 暗褐色土　締まりややあり。
101 明黄褐色土　5cm 大の泥岩ブロック主体。締まり強い。
102 黒褐色土　5mm 大の泥岩粒少量。粘性、締まりあり。
103 灰黒色土　黒色粘質土をベースに灰色砂が斑紋状に混入。粘性あり、締まりややあり。
104 暗灰褐色土　砂質土。1 ～ 5cm の泥岩粒少量。
105 明黄褐色土　1 ～ 2cm の泥岩粒主体。締まりあり。
106 黄灰色砂　1cm 大の泥岩粒多量。
107 明黄褐色土　1 ～ 5cm の泥岩粒主体。締まり強い。
108 暗褐色土　1cm 大の泥岩粒少量。

遺構
214a① 109 明黄褐色土　1 ～ 5cm の泥岩粒主体。締まり強い。
214a② 110 黄灰色砂　1cm 以下の泥岩粒ごく微量。
214a② 111 灰色砂　混入物なし。
214b① 112 灰黒色土　粘質土＋砂。1 ～ 2cm 大の泥岩粒少量。
214b① 113 灰黒色土　粘質土主体＋砂粒少量。拳大の泥岩ブロック少量。
214b② 114 黒褐色土　粘質土主体＋砂少量。5cm ～拳大の泥岩ブロック微量。遺構 214b②－メ層相当。
214b② 115 黒褐色土　粘質土。混入物なし。締まり弱い。遺構 214b②－モ層相当。
214b② 116 黒褐色土　粘質土。混入物なし。締まり非常に弱い。遺構 214b②－ヤ層相当。
117 黒褐色土　粘質土。炭粒少量。
118 黒褐色土　粘質土。炭粒やや多い。締まり弱い。

撹乱・主要遺構　土層説明

0 面　撹乱 1

ア　暗褐色土　砂質土。1cm 大の泥岩粒少量。締まり弱い。
イ　暗褐色土　砂質土。炭粒多い。
ウ　黒色土　炭粒が主体。
エ　暗褐色土　砂質土。2cm 大の泥岩粒やや多い。締まり強い。
オ　砂質土　1 ～ 5cm の泥岩粒少量。

1 面　遺構 3（井戸）

カ～チ　図 5－1 ～ 12 層。

1 面　遺構 222（井戸 ?）

ツ　暗褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック多い。
テ　暗灰褐色土　砂質土。1cm 大の泥岩粒少量。
ト　暗灰褐色土　砂質土。1mm 以下の泥岩粒微量。
ナ　暗黄褐色土　拳大の泥岩ブロック多い。締まりあり。
ニ　黒褐色土　炭粒主体。締まり弱い。
ヌ　暗褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック非常に多い。

1 面　遺構 214a（道路側溝）

214a① ネ　暗褐色土　3cm 大の泥岩粒多い。締まりあり。
214a① ノ　暗褐色土　1 ～ 2cm の泥岩粒少量。
214a① ハ　暗褐色土　1cm ～拳大の泥岩粒やや多い。締まりあり。
214a② ヒ　褐色土　砂質土。1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
214a② フ　明黄褐色土　1 ～ 3cm の泥岩粒が密に入る。締まりあり。
214a② ヘ　褐色土　砂質土。3cm 大の泥岩粒少量。

2 面・3 面　遺構 214b（道路側溝）

214b① ホ　明黄褐色土　3cm ～拳大の泥岩ブロックが密に入る。締まりあり。
214b① マ　褐色土　砂質土。
214b① ミ　褐色土　砂質土＋粘質土 1 ～ 3cm の泥岩粒少量。
214b② メ　暗褐色土　砂質土。粘質土ブロック、1cm 大の泥岩ブロック少量。
214b② モ　黒褐色土　粘質土。1cm 大の泥岩粒、炭粒ごく微量。締まり弱い。
214b② ヤ　黒褐色土　微細な砂質土。締まり弱い。

3b 面　遺構 259（土坑）

ユ　黒灰色土　粘質土。1cm 大の泥岩粒、炭粒微量。
ヨ　黒色土　炭粒主体。締まり弱い。
ワ　黒色土　粘質土＋砂。炭粒非常に多い。締まり弱い。

第四章　発見された遺構と遺物

前章で述べたように、本地点では中世基盤層（Ⅳ a 層）に達するまでに計 5 枚の遺構面を確認した。

最下層の 4 面はⅣ a 層上面で、帰属する遺構は南北溝や円筒状の土坑などごくわずかであった。これらの遺構覆土中からは僅少ながら中世の遺物が出土しており、またⅣ a 層の掘り下げを行った際にも中世の遺物が出土していることから、今回の調査で発見された遺構面は、概して中世の範囲で推移したことを確認できた。以下、新しい面（上層）から順に、検出遺構と出土遺物について説明する。遺構番号の振り方については、第二章第 2 節で述べたとおりである。

1 面（図 4）

7.1 ～ 7.4 m前後で確認した。表土除去後、1 面検出時までの人力掘削は「0 面下～ 1 面掘り下げ」として遺物の取り上げを行った。南側がわずかに低い。層準としてはⅠ層直下での確認で、調査区全体で安定した整地面を確認できた訳ではない。その中でも、調査区の北辺付近と西側のⅡ区で泥岩の濃密な範囲を確認している。北辺部分では大型の泥岩ブロックを多用し、下層面でも確認されている東西道路の最新段階と考えている。明確な平面プランとしては捉えられなかったが、断面の観察では深さ 50cm ほどの南側溝を伴っていたとことが推測できる。この埋土最上層（図 3-104 層）は、Ⅰ層に近似する。

1 面では土坑や井戸の他、近代の板敷き施設や近世の落ち込み（攪乱 1・2）も検出された。

攪乱 1　調査区の北東部、Ⅰ区とⅡ区に跨って検出された。長軸 2.1 m、短軸 1.2 mの長方形プランを呈し､確認面から 20cm 下で板敷き床面を検出した。長軸は N60° W を指す。板敷き面は標高 7.08 mで、掘り方の底面に幅 20 ～ 40cm の板材を長軸に沿って敷き並べていた。板材は腐朽が進んで厚さ 5mm 以下となり、取り上げ時には原形を保つことが叶わなかった。同様に四辺の側壁には腐朽が進んだ板材の痕が見られた。床板と側板は鉄釘で固定され、埋土中も含めて 24 点が出土している。この他、肥前系と瀬戸･美濃系の磁器染付碗が比較的まとまって出土し､かわらけなどの中世遺物も混在していた（表 2)。図 10-15 は瀬戸・美濃系陶器の皿。内面全面～口縁部外面にかけて灰釉が掛かる。

用途については不明だが、浅い半地下式の形状からは貯蔵・保管施設などが考えられる。

攪乱 2　調査区の南壁沿いで検出された。南に向けたなだらかな落ち込みで、南側と東西が調査区外に続くため、具体的な平面形態と規模は不明である。1 面上からの深さは 50 ～ 70cm を測る。埋土からは肥前系および瀬戸・美濃系、堺・明石系といった近世陶磁器が出土し、相当量の中世遺物も混在している（表 2・図 10-16 ～ 31)。

この他、掲載順が交錯しているが、表土掘削時および表面採集遺物を図 10-1 ～ 8 に、0 面下～ 1 面掘り下げ時に出土した遺物を図 11 に示した。57 ～ 63 の鉄釘には木片が固着している。攪乱 1 の木組みに伴っていた可能性が高い。65 の漆器や 66 ～ 71 の木製品は遺存状態が良いことから 1 面に帰属するとは考えにくく、試掘坑内やサブトレンチなど下層の堆積土に接触した際に掘り上げてしまったものと思われる。

遺構 3（井戸）　Ⅰ区の東壁際で検出された。東は調査区外に続くものの、2.8 m四方の方形掘り方で、2.2 mの方形木枠を持つ大型井戸に復元できる。Ⅰ層直下まで立ち上がり、本来はさらに上位の生活面から掘り込まれたものが、近世以降に削平を受けた可能性がある。調査区の壁際でもあるため、安全面を考慮して 1 面調査時に埋土を一気に掘り下げることはせず、4 面の調査まで順次、各遺構面より低い状態を保ちながら掘り進めていく方法を採った。その結果、確認面より 2.6 m掘り下げた標高 5.05 mでも底面に到達せず、ここで掘削を断念した。標高 5.4 mの波食台岩盤以下は 1.9 m四方の素掘りで、

岩盤面上の縁辺に幅 12cm、厚さ 8cm の厚板を据えて土台材としていた。土台材の先端部は西辺の材が凸状に、南辺と北辺の材が凹状に切り欠かれ、それらを差し込んで組み合わせていた。土台材の四隅に 6 ～ 8cm 角の支柱を立て、その上に横桟を載せて背後の側材を抑える「隅柱横桟」構造であったと見られる。側材は厚さ 2cm、幅 25 ～ 30cm の縦板が西側壁で 8 枚、土台材の背後（掘り方側）に接して立て並べられていた。隅柱、側材ともに岩盤上から 60 ～ 70cm の高さまで遺存していた。図 3 の断面図には人為的に枠材を撤去した形跡が見て取れないので、地下水位より上に存した部分は自然腐朽したものと考えられる。西辺の土台材上では小型ロクロかわらけの準完形品が伏せた状態で出土している（図 12-76・図版 2-2）。土台材を載せる波食台岩盤の上面には海棲動物の巣穴痕があり（図版 3-2）、岩盤部分の掘り方壁面には斜め方向の掘削工具痕が認められた（図版 2-4）。木枠内の埋土は概ねレンズ状堆積を示しており（図 5）、上位には炭化物の集積層が認められた（3 層）。木枠外には拳大の泥岩ブロックが裏込め材として多用されていた（12 層）。

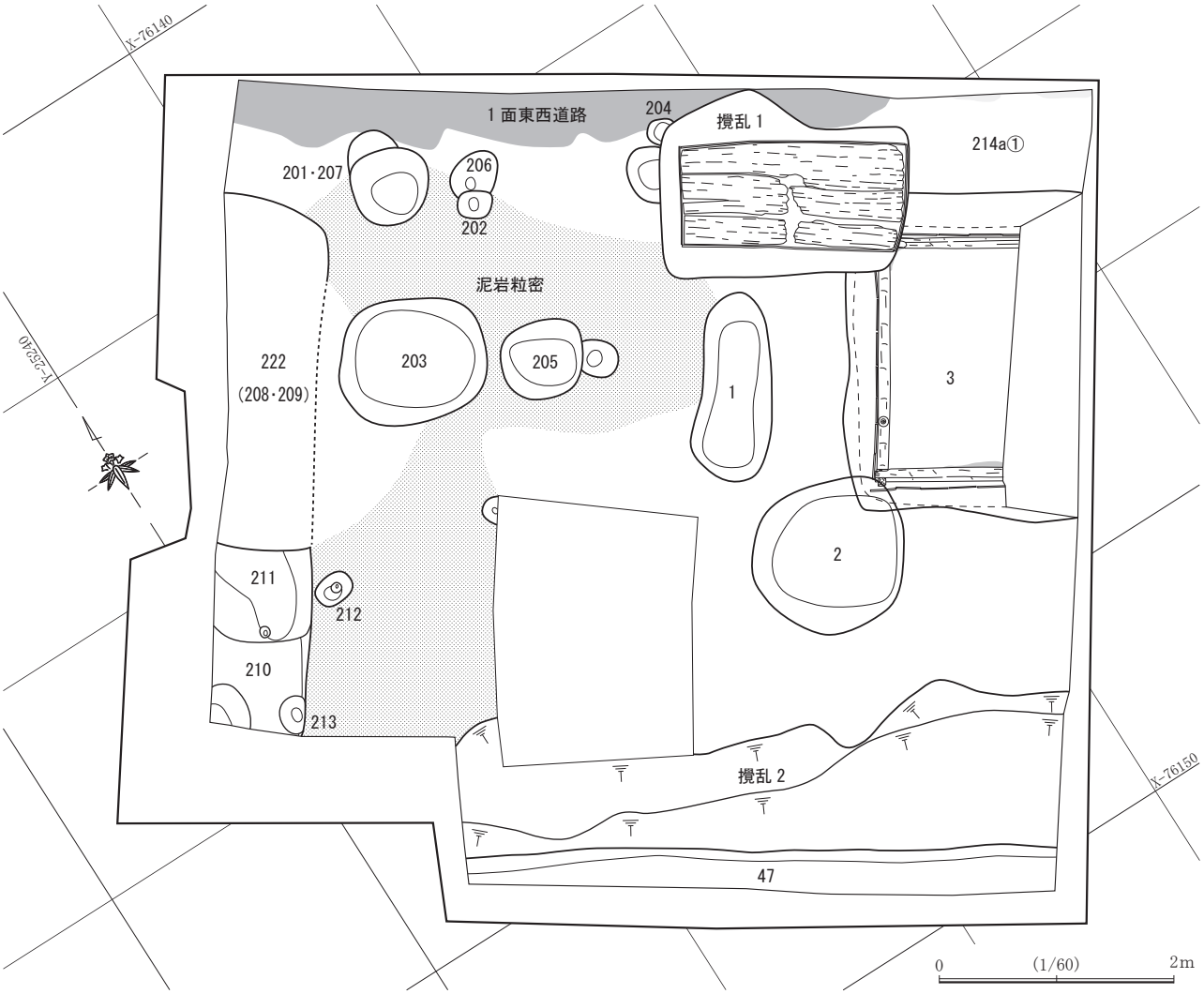


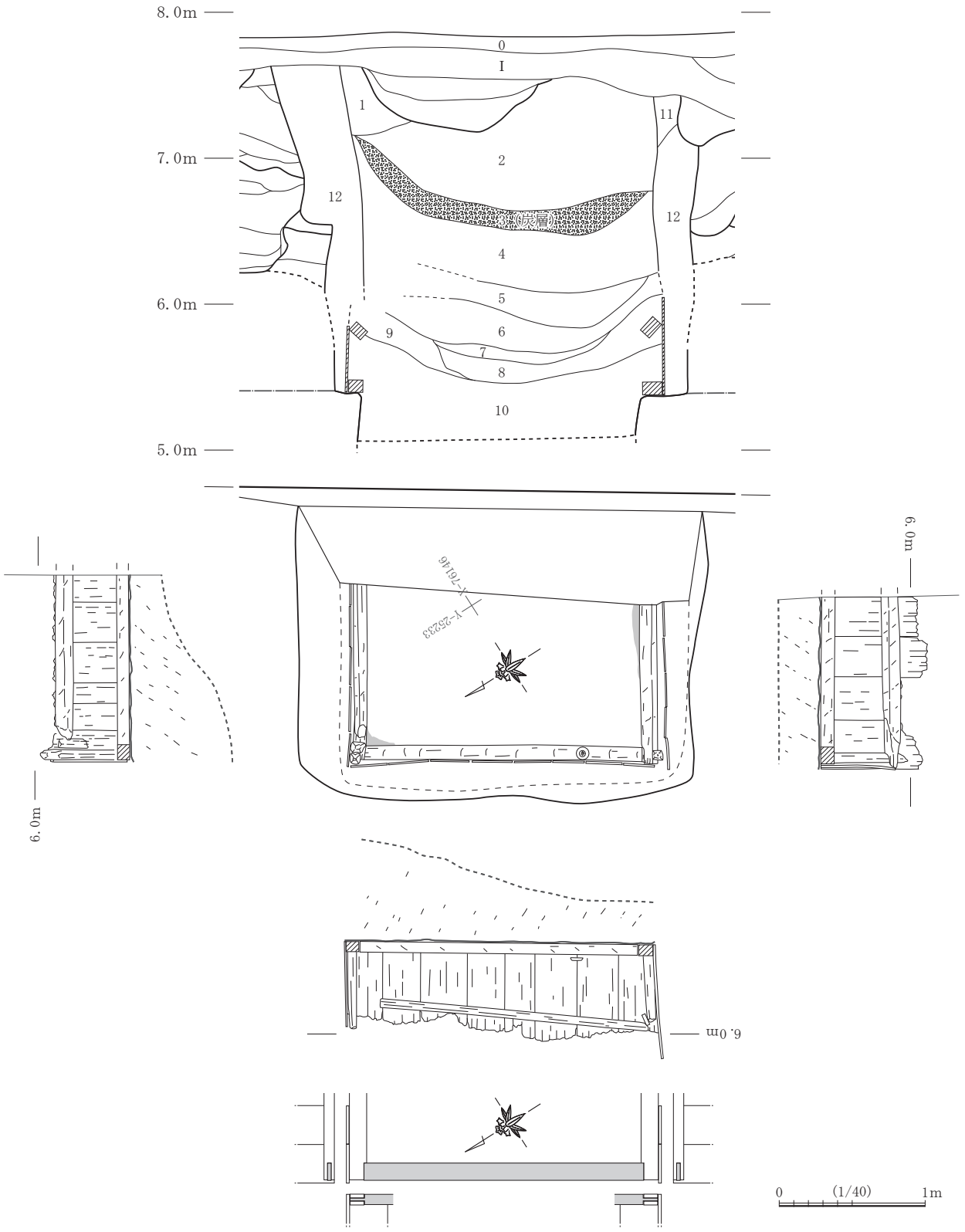
図４　１面全体図

１面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）
1	7.09
2	7.08
202	6.79
203	6.65

遺構 No.	底面標高（m）
204	7.20
205	7.04
206	6.92
201・207	6.92

遺構 No.	底面標高（m）
210	7.13
211	6.85
212	6.93
213	7.00



1　暗褐色土　拳大の泥岩ブロック少量。
2　暗褐色土　人頭大の泥岩ブロック多い。
3　黒色土　　炭粒が主体。締まり弱い。
4　暗褐色土　拳大の泥岩ブロック多い。
5　灰褐色土　粒径 1cm の泥岩粒多い。貝殻片少量。
6　灰褐色土　砂質土。1cm 大の泥岩粒少量。貝殻片多い。
7　暗褐色土　粘質土＋砂。貝殻片少量。締まり弱い。
8　暗褐色土　粘質土主体。貝殻片、炭粒微量。締まり弱い。
9　暗褐色土　1 ～ 3cm の泥岩粒少量。締まりややあり。
10　灰褐色土　拳～人頭大の泥岩ブロック多い。
11　暗褐色土　5cm 大の泥岩粒少量。
12　明黄褐色土　拳大の泥岩ブロックが主体。

図5　1面 遺構3（井戸）

本遺構は方形横桟支柱という中世鎌倉に通有の木枠構造を持つが、概ね一辺１ｍ前後となるのが通例であるなか、その２倍近い規模を有する点で特筆できる。

埋土中から出土した遺物は、表２に見るようにロクロかわらけが圧倒的に多く、手づくねかわらけは数点の出土に留まっている。後者が消滅した以降に井戸が廃絶に至ったことを示していよう。肥前系や瀬戸・美濃系の近世陶磁器がわずかながら見られるが、埋土上層への混入によるものと理解している。図 12-72 ～ 88 に本遺構出土の遺物を示した。図示可能な遺物も大部分がロクロかわらけで、陶磁器類には器形復元できる資料は皆無であった。72 は手づくねかわらけの小皿。73 ～ 79 はロクロかわらけの小皿。広底で低平な 76 や 78、底径が小さく深身となる 73・77 など２タイプがある。81 ～ 85 はロクロかわらけの大皿。深身で体部～口縁部が内湾気味となる資料が主体となり、口径 14cm 以上と 12cm 台の２法量がある。87 は白磁壺の底部片。88 は常滑 6a 型式の甕口縁部。78・80・84・85・87・88 は埋土の上位に見られた炭層（図 4-3 層）から出土。72 と 79 は掘り方側壁の黒色粘質土より出土し、Ⅳａ層に帰属する可能性が高い。

遺構 222（井戸）　Ⅱ区西壁際で検出された。東側には泥岩粒の濃密な範囲が広がり、これを切って構築されていた。遺構プラン検出時には西壁際に４基の浅い土坑が切り合っているものと捉えていたが（土坑 208 ～ 211)、このうち北側の遺構 208・209 としたものは断面観察の結果、ともに本井戸の埋土に包括されることが判明した。表２では遺構 208・209 出土の遺物を個別に示しているが、ともに遺構 222 に帰属することを留意されたい。井戸と判断したものの、調査できた深さまでには木枠は検出されず、掘り方のみの確認となった。平面規模は南北に 307cm を測り、大よそ一辺が 3.0 ～ 3.1 ｍの方形プランであったと推測される。掘り方の東辺ラインは、大よそ N30° W を指す。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、オーバーハングする箇所も見られた。Ⅰｂ層直下まで立ち上がるが、本来はさらに上位にあった生活面から掘り込まれた可能性が高い。調査区の壁際にあることから安全面を考慮し、周囲の面下げに伴って段階的に埋土の掘り下げを進めた。最終的には、確認面から 1.5 ｍの深さまで掘り下げたところで掘削を断念した。

埋土には大型の泥岩ブロックや炭化物が入り、やや乱雑に埋め戻されたような印象を受ける。

本遺構の出土遺物も、ロクロかわらけが主体となる。数量比としては遺構３より手づくねかわらけの比率が高い。図 12-90 ～ 92 として示した。92 は常滑 6a 型式の片口鉢Ⅱ類。体下部～底部の内面が摩耗している。

遺構 47（東西溝）　調査区南壁に沿って検出された。現地では３面の調査時に確認したものの、断面観察の結果、遺構自体はⅠｂ層の落ち込み（攪乱２）直下まで立ち上がることを確認している。２面を掘り込み面としていた可能性もあるが、後述する出土遺物の傾向を以って１面に帰属させた。北辺の肩が検出されたのみで、南への立ち上がりは確認していない。よって、溝ではなく南に開けた段切り平場となる可能性もある。検出できた限りでは、南北（幅）40cm、東西（長さ）５ｍ以上で、深さは 40cm を測る。底面標高は 6.35 ｍで、どちらか一方への傾斜は認められなかった。北肩ラインは N60° W を指す。

本遺構からの出土遺物は僅少で、瀬戸・美濃系陶器の擂鉢片などが出土している。図示すべきものはなかった。

１面土坑　１面上では浅い皿状の断面形を呈する土坑が散在していた。いずれも用途は特定できない。各遺構の検出位置や規模は図４を、出土遺物については図 12-89・93 ～ 105 を参照されたい。

１面下出土遺物　図 13-106 ～ 112 は、Ⅰ区１面下～２面掘り下げの際に出土した遺物である。表２

①からは、出土かわらけの大部分がロクロ成形品であることが分かる。ごく少量ではあるが、舶載品には白磁口禿皿や龍泉窯系青磁の蓮弁文碗が、国産陶磁器には常滑の片口鉢Ⅱ類が含まれている。

2面（図6）

標高 7.0 ～ 7.2 mで検出された。南側がわずかに低くなる。調査区の北壁際で南側溝を伴う東西道路が、側溝以南では方形基調の浅い落ち込みの他、土坑・小穴といった遺構が確認された。

2面東西道路　調査区の北壁に沿う形で検出された。人頭大ほどの、やや扁平な泥岩片を敷き並べて路面を構築している（図 3-10 層）。道路上面の標高は 7.2 m前後だが、縁辺のみの検出であり、北側の道路中心部に向けて高くなることが予測される。上面には、褐色砂質土の薄層が認められた（9 層）。

遺構 214a ②（道路側溝）　東西道路の南側溝である。2 面調査時には遺構 214 と呼称し、下位の 3 面道路に伴う側溝は遺構 214b と呼称したが、断面観察の結果、1 面でも道路側溝と認識できる浅い落ち込みが認められたことから、本報告では次のように遺構番号を整理した。1 面側溝…**遺構 214a ①**。2 面側溝…**遺構 214a ②**。3 面側溝（新）…**遺構 214b ①**。3 面側溝（古）…**遺構 214b ②**。

2 面遺構 214a ②は、上幅 50cm、下底幅 40cmを測る。道路面から 30 ～ 40cmの深さを持ち、底面標高は 6.8 ～ 6.9 mを測り、西に向けて下がる。南肩の標高は、7.0 m前後を測る。箱形ないし逆台形の断面形を

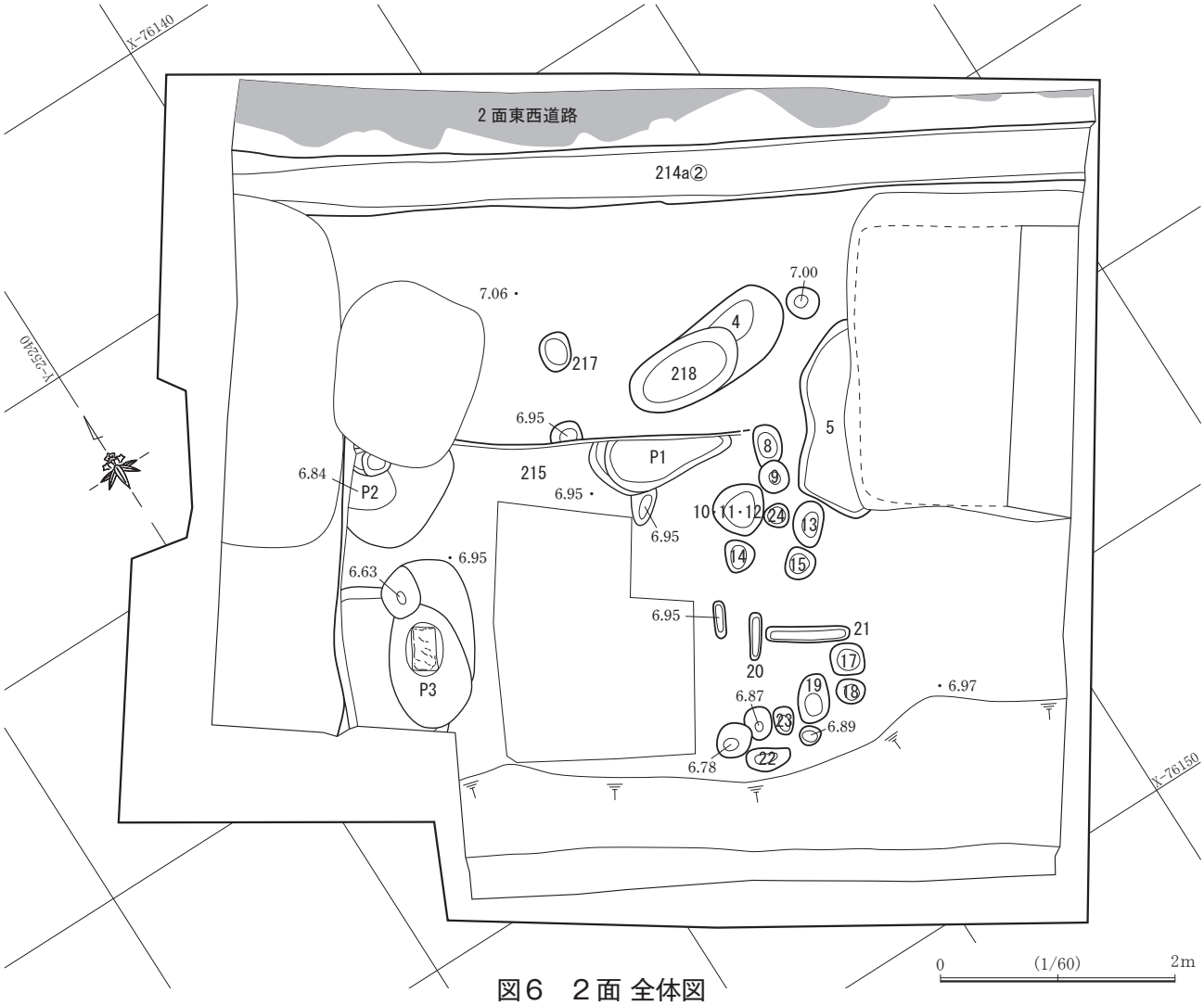


図6　2面 全体図

3a 面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）
4		9	6.77	14	6.80	18	6.93	21	6.90	215	6.95	215-P3	6.72
5	6.90	10·11·12	6.78	15	6.83	19	6,84	22	6.70	215-P1	6.75	217	6.95
8	6.80	13	6.82	17	6.92	20	6.87	23	6.88	215-P2	6.77	218	7.02

呈する。埋土上層には、北から道路構築土が流入していた。走方向軸の中心軸は、N60° W を指す。

表 2 ③・④で示したごとく、本遺構から出土した遺物はごく少量である。その中でも主体となるのはロクロかわらけで、手づくねかわらけは 1 点も見られなかった。肥前系磁器の染付碗が含まれているが、本遺構より新しい遺構 214a ①埋土、またはさらに新しい堆積層からの混入品であろう。図示できたのは、図 13-118 のロクロかわらけ大皿 1 点である。体部の内湾度がやや弱いが、器形全体としては他の 2 面遺構出土資料と大差ない。

遺構 215（方形落ち込み） 調査区の南半部で検出された。東西 3.6 m、南北 2.6 m ほどの方形範囲が確認面より 5cm ほど低くなっていた。落ち込みは北辺と西辺のみで確認され、攪乱 2 による削平を受けはっきりしないが、南へは続いていた可能性がある。落ち込みの下底部は標高 6.95 m前後の平坦面をなし、落ち込み際に沿って 3 基の小穴が検出された（図 6-P1 ～ P3）。こうした形状や掘り方の特徴から、浅い掘り込みを埋め戻して構築した壁立ち式建物（板壁建物）であった可能性が想定でき、本来外周部にあった壁板は腐食により失われてしまったと考えられる。西辺は N30° E を指す。配置状況から、P1・2 は小規模ながら柱穴であったと考え得るが、P3 については判断しがたい。P3 の底には長さ 35cm、幅 20cm、厚さ 10cm ほどの砂質凝灰岩切り石（鎌倉石）が据えてあった。

落ち込みの埋土および 3 基のピットからは、ロクロかわらけや常滑、渥美窯産の甕片が出土している。手づくねかわらけは、小皿が 1 点のみ出土している（表 2）。図 13-113 は P1、114・115 は P3、116 は P2、117 は落ち込み埋土から出土した。116 は常滑 6a 型式の甕口縁部片。

2 面土坑・ピット 上記の遺構の他、浅い土坑や小規模なピットが検出している。ピットのうち遺構 215 の東側に密集する一群は、同遺構に付随した痕跡であろうか。上幅が 15cmほどの浅い溝状痕跡も、遺構 215 と平行・直交する平面軸を取ることから、根太痕など同遺構に伴うものであろう。

各遺構の出土遺物は、図 13-119 ～ 123 に示した。

2 面下出土遺物 図 13-124 ～ 140 は、2 面下から 3 面まで掘り下げた際に出土した遺物である。本図および表 2 ①を見ても分かるように、かわらけはロクロ成形品が主体となるも、手づくね成形品が数点では留まらないところが 2 面までと異なる。ロクロかわらけだけを見ても、大・小とも器高が浅く低平な器形となる傾向が見て取れる。

3a 面（図 7）

標高 6.7 ～ 7.1 m で検出された。南側が低い。2 面と同様、調査区の北辺に沿って東西道路が走り、その南側溝を挟んで南側にピットなどが展開していた。調査区の中央部には泥岩粒を多用した整地面が広がり、これに覆われるピットも非常に多く見つかっている。整地面上および同一レベルで確認できた遺構を 3a 面に、整地層下で確認した遺構は 3b 面に分けて提示した。

3 面東西道路 調査区の北壁に沿って検出された。やや扁平な泥岩ブロックを敷き並べて路面を構築し（図 3-12 層）、上面には褐色砂質土の薄層が見られた（11 層）。路面上の標高は 7.1 m前後を測り、北側調査区外の道路中央に向けて高まっていくものと見られる。本道路遺構には、新旧 2 時期の南側溝が伴う（新：遺構 214b ①、旧：遺構 214b ②）。

遺構 214b ①（道路側溝） 3 面東西道路に伴う新段階の南側溝である。上幅は 70 ～ 120cm、底面幅は 50 ～ 60cm を測る。路面から 55 ～ 75cm の深さを持ち、断面は逆台形を呈する。底面標高は 6.35 ～ 6.55 m を測り、西側が低い。南肩の標高は 6.8 m前後を測る。走方向は、N60° W を指す。 I 区西端部付近の底面上ではかわらけが集積した状態で出土している。

遺構 214b ②（道路側溝） 3 面東西道路に伴う古段階の南側溝である。上部を改修溝（遺構 214b ①）

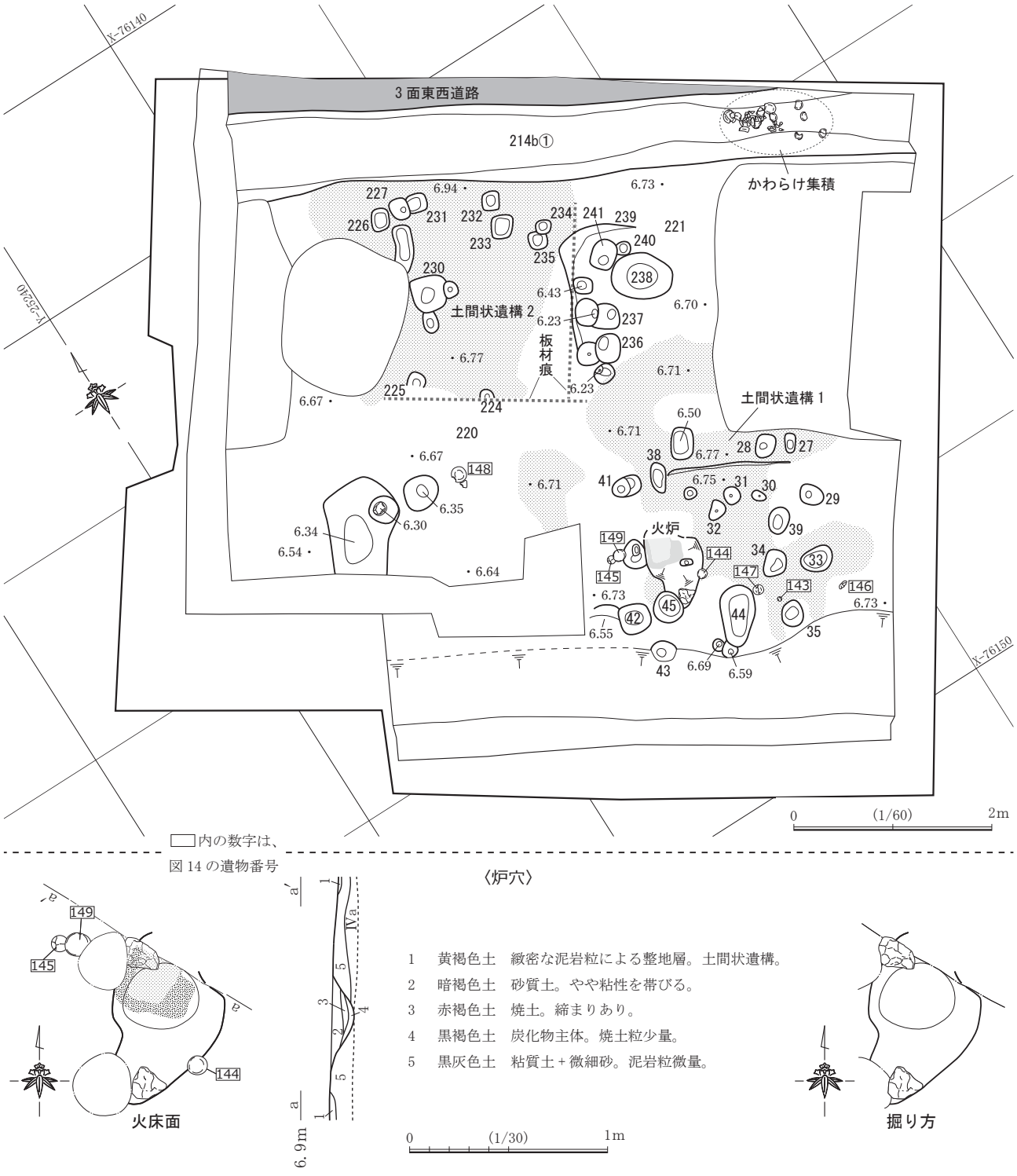


図7　3a 面 全体図・炉穴個別図

3a 面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）
27	6.66
28	6.52
29	6.49
30	6.71
31	6.71

遺構 No.	底面標高（m）
32	6.73
33	6.63
34	6.62
35	6.64
36	6.66

遺構 No.	底面標高（m）
38	6.55
39	6.60
41	6.39
42	6.40
43	6.59

遺構 No.	底面標高（m）
44	6.55
45	6.54
224	6.74
225	6.80
226	6.74

遺構 No.	底面標高（m）
227	6.72
229	6.74
230	6.56
231	6.72
232	6.82

遺構 No.	底面標高（m）
233	6.77
234	6.91
235	6.83
236	6.35
237	6.25

遺構 No.	底面標高（m）
238	6.71
239	6.43
240	6.26
241	6.15

に切られるが、上幅は 105cm 以上あったことが分かり、底面幅は 30 ～ 50cm を計測した。道路面からは 1 mの深さがあり、底面標高は 6.1 ～ 6.2 mを測り西側が低い。南肩の標高は、改修に伴い削平されたため 6.4 ～ 6.5 m と低い。護岸材は遺存していなかったが、木材の腐食痕から内法幅 50cm の横板組み護岸が施されていたものと思われる。走方向は、214b ①と変わらず N60° W を指す。

出土遺物については新旧の溝で分けて取り上げていないので、図 14-150 ～ 184 にまとめて提示した。このうち、151 ～ 159・161・163・169 ～ 171・173・174・176 ～ 178 が①の底面上でまとまって出土した資料である。全てかわらけで、図上では小皿は手づくねが多く、大皿はロクロかわらけが主体となっている。表 2 ④から重量比を算出すると、大で 86％、小では 67％をロクロかわらけが占め、手づくねを凌駕している。器形・法量の上では、ロクロと手づくねが相似的関係にあることが窺える。

図の配置が上下逆転しているが、181 は柱状高台のロクロかわらけ。高台のみ遺存。182 は龍泉窯系青磁の劃花文碗。18 は常滑 5 型式の甕口縁部片。

整地面（土間状遺構） 道路側溝の南側区域で、大きく 2 ヶ所の整地面を確認した。どちらも泥岩粒を叩き締めて薄く平坦に仕上げてあり、周囲にピットや火炉の痕跡が見られたことから、板壁建物などに付随する土間状施設の痕跡と考えられる。

土間状遺構 1 は Ⅰ 区の南部で検出された。北・南とも 1 面の遺構に切られている。泥岩粒と黄灰色の粘質土を数 cm の厚さで貼り、上面は標高 6.75 m前後で平坦に仕上げている。部分的に途切れているが、大よそ東西 3.5 m、南北 3.0 mほどの広がりを確認できた。この範囲からは浅い小穴や火炉と思われる小土坑を確認した。また、道路側溝と同じ軸線で延びつつ南に 4cm ほど落ちる段差が検出され、整地の切れ目や木材を据えていた痕跡かと思われる。これと平行または直交する方向で遺構 41 ～ 42 など列をなす小穴群が見られるので、これらが束柱など上屋建物の基礎痕跡であった可能性を考えている。火炉は板材で囲った形跡はなかったが、「囲炉裏」の枠材が撤去された後の痕跡かもしれない。平面規模は東西 65cm、南北 70cm で、南西側をピットに切られる。深さ 6 ～ 7cm の浅い窪みに炭粒を多く含む埋土が堆積し、その上には各 1cm 厚の炭層と焼土層が順に堆積していた。焼土層上面は固化しており、周囲の整地面より 5 ～ 7cm ほど低い平坦面をなしていた。

整地面の直上ないし 2 ～ 3cm ほど高いレベルでは完形のかわらけが正位または伏せた状態で散在しており、図 7 に出土位置を表示した。遺物番号は図 14 に対応している。小皿はロクロかわらけのみ、大皿は手づくねかわらけのみで占められる。143 はロクロ成形の極小皿。144 ～ 146 はロクロ成形の小皿で、広底で体部は外方へ低く直線的に立ち上がる。147 ～ 149 は手づくね成形の大皿。器壁はやや厚手で、口縁端部は面取り状に仕上がっていない。148 は整地面の西縁から 50㎝ばかり離れた位置で出土しており、後述する遺構 220 に帰属する可能性がある。図 14-185 は遺構 42 出土の内折れ手づくねかわらけ。

土間状遺構 2 は Ⅱ 区の北部、道路側溝に接する位置で検出された。泥岩粒を多用した良好な整地面で、上面の標高は検出北端部で 6.95 m、南端部では 6.8 m前後を測る。東西 2.7 m、南北 2.2 mの広がりを持つ。東辺と南辺には、道路側溝と平行・直交方向に延びる板材痕が認められた。東辺の板痕以東を遺構 215、南辺の板痕以南を遺構 220 として遺物の取り上げを区別したが、実際には整地面が途切れるだけで、遺構としての明確な落ち込みは確認できなかった。また、東辺と北辺に沿って並ぶ小穴があり、上屋建物の基礎痕跡となる可能性がある。本整地面が建物に付随していたとすると、道路側溝から間を置かずして建物が構築されていたことになる。

3b 面検出の遺構から出土した遺物は、図 15-203 ～ 223 に示した。

3b 面（図 8）

土間状整地層下～Ⅳ層上面で検出された遺構を、3b 面に帰属させた。層序としては遺構 300（南北溝）もⅣ a 層を切っているが、埋土様相が他とは異質であることから、中世最下面となる 4 面に帰属させた。調査区の南壁際では、円筒状の土坑（遺構 259）を確認している。

3b 面では主体となる遺構はピットで、幾重にも切り合った状態で検出された。上層の遺構面で見られた東西道路側溝や板材の痕跡と平行または直交する軸線で並ぶものと見られるが、大よそ直線上には並ぶものの、間隔が一定でないことから建物を復元するには至らなかった。上面の道路側溝に沿って 90 ～ 100cm 間隔で並ぶ東西柱穴列のみ、トーンを掛けて示した。

遺構 259（土坑） 調査区の南壁際で検出し、南側 1/3 ほどが調査区外に続く。東西径は 114cm を測り、直径 120cm 前後の円形プランを呈すると見られる。確認面からの深さは 117cm で、波食台岩盤面を 5cm ほど掘り下げている。底面標高は、5.25 m を測る。黒色の粘質土を埋土とし、下層では炭粒

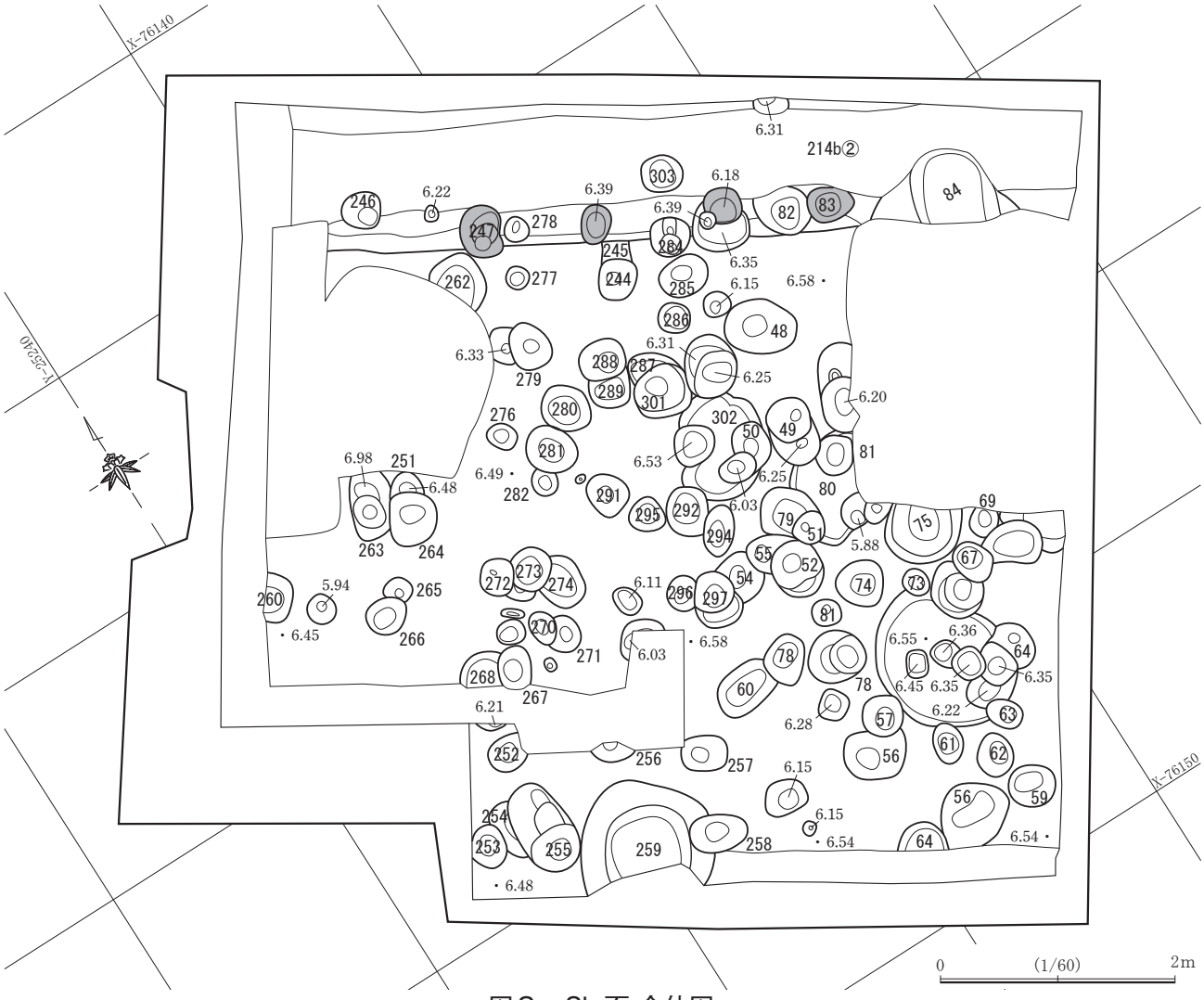


図 8　3b 面 全体図

3b 面遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）
48	6. 15	60	6. 15	76	6. 01	246	5. 95	260	6. 23	270	6. 31	280	6. 41	291	5. 88
49	6. 18	61	6. 22	79	6. 48	247	6. 05	262	6. 33	271	6. 17	281	6. 35	292	6. 38
50	6. 26	62	6. 28	80	6. 52	252	6. 36	263	6. 01	272	6. 23	282	6. 23	294	6. 50
51	6. 40	63	6. 39	81	6. 08	253	6. 17	264	6. 29	273	6. 08	284	6. 06	295	6. 34
52	6. 27	64	6. 38	82	6. 32	255	5. 89	265	6. 32	274	6. 35	285	6. 10	296	6. 33
54	6. 24	67	6. 32	83	6. 24	256	5. 96	266	6. 27	276	6. 19	286	6. 36	297	6. 33
55	6. 34	73	6. 30	84	6. 09	254	6. 29	267	6. 13	277	6. 42	287	6. 36	301	6. 07
56	6. 03	74	6. 48	244	6. 30	257	6. 33	268	6. 29	278	6. 33	288	6. 17	302	6. 27
57	6. 21	75	6. 35	245	6. 33	258	6. 11	269	6. 24	279	6. 08	289	6. 31	303	6. 06
59	6. 15														

の混入が目立った。下部2層については土壌分析を外部機関に依頼し、最下層のサンプルからは少量の寄生虫卵と食用植物の花粉化石が検出されており、他の事例との類似性から糞便由来である可能性が指摘されている（付編参照）。

本遺構埋土より出土した遺物は、図15-216～223に示した。本地点では唯一木製品が良好な状態で遺存しており、黒色漆塗りで無文の碗・皿（218・219）や箸、草履芯（221～223）などが見られた。217のロクロかわらけ大皿は細砂粒を多く含む胎土で硬質に焼き上がり、古手の様相を残している。

3面下出土遺物　図15-188～202に、3a面下から4面（Ⅳa層上面）までの掘り下げ時に出土した遺物を掲げた。

表2①から出土かわらけの重量比を計算すると、大・小ともに手づくね成形品77％、ロクロ成形品22％という結果が得られ､3面検出の道路側溝（遺構214b①）での数値が逆転している。陶磁器類では、龍泉窯系の青磁蓮弁文碗や常滑片口鉢Ⅱ類などが少数だが含まれている。

4面（図9）

Ⅳa層上面で検出された。標高6.45～6.6 mを測り、南側が低い。ここで検出されたピット・土坑は3b面に帰属するものとし、埋土様相の異なる南北溝（遺構300）のみを4面に帰属させて提示した。

遺構300（南北溝）　Ⅳa層上面より掘り込まれているが､埋土上層がⅣa層と非常に近似するため、Ⅳb層上面での確認となった。上幅は70～80cm､底面幅は40～50cmを測り断面は逆台形を呈する。

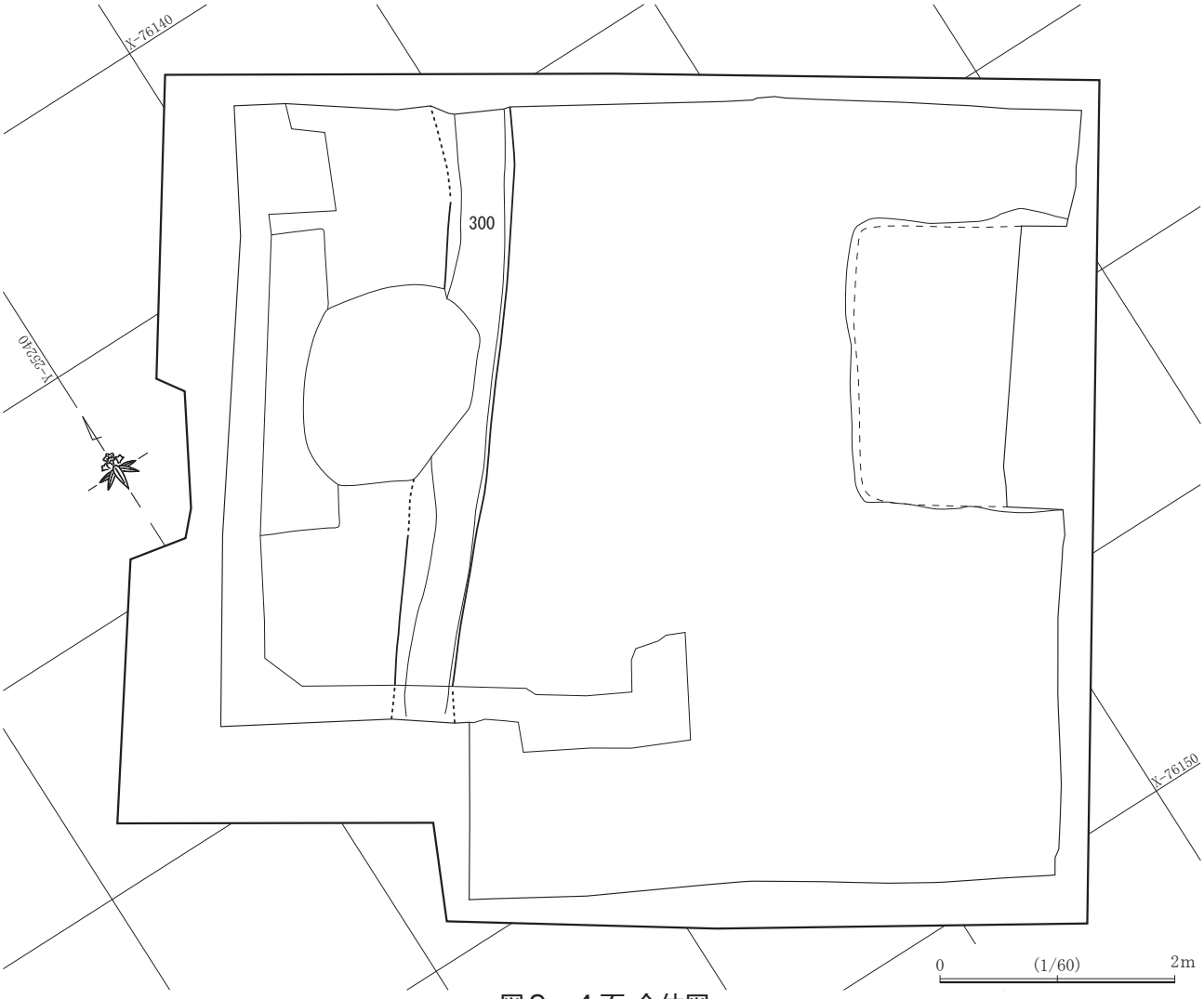


図9　4面 全体図

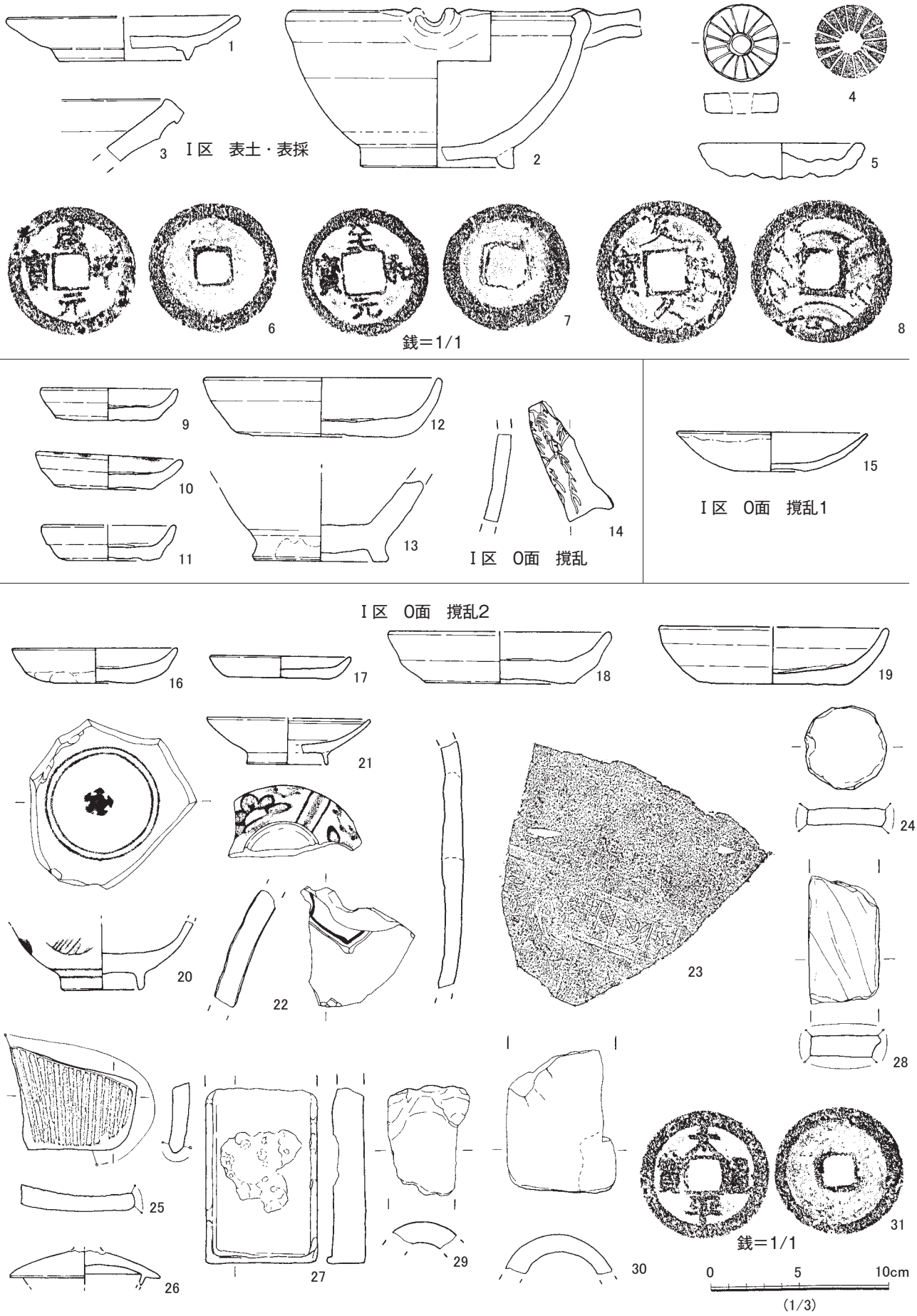

1
2
3
4
5
Ⅰ区　表土・表採
6
7
8
銭＝1/1
9
10
11
12
13
14
Ⅰ区　0面　撹乱
15
Ⅰ区　0面　撹乱1
Ⅰ区　0面　撹乱2
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
銭＝1/1
0
5
10cm
(1/3)

図 10　出土遺物（1）

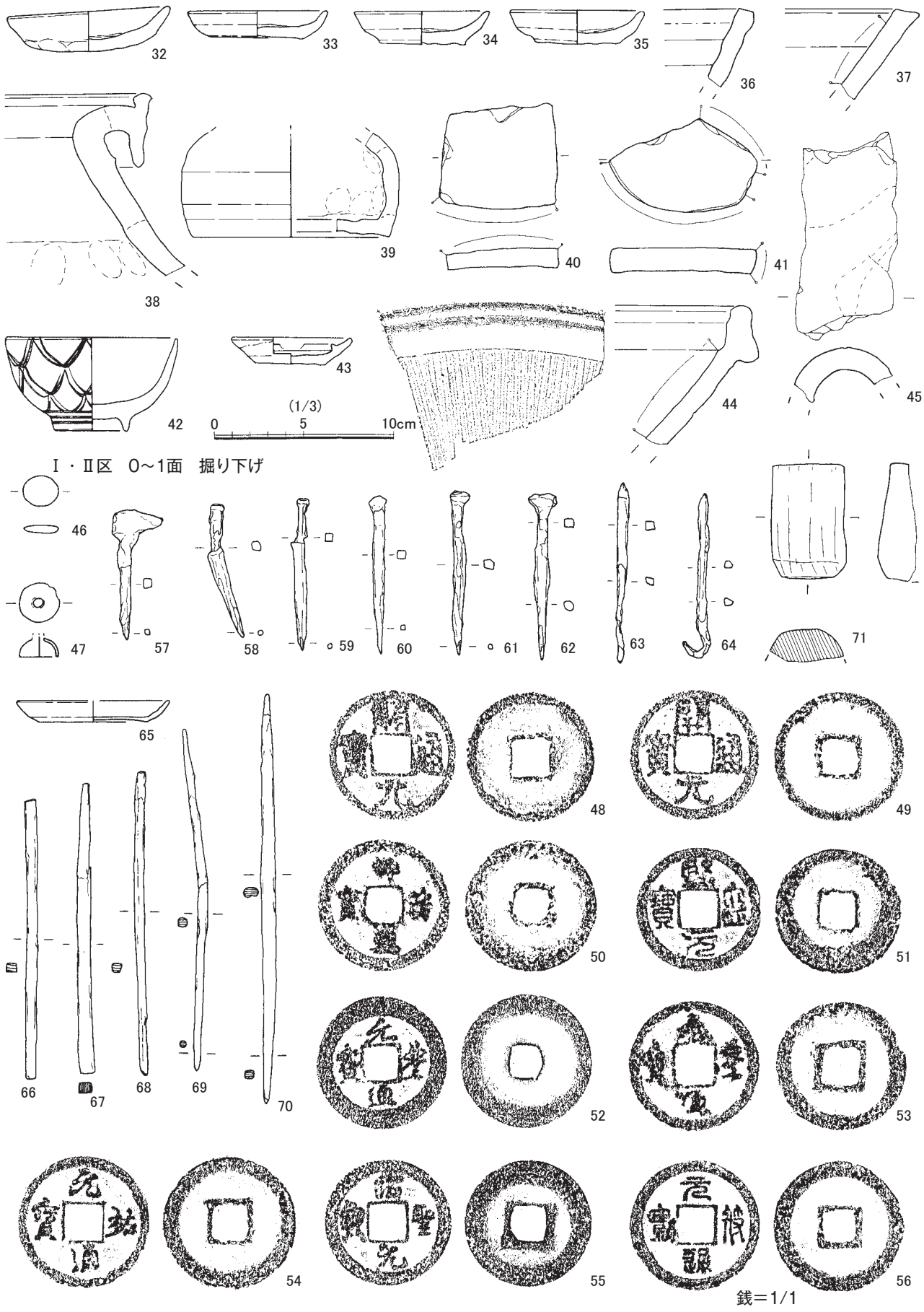

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
(1/3)
0
5
10cm
Ⅰ・Ⅱ区　0～1面　掘り下げ
46
47
57
58
59
60
61
62
63
64
71
65
66
67
68
69
70
48
49
50
51
52
53
54
55
56
銭＝1/1

図 11　出土遺物（2）

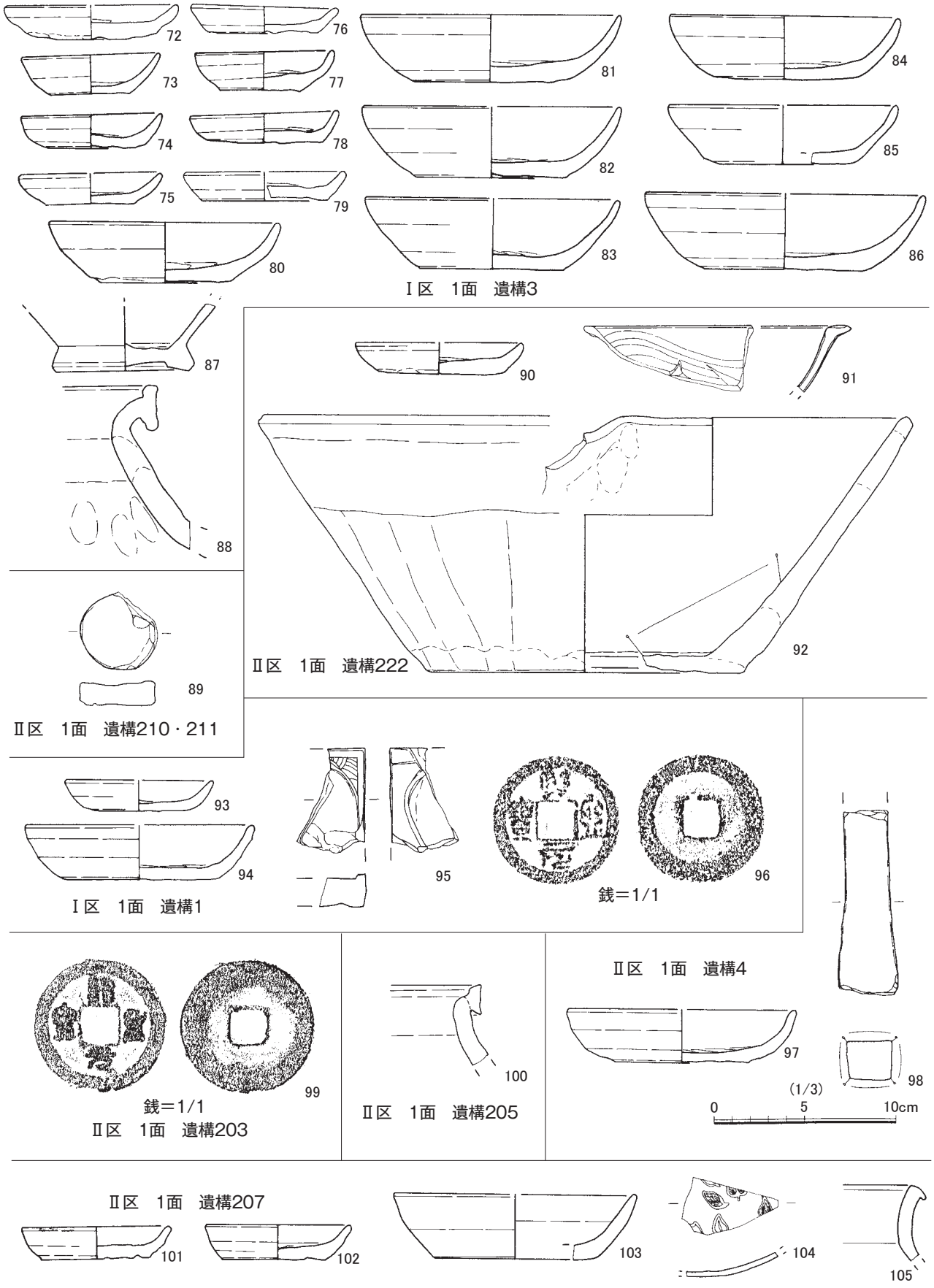

72
76
73
77
74
78
75
79
80
81
84
82
85
83
86
Ⅰ区　1面　遺構3
87
88
90
91
92
Ⅱ区　1面　遺構222
89
Ⅱ区　1面　遺構210・211
93
94
Ⅰ区　1面　遺構1
95
96
銭＝1/1
97
98
(1/3)
0　5　10cm
Ⅱ区　1面　遺構4
99
銭＝1/1
Ⅱ区　1面　遺構203
100
Ⅱ区　1面　遺構205
Ⅱ区　1面　遺構207
101
102
103
104
105

図 12　出土遺物（3)

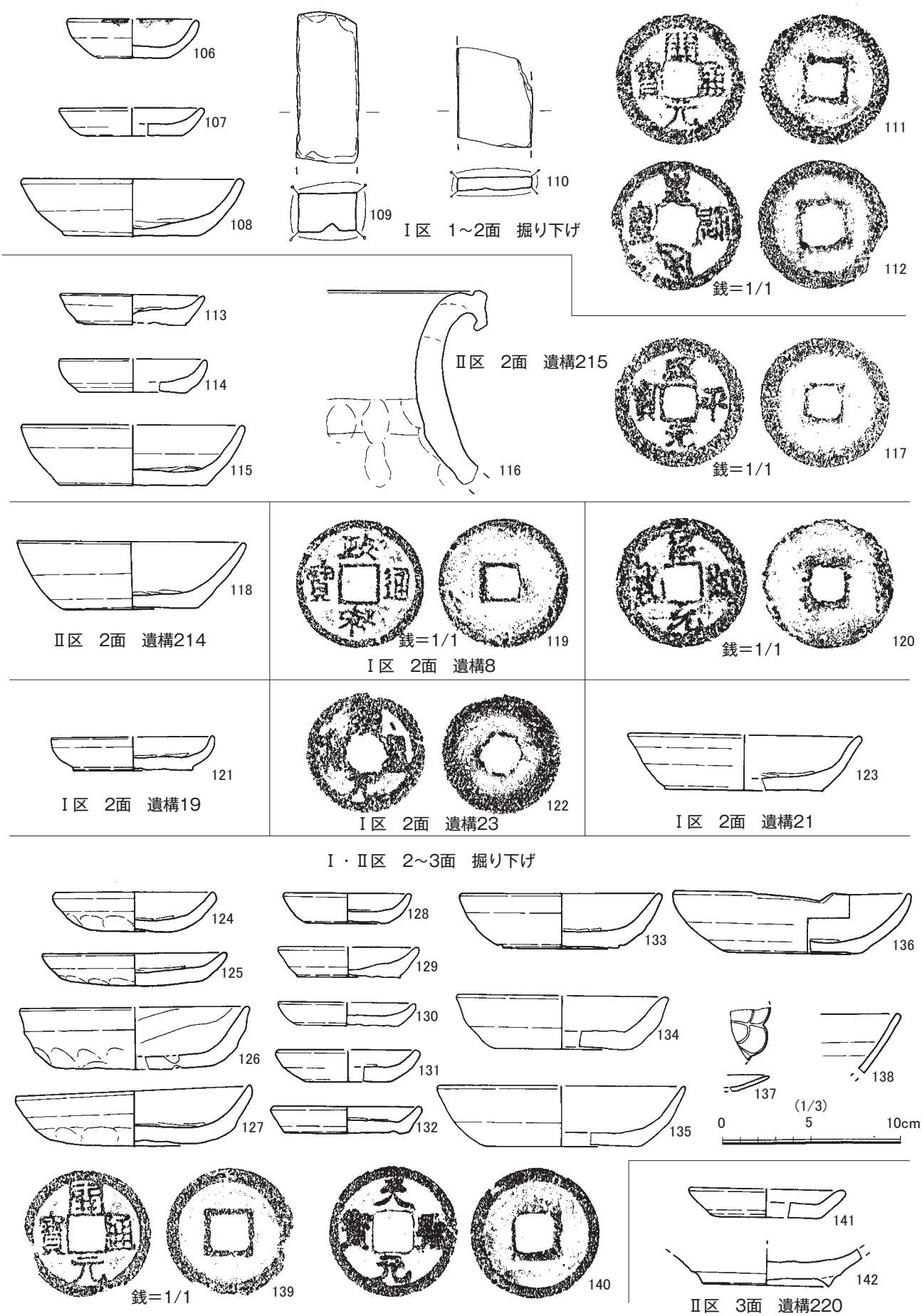

106
107
108
109
110
Ⅰ区　1～2面　掘り下げ
111
112
銭＝1/1
113
114
115
116
Ⅱ区　2面　遺構215
117
銭＝1/1
118
Ⅱ区　2面　遺構214
119
銭＝1/1
Ⅰ区　2面　遺構8
120
銭＝1/1
121
Ⅰ区　2面　遺構19
122
Ⅰ区　2面　遺構23
123
Ⅰ区　2面　遺構21
Ⅰ・Ⅱ区　2～3面　掘り下げ
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
(1/3)
0
5
10cm
139
銭＝1/1
140
141
142
Ⅱ区　3面　遺構220

図 13　出土遺物（4)

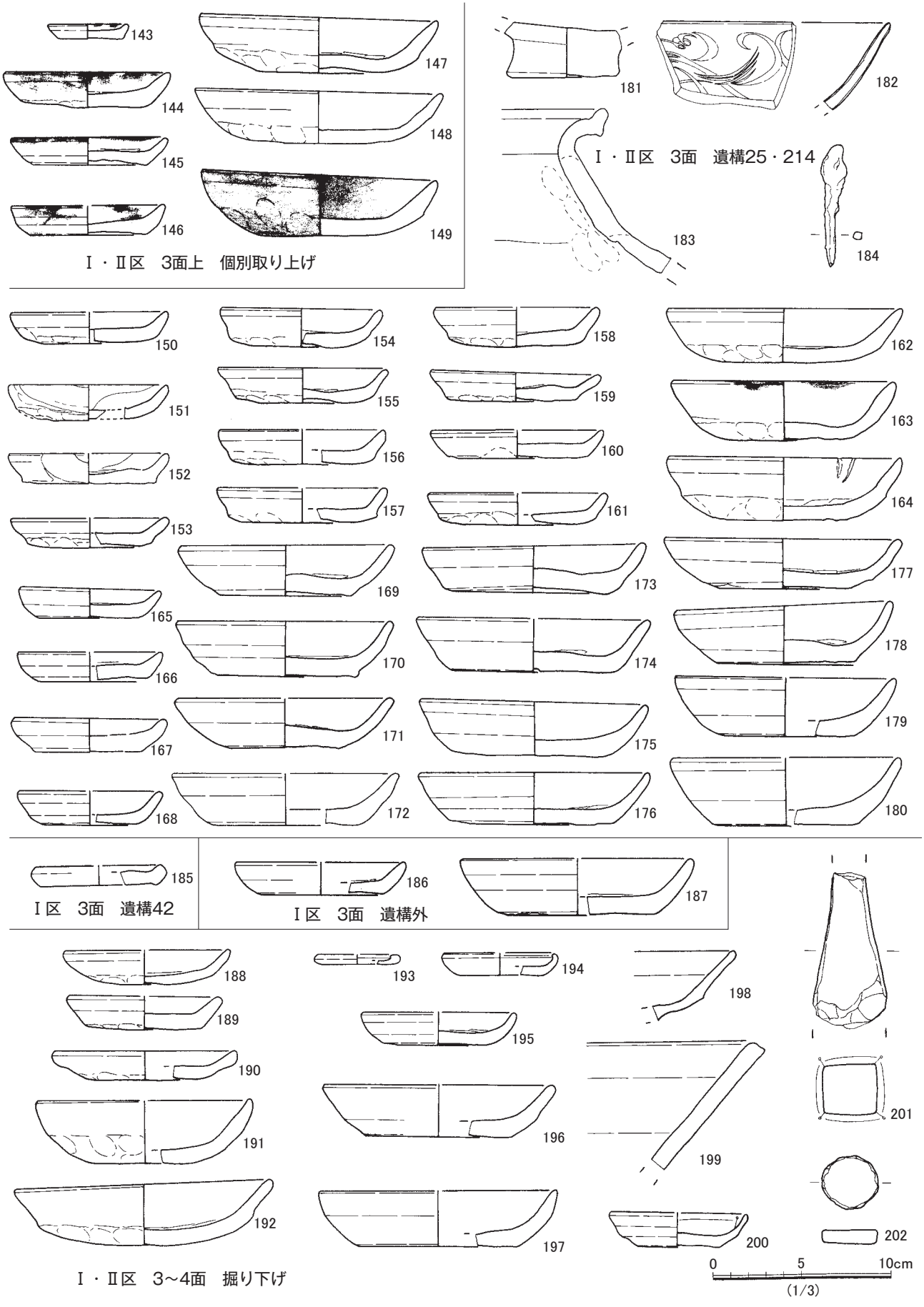

143
144
145
146
147
148
149
Ⅰ・Ⅱ区　3面上　個別取り上げ
181
182
183
184
Ⅰ・Ⅱ区　3面　遺構25・214
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
185
Ⅰ区　3面　遺構42
186
187
Ⅰ区　3面　遺構外
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
0
5
10cm
(1/3)
Ⅰ・Ⅱ区　3～4面　掘り下げ

図 14　出土遺物（5)

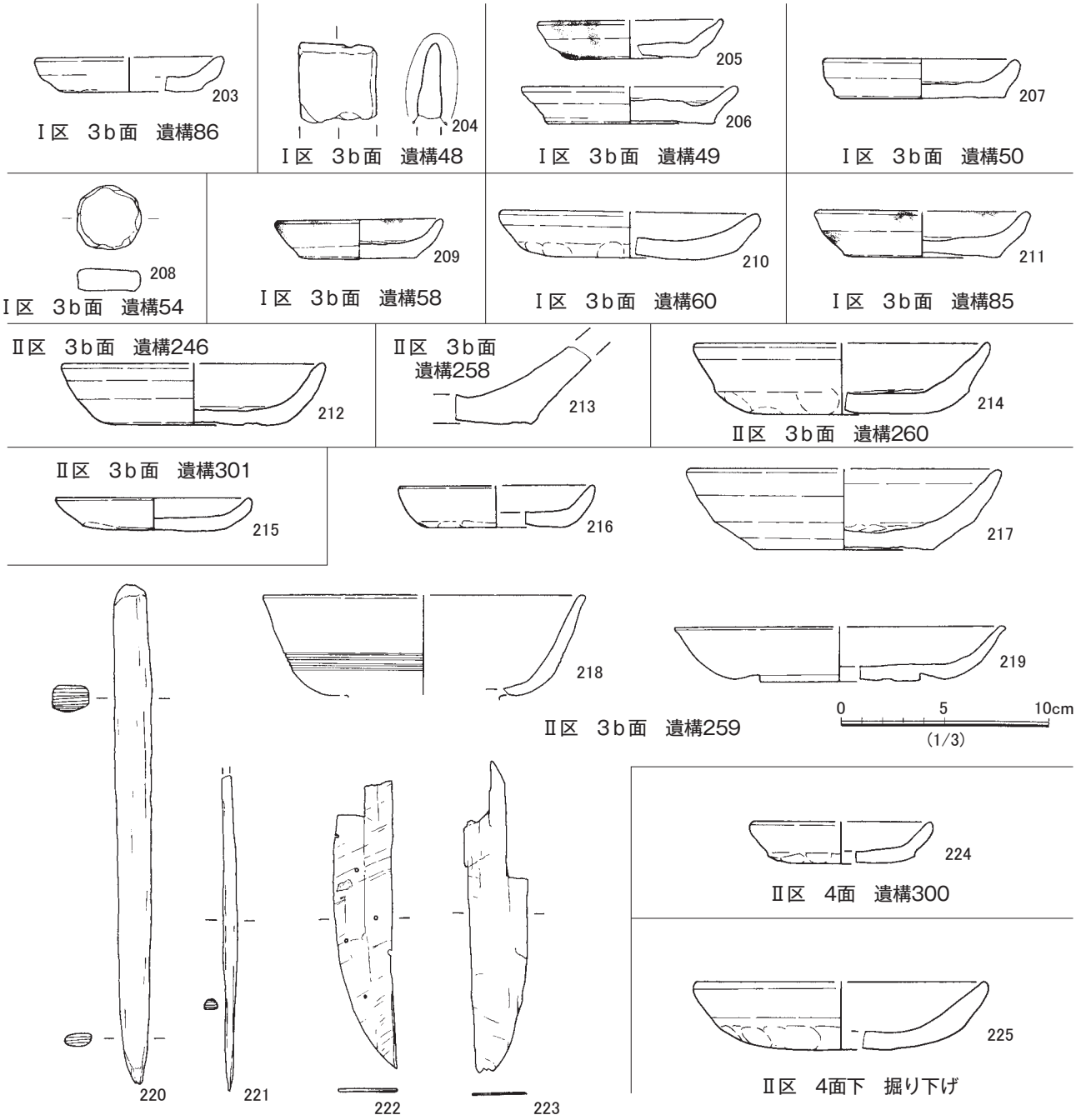


図 15　出土遺物（6)

Ⅳ a 層上面からの深さは 50cm で、底面標高は 5.95 ～ 6.05 m を測り南へ向けてわずかに下がる。底面の中心ラインは N37° E を指し、上層の遺構より 7° ほど東に振れている。

本遺構から出土した遺物は手づくねかわらけ小皿の小片 1 点のみで（表 2 ④)、図 15-224 に示した。

４面下出土遺物　Ⅳ a 層～Ⅳ b 層の掘り下げ時に出土した遺物であるが、調査で見落としてしまった中世遺構の包含遺物が含まれている可能性もある。表 2 ①からは手づくねかわらけが数量的に最も多いことが分かり、奈良～平安時代の土師器も数点出土している。龍泉窯系の青磁蓮弁文碗は新しい要素であり、中世遺構からの混入かもしれない。図 15-225 には手づくねかわらけの大皿 1 点を示した。今回は細別できなかったが、Ⅳ a 層でも下位は締まりが強くなり、無遺物層となる可能性がある。

第五章　調査成果のまとめ

ここまで、中世に属する 5 枚の遺構面と、そこから出土した遺物について説明してきた。本地点では 3b 面より上層において、調査区北壁際に沿って東西道路が検出された。路面自体は最大でも 60cm 幅を検出できたに留まるが、路面幅については周辺での調査事例が参考となる。前稿（押木 2011）と記載が重複するが、まずは道路の展開状況について概観しておきたい。

検出された道路の所産時期について、路面構築土からの出土遺物は殆どないが、第 3a 面に帰属する道路側溝（遺構 214b ①）の底面ではかわらけ集積が検出されており、図示できた資料の中では小皿は全て手づくね成形品で、大皿は殆どがロクロ成形品で占められていた。前章で述べたように、旧段階の側溝を含めた遺構 214b 全体でのかわらけの重量比を見ると、大で 86％、小では 67％をロクロ成形品が占めていた。これに、小片資料だが龍泉窯系の青磁劃花文碗や常滑 5 型式の甕が伴っている。手づくねかわらけの終焉時期については研究者間で見解が分かれるが、遺物総体の傾向は 13 世紀前半を大きく下らない。かわらけ集積が改修後の側溝に伴うことを考えると、13 世紀前葉頃には路面構築とともに開削されたことが推測できる。

図 16 は米町遺跡をはじめ、周辺の主な調査地点を地図上に落としたものである。地点 b では大きく 4 時期の中世遺構群が検出され、13 世紀第 2 四半期～ 14 世紀代に比定される 2・3 期では東西道路と、その南側溝が検出されている。計 6 枚の路面が連綿と構築され、幅 8.8 m以上を測る大規模な道路遺構であるが、それに比して南側溝は幅 60cm、深さ 40cm と小規模である。走方向は、N62° W を指す。この点をはじめ、新しい段階（2 期）には側溝が一部路面に覆われ不明瞭となる点、また、鎌倉時代初期と考えられる 4 期では未だ道路が築造されていない点など、本地点の道路遺構とも共通する要素が多い。地点 c でも、この延長部分と考えられる 8 枚の泥岩整地面が確認されており、路面の高さや構築方法の近似性から、地点 b の道路と連続するものとみて大過ない。

上記 2 地点と本地点の道路遺構は、地図上ではさほど違和感なく結び付けることが可能である。ただ、

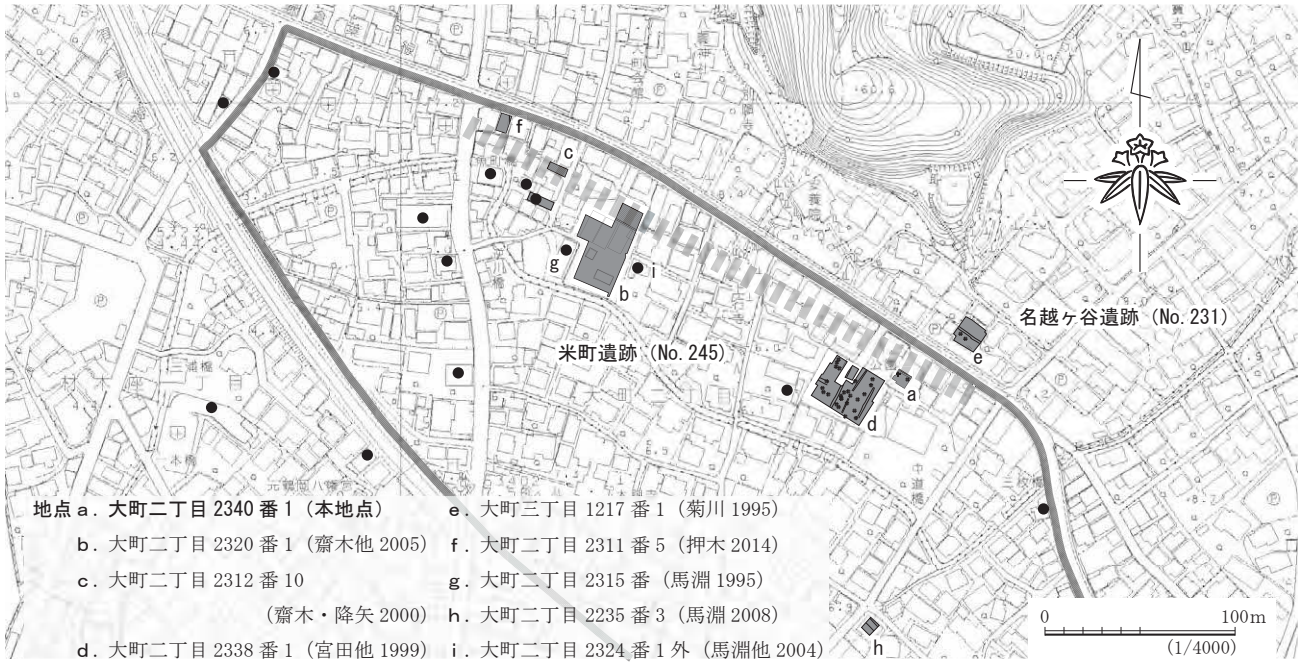


図 16　周辺調査地点および道路推定ライン（鎌倉市発行 1：2,500 都市計画基本図を使用）

両者間は 200 m も離れているため、現時点では「概ね走行ラインが一致する」という程度の評価を補う意味しかないだろう。先に掲げた路面の構築方法や側溝の構造・変遷といった点についての共通性も、双方について諸要素の精査を行なった上で改めて検討する必要があるだろう。当然のことながら、この間の延長線上にある新たな発掘成果についても、留意が必要である。

仮に両道路跡が繋がるものとして、これが中世の「大町大路」といえるのか、大きな問題点である。中世の大町大路については史料解釈では定説に至っておらず、夷堂橋以南の南北道を大町大路に当てる見方もある（『新編相模国風土記稿』など）。中世の都市遺跡である鎌倉では大小さまざまな規模の道路遺構が発見されているが、これらを史料上に残る道路名称と符合させることは、非常に困難と言わざるを得ない。今後も、史料解釈を通じて地道に検討を重ねるべき課題といえる。

なお、名越ヶ谷遺跡の地点 e では調査区の南端部で東西に延びる通路状遺構が検出されており、仮にこれを本地点の道路遺構と一連のものと考えると路面幅だけで 30 m に達することになり、若宮大路に匹敵する規模となる。報告書の記載内容をみても、構造的に地点 a 〜 c の道路遺構と同一視できるものとは考え難く、現時点では同地点よりも南側に道路の北辺があったと考えてよいだろう。大町四ッ角の南東側にある地点 f では、調査区の北東角で南北に延びる通路状遺構（泥岩整地面）が検出されたのみで、調査区の全域を覆う数段階に及ぶ泥岩地業は確認されていない。地点 a 〜 c の推定道路ライン上にあり、これ以西へも直線で延びるとすれば、その幅は 12 m以下の値となる。仮定の積み上げに過ぎないが、参考例として提示した。ちなみに、地点 h では上幅が 4 m を測る東西溝が検出され、開削当初は素掘りであったものが 13 世紀第 1 四半期以降には木組み護岸や橋脚の可能性も指摘される大型柱材が追加されるようになる。規模の大きさや護岸の構築技法にみられる高い規格性は、小町大路や横大路の側溝に類似するものとして、報告書では「車大路」との関連性が指摘されている。

いずれにしても、地点 b・c における大規模な道路が都市鎌倉にあって主要な交通機能を担っていたことは間違いなく、そこには当然「大町大路」との関わりも視野に入ってくる。本地点の成果も、中世鎌倉の都市構造を考える上で、重要な価値を有している。

各遺構面の年代観について、1 面は井戸（遺構 3）の埋土から出土した遺物をもとに、14 世紀前半頃には廃絶に向かっていたものと見ている。3a 面は土間状遺構の面上や先述の道路側溝（遺構 214b ①）から出土したかわらけに一定量の手づくねかわらけが含まれる点から、13 世紀前半と考えた。従って、2 面は 1 面と 3 面の中間を取って 13 世紀後半頃と理解できようか。3b 面では円筒状の土坑（遺構 259）から古手の名残を留めるロクロかわらけや無文の漆器椀・皿が出土するなど、全体として鎌倉時代初期に近い遺物様相を見せている。層位的に同一面となる 4 面は、南北溝（遺構 300）で手づくねかわらけが 1 点出土したのみで評価が難しいが、4 面から 3b 面の遺構群は 13 世紀初頭〜前葉の年代幅で構築が進んだものと考えておきたい。なお、調査区の南端部では南に下がる江戸時代の落ち込みが検出されている。覆土中からは多量の陶磁器が出土しており、近世における当地区の生活ぶりを知るうえで貴重な資料が得られた。本地点では 14 世紀以降、近世の間を繋ぐ遺構は確認できなかったが、県道を挟んだ北側の地点 e では 15 世紀に属する溝や土坑が検出され、天目茶碗や瓦質湯釜、茶臼などの喫茶道具が一定量出土している点、寺院地や屋敷地の一角であった可能性を示唆している。

4 面下（Ⅳ a 層）掘り下げ時には中世遺物に混じって奈良〜平安時代の土師器も少量出土している。本地点の北を東西に走る県道鎌倉・葉山線については、その前身を宝亀二年（771）以前の東海道駅路にまで遡らせる見解があるが（藤沢市 1997）、考古学上の証跡を得るには至っていない。海側に視界の開けた丘陵裾部の微高地という立地は古代においても居住や交通に関わる施設を置くうえで好条件

にあったことが想像でき、鎌倉における古代遺跡の分布や旧地形の復元研究を目にするにつけ、ある種の説得力をもつ所見であるとは感じている。ただ、その可否は今後の発掘調査に委ねるしかない。

引用・参考文献

押木弘己　2011 「調査速報　米町遺跡の調査」『かまくら考古』第 10 号　特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所

押木弘己　2014 「米町遺跡　大町二丁目 2311 番 5 地点」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会（図 16- 地点 f）

菊川英政　1995 「名越ヶ谷遺跡　大町三丁目 1217 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11（第 1 分冊）』 鎌倉市教育委員会（図 16- 地点 e）

齋木秀雄・降矢順子　2000 『米町遺跡―第 6 地点、第 7 地点発掘調査報告書―』鎌倉市米町遺跡発掘調査団 （図 16- 地点 c）

齋木秀雄、他　2005 『米町遺跡発掘調査報告書―第 10 地点―』有限会社　鎌倉遺跡調査会（図 16- 地点 b）

藤沢市教育委員会　1997 『神奈川の古代道』

馬淵和雄　1995 「米町遺跡　大町二丁目 2315 番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11（第 1 分冊）』 鎌倉市教育委員会（図 16- 地点 g）

馬淵和雄、他　2004 「米町遺跡　大町二丁目 2324 番 1 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20』 鎌倉市教育委員会（図 16- 地点 i）

馬淵和雄　2008 「米町遺跡　大町二丁目 2235 番 3 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 24』 鎌倉市教育委員会（図 16- 地点 h）

馬淵和雄ほか　2011 「下馬周辺遺跡　大町二丁目 1001 番 4 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27（第 1 分冊）』 鎌倉市教育委員会

宮田　眞、他　1999 『米町遺跡発掘調査報告書　鎌倉市大町 2 丁目 2338 番 1』米町遺跡発掘調査団

高柳光寿　1959 『鎌倉市史　総説編』 鎌倉市

表１　出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1)（図10）						
1	陶器	瀬戸・美濃系 皿	(12.6)	(7.0)	2.5	1/3　胎土:灰色　黒色粒　釉調:灰緑色　内底面に重ね焼き痕
2	陶器	瀬戸・美濃系 片口?	(17.6)	(7.6)	9.0	1/3　胎土:灰色　黒色粒　釉調:黄褐色
3	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[3.5]	口小片　胎土:長石　色調:褐灰色
4	石製品	用途不明	直径 4.2	孔径 1.0	厚さ 1.1	完形　上面?を刻線により16分割
5	鉄製品	皿	8.2	—	2.0	略完形　全体に錆び顕著
6	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	咸平元寶　中国北宋代・998年初鋳
7	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	至和通寶（真書）　中国北宋代・1054年初鋳
8	銅製品	銭	直径 2.7	孔径 0.7	厚さ 0.1	文久永寶　江戸時代・文久二年（1862）初鋳
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.6	1.8	4/5　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	5.5	1.9	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.7)	2.0	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
12	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.8	3.3	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
13	磁器	白磁 瓶類	—	5.8	[4.5]	底完存　胎土:灰白色　黒色粒　釉調:灰緑色
14	磁器	高麗青磁 壺	—	—	—	胴小片　胎土:灰色、精良　黒・白色粒　釉調:緑灰色　外面に象嵌（枝垂れ柳?）
15	陶器	瀬戸・美濃系 皿	10.7	3.2	2.2	1/2　胎土:灰白色　釉調:灰色　体下部回転ヘラケズリ
16	土器	手づくね かわらけ・小	9.2	—	2.0	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:黄橙色
17	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	10.6	1.3	2/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色
18	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	8.1	2.9	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
19	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	8.4	3.2	2/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色
20	磁器	肥前系 染付碗	—	(4.2)	[3.8]	底完存　胎土:灰白色　黒色粒　釉調:白色　内外面に絵付け
21	磁器	肥前系 染付皿	(9.2)	(4.6)	2.7	1/3　胎土:灰白色　黒色粒　釉調:白色　内外面に絵付け
22	磁器	高麗青磁 壺	—	—	—	胴小片　胎土:灰色、黒・白色粒を含み精良　釉調:緑灰色　　外側に象嵌
23	陶器	常滑 甕	—	—	—	頸小片　胎土:長石、小石粒　色調:褐灰色 花と他2種類の模様のかさなったスタンプが施されている
24	陶器	常滑 転用研磨具	直径 4.6	—	厚さ 0.9	甕胴部片を転用　割れ口の二辺が摩耗　胎土:灰色　黒色粒　色調:灰褐色
25	陶器	堺・明石系 転用研磨具	長さ 6.4	幅 5.5	厚さ 1.1	擂鉢体部片を転用　割れ口の三辺が摩耗
26	瓦質土器	蓋	—	—	[1.9]	摘み、受端部欠損　胎土:灰色　白色粒　色調:黒褐色
27	石製品	硯	長さ [9.8]	幅 6.3	高さ 2.2	4/5　陸の表面が部分的に剥落　色調:灰色
28	石製品	砥石	長さ [7.2]	幅 4.0	厚さ 1.3	仕上砥　両端欠損　四辺が摩耗　色調:灰色
29	土製品	鞴羽口	長さ [6.2]	外径 (6.0)	孔径 (4.6)	1/6周　炉体との接合部熔解
30	土製品	鞴羽口	長さ [7.8]	外径 (6.0)	孔径 (4.8)	1/3周　炉体との接合部熔解
31	銅	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	太平通寶　中国北宋代・976年初鋳
出土遺物(2)（図11）						
32	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	2.3	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
33	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.1	1.5	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色
34	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.0	完形　51g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
35	土器	ロクロかわらけ・小	7.3	4.8	2.0	完形　54g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
36	陶器	灰青釉植木鉢?	—	—	—	体小片、傾き不詳　胎土:にぶい黄褐色　黒色粒　釉調:青白色
37	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	—	—	[5.0]	口小片　胎土:長石　色調:赤褐色　7～8型式か
38	陶器	常滑甕	—	—	[9.5]	口小片　胎土:長石　色調:褐色　7型式か
39	陶器	常滑壺	—	(10.9)	[5.7]	下部1/4　胎土:長石、黒色粒　色調:褐灰色　鳶口壺か
40	陶器	常滑転用研磨具	長さ 6.4	幅 5.6	厚さ 1.0	甕胴部片を転用　胎土:長石、黒色粒　色調:明灰色　割れ口一辺と外面が磨耗
41	陶器	常滑転用研磨具	長さ 8.2	幅 5.1	厚さ 1.3	甕胴部片を転用　胎土:長石、黒色粒　色調:赤褐色　割れ口二辺が磨耗
42	磁器	肥前系染付碗	9.4	5.3	4.0	2/3　胎土:白色　黒色粒　釉調:透明釉　外面に二重網目文
43	陶器	瀬戸・美濃系灯明油受皿	6.5	3.9	1.5	完形　胎土:灰黄色、密　釉調:黒褐色
44	陶器	堺・明石系擂鉢	—	—	[7.3]	口小片　胎土:密　色調:赤褐色　内面に9条一単位の櫛目
45	土製品	鞴羽口	長さ [10.5]	直径 (6.0)	孔径 (3.8)	1/3周　炉体との接合部熔解
46	石製品	碁石?	長径 2.0	短径 1.7	厚さ 0.5	完形　2g
47	銅製品	用途不明	直径 2.0	孔径 0.5	高さ [1.1]	一部欠損　[5]g
48	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶　中国唐代・621年初鋳
49	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶（隷書）　中国唐代・621年初鋳
50	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶（行書）　中国北宋代・1008年初鋳
51	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶（篆書）　中国北宋代・1068年初鋳
52	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶（行書）　中国北宋代・1078年初鋳
53	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶（行書）　中国北宋大・1078年初鋳
54	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶（行書）　中国北宋大・1086年初鋳
55	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	紹聖通寶（行書）　中国北宋代・1094年初鋳
56	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元符通寶（篆書）　中国北宋大・1098年初鋳
57	鉄製品	釘	長さ 7.2	幅 0.5	厚さ 0.5	完形　9g
58	鉄製品	釘	長さ 7.6	幅 0.8	厚さ 0.5	完形　9g
59	鉄製品	釘	長さ 8.4	幅 0.6	厚さ 0.4	完形　9g
60	鉄製品	釘	長さ 8.8	幅 1.0	厚さ 0.5	完形　10g
61	鉄製品	釘	長さ 9.1	幅 1.1	厚さ 0.4	完形　9g
62	鉄製品	釘	長さ 9.1	幅 0.7	厚さ 0.5	完形　13g
63	鉄製品	釘	長さ 10.1	幅 0.6	厚さ 0.5	完形　9g
64	鉄製品	掛け金具?	長さ 10.3	幅 0.5	厚さ 0.4	完形　9g
65	木製品	漆器皿	(8.4)	6.0	1.2	1/2　内外面黒色系漆塗り
66	木製品	用途不明	長さ 15.6	幅 0.7	厚さ 0.5	完形?　角棒
67	木製品	用途不明	長さ 16.2	幅 0.9	厚さ 0.6	完形?　角棒
68	木製品	用途不明	長さ 16.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形?　角棒
69	木製品	箸	長さ 19.0	幅 0.6	厚さ 0.5	完形

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
70	木製品	箸	長さ 22.7	幅 0.8	厚さ 0.5	完形
71	木製品	用途 栓?	長さ 6.4	幅 [4.2]	厚さ [1.8]	1/3程度?
出土遺物(3)（図12）						
72	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色
73	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.3	2.2	略完形　[45]g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
74	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	1.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
75	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	4.9	1.7	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
76	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.2	1.6	4/5　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
77	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.2	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
78	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	1.8	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:灰黄色　外底面に板状圧痕
79	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.7)	(7.0)	1.6	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
80	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.4	3.3	略完形　[190]g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色 外底面に板状圧痕
81	土器	ロクロ かわらけ・大	14.1	8.1	3.7	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
82	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	8.1	3.9	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
83	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.0)	3.9	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
84	土器	ロクロ かわらけ・大	12.4	7.8	3.5	略完形　[179]g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:灰黄色
85	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	6.8	3.3	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
86	土器	ロクロ かわらけ・大	(15.2)	8.6	4.2	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
87	磁器	白磁 瓶類	—	7.2	[3.6]	底完存　胎土:灰色、精良　黒色粒　釉調:明緑灰色
88	陶器	常滑 甕か壺	—	—	[9.0]	口小片　胎土:黒色粒　色調:灰褐色　6a型式
89	土製品	円盤	直径 4.2	—	厚さ 1.2	一部欠損　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
90	土器	手づくね かわらけ・小	9.1	—	1.9	1/2　胎土:雲母、黒色粒　色調:淡橙色/橙色
91	磁器	青磁 折縁皿（坏）?	—	—	[3.7]	口小片　胎土:灰白色で精良　黒色粒　釉調:明緑灰色　龍泉窯系Ⅰ-2類
92	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(35.3)	(17.5)	14.0	1/4　胎土:黒・白色粒　色調:灰褐色　体～底部内面磨耗　5～6a型式
93	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.2)	1.7	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
94	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(8.0)	3.0	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色 外底面に板状圧痕
95	石製品	硯	長さ [5.8]	幅 [3.7]	高さ 1.8	両面が硯面？　表面の外縁に線刻画
96	銅製品	銭	直径 2.2	孔径 0.6	厚さ 0.1	熙寧元寶（篆書）　中国北宋代・1068年初鋳
97	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	(7.4)	2.9	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色　外底面に板状圧痕
98	石製品	砥石	長さ [10.0]	幅 3.2	厚さ 2.1	一端欠損　中砥（合掌寺砥）　石材:凝灰岩　色調:灰白色　4面使用
99	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	紹聖元寶（篆書）　中国北宋代・1094年初鋳
100	陶器	常滑 甕	—	—	[4.4]	口小片　色調:灰褐色　6a型式
101	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.0	1.8	4/5　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
102	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	2.0	5.7	4/5　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色　外底面に板状圧痕
103	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(9.0)	3.6	1/4　胎土:白色針状物質　色調:にぶい赤褐色
104	磁器	白磁 皿	—	—	—	口小片、傾き不詳　胎土:白色　黒色粒　釉調:灰白色 内面型押しによる陽刻（木の葉文）

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
105	陶器	常滑 壺	—	—	[4.1]	口小片　胎土:長石、白色粒　色調:赤灰色
出土遺物(4)（図13）						
106	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(3.8)	2.2	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
107	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.8)	1.7	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
108	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.8	3.2	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色
109	石製品	砥石	長さ [8.4]	幅 3.4	厚さ 2.1	中砥　両端欠損　3面を使用
110	石製品	砥石	長さ [5.2]	幅 4.1	厚さ 0.8	仕上砥　一端欠損　1面を使用
111	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	開元通寶（隷書）　中国唐代・621年初鋳
112	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	皇宋通寶（篆書）　中国北宋代・1038年初鋳
113	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.7	4/5　胎土:雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
114	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.7	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色
115	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.4)	8.9	3.4	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色　外底面に板状圧痕
116	陶器	常滑 甕	—	—	[10.8]	口小片　胎土:長石、黒色粒　色調:褐灰～赤褐色　6型式
117	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	咸平元寶　中国北宋代・998年初鋳
118	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.4	3.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
119	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	政和通寶（隷書）　中国北宋代・1111年初鋳
120	銅製品	銭	2.4	0.7	0.1	紹聖元寶（行書）　中国北宋代・1094年初鋳
121	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(6.7)	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
122	銅製品	銭	2.1	0.7	0.1	開元通寶　中国唐代・621年初鋳
123	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.8)	3.2	1/6　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
124	土器	手づくね かわらけ・小	(8.9)	—	2.2	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
125	土器	手づくね かわらけ・小	(10.1)	—	1.5	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
126	土器	手づくね かわらけ・大	12.8	—	3.5	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
127	土器	手づくね かわらけ・大	13.1	—	3.1	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
128	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.6)	1.7	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
129	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.9)	1.7	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒、泥岩粒　色調:黄橙色　外底面に板状圧痕
130	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.7)	(5.7)	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色　外底面に板状圧痕
131	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.0)	1.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
132	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(7.1)	1.6	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい橙色
133	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.0)	(6.5)	3.5	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
134	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.8)	(7.9)	3.0	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色
135	土器	ロクロ かわら・大	(13.8)	(9.0)	3.4	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:淡橙色
136	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.4	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
137	磁器	白磁 皿	—	—	—	口小片、傾き不詳　胎土:白色　黒色粒　釉調:青灰色 輪花形　内面に型押しの陽刻花弁文?
138	陶器	渥美・湖西 山茶碗?	—	—	[3.4]	口小片　胎土:黒色粒　色調:灰白色
139	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.8	厚さ 0.1	開元通寶（隷書）　中国唐代・621年初鋳

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
140	銅製品	銭	2.3	0.7	0.1	天聖元寶（真書）　中国北宋代・1023年初鋳
141	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:浅黄色
142	陶器	渥美・湖西 山茶碗	—	(6.2)	[2.1]	底1/4　胎土:白色粒　色調:灰色
出土遺物(5)（図14）						
143	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.4	3.6	0.9	完形　12g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　内折れ
144	土器	手づくね かわらけ・小	9.2	—	2.0	完形　91g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
145	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	6.5	1.7	完形　71g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
146	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.6)	1.7	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい橙色　外底面に板状圧痕
147	土器	手づくね かわらけ・大	13.2	—	3.1	略完形　[207]g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい褐色
148	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.0	3/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色
149	土器	手づくね かわらけ・大	13.1	—	3.4	完形　232g　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
150	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色
151	土器	手づくね かわらけ・小	8.7	—	2.1	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色
152	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.7	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調：浅黄色
153	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色～淡橙色
154	土器	手づくね かわらけ・小	(8.9)	—	2.2	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒　色調:にぶい黄橙色
155	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	2.0	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調：浅黄色
156	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	2.0	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調：黄灰色
157	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	2.0	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調：浅黄色
158	土器	手づくね かわらけ・小	(9.1)	—	1.8	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調：浅黄色
159	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	1.6	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調：浅黄色
160	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.6	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色
161	土器	手づくね かわらけ・小	(10.0)	—	1.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色
162	土器	手づくね かわらけ・大	13.0	—	3.1	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
163	土器	手づくね かわらけ・大	12.4	—	3.3	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色～褐灰色
164	土器	手づくね かわらけ・大	(13.0)	—	3.5	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒、泥岩粒　色調:にぶい黄橙色
165	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.7	4/5　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:橙色　外底面に板状圧痕
166	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.0)	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
167	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	6.0	1.9	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
168	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.3)	1.9	1/2弱　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい赤褐色　外底面に板状圧痕
169	土器	ロクロ かわらけ・大	11.9	7.3	2.9	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
170	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	8.3	3.1	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色　外底面に板状圧痕
171	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.9)	(6.8)	2.8	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調：浅黄色
172	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	(8.3)	2.9	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:灰黄色　外底面に板状圧痕
173	土器	ロクロ かわらけ・大	11.7	9.5	2.7	4/5　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色　外底面に板状圧痕
174	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	9.2	3.0	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色　外底面に板状圧痕

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
175	土器	ロクロかわらけ・大	12.6	9.1	3.0	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
176	土器	ロクロかわらけ・大	12.7	9.0	2.9	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒・土丹粒　色調：淡橙色
177	土器	ロクロかわらけ・大	13.1	7.8	2.8	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:浅黄色　外底面に板状圧痕
178	土器	ロクロかわらけ・大	12.0	7.7	3.3	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒　色調：浅黄色
179	土器	ロクロかわらけ・大	(12.4)	(7.8)	3.3	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
180	土器	ロクロかわらけ・大	(12.7)	(8.2)	3.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
181	土器	ロクロかわらけ・大	—	6.3	[3.1]	底完存　柱状高台　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:黄橙色 外底面に板状圧痕
182	磁器	青磁劃花文碗	—	—	[4.9]	口小片　胎土:灰白色で精良　黒色粒　釉調:明緑灰色　龍泉窯系Ⅰ-2類
183	陶器	常滑甕	—	—	—	口小片、傾き不詳　胎土:黒色粒　色調:灰褐色/浅黄色　5型式
184	鉄製品	釘	長さ 6.9	幅 0.6	厚さ 0.4	完形　7g
185	土器	手づくねかわらけ・小	(7.0)	—	1.1	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
186	土器	ロクロかわらけ・小	(9.4)	—	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色　外底面に板状圧痕
187	土器	ロクロかわらけ・大	(12.8)	(8.9)	3.2	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:黄橙色
188	土器	手づくねかわらけ・小	9.2	—	2.0	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒 色調:にぶい橙色だが、中央の内外部に灰赤色の焼きむら
189	土器	手づくねかわらけ・小	(8.4)	—	1.9	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
190	土器	手づくねかわらけ・小	(10.2)	—	1.7	1/4　胎土:雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
191	土器	手づくねかわらけ・大	(12.0)	—	3.6	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒・赤色粒　色調:にぶい黄橙色
192	土器	手づくねかわらけ・大	14.3	—	3.4	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
193	土器	手づくね白かわらけ極小	(4.6)	—	0.6	内折れ　1/3　胎土:黒色粒　色調:灰白色
194	土器	ロクロかわらけ・小	(6.2)	(4.6)	1.3	内折れ　1/4　胎土:雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
195	土器	ロクロかわらけ・小	(8.6)	(6.2)	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
196	土器	ロクロかわらけ・大	(12.8)	(8.2)	3.0	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒・赤色粒　色調:にぶい黄橙色
197	土器	ロクロかわらけ・大	(13.2)	(8.8)	3.2	1/2　胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒・土丹粒　色調:橙色
198	土器	ロクロ土師器高台付付	—	—	[3.9]	口～体小片　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
199	陶器	常滑片口鉢Ⅰ類	—	—	—	口小片　胎土：褐灰色　白色粒　色調：褐灰色　内面に緑灰色の自然釉がかかる
200	陶器	山皿東遠系	(7.6)	(4.2)	1.9	1/2　胎土：黒・白色粒　色調：灰色
201	石製品	砥石	長さ 8.7	幅 4.1	厚さ 2.8	中砥　残存率不明　凝灰岩　灰白色　4面磨耗
202	陶器	常滑転用研磨具	直径 3.2	厚さ 0.7	—	胎土:灰色　黒・白色粒　常滑片口鉢Ⅰ類転用　外底部やや磨耗
出土遺物(6)（図15）						
203	土器	手づくねかわらけ・小	(9.0)	—	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:灰橙色
204	石製品	砥石	長径 3.5	短径 3.4	厚さ 0.9	色調：灰緑色～灰色　3面磨耗
205	土器	手づくねかわらけ・小	(8.8)	—	1.8	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒　色調:橙色　内外部に黒ずみ痕
206	土器	ロクロかわらけ・中	(10.2)	(8.0)	1.8	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、黒色粒　色調:にぶい黄橙色
207	土器	ロクロかわらけ・小	9.2	7.8	1.9	完形　94ｇ　胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒　色調:灰黄色
208	土器	かわらけ転用円盤	直径 3.5	厚さ 1.0	—	胎土:白色針状物質、雲母、白・黒・赤色粒　色調:橙色
209	土器	ロクロかわらけ・小	8.0	5.8	1.8	完形　56ｇ　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒　色調:にぶい黄橙色 内底部に液体？痕、内外、黒く変色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
210	土器	手づくね かわらけ・大	(12.7)	—	2.2	1/4　胎土:白色針状物質、雲母、白・黒色粒　色調:灰黄色
211	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.0)	(7.5)	2.2	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白・赤色粒　色調:にぶい黄橙色 内部縁・外部に黒ずみ痕
212	土器	ロクロ かわらけ・大	12.5	8.7	3.0	1/2　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:淡橙色/橙色　外底面に板状圧痕
213	陶器	渥美 甕	—	—	[3.8]	底小片　胎土:白色粒　色調:灰黄色　内面に自然釉
214	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.4	1/2　胎土:雲母、黒色粒　色調:灰色～灰黄色
215	土器	手づくね かわらけ・小	9.3	—	1.6	略完形　[67]g　胎土:雲母、白色針状物質、黒色粒　色調:にぶい黄褐色
216	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	2.0	1/3　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:橙色
217	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.8)	8.6	3.9	1/3　胎土:角閃石、石英粒、白色針状物質　色調:淡橙褐色/黒褐色 外底面に板状圧痕
218	木製品	漆器 椀	(15.4)	(8.8)	[4.8]	1/4　内外面黒色系漆塗り　体部外面に4条一組の横位沈線
219	木製品	漆器 椀	(15.6)	7.8	[2.8]	1/3　土圧により体部が押し広げられる　体部外面～内全面黒色系漆塗り
220	木製品	用途不明	長さ 23.8	幅 1.8	厚さ 1.3	完形　柾目材
221	木製品	箸	長さ [15.2]	幅 [0.7]	厚さ 0.5	一端欠損
222	木製品	草履芯	長さ [13.9]	幅 [2.8]	厚さ 0.2	一部残存　柾目材　直径2㎜程度の小孔5ヶ所
223	木製品	草履芯	長さ [15.0]	幅 [2.8]	厚さ 0.2	一部残存　柾目材
224	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	2.0	1/4　胎土:白色針状物質、黒色粒　色調:橙色
225	土器	手づくね かわらけ・大	(13.8)	—	3.3	1/3　胎土:白色針状物質、雲母、黒・白色粒　色調:にぶい黄橙色

表２　出土遺物カウント表

①　各遺構面までの掘り下げ時

凡例　点数＝破片数
重量単位＝ｇ

帰属遺構面	出土状況	かわらけ										白かわらけ					
		ロクロ						手づくね				ロクロ		手づくね		小片	
		大		小		内折れ		大		小		内折れ		大			
		点数	重量														
表土	表採	3	30	5	45			6	85								
表土	掘削時	45	540	7	35			1	15								
0-1	掘削時	344	3610	20	330			1	35								
1-2	掘削時	87	810	27	210			5	65	1	5			1	5		
2-3	掘削時	225	2795	56	535	1	5	52	800	23	255			1	5	1	5
3-4	掘削時	76	880	29	215	1	10	271	3035	69	735	5	1	2	10		
4下	掘削時	1	15	1	5			22	335	6	40						

帰属遺構面	出土状況	土器						白磁				青白磁		青磁(同安系)	
		南伊勢系鍋		火鉢		不明		口禿碗・皿		碗皿		梅瓶		櫛描文碗	
		点数	重量												
表土	表採							1	15						
表土	掘削時														
0-1	掘削時			2	50	3	90	1	5			3	20		
1-2	掘削時	2	15	1	50			2	15						
2-3	掘削時	1	10					1	5	3	20	1	5		
3-4	掘削時									1	10			1	15
4下	掘削時														

帰属遺構面	出土状況	青磁(龍泉系)								舶載陶器					
		劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿(坏)		碗・皿		壺類		褐釉壺		緑釉盤		澱青釉植木鉢	
		点数	重量														
表土	表採																
表土	掘削時									1	25						
0-1	掘削時	1	15	7	80			5	90	2	50	1	50			1	50
1-2	掘削時			4	100	1	10	1	5								
2-3	掘削時			3	60			2	10								
3-4	掘削時			1	5			2	10	1	25			1	10		
4下	掘削時			1	5												

帰属遺構面	出土状況	瀬戸				尾張・常滑											
		香炉		洗?		甕		壺		山茶碗		片口碗		片口鉢		転用片	
														Ⅰ類		Ⅱ類	
		点数	重量														
表土	表採					11	725							1	15		
表土	掘削時					23	1145							2	80	2	105	1	80
0-1	掘削時	1	10			225	11150	5	375	2	35	1	50	12	455	8	710	3	170
1-2	掘削時					32	1865	1	25			6	60	6	350	1	95		
2-3	掘削時					47	1990	5	145	1	5			4	365	5	300		
3-4	掘削時			1	5	98	5725							4	80	2	135	1	15
4下	掘削時					8	215												

帰属遺構面	出土状況	渥美・湖西				東遠		備前		瓦器		瓦質土器				瓦		土製品	
		甕		山茶碗		小皿		擂鉢		碗		火鉢		香炉?		不明		鞴羽口	
		点数	重量																
表土	表採	1	80																
表土	掘削時											1	55						
0-1	掘削時	1	45					1	70			5	295	1	50	2	165	2	250
1-2	掘削時	2	85									1	15						
2-3	掘削時	3	100	1	15							1	105						
3-4	掘削時	9	740			2	70			1	5	1	170						
4下	掘削時																		

帰属遺構面	出土状況	銅製品		鉄製品・鉄滓								石製品							
		銭		皿		釘		不明		鉄滓		滑石鍋		紡錘車		碁石		砥石	
		点数	重量																
表土	表採	3	10																
表土	掘削時	1	5	1	65									1	40			2	55
0-1	掘削時	9	35			24	260	4	75	5	735					1	5	7	460
1-2	掘削時	3	10									5	20					3	165
2-3	掘削時	2	10			11	45												
3-4	掘削時					2	30					1	10					1	150
4下	掘削時					1	10												

帰属遺構面	出土状況	木製品			肥前系磁器				瀬戸・美濃系磁器	
		箸	棒状	栓?	染付碗皿		壺類		染付碗	
		点数			点数	*重量*				
表土	表採								1	*10*
表土	掘削時				2	*25*				
0-1	掘削時	2	3	1	14	*310*	2	*25*	15	*195*
1-2	掘削時									
2-3	掘削時									
3-4	掘削時									
4下	掘削時									

帰属遺構面	出土状況	瀬戸・美濃系陶器												堺・明石系陶器	
		擂鉢		柄付片口鉢		皿		灯明油受皿		香炉?		瓶類		擂鉢	
		点数	*重量*												
表土	表採														
表土	掘削時	2	*65*	1	*255*	1	*50*	1	*5*	1	*5*	1	*5*	1	*245*
0-1	掘削時	3	*115*					1	*45*					3	*280*
1-2	掘削時														
2-3	掘削時														
3-4	掘削時														
4下	掘削時														

帰属遺構面	出土状況	土師器						ロクロ土師器		須恵器				灰釉陶器		獣骨		貝		
		坏		壺		甕		高台付坏		坏		甕		碗		不明	魚類	ｱｶﾆｼ	ｻｻﾞｴ	ﾊﾏｸﾞﾘ
		点数	*重量*													点数				
表土	表採																			
表土	掘削時																			
0-1	掘削時									1	*5*			1	*5*	1		2	1	1
1-2	掘削時																			
2-3	掘削時											1	*15*	1	*5*	3	1			
3-4	掘削時			1	*10*	3	*45*	2	*60*							2				
4下	掘削時	1	*5*			7	*85*													

②　攪乱・１面遺構

帰属遺構面	遺構	かわらけ														白かわらけ	
		ロクロ								手づくね				小片		手づくね	
		特大		大		小		内折れ		大		小				大	
		点数	*重量*														
0	攪乱			1	*10*	4	*10*										
	攪乱1			6	*70*	1	*5*			3	*30*						
	攪乱2			115	*1745*	58	*485*			22	*300*	7	*190*			1	*5*
1	1			19	*250*	4	*35*										
	3	1	*150*	345	*4755*	86	*900*	1	*5*	4	*60*	2	*85*	29	*75*	2	*10*
	4			11	*170*	6	*25*			2	*15*						
	201			2	*20*									1	*5*		
	202			2	*25*												
	203			43	*520*	17	*130*			7	*75*	1	*15*				
	205																
	207			8	*130*	8	*145*										
	208			3	*50*					3	*25*					1	*5*
	209																
	210･211			5	*100*	1	*10*										
	213			1	*20*												
	222			37	*535*	8	*70*			8	*100*	2	*55*				

帰属遺構面	遺構	土器						白磁						青白磁				青磁(同安系)	
		鍔釜		南伊勢系鍋		不明		口禿碗・皿		碗皿		瓶類		梅瓶		合子身		櫛描文碗	
		点数	*重量*																
0	攪乱																		
	攪乱1	1	*10*																
	攪乱2					2	*15*	1	*5*	2	*5*	2	*295*					1	*10*
1	1			1	*10*														
	3					1	*15*	1	*5*			1	*105*						
	4																		
	201																		
	202																		
	203							1	*10*					1	*5*				
	205																		
	207									1	*10*								
	208																		
	209																		
	210･211																		
	213																		
	222			2	*15*											1	*5*		

帰属遺構面	遺構	青磁(龍泉系)										高麗青磁		瀬戸							
		劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿(坏)		碗・皿		壺類		瓶類		卸皿		入子		洗?		瓶類	
		点数	重量																		
0	攪乱																				
	攪乱1															1	5				
	攪乱2	1	5	6	50			3	50			2	85	1	10			1	25	2	75
1	1																				
	3			4	35	1	25	1	15					1	25					1	25
	4																				
	201																				
	202																				
	203			1	5			2	10												
	205																				
	207																				
	208	1	25																		
	209							2	5												
	210・211			1	5					1	5										
	213																				
	222					1	35														

帰属遺構面	遺構	尾張・常滑												渥美・湖西		備前	
		甕		壺		山茶碗		片口碗		片口鉢 I類		片口鉢 II類		転用片		甕		擂鉢	
		点数	重量																
0	攪乱	1	40															1	15
	攪乱1	5	265															1	200
	攪乱2	158	8895							13	745	8	490	1	30	4	205	4	200
1	1	1	75																
	3	70	4745			1	10	1	20	4	355								
	4	3	55																
	201	1	50																
	202																		
	203	21	835							2	95	3	100						
	205	2	75																
	207			1	25														
	208									1	25								
	209	3	155							1	20								
	210・211	5	250													2	215		
	213																		
	222	42	3150							2	160	5	1160						

帰属遺構面	遺構	瓦質土器				瓦		土製品				銅製品		鉄製品・鉄滓					
		火鉢		蓋		不明		鞴羽口		円盤		銭		皿		釘		鉄滓	
		点数	重量																
0	攪乱																		
	攪乱1															24	350		
	攪乱2	4	345	1	50	3	595	1	115			2	10			4	35	5	1770
1	1											1	5						
	3					2	215									4	25	1	15
	4																		
	201																		
	202																	1	65
	203	2	390									1	5						
	205																		
	207																		
	208															1	10		
	209																		
	210・211									1	25								
	213																		
	222																		

帰属遺構面	遺構	石製品												肥前系磁器				瀬戸・美濃系磁器	
		滑石鍋		紡錘車		硯		砥石		石臼		不明		染付碗皿		壺類		染付碗	
		点数	重量																
0	攪乱																		
	攪乱1							1	40					4	20			9	200
	攪乱2					1	185	2	95			2	265	16	250	3	45	21	205
1	1					1	50												
	3	4	175							1	2000					1	5	1	5
	4							1	135										
	201																		
	202																		
	203							2	15							2	120		
	205																		
	207																		
	208																		
	209																		
	210・211																		
	213																		
	222																		

帰属遺構面	遺構	瀬戸・美濃系陶器						堺・明石系陶器				土師器		獣骨	貝					種子	備考
		擂鉢		皿		瓶類		擂鉢		転用片		坏		不明	アカニシ	ハイ	ツメタ	ダンベイキサゴ		桃核	
		点数	重量											点数							
0	攪乱																				
	攪乱1			1	50																
	攪乱2	7	455	3	130	1	10	7	670	1	50			1	1						
1	1																				
	3													4		1	1	1	1		
	4																				
	201																				
	202																				
	203	1	25																		
	205																				常滑甕は5～6型式
	207																				
	208																				
	209											1	10								
	210・211																				
	213																				
	222																				

③　2面遺構

帰属遺構面	遺構	層位	かわらけ										白かわらけ		白磁		青白磁		青磁(龍泉系)	
							手づくね				小片		手づくね		碗皿		梅瓶		碗・皿	
			大		小		大		小				大							
			点数	重量																
	面上				1	10													1	10
	5		3	30	3	25														
	8				1	10														
	9		2	20																
	11																			
	13		1	5																
	15		1	15																
	17																			
	18														1	5				
	19		1	20	1	35														
	20		1	25																
2	21		7	95							7	20								
	22		2	20			3	45												
	23																			
	24		1	10	1	5	3	25												
	214		10	505	2	5														
	215		40	345	11	50							1	5						
	215-P1		12	125	4	80														
	215-P2		5	45	4	20			1	5										
	215-P3		12	165	6	45														
	218																			
	219		1	20																
	道路	被覆土															1	5		
2-3	道路	掘削時																		

帰属遺構面	遺構	層位	瀬戸		尾張・常滑						渥美・湖西		瓦質土器		瓦	
			瓶類		甕		壺		片口鉢 I類		甕		火鉢		平瓦 不明	
			点数	重量												
	面上				1	25										
	5				1	50										
	8														1	35
	9															
	11															
	13				1	25										
	15															
	17								1	15						
	18															
	19								1	25						
	20						1	120								
2	21															
	22															
	23															
	24															
	214										1	40				
	215		1	5	5	655					1	45				
	215-P1															
	215-P2				1	305										
	215-P3				3	75										
	218				1	35										
	219															
	道路	被覆土							1	25			1	15		
2-3	道路	掘削時			1	15										

帰属遺構面	遺構	層位	銅製品		鉄製品		石製品		肥前系磁器		獣骨	備考
			銭		釘		砥石		染付碗皿		不明	
			点数	重量							点数	
	面上				1	10						
	5				1	5						
	8		1	5								
	9											
	11		1	5								
	13											
	15											
	17											
	18											
	19											
	20											
2	21				2	10						
	22											
	23		1	5								
	24											
	214								1	5		
	215		1	5							1	
	215-P1				1	5						
	215-P2											常滑甕は5～6型式
	215-P3											
	218											
	219											
	道路	被覆土					1	15				
2-3	道路	掘削時										

④　3面遺構

帰属遺構面	遺構	かわらけ																		白かわらけ	
		手づくね														小片		円盤		手づくね	
		大		小		内折れ		大		小		内折れ		不明						小	
		点数	重量																		
	面上	35	495	13	210	15	155	4	645	1	90			1	10					1	10
	25	65	1715	11	400			27	475	16	260					20	35	1	5		
	27							1	20												
	28							2	10												
	35	1	10																		
	38																				
	42	2	20	1	5			5	45	1	5	1	10								
	44									1	5										
	45	1	5					2	20	1	10										
	46	1	5	3	15			1	5												
	47	2	35	1	5													1	10		
	214b	30	950	18	255			34	463	5	40										
	220	8	150	7	15			16	210	1	20										
	221			4	15			9	75												
3	223									1	10										
	224																				
	231	1	5																		
	233			1	10																
	237							1	5												
	241																				
	243	16	95	1	5			13	110												
	244	1	10	1	5			1	20												
	245																				
	246	1	80					1	20	1	15										
	247																				
	248							1	5												
	249							3	10												
	250									3	10										

帰属遺構面	遺構	白磁		青白磁		青磁(龍泉系)				瀬戸				尾張・常滑				渥美・湖西		東遠	
		口禿碗・皿		合子蓋		劃花文碗		蓮弁文碗		洗?		碗		甕		片口鉢 I類		甕		山茶碗	
		点数	重量																		
3	面上							2	10					14	590	1	60				
	25													6	280			1	220		
	27																				
	28																	1	60		
	35													1	35						
	38													2	80						
	42													4	290						
	44											1	51								
	45													1	45						
	46																				
	47													1	25						
	214b			1	5			2	55					19	935			1	90		
	220					1	5	1	10					16	540					1	20
	221							1	10	1	5										
	223																				
	224													1	50						
	231	1	5																		
	233																				
	237													1	25						
	241													1	45						
	243													8	220					1	5
	244													1	40						
	245													6	255						
	246																				
	247																				
	248																				
	249																				
	250																				

帰属遺構面	遺構	瓦器		瓦		鉄製品・鉄滓				石製品		瀬戸・美濃系陶器		獣骨
		碗		平瓦 不明		釘		鉄滓		滑石鍋		擂鉢		不明
		点数	重量											
3	面上									1	125			
	25													
	27													
	28													
	35													
	38													
	42													
	44					1	15							
	45					2	10							
	46													
	47											1	25	
	214b			1	95									2
	220													
	221													
	223													
	224													
	231													
	233													
	237													
	241													
	243	1	5											
	244													
	245													
	246													
	247							1	75					
	248													
	249													
	250													

④　3b 面・4 面遺構

帰属遺構面	遺構	かわらけ								白かわらけ				土器		青磁(龍泉系)			
		ロクロ				手づくね				ロクロ		手づくね		南伊勢系鍋		劃花文碗		蓮弁文碗	
		大		小		大		小		内折れ		大							
		点数	重量																
3b	48			3	10	5	35												
	49			1	55			1	25										
	50			3	105			2	10										
	52					3	35												
	52b							1	5										
	54							1	10	1	10							1	5
	55			1	5	1	10												
	56															1	25		
	58			1	55							1	10						
	59					1	15												
	60			4	25	7	130												
	61					1	10												
	62	2	40	1	15														
	63			1	10														
	65							1	20										
	67					4	25	2	5										
	68	1	20					1	5							1	20		
	69					1	10												
	70					3	25												
	72					2	20												
	76							3	15										
	80	1	5			3	25												
	81					1	15												
	82					2	45												
	83			1	10	10	45	6	20										
	85	2	20	1	35	3	20												
	86			1	5	7	65	1	30										
	87	1	5			2	20	1	5					1	5				
	253																		
	254																		
	255																		
	258																		
	260	1	10	1	5	2	100												
	270	1	5	1	5														
	272					1	10	1	5										
	273					2	10	3	10										
	279	3	15	1	10														
	296					1	10												
	301							2	65										
	259	1	138			3	70	4	25							1	10		
4	300							1	25										

帰属遺構面	遺構	尾張・常滑				渥美・湖西		鉄製品		石製品		木製品・木材			漆器	土師器					
		甕		片口鉢 Ⅰ類		甕		釘		砥石		草履芯	箸	棒状	椀	坏		相模型甕		不明	
		点数	重量									点数									
3b	48	2	285							1	25										
	49							1	5												
	50																				
	52																				
	52b			1	20																
	54	1	10	1	75	1	80														
	55	10	540																		
	56																				
	58																				
	59	3	220																		
	60																				
	61																				
	62							1	5												
	63																				
	65																				
	67	1	20																		
	68	2	55																		
	69																				
	70																				
	72																				
	76																				
	80																				
	81															1	5				
	82																				
	83																				
	85																				
	86	3	170																		
	87																				
	253	1	85																		
	254	1	55																		
	255	1	125																		
	258					1	150														
	260																	1	5		
	270																				
	272																				
	273	1	100	1	40																
	279																				
	296																				
	301																				
	259											2	1	1	2					1	5
4	300																				

付編　米町遺跡の寄生虫卵分析・花粉分析

森　将志（パレオ・ラボ）

1. はじめに

神奈川県鎌倉市大町二丁目に所在する米町遺跡において検出された遺構 259 の性格を調べるために、遺構内堆積物が採取された。以下では、試料について行った寄生虫卵分析と花粉分析の結果を示し、遺構 259 の性格について検討した。

2. 試料と分析方法

分析試料は、遺構 259 の 2 層から採取された黒色（N1.5/）細粒砂と、最下層に相当する 3 層から採取された黒色（7.5Y2/1）砂混じり粘土の 2 点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析および花粉分析を試みた。

2-1. 寄生虫卵分析

一定量の体積（2ml）の試料を採取し、水を加えて撹拌した後、椀かけ処理を施す。次に、10％の水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後､比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い､浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸の割合の混酸を加え 10 分間湯煎）を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて体積を測定し、保存用とした。この残渣からマイクロピペットを用いてプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。試料 1ml 中の寄生虫卵含有数は、次式による方法で求めた。

$X = BD/AC$

X：試料 1ml 中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の体積、B：濃縮試料＋グリセリンの体積、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた体積、D：プレパラート中の寄生虫卵数

2-2. 花粉分析

試料（湿重約 3 ～ 4g）を遠沈管にとり､10％の水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％のフッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸 9：1 濃硫酸の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣より適宜プレパラートを作製した。2 層の試料についてはプレパラート全面に渡り検鏡した。3 層の試料については樹木花粉が 200 個を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、図版に示した分類群ごとの単体標本（PLC.586 ～ 591）は、パレオ・ラボに保管されている。

3. 分析結果

検鏡の結果、2 層では寄生虫卵および花粉化石の産出は確認できなかったが、3 層では寄生虫卵と花粉化石の産出が確認できた。3 層から産出した寄生虫卵は鞭虫卵と横川吸虫卵の 2 種類で、鞭虫卵は試料 1ml 当たり 24 個､横川吸虫卵は試料 1ml 当たり 8 個である。計量の結果と寄生虫卵数を表 1 に示す。また、産出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 11、草本花粉 11、形態分類を含むシダ植物胞子 1 の総計 23 である。これらの花粉・胞子の一覧表を表 2 に、分布図を図 1 に示した。分布図において、

表１　寄生虫卵分析に用いた試料の計量値と寄生虫卵数

	遺構259	
	2層	3層
分析に用いた試料(ml)	2	2
残渣＋グリセリン（ml）	0.7	0.8
封入に用いた量（ml）	0.05	0.05
鞭虫卵	－	3
(試料1ml当たりの個数)		(24)
横川吸虫卵	－	1
(試料1ml当たりの個数)		(8)
合計	－	4
(試料1ml当たりの個数)		(32)

樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉および胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図および表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉ではスギ属とコナラ属コナラ亜属、シイノキ属-マテバシイ属の産出が目立ち、それぞれ 56% と 23%、13% の産出率を示す。草本花粉ではアカザ科-ヒユ科とナス属の産出が多く、それぞれ 26% と 42% の産出率である。また、栽培植物のゴマ属がわずかに産出している。

表２　産出花粉化石一覧

学名	和名	遺構259	
		2層	3層
樹木			
Sciadopitys	コウヤマキ属	－	1
Cryptomeria	スギ属	－	114
Taxaceae－Cephalotaxaceae－Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	－	2
Pterocarya－Juglans	サワグルミ属－クルミ属	－	1
Carpinus－Ostrya	クマシデ属－アサダ属	－	1
Alnus	ハンノキ属	－	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	－	46
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	－	4
Castanea	クリ属	－	3
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	－	25
Ulmus－Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	－	2
草本			
Gramineae	イネ科	－	24
Polygonum sect. *Persicaria－Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	－	4
Chenopodiaceae－Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	－	224
Brassicaceae	アブラナ科	－	1
Leguminosae	マメ科	－	1
Apiaceae	セリ科	－	1
Solanum	ナス属	－	365
Sesamum	ゴマ属	－	1
Artemisia	ヨモギ属	－	33
Tubuliflorae	キク亜科	－	20
Liguliflorae	タンポポ亜科	－	5
シダ植物			
Trilete type spore	三条溝胞子	－	1
Arboreal pollen	樹木花粉	－	200
Nonarboreal pollen	草本花粉	－	679
Spores	シダ植物胞子	－	1
Total Pollen&Spores	花粉・胞子総数	－	880
Unknown pollen	不明花粉	－	2

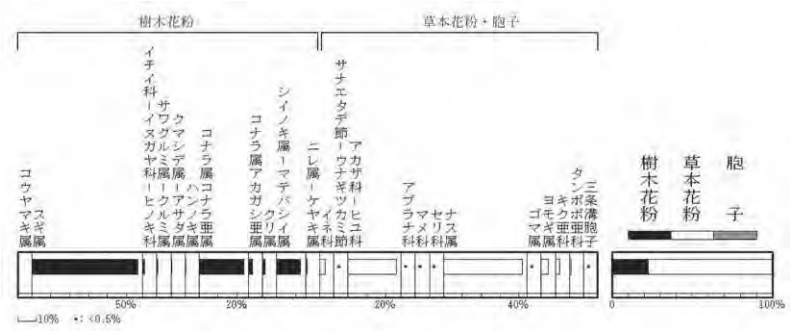


図１　遺構 259-3 層における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で産出した。

4. 考察

今回の分析試料のうち、遺構 259 の最下層に相当する 3 層の試料から、1ml 当たり 32 個の寄生虫卵が確認された。金原（1997）によると、寄生虫卵が試料 1cm3 中に 1,000 個以上あればその堆積物は糞便の可能性があると考えられている。寄生虫卵数から考えると、遺構 259 の堆積物に糞便が混じりこんでいた可能性は低いと思われる。よって、寄生虫卵分析の結果から遺構 259 が厠や肥溜めかどうかを判断するのは難しい。

次に、3 層の花粉分析結果を見てみる。もし、遺構 259 が厠や肥溜めであれば、人間が食した物が排泄されているため、そこから産出する花粉化石群集には食物に含まれる花粉が多く含まれている可能性がある。3 層の花粉分析結果では、草本花粉においてナス属とアカザ科-ヒユ科が特異的に高い産出率を示している。ナス属は野菜となる植物を含む分類群で、アカザ科-ヒユ科については、腹痛時の薬として用いられていた可能性が指摘されている（黒崎，1997

など)。秋田城跡から検出された木桶底の花粉分析の例（金原正明・金原正子，1996）を見ると、寄生虫卵の産出が稀であるにもかかわらず、ナス科とアカザ科 - ヒユ科、アブラナ科などが特異的に多産している。これらの分類群は当時の周辺植生を反映しているとは考えにくく、各遺跡で得られている糞便のデータと類似性があるため、遺構に残存していた糞便に由来すると考えられている。秋田城跡の木桶底の例と米町遺跡の遺構259の3層の分析結果を比べると、寄生虫卵がそれほど産出しておらず、ナス属とアカザ科 - ヒユ科が特異的に産出する点が類似する。よって、今回の遺構 259 の 3 層から産出したナス属とアカザ科 - ヒユ科は糞便由来の可能性が考えられる。

さらに、3 層ではゴマ属花粉の産出も見られた。ゴマについては、石動山大宮坊跡の厠跡の種実分析において種子が多く確認され、17 ～ 18 世紀の人々はゴマを食べていたと考えられている（金原ほか、1995)。今回は花粉分析しか行っていないため、試料にゴマの種子が含まれているかどうかは不明であるが、人がゴマを食す際に花粉を取り込み、それが排泄されたことも考えられる。

以上のように、259 遺構の 3 層では寄生虫卵の検出量は極めて少ないものの、食用や薬用になる分類群の花粉化石が特異的な産出傾向を示し、従来知られているトイレ遺構から産出する花粉化石群集と類似した組成を示すため、糞便の存在が窺える。よって、遺構 259 はトイレ遺構や肥溜である可能性が高いように思われる。

引用文献

金原正明（1997）自然科学的研究からみたトイレ文化．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」:197-216, 東京美術.

金原正明・金原正子（1996）秋田城跡便所遺構における微遺体分析．秋田市教育委員会編「秋田城跡平成 7 年度秋田城跡調査概報」: 115-134, 秋田市教育委員会.

金原正明・金原正子・中村亮仁（1995）大宮坊跡（厠跡）における自然科学的分析．鹿島町教育委員会編「史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ」: 51-70, 石川県鹿島町教育委員会.

黒崎　直 (1997) 考古学の発掘現場におけるトイレ研究．大田区立郷土博物館編「トイレの考古学」:183-196, 東京美術.

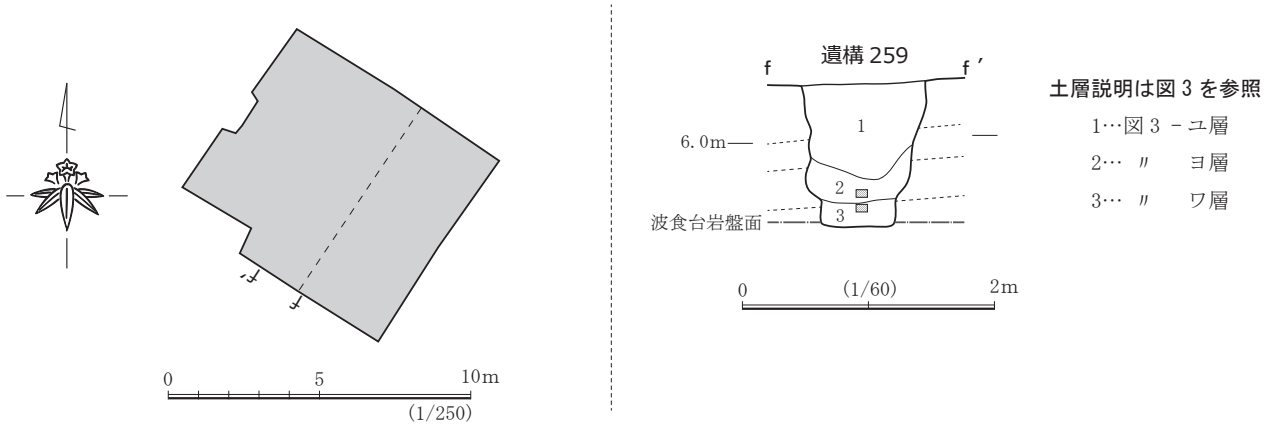
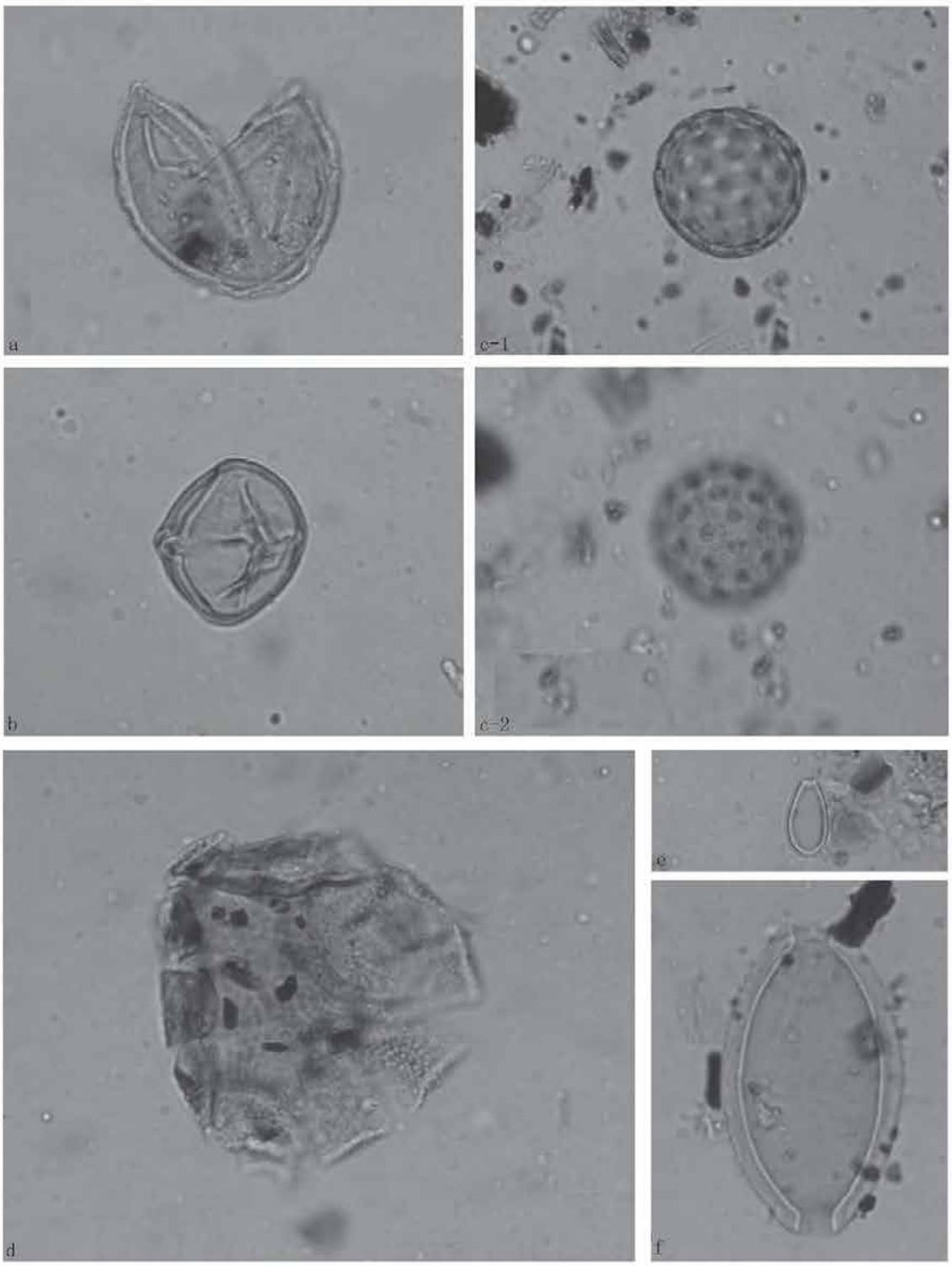


図２　試料の採取箇所



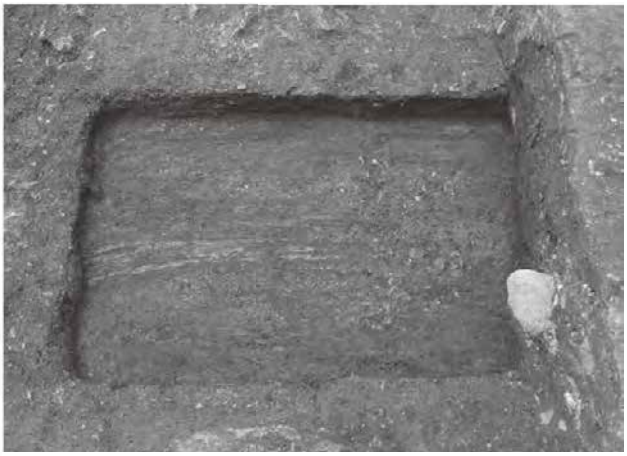
図版　遺構 259-3 層から産出した寄生虫卵および花粉化石

a. スギ属（PLC. 586）
b. ナス属（PLC. 587）
c. アカザ科-ヒユ科（PLC. 588）
d. ゴマ属（PLC. 589）
e. 横川吸虫卵（PLC. 590）
f. 鞭虫卵（PLC. 591）

１．現地調査前（北東から）

４．Ⅰ・Ⅱ区 表土掘削状況（西から）

２．調査地から祇園山を望む（Ⅱ区調査時・南から）



５．Ⅰ区 攪乱１（南西から）

３．Ⅰ区 表土掘削後（北東から）

６．Ⅰ区１面（北東から）

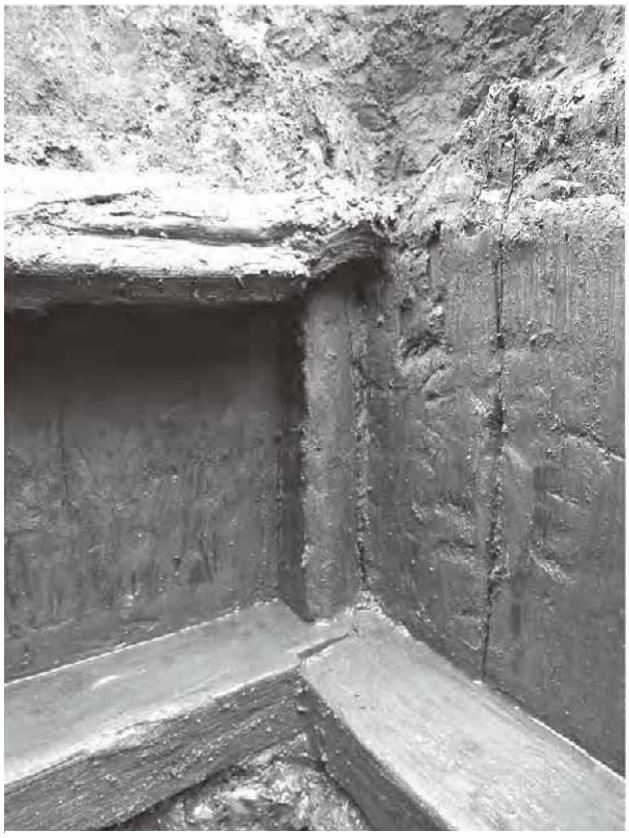
図版２

1．井戸枠検出状況（南から）

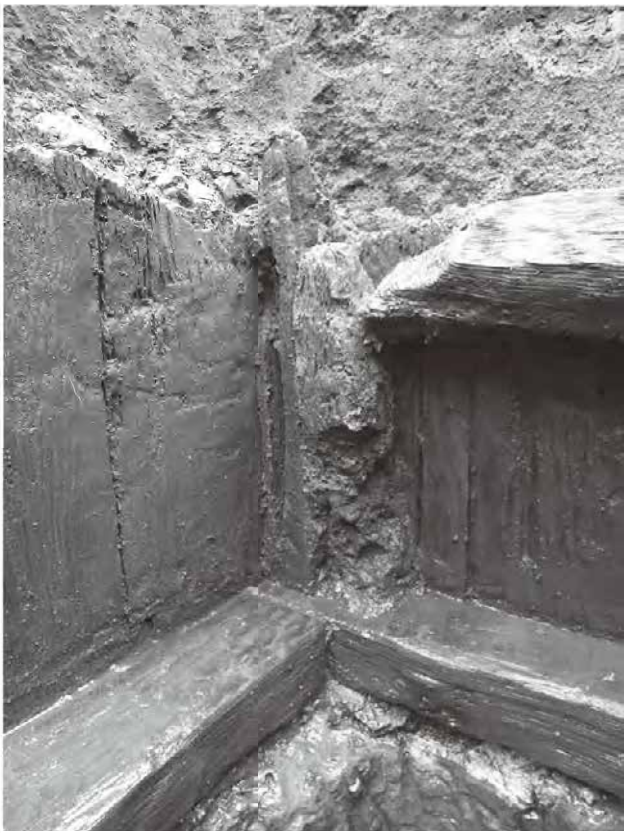
2．井戸枠 土台材上かわらけ出土状況（東から）

3．井戸枠 南壁（北東から）

4．井戸枠 北壁（南西から）



5．井戸枠 南西隅の支柱（東から）



6．井戸枠 北西隅の支柱（南から）

Ⅰ区１面 遺構３（井戸・4 面調査時）①

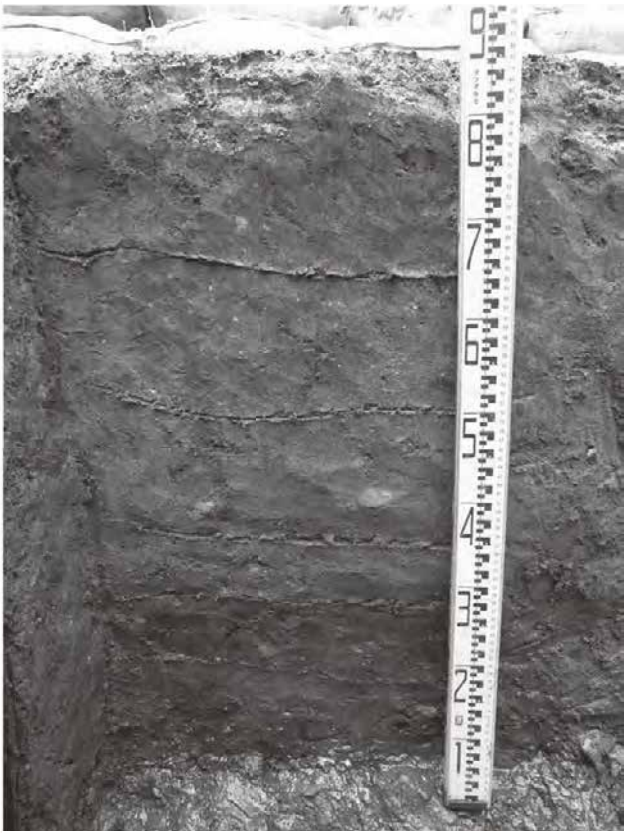
1．井戸枠 北西隅の土台材（南東から）

2．井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材（南から）

3．井戸枠 北西隅の波食台岩盤と土台材（南から）

4．調査区東壁での土層断面（北西から）

5．井戸枠内と裏込め土 土層断面（北西から）



6．中世基盤層～波食台岩盤 土層断面（北東から）

Ⅰ区１面 遺構３（井戸・4 面調査時）②

図版４

1. Ⅰ区２面（北東から）

2. Ⅰ区２面 遺構 47（南東から）

3. Ⅰ区３面 プラン確認後（北東から）

4. Ⅰ区３面 プラン確認後（東から）

5. Ⅰ区３面上 遺物出土状況（南東から）

1. Ⅰ区３面（北東から）

2. Ⅰ区３面 土間状整地面（北から）

3. Ⅰ区３面 土間状整地面の断面（北東から）

4. Ⅰ区３面 土間状遺構・炉址の断面（北東から）

5. Ⅰ区３面 炉址の断面（北東から）

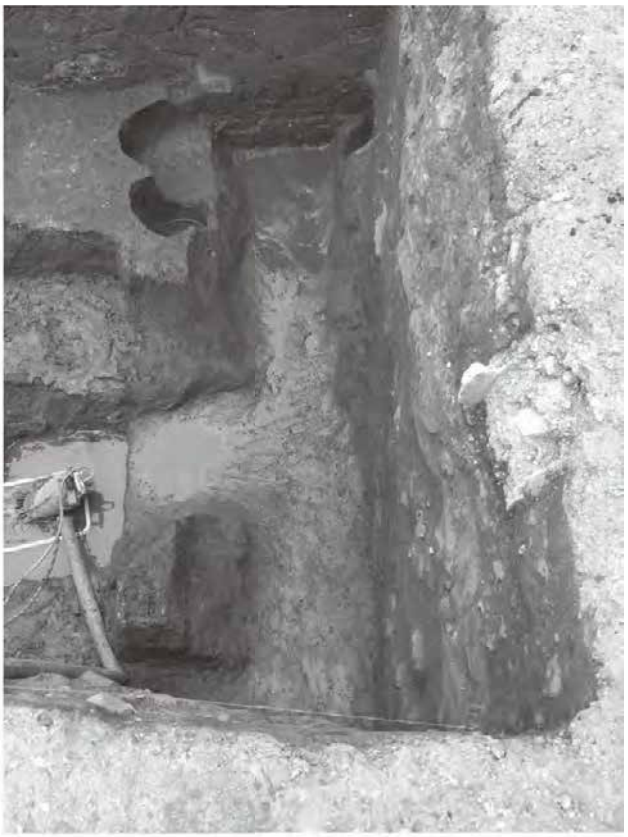
6. Ⅰ区３面 炉址南半部（北東から）

7. Ⅰ区３面 炉址掘り方（北東から）

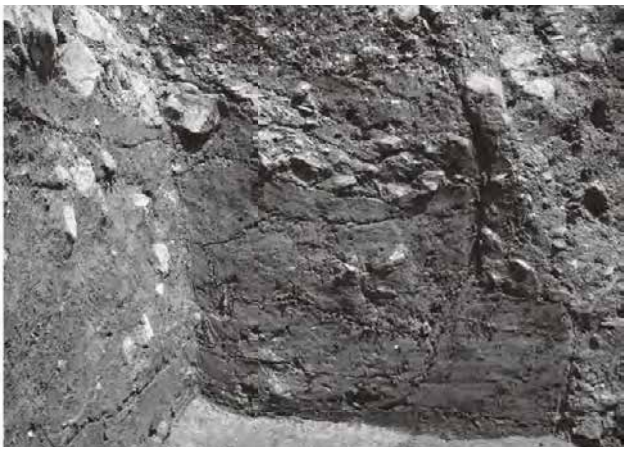
図版６

1. Ⅰ区３面 遺構 214b 遺物出土状況（南東から）

2. Ⅰ区３面 遺構 214b 遺物出土状況（南東から）



3. Ⅰ区３面 遺構 214b（南東から）



4. Ⅰ区３面 遺構 214b 断面（北西から）

5. Ⅰ区３面 遺構 214b 断面（南東から）

1. Ⅰ区 大雨後（2011 年 5 月 30 日・西から）

2. Ⅰ区 3b 面（北東から）

4. Ⅰ区 西壁断面（南東から）

3. Ⅰ区 4 面（北東から）

5. Ⅰ区 北壁断面（南西から）

図版８

1. Ⅱ区 攪乱１（北東から）

2. Ⅱ区１面（北東から）

3. Ⅱ区１面　東西道路（北西から）

4. Ⅱ区２面（北東から）

5. Ⅱ区２面 東西道路・遺構２１４（北西から）

6. Ⅱ区２面 遺構２１５（南西から）

1. Ⅱ区３面（北東から）

3. Ⅱ区 3b 面（北東から）

2. Ⅱ区３面 東西道路・遺構 214b（南西から）

4. Ⅱ区 3b 面 東西道路・遺構 214b（南西から）

図版 10

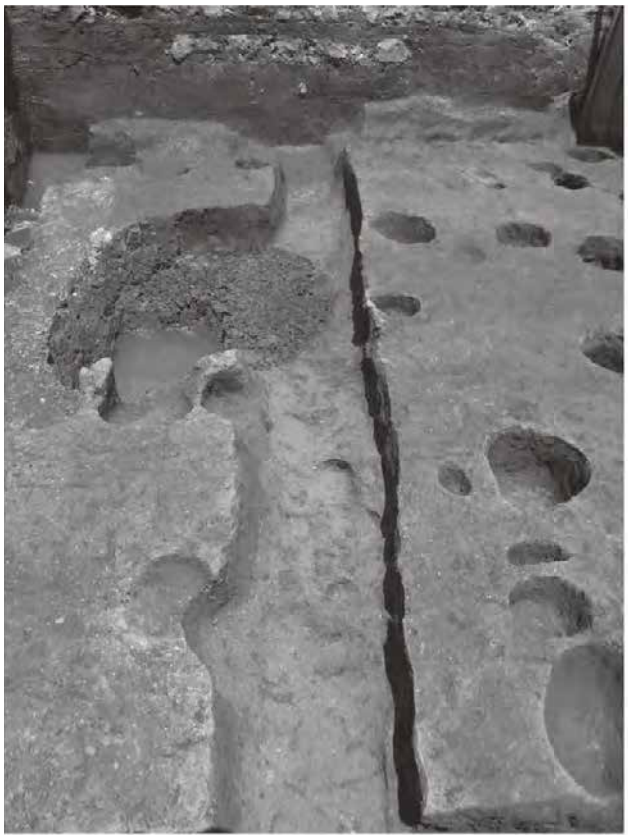
1. Ⅱ区 3b 面下（北東から）

3. Ⅱ区 4 面 遺構 259（北東から）

2. Ⅱ区 4 面（北東から）

4. Ⅱ区 4 面 遺構 259 断面（北東から）

5. Ⅱ区 4 面下（北東から）



1. Ⅱ区 4 面 遺構 300（4 面下調査時・北東から）

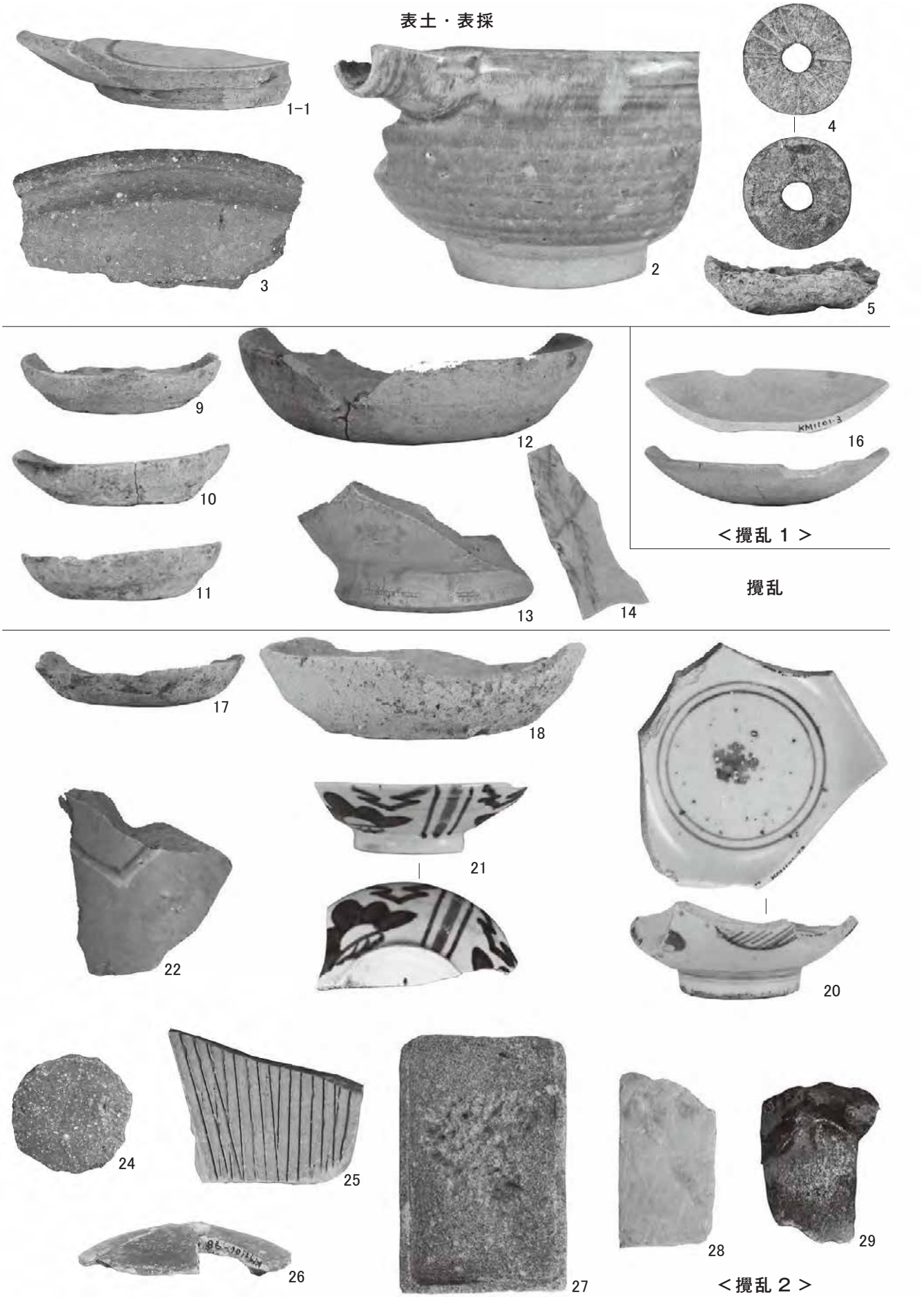
3. Ⅱ区 4 面 遺構 300 断面（北東から）

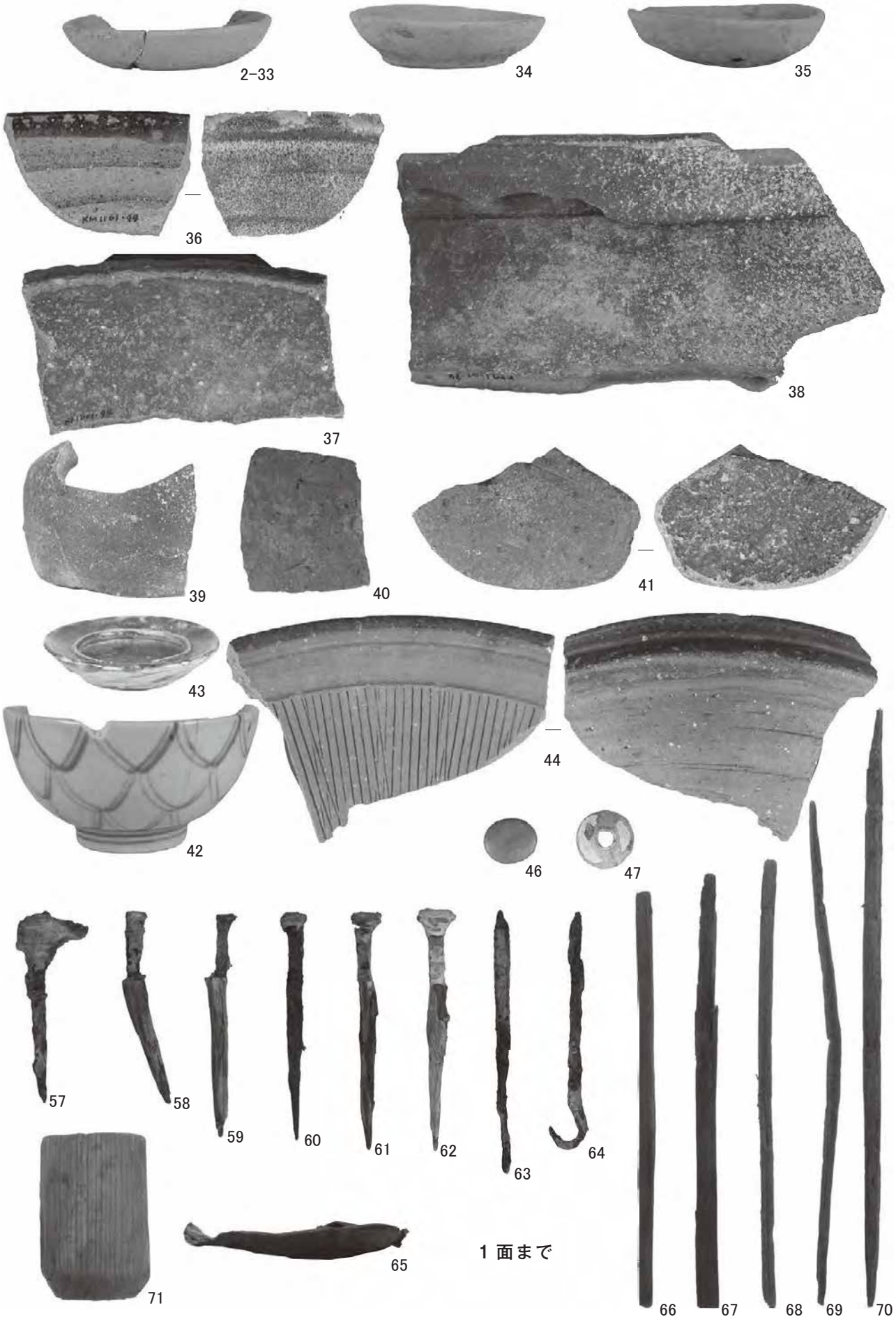
2. Ⅱ区 4 面 遺構 300（4 面下調査時・北東から）

4. Ⅱ区 4 面 遺構 300 断面（南西から）

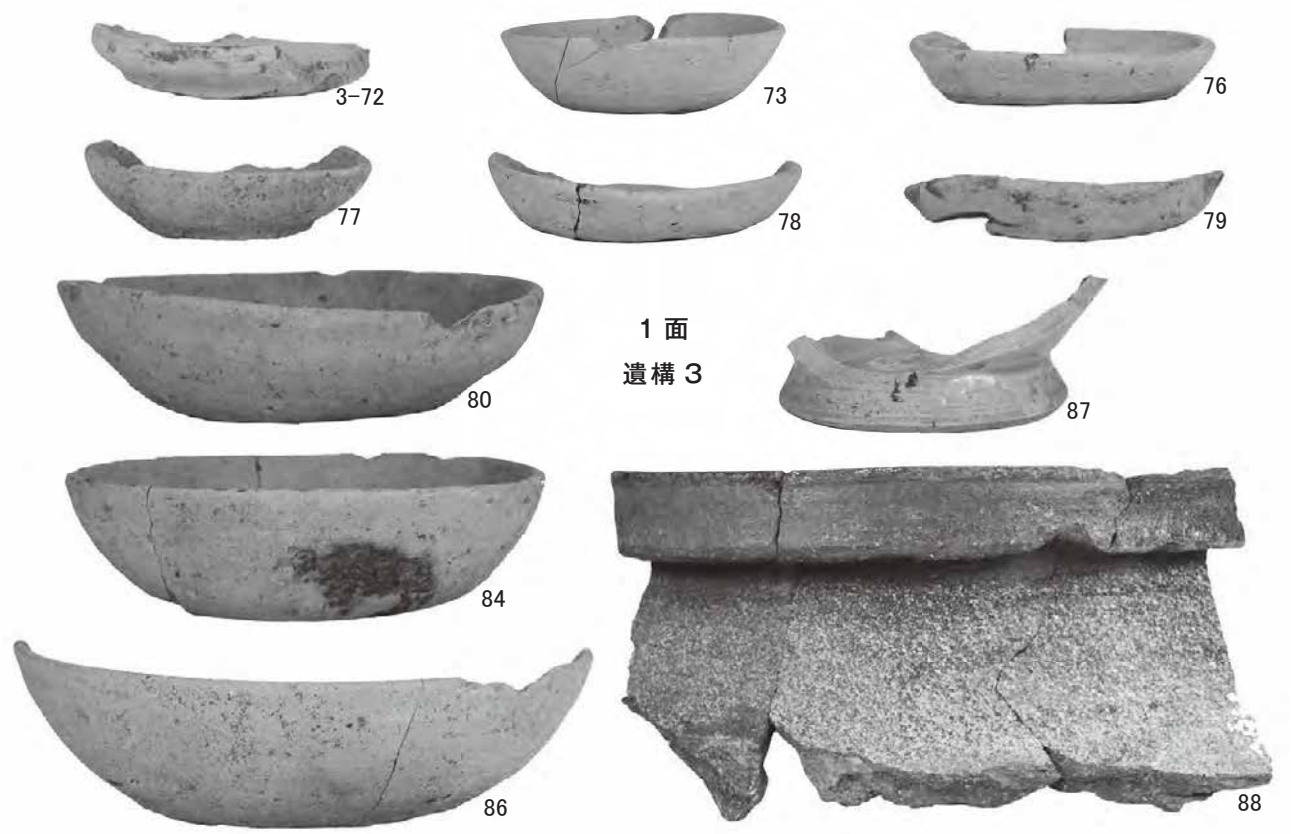
5. Ⅱ区 北壁断面（南西から）

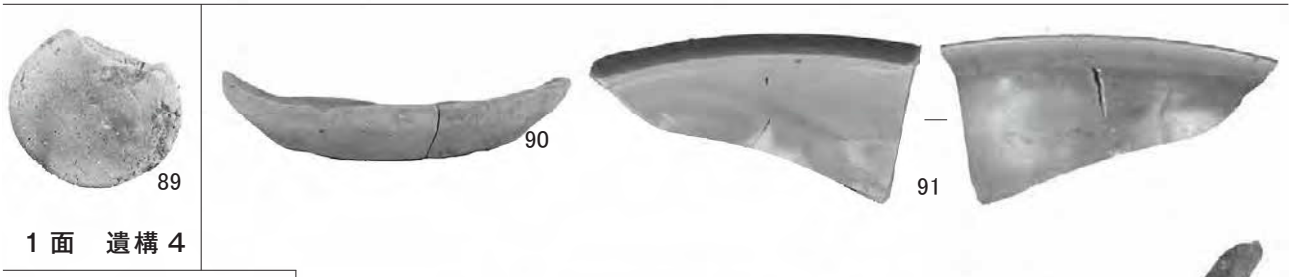
図版 12


表土・表採
1-1
2
3
4
5
9
10
11
12
13
14
16
＜攪乱 1 ＞
攪乱
17
18
21
22
20
24
25
26
27
28
29
＜攪乱 2 ＞

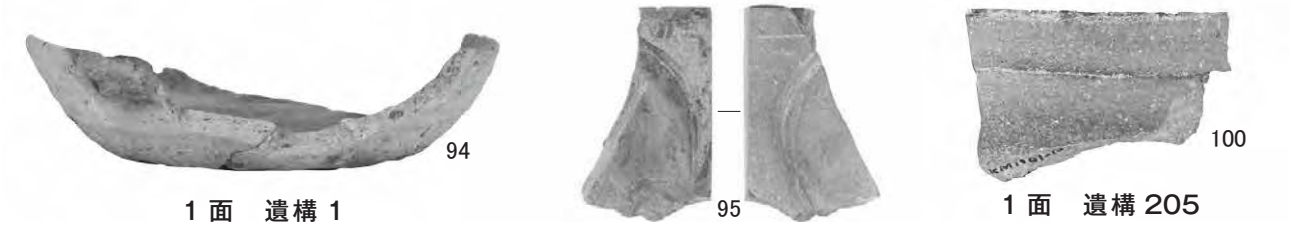

2-33
34
35
36
37
38
39
40
41
43
44
42
46
47
57
58
59
60
61
62
63
64
65
1 面まで
66
67
68
69
70
71

図版 14


3-72
73
76
77
78
79
80
1 面
遺構 3
87
84
86
88


89
1 面　遺構 4
90
91

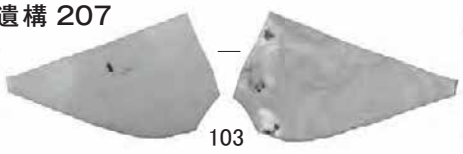
98
1 面　遺構 3
92


94
1 面　遺構 1
95
100
1 面　遺構 205

1 面　遺構 207

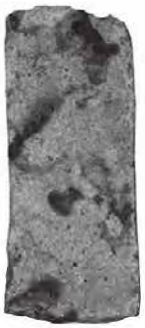
101

102


103

105

1 面～ 2 面


4-109

110

2 面　遺構 214

118

2 面　遺構 215

113

116

2 面～ 3 面

126

124

138

127

137

3 面　遺構 220

142

5-143

144

145

146

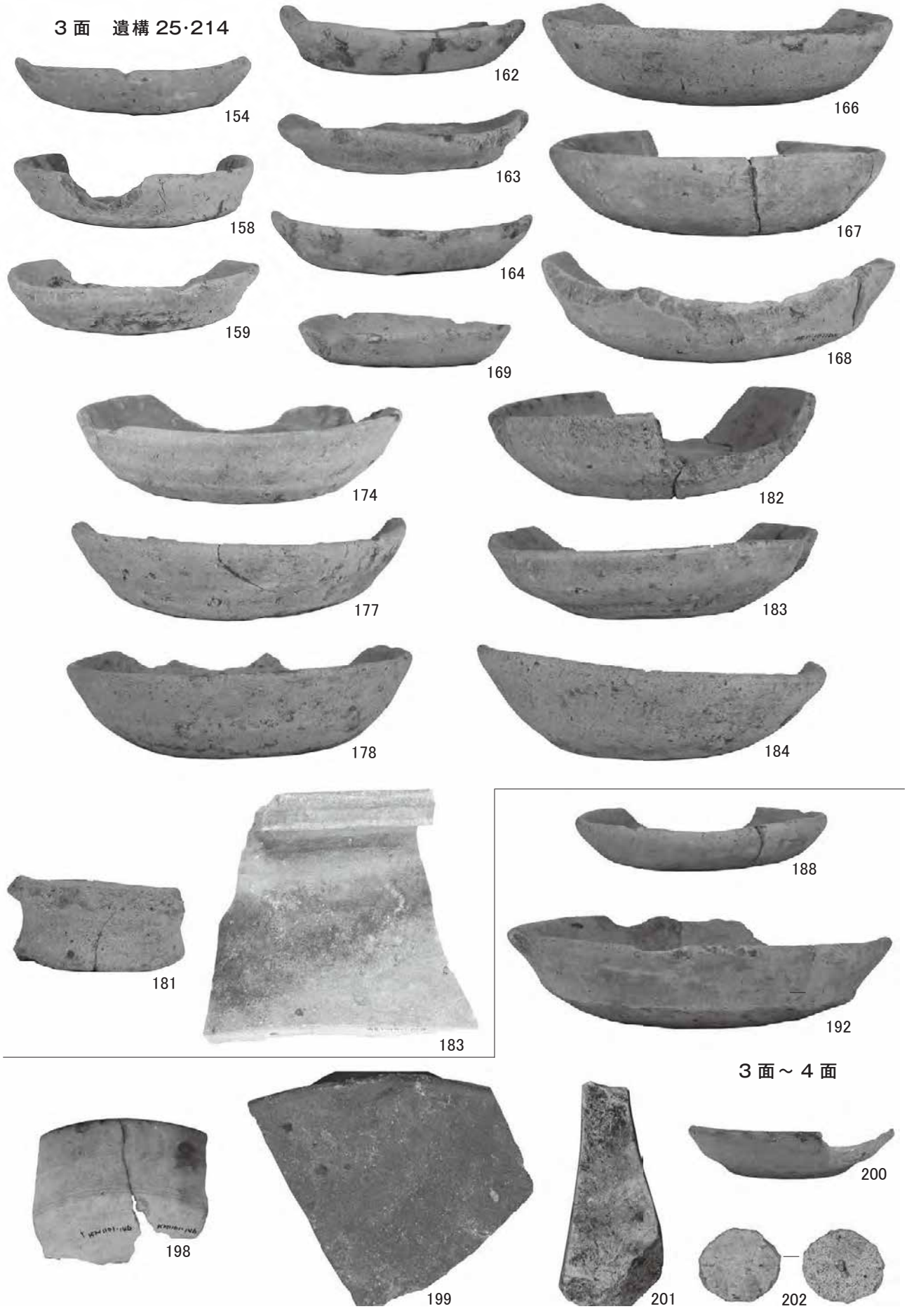
147

148

149

3 面上　個別取り上げ

図版 16


3 面　遺構 25·214
154
162
166
158
163
167
159
164
168
169
174
182
177
183
178
184
181
183
188
192
3 面～ 4 面
198
199
201
200
202

3b 面　遺構 86

6–204

3b 面　遺構 50

207

3b 面　遺構 54

208

3b 面　遺構 58

209

3b 面
遺構 246

212

3b 面
遺構 260

214

216

219

218

4 面　遺構 259

220

221

222

223

3b 面　遺構 301

215

4 面　遺構 300

224

名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町六丁目 1506 番 11 の一部地点

例　言

1．本報告は、鎌倉市大町六丁目 1506 番 11 の一部において実施した名越ヶ谷遺跡（鎌倉市 No.231）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は平成 25 年 4 月 15 日から同年 5 月 31 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、40.7㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員　　押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調　査　員　　岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作　業　員　　伴　一明、安藤宗幸、大塚尚城、佐藤忠秀、石黒　清
（公益社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者　押木弘己、岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

4．本報告の執筆と編集は、押木が行った。

5．本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。

6．本報告では世界測地系（第Ⅸ系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前に打設された鎌倉市 4 級基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正値となっていない。

7．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＮＧ１３０１」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、 筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明　2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：愛知県　2012『愛知県史』別編窯業 3　中世・近世常滑系

目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 73

第二章　調査の方法と経過…… 75

第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の方法
第３節　調査の経過

第三章　基本土層…… 76

第四章　発見された遺構と遺物…… 78

第五章　調査成果のまとめ…… 86

挿図目次

図１　調査地点位置図 …… 74
図２　調査区配置図 …… 75
図３　調査区壁断面図 …… 77
図４　1（現地 1f 面）面全体図 …… 79
図５　Ⅰ区の出土遺物 …… 80
図６　Ⅱ区の出土遺物 …… 81

表　目　次

表１　出土遺物カウント・計量表 …… 82
表２　出土遺物観察表 …… 84

図版目次

図版１…… 87
1. 調査地近景（南から）
2. Ⅰ区調査風景（北から）
3. Ⅰ区 中世層検出状況（北から）
4. Ⅰ区 中世層上の堆積土（北東から）
5. Ⅰ区１面（1f 面・北から）
6. Ⅰ区１面（西から）
7. Ⅰ区１面下トレンチ（上層・北から）
8. Ⅰ区１面下の堆積土（南東から）

図版２…… 88
1. Ⅰ区１面下トレンチ（下層・北から）
2. Ⅰ区１面下の堆積層（南から）
3. Ⅰ区１面上の堆積土（南から）
4. Ⅱ区１面（1c 面・東から）
5. Ⅱ区１面（1c 面・北から）
6. Ⅱ区１面（1c 面）炭検出状況（北から）
7. Ⅱ区１面（1c 面・西から）

図版３…… 89
1. Ⅱ区１面（1c 面下部・北から）
2. Ⅱ区１面（1d 面・北から）
3. Ⅱ区１面（1d 面）上遺物出土状況
4. Ⅱ区１面（1e 面）上遺物出土状況

5. Ⅰ区１面（1f 面）上遺物出土状況
6. Ⅰ区１面（1f 面・西から）
7. Ⅰ区１面（1f 面・北から）
図版 4 …… 90
1. Ⅱ区１面（1f 面）遺構掘削後（北から）
2. Ⅱ区１面（1f 面）遺構掘削後（東から）
3. Ⅱ区１面（1f 面）上遺物出土状況
4. Ⅱ区１面下トレンチ（上層・北から）
5. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・北から）
6. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・北から）
7. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・南東から）
図版 5 …… 91
1. Ⅱ区Ⅰ面下の堆積土（西から）
2. Ⅱ区北壁の堆積土（南から）
3. Ⅱ区Ⅰ面下の堆積土（東から）
4. Ⅱ区Ⅰ面下トレンチ（最下層・北から）
5. Ⅱ区１面下の堆積土（南から）
6. Ⅱ区１面下最下層（22･23 層）遺物出土状況
図版 6　出土遺物 …… 92

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

名越ヶ谷遺跡（No.231）は鎌倉市の南東部に位置し、県道鎌倉・葉山線の北東側、逆川流域の奥深い谷戸内低地に占地し、東西 1km、南北 800 ｍの広がりを持つ。東方の国指定史跡「名越切通し」方面へ抜ける東西筋を主谷とし、遺跡南西端の県道に接する付近で市街の沖積平野に開けている。主谷からは大小の支谷が樹枝状に延び、主なものには松葉ヶ谷・山王ヶ谷・花ヶ谷といった名が付されている。

今回の調査地点は、県道から 700 ｍほど東に入った逆川右岸（北岸）の小支谷開口部に立地している。河岸の市道からは一段高い造成平場となっており、現地表面の標高は約 17.2 ｍを測る。

本遺跡地では現在までに 27 地点で発掘調査が実施されている。主谷の開口部付近に集中しているが、個人住宅の建設に伴う調査が大半であり、まとまった面積の調査例は少ない。安国論寺の北、松葉ヶ谷の開口部では老人保健施設の建設に伴って 1056㎡が調査され、13 世紀～ 14 世紀代の遺構面 3 枚が確認されている。最下層の第 3 面では両岸に柱穴を伴う東西溝が調査区を横断し、その両岸に多数の掘立柱建物・ピットが重複して分布している。13 世紀前半～後半に位置付けられ、3 面の中でも 3 時期以上の遺構変遷が捉えられている。続く 2 面でも調査区を横断する東西溝が延び、併走する道路の南側溝と報告されている。道路・溝を挟んで礎石建物や掘立柱建物、井戸といった遺構が整然と分布している。調査区の北東部では門遺構から玉砂利敷きの通路が北に向かい、その東側には囲炉裏や専用井戸を併設する小規模な土台建物が取り付き、台所的機能が考えられている。また、213㎝（7 尺）間隔で十字の指示線を刻んだ礎石建物は類例が少なく、当時の土木・建築工法を知る上で貴重な情報をもたらした。出土品には輸入陶磁器に優品が目立ち、こうした遺構・遺物の様相から、武家屋敷または寺院であった可能性が指摘されている。2 面の年代は、13 世紀後半～ 14 世紀中頃とされている（滝澤・宮田 2003）。

今回の調査地近くでは、図１‐地点 2・3 で個人住宅の建設に伴い 21㎡と 28㎡の調査が実施されている。地点 2 では中世で 4 枚の遺構面が確認されており、遺物様相から 13 世紀中葉～ 14 世紀初頭の年代幅で変遷を遂げたようである。出土かわらけの約半数を手づくね成形品が占めている点は、次章以降で報告するように本地点より早い段階で土地利用が進んだことを想起させる。（汐見・小泉 2004）。本地点の 100 ｍ西にあたる地点 4 では 182㎡が調査され、5 枚の中世遺構面が検出されている。このうち 13 世紀後半～ 14 世紀初頭の第 3･4 面では直交する 2 条の土塁が順次築成され、これらで遮蔽された区画内に塀や掘立柱建物、石組み炉が段階的に営まれていた。第 3 面では混貝砂を敷いた整地面と掘立柱建物が伴い、輸入陶磁器や古瀬戸の優品に加え銅製水滴など希少品の出土から、武家屋敷または寺院であった可能性が高いとされている（宗臺・遠藤 1998）。

遺跡名称は異なるが、本地点の北側尾根を越えた大町釈迦堂口遺跡（No.235）では遺跡保護を念頭に置いた確認調査が、300㎡を対象として実施されている。谷戸奥の平場は 13 世紀後半に大規模な造成が行われ、寺院に加え、やぐら・茶毘所を伴う宗教空間としての谷戸利用の形跡が良好に遺存していることが確認された。なお、この調査報告書では名越ヶ谷周辺の沿革や発掘調査成果が端的に整理されており、参考となる（図 1- 地点 6、永田・福田 2009）。

点在する断片的な調査例を有機的に結び付けることは難しいが、名越ヶ谷における中世の土地利用は、13 世紀前半に谷戸の開口部で先行して始まり、遅れて 13 世紀中葉～後半には谷戸奥に拡大・進展して行った様子が判明しつつある。

【参考文献は第五章末（86 頁）に掲載】

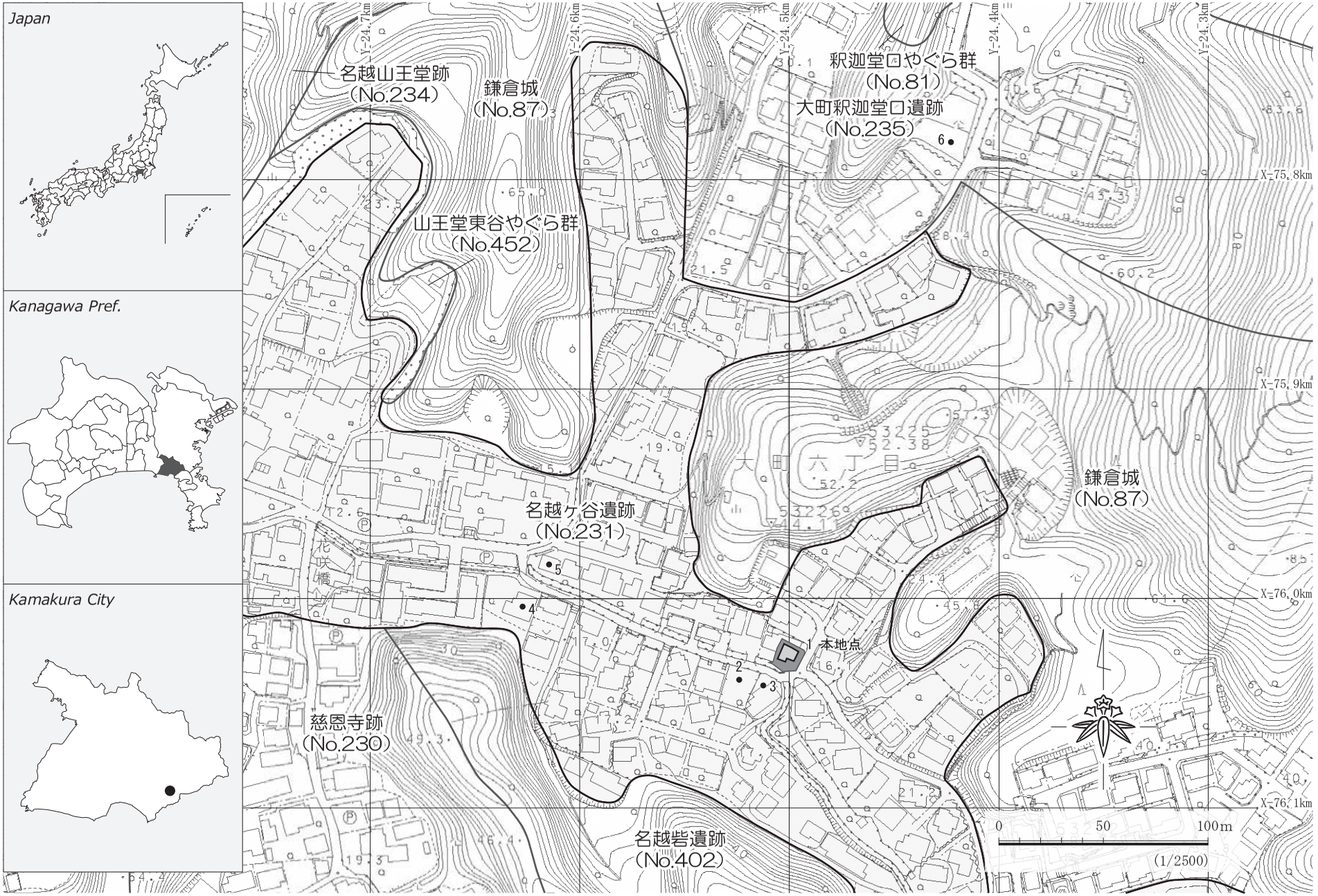


図１　調査地点位置図（鎌倉市発行 1：2,500 都市計画基本図を使用）

第二章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。建築計画では基礎工事として現地表下 6.9 ｍまでの柱状改良を施すことから、市教委は平成 23 年 4 月 12・13 日の二日間にわたり埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下約 116cm の表土層直下で中世の遺物包含層が、地表下 130cm では泥岩粒を多用した整地層が確認され、この上面が遺構面と判断された。また、地表下 198cm まで掘削した結果、この深さまでに 4 枚の遺構面が広がることが想定された。以上の調査結果を受け、建築計画の実施に先立っては本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

その後、市教委と施工主との調整・書類手続きを経て、平成 25 年 4 月 15 日～ 5 月 31 日の 2 ヶ月半をかけて現地での発掘調査を行った。

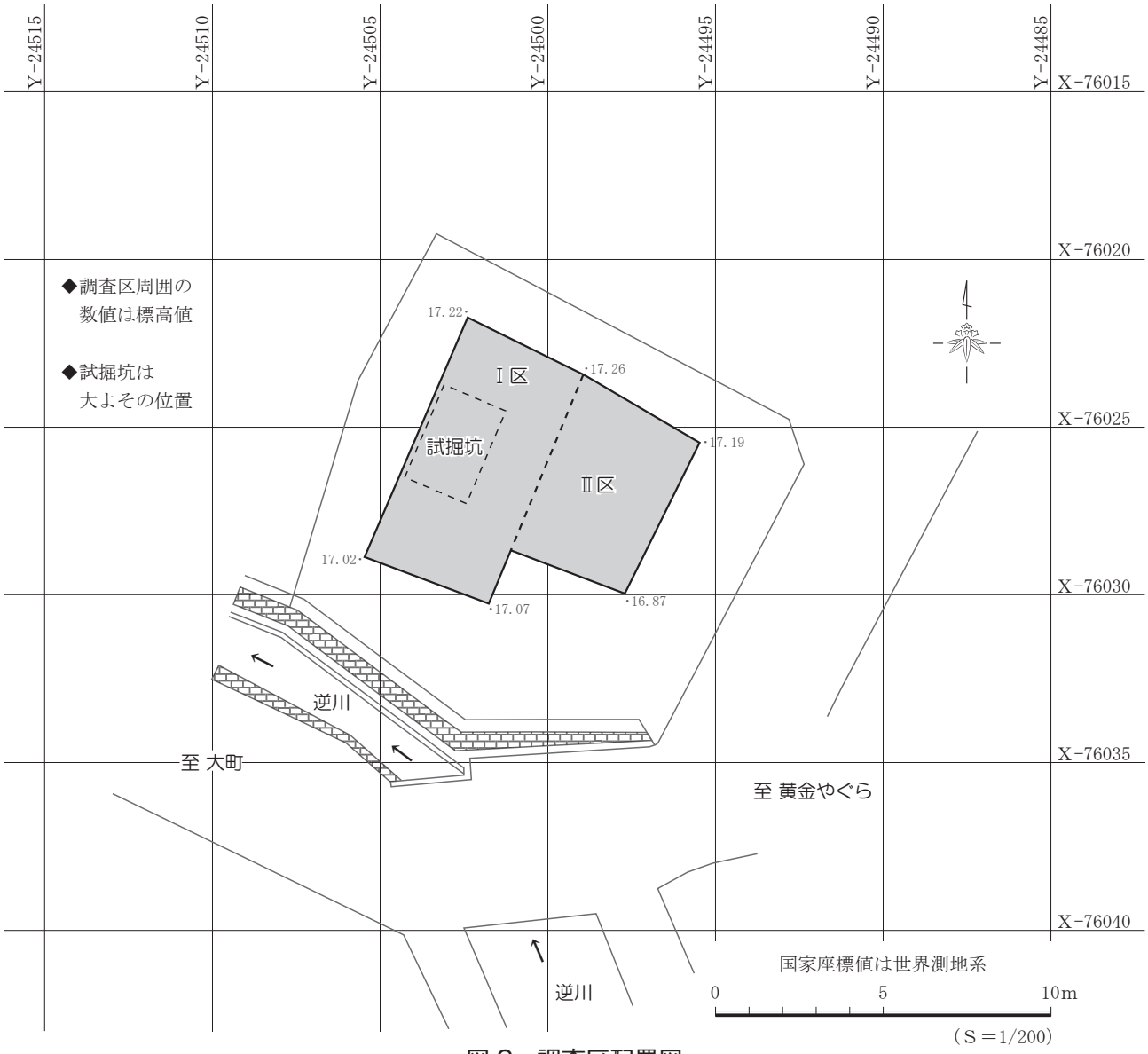


図２　調査区配置図

第 2 節　調査の方法

掘削に伴う発生土置場を確保する必要から、40.7㎡の調査範囲を二分割して調査を進めた（図 2)。表土の除去は重機によって行い、西半のⅠ区の調査を終えた後、Ⅰ区の埋め戻しおよびⅡ区の表土掘削を行った。Ⅰ・Ⅱ区とも表土除去後は全て人力によって掘削し、順次下層への掘り下げと遺構掘削、および写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に基づく基準軸を用い、主として光波測距儀で読んだ座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図の作図に当たった。国家座標値は､市道上に打設された鎌倉市 4 級基準点（I027）と同（I026）の 2 点間関係を起点とし、開放トラバース法によって調査敷地内まで移動した。移動に先立ち､､国土地理院のホームページ上で公開されている座標変換ソフト「Web 版 TKY2JGD」を利用して上記 2 点の座標値を旧測地系から新測地系（世界測地系）に変換した。標高については、鎌倉市 3 級基準点「53229」（標高 11.168 m）を起点とし、直接水準測量を往復で行って敷地内の基準杭に移設した。4 級・3 級基準点とも平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災発生以前の座標データであり、これらを起点に移設した座標値も震災後の地殻変動に対応した補正値とはなっていない。

第 3 節　調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。Ⅰ区の表土掘削は平成 25 年 4 月 15 日に実施し、翌日には調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。本地点では、中世の遺構面は調査区の北壁際で部分的に検出されたに過ぎない。調査区の南側 2/3 は逆川に向けて落ち込む斜面となっており、ここを泥岩ブロックで埋め立てて現在（調査前）の平場が造成されていた。こうした現代の造成土を除去することに作業時間の多くを費やすことになったが、わずかに残された中世遺構面と、その下位に堆積した古墳時代の遺物包含層の掘削・記録作業を順次進めていった。5 月 14 日にはⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を行い、その後はⅠ区と同様の作業を進めて 5 月 27 日にはひと通りの記録作業を終えることができた。この後、5 月 31 日には調査用具を撤収して、現地での調査工程を全て終了した。

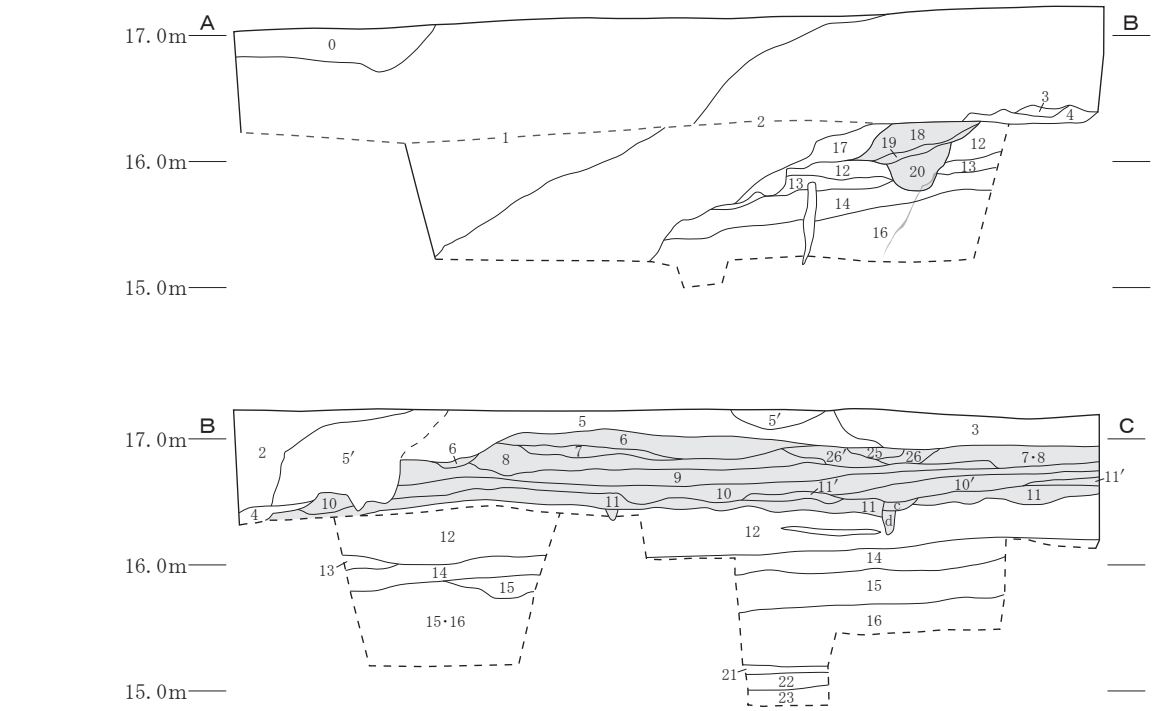
出土品および記録類の整理作業は平成 27 年度の後半に､報告書の執筆･編集作業は 28 年度の前半に、鎌倉市教育委員会文化財課分室において行った。

第三章　基本土層

本地点は､丘陵の裾部に近い斜面地に立地している｡現状では逆川を南に見下ろす平場となっており、北側は緩やかな斜面が続いて隣地に至る。現地表面の標高は 17 m強を測り、南側がわずかに低い。

前述したように、本地点では中世面の検出範囲が非常に狭く、調査区南側の大部分は現代に埋め立てられた斜面地となっていた。図 3 の 1・2 層が埋め立て土である。これより下位の 3 層は近世耕作土と呼ばれることの多い、色味の明るい砂質土層で、これらが堆積していく過程で中世の遺構面が失われたようである。人為的な土地改変もあったろうが、斜面という地形の特質上、大雨や地震に伴う自然崩落も度々発生していたことと想像する。

中世層は、最も高いところでは地表下 15cm の標高 17.1 m前後で検出された。上述した崩落の可能性なども加味すると、本来の中世層は、現況よりも高いレベルまで堆積していたと推測できる。図 3 では調査区北壁（B - C）の 6 層以下が中世層と判断された。6 ～ 10 層は泥岩粒･ブロックが主体土で、版築状の堆積様相を見せていた。Ⅰ区では遺存範囲が狭いこともあり重機で掘り崩してしまったため、



0	黒褐色土	現代客土。
1	泥岩ブロック	人頭大の泥岩ブロックによる埋め立て土。
2	明灰褐色土	埋め立て土。コンクリート片混入。
3	明灰褐色土	泥岩粒混入。
4	泥岩ブロック	泥岩ブロック主体で、3層土混入。
5	暗褐色土	泥岩粒、炭粒多い。
6	灰褐色土	拳大の泥岩ブロック多い。
7	灰褐色土	6層より泥岩が密に入る。
8	灰黄褐色土	1～3cm大の泥岩粒が密に入る。整地層。
9	灰褐色土	泥岩ブロック主体。
10	灰褐色土	1cm以下の泥岩粒多い。整地層。
10′	灰褐色土	泥岩粒多い。整地層。
11	暗褐色土	粘質土がベース。1～3cmの泥岩粒多い。炭粒少量。
11′	暗褐色土	粘質土がベース。
12	黒褐色土	粘質土。1cm以下の泥岩粒少量。中世遺物微量。
13	黒褐色土	粘質土。1cm以下の泥岩粒ごく微量。
14	黒褐色土	粘質土がベースでやや砂質感あり。1cm以下の泥岩粒少量。
15	黒褐色土	14層より砂質感が強い。1cm大の泥岩粒微量。
16	黒色土	上端面が酸化・硬化。1cm大の泥岩粒ごく微量。
		古代以前の遺物包含層
17	明灰黄褐色土	1～2cmの泥岩粒多い。締まりあり。
18	黒褐色土	12層土がベース。泥岩粒やや多い。
19	黒灰色土	粘質土。上端面が酸化・硬化。泥岩の細粒多い。
20	黒褐色土	12層土がベースで、やや粗粒の泥岩粒多い。
21	暗青灰色土	砂質土。古墳時代の土器片が集中。
22	黒灰色土	粘質土。無遺物層。
23	灰色土	粘質土。シルト質。無遺物層。
24	灰色土	粘質土。泥岩粒混入。
25	黒褐色土	炭粒多い。締まり弱い。
26	黒褐色土	炭粒、泥岩粒少量。
27	黒褐色土	泥岩粒少量。
28	褐色砂	

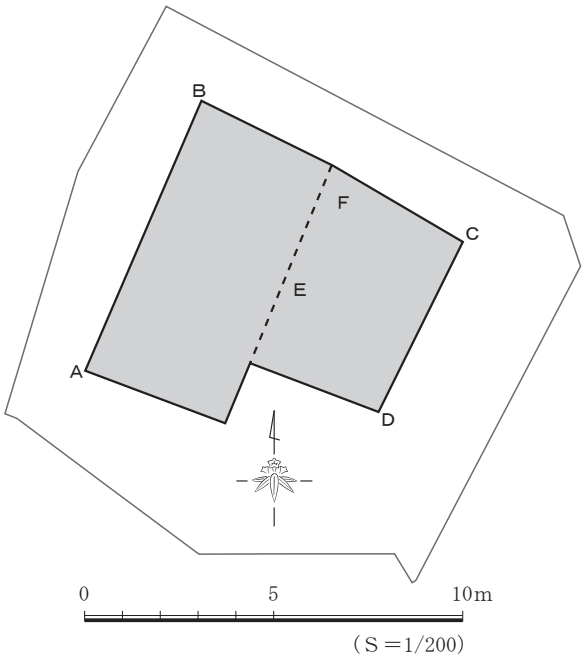


図３　調査区壁断面図

断面のみの確認となった。Ⅱ区では 6 層の検出後、1 層ごとに掘り下げながら各上面を遺構面と考えて平面図他の記録を取った。11 層以下は粘質土がベースとなり、12 層までは確実に中世遺物を包含していた。12 層上面となる標高 16.5 m付近では調査区北辺に平行または直交方向に延びる浅い溝状遺構や小ピットが検出され、ここを 1f 面とした。これより上位の層序には明らかに人工と見なせる整地層が多くあり、各層の上面を 1a ～ 1e 面として一枚ずつ記録を取ったが、いずれの面でも明確な掘り込みは確認できなかった。また、6 層上面の一部（1c 面）や 11 層上面（1e 面）では炭化物の広がりを検出し、後者の面上ではロクロかわらけの完形品が正位で出土するなど、人為的活動の痕跡と見なし得る状況も散見されたが、生活面と認めるには決めてに欠けることから、本報告では 1f 面のみを生活面と捉えることとした（図 4）。6 ～ 11 層については、各々を生活面と理解する他（9・10 層の上面は面としての記録を残していない）、版築を施した土塁といった見方もできるが、確証となるだけ情報は得ていない。

中世層の記録を取り終えた後、Ⅰ・Ⅱ区ともに 12 層以下の土層確認を目的とする 2 m幅のトレンチを設定、掘削した。13 ～ 15 層はほぼ無遺物層となるも、12 層とは層相に顕著な差は見られなかった。16 層は黒色味が増し、14・15 層との層界が褐鉄化していた。古墳時代の遺物包含層で局所的に土器の集中する箇所が見られたものの、遺構の検出には至らなかった。最深部では標高 14.75 m まで掘り下げ、16 層以下の堆積状況を記録して調査を終えた。

第四章　発見された遺構と遺物

第 1 節　中世の遺構と遺物（図 4）

前述のように、確実に中世の遺構面といえるのは 1 枚のみと考えた。

中世 1 面（1f 面）は標高 16.35 ～ 16.5 m で検出され、南に向けわずかに低くなっていた。ここでは小規模な溝状遺構とピット数基が検出されたが、検出範囲が狭いこともあり、遺構の性格については明らかにできなかった。溝状遺構は N30° E 前後、またはこれに直交する主軸方位を取り、上幅 30cm、底幅 15cm ほどで確認面から 10 ～ 15cm の深さしか持たない。ピットは直径 30 ～ 40cm の円形もしくは楕円状の平面形態を取り、確認面からの深さは 25cm ほどしかなかった。pit1 と pit2 は溝状遺構と同じ軸線で並ぶ可能性もあるが、検出範囲が限られており不明とせざるを得ない。表 1 中、1f 面に「泥岩プラン」とあるのは溝状遺構やピットの埋土全体を指し、個別遺構への帰属ができなかった遺物が多くあることを表している。

Ⅰ区出土の遺物（図 5）

中世遺構の確認手順が異なったため、出土遺物はⅠ区とⅡ区とに分けて図示した。

Ⅰ区では、1 ～ 6 と 9 が 1 面（1f 面）の確認までに出土した遺物となる。9 の青磁碗は図 3-9 層から出土。

白磁口禿皿や常滑の片口鉢Ⅱ類があり、これらの消費時期に 1 面が覆われたことを示す。7 は 1 面直上から、8 ～ 10 は溝状遺構 1 から出土した。いずれもロクロかわらけの小皿で、広い底部から直線的に外方へ開く体部を持つ。12・13 は 1 面下の掘り下げ時に出土した手づくねかわらけ。概ね 12 層からの出土と見ている。

14・15 は 16 層から出土した。14 は古墳時代終末期～奈良時代初頭の土師器坏、15 は古墳前期～中期の土師器坩。

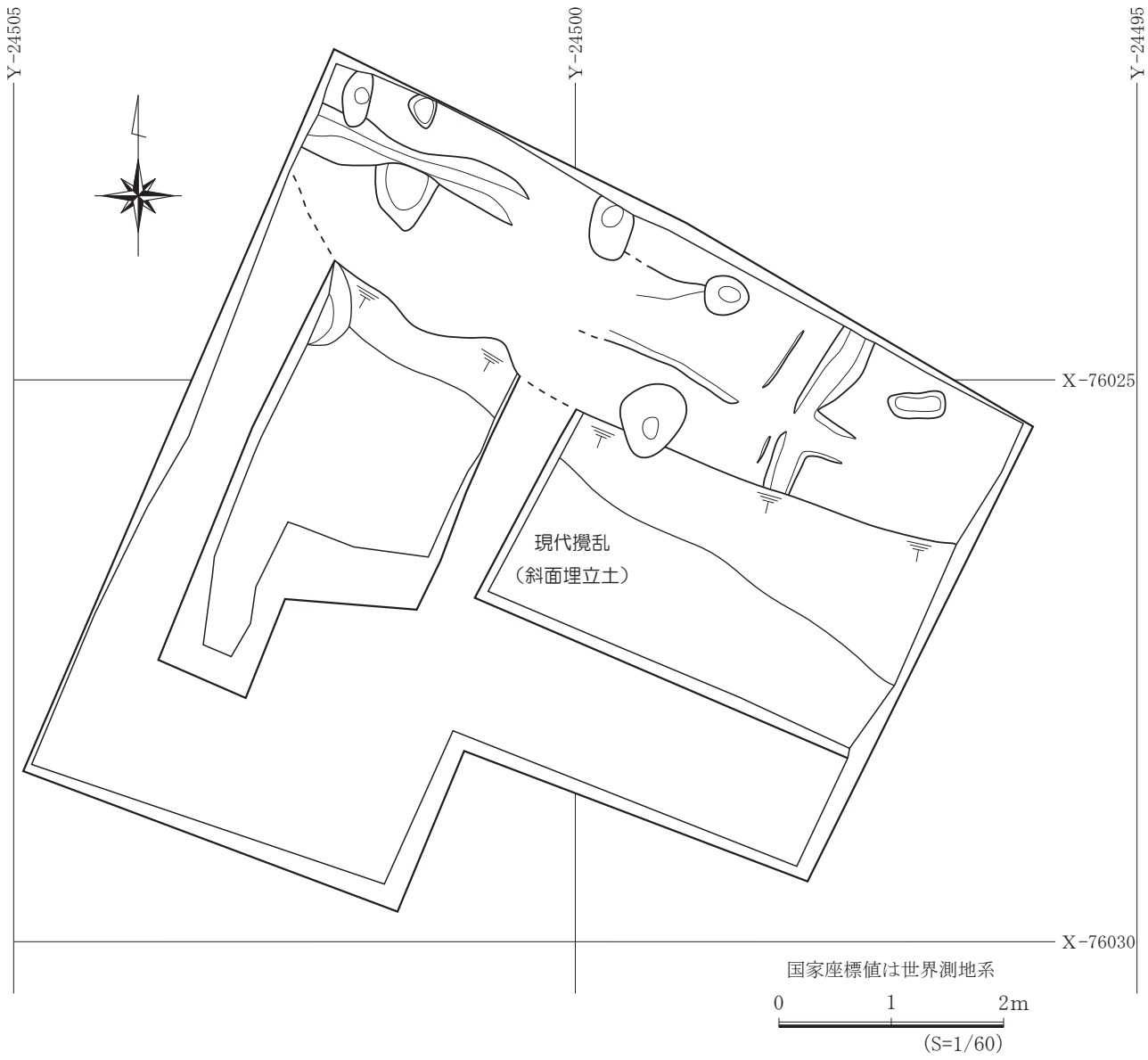


図４　１面（現地 1f 面）全体図

Ⅱ区出土の遺物（図６）

Ⅱ区では層位ごとに遺物を取り上げることができたので、現地での遺構面名称（層序番号）に分けて図示した。16 ～ 18 は 1a 面下（5 層相当）から出土。いずれもロクロかわらけ小皿。1b 面下（6 層相当）では、図示できる出土遺物はなかった。19 ～ 23 は 1c 面下（7 ～ 10 層相当）出土。9・10 層とも整地層と見なせるので、各々を生活面と考えれば、2 段階以上の遺物が含まれていることになる。ロクロかわらけが主体となる。25 は 1d 面の面上から、26 ～ 29 は 1d 面下（10′層相当）から出土。30 は 1e 面上、31 ～ 38 は 1 e 面下（11 層相当）から出土した。39 ～ 41 は 1f 面の面上で出土したロクロかわらけ小皿で、Ⅰ区 1 面（1f 面）の資料と比べて体部の外傾具合が弱い。42・43 は 1f 面の遺構埋土中から出土した。

44 ～ 46 は 1f 面下（12 層相当）から出土。表 1 では「1-2」（＝ 1 面下～ 2 面）とした、1f 面の下位において手づくねかわらけの出土量が多いことが分かり、12 層を挟んで遺物の構成・様相が大きく変化する状況が読み取れる。

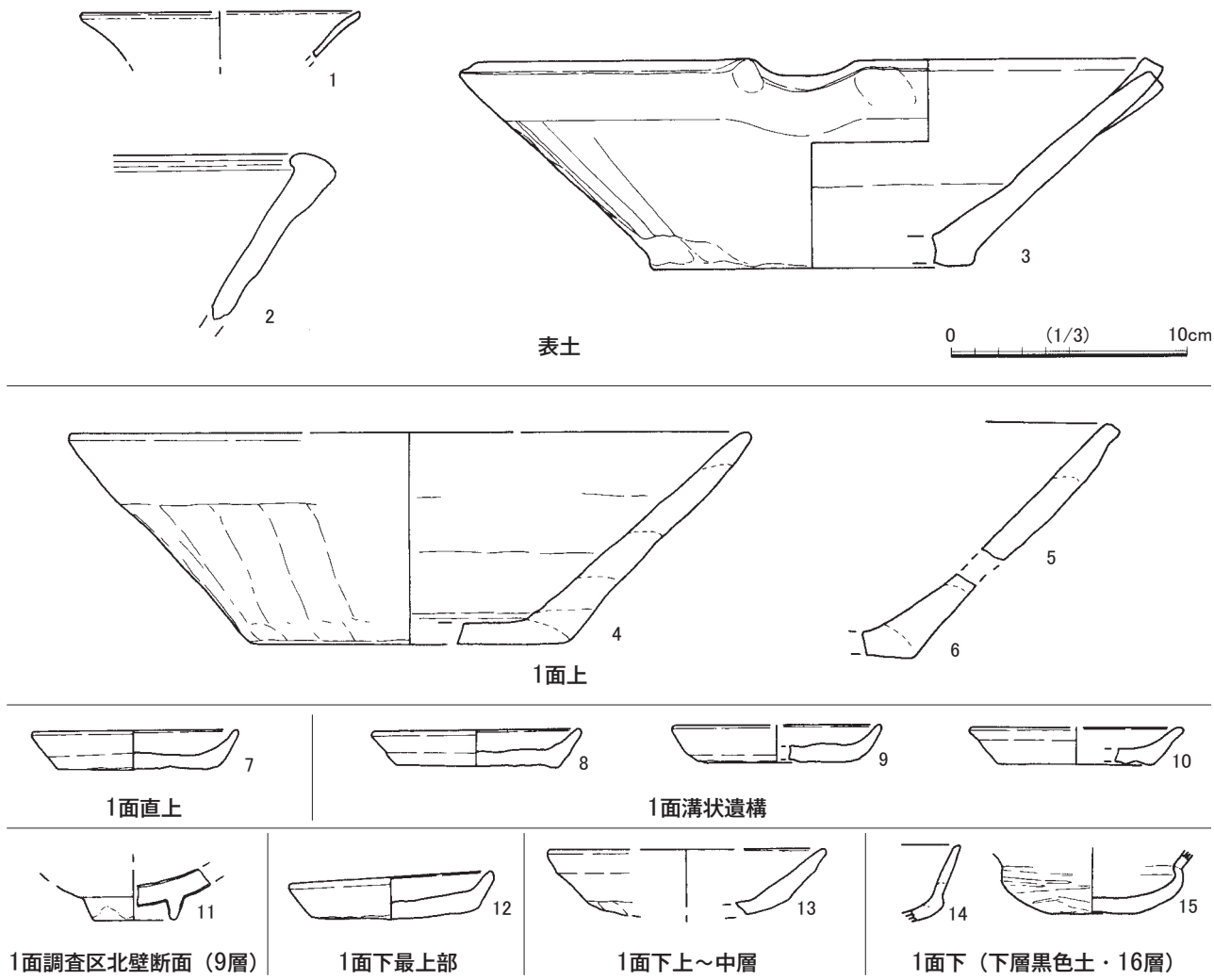


図５　Ⅰ区の出土遺物

47 ～ 58 は 12 層以下で出土した、古代以前の遺物。47 ～ 50・53 は 16 層と 21 層から出土している。

小片ばかりで、全体の器形を復元し得た個体は 47 の小型鉢形土器１点のみであった。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が主体となっている。表１が示すように、掘り下げ時でも上位の層序では須恵器や土師器の相模型坏・甕といった古墳後期～律令期の遺物が出土している。前章で述べたように、これら古代以前の遺物に伴う時期の遺構は検出されていない。

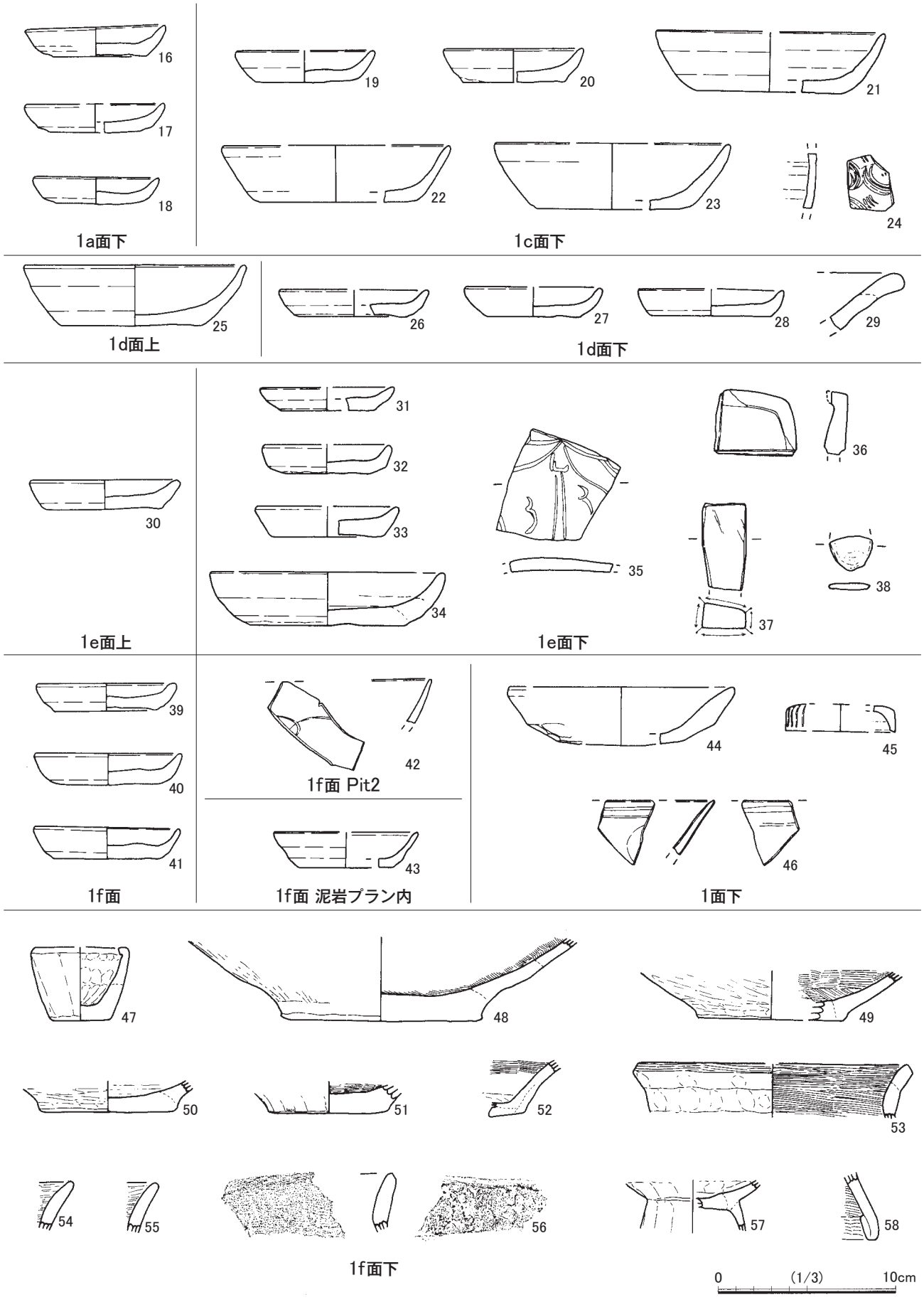

16
17
18
1a面下
19
20
21
22
23
24
1c面下
25
1d面上
26
27
28
29
1d面下
30
1e面上
31
32
33
34
35
36
37
38
1e面下
39
40
41
1f面
42
1f面 Pit2
43
1f面 泥岩プラン内
44
45
46
1面下
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
1f面下
0
(1/3)
10cm

図６　Ⅱ区の出土遺物

表１　出土遺物カウント・計量表

面	遺構	かわらけ								白かわらけ				白磁				青白磁						青磁（龍泉窯系）							
		ロクロ				手づくね				ロクロ		手づくね		口禿皿		碗皿		梅瓶		碗		合子蓋		劃花文碗		蓮弁文碗		碗・皿		壺類	
		大		小		大		小		大		小																			
		点数	重量																												
表土		91	810	24	125	1	5							1	9											1	6				
1																												1	21		
	攪乱	10	67	4	17																										
1a-1b		40	301	19	173	1	6	1	3																						
1b-1c		2	10	5	14																										
1c-1d		173	1654	70	458	2	15					1	3					1	6												
1d	遺構外	1	184																												
1d-1e		26	279	18	158	2	56																								
1e	遺構外			1	66																										
1e-1f		50	582	16	140	3	36			1	19					1	2														
1f	溝1	8	186	11	182	2	29	2	10																						
	pit1	5	22	6	17																										
	pit2	2	40	2	5											1	3														
	泥岩ブラン	27	225	9	53	2	56	2	12																						
	遺構外	38	392	17	309	1	10																								
1-2		20	186	10	44	55	505	34	225											1	5	1	6	1	7						
2-3																															
2-地山																															

面	遺構	舶載陶器		瀬戸								尾張・常滑								渥美・湖西		東濃		瓦質土器		瓦		鉄滓	
		緑釉	盤	卸皿		天目碗		入子		瓶類		甕		壺		山茶碗		片口鉢 Ⅰ類		片口鉢 Ⅱ類		甕		山茶碗		火鉢		平瓦 不明		鉄滓	
												点数	重量																		
表土				1	4	1	21	1	1	3	28	12	367					1	301	3	109					3	213	2	77		
1																															
	攪乱																	1	9			1	51	1	5						
1a-1b												2	218					1	62												
1b-1c																															
1c-1d														4	32	1	35														
1d	遺構外																														
1d-1e																		3	126												
1e	遺構外																														
1e-1f		1	33									2	58					2	24							1	12			1	3
1f	溝1																									1	56				
	pit1																														
	pit2																														
	泥岩ブラン											1	48																	1	4
	遺構外											3	117			1	242			1	432										
1-2		1	4									8	525																		
2-3																															
2-地山																															

面	遺構	石製品						土師器										須恵器				土器（古式土師器）					
		滑石鍋		硯		砥石		有稜坏		相模型坏		坏		相模型甕		鉢		壺		坏		壺		甕		鉢	
		点数	*重量*																								
表土																						1	*19*				
1																											
	攪乱																										
1a-1b																											
1b-1c																											
1c-1d														1	*17*												
1d	遺構外																										
1d-1e		1	*13*																								
1e	遺構外																										
1e-1f				1	*32*	1	*28*															1	*26*				
1f	溝1																										
	pit1																										
	pit2																										
	泥岩プラン																										
	遺構外																										
1-2								2	*10*	4	*37*	2	*6*	9	*34*	2	*14*			2	*1*	9	*38*	19	*115*	1	*50*
2-3										2	*18*			2	*8*			1	*8*			25	*755*	13	*115*		
2-地山																						76	*939*	101	*1296*	1	*57*

凡例

「1-2」は中世１面（1f 面）以下、12 ～ 15 層に相当。

「2-3」・「2 ー地山」はともに 16 層以下に相当。「2-3」の方が上位の層に限定できる。

「泥岩プラン」は溝状遺構やピットの埋土全体を指す。

点数＝破片数

重量単位＝ g

表２　出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
Ⅰ区の出土遺物（図5）						
1	磁器	白磁 口禿皿	(11.8)	—	[2.0]	口1/6　大宰府Ⅸ類
2	瓦質土器	火鉢	—	—	[7.0]	口小片　胎土:礫粒、赤色砂粒　器表黒褐色　河野ⅠC類
3	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(28.0)	(14.0)	8.8	1/4弱　胎土:礫粒　灰色　6型式頃
4	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(28.8)	(13.6)	9.0	1/5　胎土:白色礫　橙褐色　5～6型式
5･6	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	口･底小片　胎土:長石粒　暗灰色　5～6型式
7	土器	ロクロ かわらけ･小	8.8	7.0	1.7	略完形　67g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
8	土器	ロクロ かわらけ･小	8.8	6.9	1.5	4/5　[59]g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
9	土器	ロクロ かわらけ･小	(8.8)	(6.4)	1.6	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロ かわらけ･小	(9.0)	(6.7)	1.6	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
11	磁器	龍泉窯系青磁 碗	—	3.6	[2.2]	底のみ　大宰府Ⅲ-1B類か
12	土器	手づくね かわらけ･小	8.6	—	1.8	4/5　[67]g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
12	土器	手づくね かわらけ･大	(11.8)	—	[2.8]	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色　外底面に板状圧痕
14	土師器	坏	—	—	—	口小片　橙褐色
15	土器	坩	—	2.9	[2.8]	体～底2/3　胎土:白色針状物質、角閃石　灰褐色/赤褐色（内外面赤彩）
Ⅱ区の出土遺物(2)（図6）						
16	土器	ロクロ かわらけ･小	7.8	5.3	1.7	完形　51g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
17	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.8)	(5.2)	1.6	1/5　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
18	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.0)	(4.4)	1.5	1/4　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
19	土器	ロクロ かわらけ･大	(7.7)	(5.8)	1.8	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
20	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.8)	(5.7)	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
21	土器	ロクロ かわらけ･大	(12.8)	(8.0)	3.4	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
22	土器	ロクロ かわらけ･大	(12.8)	(8.8)	3.2	1/8　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
23	土器	ロクロ かわらけ･大	(13.0)	(8.2)	3.7	1/8　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
24	磁器	青白磁 梅瓶	—	—	—	胴小片　胎土:黒色粒　青白色
25	土器	ロクロ かわらけ･大	12.3	8.2	3.6	完形　184g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　褐色　外底面に板状圧痕
26	土器	ロクロ かわらけ･小	(8.3)	(6.0)	1.5	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色　外底面に板状圧痕
27	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.5)	(5.2)	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色　外底面に板状圧痕
28	土器	ロクロ かわらけ･小	(8.0)	(6.6)	1.5	1/4　胎土:白色針状物質　橙褐色　外底面に板状圧痕
29	陶器	尾張 片口鉢	—	—	[3.3]	口小片　胎土:長石粒　灰色～灰黒色（内面にタール付着）　6a型式頃
30	土器	ロクロ かわらけ･小	8.2	6.7	1.6	略完形　[66]g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
31	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.5)	(5.2)	1.4	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色　外底面に板状圧痕
32	土器	ロクロ かわらけ･小	(7.0)	(4.8)	1.7	1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　黄褐色　外底面に板状圧痕
33	土器	ロクロ かわらけ･小	(8.0)	(6.3)	1.7	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　黄褐色　外底面に板状圧痕
34	土器	ロクロ かわらけ･大	(13.0)	(8.6)	3.0	1/5　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色　外底面に板状圧痕
35	舶載陶器	緑釉 盤	—	—	—	底小片　胎土:黒色･白色粗砂粒　灰色/緑褐色（釉薬銀化）　内底面にヘラ描き文

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
36	石製品	硯	長さ [3.6]	幅 [4.5]	厚さ 1.3	頁岩
37	石製品	砥石	長さ [4.8]	幅 2.5	厚さ 1.4	中砥　表裏と両側面の4面を使用
38	ガラス	不明	長径 [2.0]	短径 2.4	厚さ 0.4	薄青色　表面は光沢がなく、やや白濁
39	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.8	1.4	略完形　[55]g　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
40	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.0	1.8	3/4　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
41	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.0	1.8	完形　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　橙色　外底面に板状圧痕
42	磁器	龍泉窯系青磁 碗	—	—	[2.5]	口小片　大宰府Ⅰ類か
43	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.3)	2.0	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色砂粒　黄橙色　外底面に板状圧痕
44	土器	手づくね かわらけ・大	(12.6)	—	[3.2]	1/8　胎土:赤色砂粒　黄橙色
45	磁器	青白磁 合子蓋	(6.2)	—	1.5	1/8　胎土:白色　緻密
46	磁器	龍泉窯系青磁 劃花文碗	—	—	—	口小片　大宰府Ⅰ-2類か
47	土器	鉢	(5.0)	3.3	4.1	口1/6～底完存　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色～黒褐色
48	土器	甕	—	11.4	[4.8]	底完存　胎土:白色針状物質、角閃石　褐色～黒褐色　外底面に葉脈?痕
49	土器	壺	—	(8.2)	[2.8]	底1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　褐色/赤褐色（外面赤彩）　外底面に木葉痕
50	土器	壺	—	(7.5)	[1.8]	底1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色
51	土器	壺	—	6.7	[1.7]	底3/4　胎土:微砂質、白色針状物質　淡褐色　外底面ヘラナデ
52	土器	壺	—	—	—	口小片　複合口縁壺か
53	土器	甕	(15.2)	—	[3.0]	口1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　にぶい褐色　輪積み甕
54	土器	壺?	—	—	[2.7]	口小片　胎土:白色針状物質、角閃石　桃褐色
55	土器	壺	—	—	—	口小片　胎土:白色針状物質
56	土器	甕	—	—	—	口小片　胎土:白色針状物質、角閃石　にぶい橙褐色
57	土器	台付甕	—	—	[2.9]	脚基部1/4　胎土:角閃石　灰褐色
58	土器	台付甕?	—	—	[3.8]	脚端部小片　胎土:微砂質、緻密　端部は内方へ折り返し成形

第五章　調査成果のまとめ

再三述べているように、本地点は敷地の南側が比較的最近まで斜面となっていた様子で、ここを埋め立てて現況の平場を造成していることが分かった。そのため、中世層以下の遺存範囲も限られており、中世遺構の展開も非常に狭いエリアで把握できたに過ぎない。1 面（1f 面）では東西に延びる浅い溝状遺構や小穴が検出されたものの、それらの用途・性格を示す情報は得られなかった。出土したかわらけの様相から、13 世紀後半の土地利用痕跡と見ている。1f 面の上位には版築状を呈する複数枚の整地層を認めたが、これらが各々生活面として利用されていたのか、それとも整地層総体で土塁状の構築物となっていたのかは特定できなかった。各整地層の上面では明確な遺構が見られず、また、間層を挟まずに上位の整地層が覆っている状況から、後者に分があるようにも感じている。いずれにしても、可能性の範囲でしか示すことができない。表土からの出土資料も含め、1 面上は 13 世紀後葉～ 14 世紀前葉の遺物様相を呈しており、古瀬戸製品の増加など、これより下る要素は希薄であった。

第 1 章でも述べたように、全体として図 1- 地点 2 よりもやや後発的な遺物様相といえる。名越ヶ谷における土地利用の進み具合にも濃淡はあった筈で、大掛かりな造成を必要としない平坦地から、次第に谷戸奥や尾根裾の斜面地を切り盛りしながら可住地を増やしていったことが推測できる。

1 面（1f 面）の下位では遺構は検出されなかったが、1f 面の基盤となる 12 層・黒褐色土からの出土かわらけは手づくね成形品が主体となり、これより上位の遺物様相とは大きく異なっていた。出土量は少ないものの、中世における当地点周辺の土地利用が、13 世紀前半に遡る可能性を示していよう。

中世層より下位では、古代以前の遺物も一定量が出土している。16 層以下がこの段階の遺物包含層で、16 層では古墳後期～奈良時代の遺物が出土し、さらに下位の 21 層では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が若干のまとまりをもって出土している。やはり遺構の検出には及ばなかったが、後者の時期には集落が近在していた可能性を示唆する出土状況であった。本地点の北東には狭い開析谷が延びるので、この中でも比較的平坦な箇所を居住域や谷戸田として利用していたのかもしれない。名越ヶ谷遺跡では古代以前の遺物が中世層などに混在する事例がある他（滝澤・宮田 2003 など）、中世以前のなだらかな落ち込みで土器片錘を含む縄文中期後葉・加曽利 E 式の土器片や古墳時代以降の土師器片、滑石製剣形模造品などの出土例がある（手塚・野本 2002）。現状では谷戸の開口部付近に事例が集中しているが、縄文前期をピークとする海進以降、離水・乾陸化の進んだ地区から土地利用が進んだのであろう。

参考文献

宗臺富貴子・遠藤雅一　1998 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目 1736 番 2 外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14（第 1 分冊）』 鎌倉市教育委員会 （図 1- 地点 4）

手塚直樹・野本賢二　2002 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町三丁目 1826 番 9 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会

滝澤晶子・宮田　眞　2003 『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書（医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ建設にともなう発掘調査）』 名越ヶ谷遺跡発掘調査団・有限会社 博通

汐見一夫・小泉衣里　2004 「名越ヶ谷遺跡（No.231）大町六丁目 1708 番 4 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会 （図 1- 地点 2）

永田史子・福田　誠　2009 『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』 鎌倉市教育委員会（図 1- 地点 6）

1．調査地近景（南から）

5．Ⅰ区 1 面（1f 面・北から）

2．Ⅰ区調査風景（北から）

6．Ⅰ区 1 面（西から）

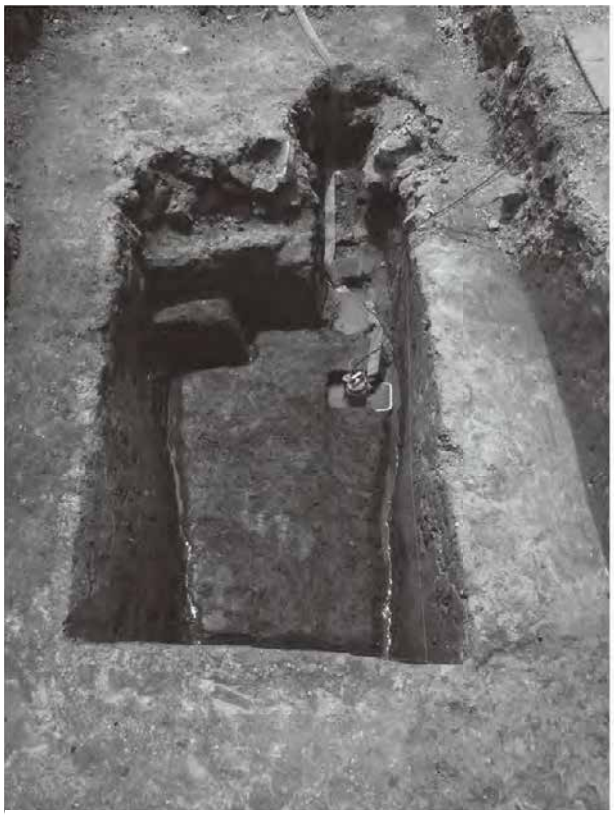
3．Ⅰ区 中世層検出状況（北から）

7．Ⅰ区 1 面下トレンチ（上層・北から）

4．Ⅰ区 中世層上の堆積土（北東から）

8．Ⅰ区 1 面下の堆積土（南東から）

図版２



1. Ⅰ区１面下トレンチ（下層・北から）

2. Ⅰ区１面下の堆積層（南から）

3. Ⅰ区１面上の堆積土（南から）

4. Ⅱ区１面（1c 面・東から）

5. Ⅱ区１面（1c 面・北から）

6. Ⅱ区１面（1c 面）炭検出状況（北から）

7. Ⅱ区１面（1c 面・西から）

1. Ⅱ区１面（1c 面下部・北から）

2. Ⅱ区１面（1d 面・北から）

3. Ⅱ区１面（1d 面）上遺物出土状況

4. Ⅱ区１面（1e 面）上遺物出土状況

5. Ⅰ区１面（1f 面）上遺物出土状況

6. Ⅰ区１面（1f 面・西から）

7. Ⅰ区１面（1f 面・北から）

図版４

1. Ⅱ区１面（1f 面）遺構掘削後（北から）

2. Ⅱ区１面（1f 面）遺構掘削後（東から）

3. Ⅱ区１面（1f 面）上遺物出土状況

4. Ⅱ区１面下トレンチ（上層・北から）

5. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・北から）

6. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・北から）

7. Ⅱ区１面下トレンチ（下層・南東から）

1．Ⅱ区Ⅰ面下の堆積土（西から）

4．Ⅱ区Ⅰ面下トレンチ（最下層・北から）

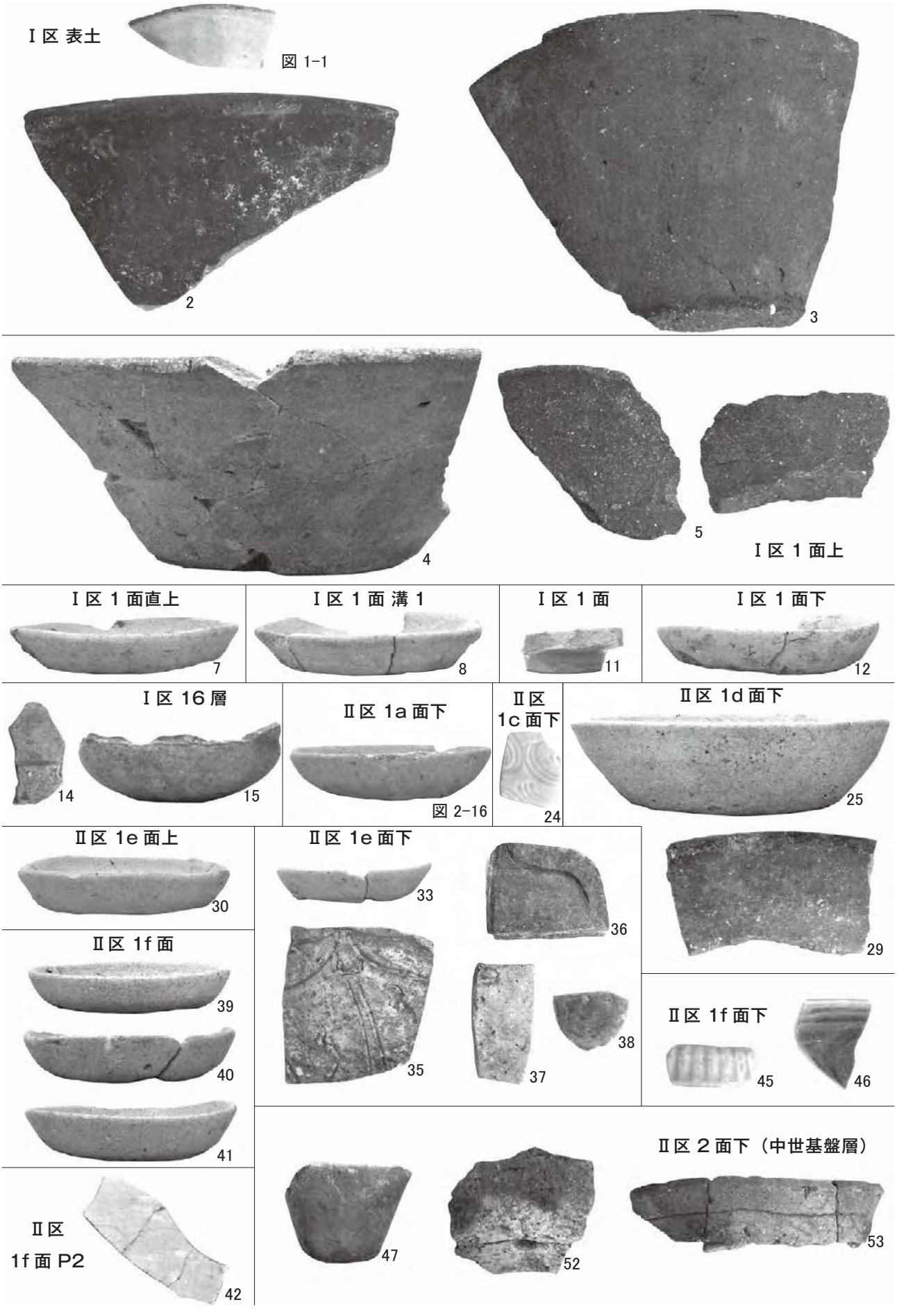
2．Ⅱ区北壁の堆積土（南から）

5．Ⅱ区１面下の堆積土（南から）

3．Ⅱ区Ⅰ面下の堆積土（東から）

6．Ⅱ区１面下最下層（22･23 層）遺物出土状況

図版6


Ⅰ区 表土
図 1-1
2
3
4
5
Ⅰ区 1 面上
Ⅰ区 1 面直上
7
Ⅰ区 1 面 溝 1
8
Ⅰ区 1 面
11
Ⅰ区 1 面下
12
Ⅰ区 16 層
14
15
Ⅱ区 1a 面下
図 2-16
Ⅱ区
1c 面下
24
Ⅱ区 1d 面下
25
Ⅱ区 1e 面上
30
Ⅱ区 1e 面下
33
36
29
Ⅱ区 1f 面
39
40
41
35
37
38
Ⅱ区 1f 面下
45
46
Ⅱ区
1f 面 P2
42
47
52
Ⅱ区 2 面下（中世基盤層）
53

北条小町邸跡（No.282）

雪ノ下一丁目 403 番 14 地点

例　言

1．本報告は、鎌倉市大雪ノ下一丁目 403 番 14 において実施した北条小町邸跡（鎌倉市 No.282）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は平成 25 年 10 月 10 日から同年 12 月 27 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、45.4㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員　　押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調　査　員　　吉田桂子、小野夏菜、本城　裕（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作　業　員　　安達越郎、伴　一明、石黒　清、永野幹晴、三橋幸雄、久島忠敬、石田光久
（公益社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）
整理作業参加者　押木弘己、吉田桂子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
天野隆男、串田健一、倉澤六郎、渡辺輝彦、宮崎　明、高橋こう子、高山譲二、
松岡信喜（公益社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報告の執筆と編集は、押木が行った。

5．本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。

6．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＨＪＫ１３０４」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正後）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、 筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明　2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：愛知県　2012『愛知県史』別編窯業３　中世・近世常滑系

目　　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 97

第二章　調査の方法と経過…… 99

第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の方法
第３節　調査の経過

第三章　基本土層…… 100

第四章　発見された遺構と遺物…… 106

第１節　中世上層の遺構と遺物
第２節　中世下層の遺構と遺物
第３節　中世層基盤層下の確認調査

第五章　調査成果のまとめ…… 120

挿図目次

図１　若宮大路幕府旧蹟碑と
「北条小町邸跡」の変遷 …… 97
図２　調査地の位置 …… 98
図３　調査区配置図 …… 99
図４　調査区セクション図① …… 101
図５　調査区セクション図② …… 103
図６　調査区セクション図③ …… 105
図７　中世上層遺構面 全体図 …… 107
図８　中世上層 遺構 81（カマド状遺構）…… 108
図９　中世下層遺構面 全体図 …… 110
図 10　中世下層遺構面 検出遺構 個別図 …… 111
図 11　中世基盤層下 全体図 …… 115
図 12　出土遺物（1） …… 116
図 13　出土遺物（2） …… 117
図 14　出土遺物（3） …… 118
図 15　出土遺物（4） …… 119
図 16　周辺調査地点合成図 …… 121

表　目　次

表１　出土遺物カウント表 …… 122
表２　出土遺物観察表 …… 137

写真図版目次

図版１
1. 調査区設定状況（南東から）
2. 調査区設定状況（北西から）
3. Ⅱ区　表土除去後（南から）
4. Ⅰ区　表土除去後（南から）
5. Ⅱ区　上層検出状況（南から）
6. Ⅰ区　上層検出状況（南から）

図版 2

1. Ⅰ区　上層検出状況（北から）
2. Ⅰ区　上層　作業状況（北東から）
3. Ⅱ区　上層全景①（南から）
4. Ⅰ区　上層全景①（北から）
5. Ⅱ区　上層全景②（南から）
6. Ⅰ区　上層全景②（南から）

図版 3

1. Ⅱ区上層　遺構 81 検出状況（南から）
2. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土貼り面：南から）
3. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土貼り面：東から）
4. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土面除去後:南から）
5. Ⅱ区上層　遺構 81（南部縦断面：東から）
6. Ⅱ区上層　遺構 81（北部縦断面：東から）
7. Ⅱ区上層　遺構 81（横断面：南から）
8. Ⅱ区上層　遺構 81（縦断面：東から）

図版 4

1. Ⅱ区下層　全景（東から）
2. Ⅰ区下層　全景（北から）
3. Ⅱ区下層　全景（南から）
4. Ⅰ区下層　全景（南から）
5. Ⅰ区 2 面　遺構 8・25（東西溝①：西から）
6. Ⅰ区下層　遺構 8・25
   かわらけ出土状況（南西から）
7. Ⅱ区下層　遺構 8・25（東西溝①：西から）
8. Ⅱ区下層　遺構 8・25（東西溝①：東から）

図版 5

1. Ⅰ区東壁　下層遺構 8・25 断面
   （東西溝①：南西から）
2. Ⅰ区西壁　下層遺構 8・25 断面
   （東西溝①：東から）
3. Ⅱ区下層　遺構 34（東西溝②：東から）
4. Ⅰ区東壁　上層遺構 34（東西溝②:西から）
5. Ⅰ区下層　遺構 34（東西溝②：東から）
6. Ⅱ－拡張区下層　柱穴 182
   （東西柱穴列：西から）
7. Ⅱ区下層　東西柱穴列（東から）
8. Ⅱ－拡張区東壁　柱穴 182 断面
   （東西柱穴列：西から）

図版 6

1. Ⅱ区下層　遺構 99（かわらけ集積:南から）
2. Ⅱ区下層　遺構 99 完掘後
   （かわらけ集積：南から）
3. Ⅱ区下層　南北柱穴列①
   （Ⅲ b 層上面：南から）
4. Ⅱ区　東壁断面（西から）
5. Ⅱ区 3 面　柱穴 134 断面（南西から）
6. Ⅱ区東壁　柱穴 143 断面
   （南北柱穴列①：西から）
7. Ⅱ区東壁　東西溝①・柱穴 171 断面
   （西から）
8. Ⅱ区下層　かわらけ出土状況（東から）

図版 7

1. Ⅰ区下層　遺構 36（井戸：東から）
2. Ⅰ区下層　遺構 36 完掘後（井戸：西から）
3. Ⅱ区上層遺構 81
   ・下層遺構 25・151 断面（東から）
4. Ⅱ区下層　遺構 151（井戸：東から）
5. Ⅱ区Ⅲ c 層上面　全景（南から）
6. Ⅰ区Ⅲ c 層上面　全景（南から）
7. Ⅱ区Ⅲ c 層上面　噴砂痕検出状況（北から）
8. Ⅰ区南壁　噴砂痕断面（北から）

図版 8 ～ 12　出土遺物

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本地点は、若宮大路と小町大路とに挟まれた住宅街に所在する。鎌倉の中心市街地が広がる沖積平野の北東部に立地し、現況の標高は約 9.5 m を測る。

埋蔵文化財包蔵地としての「北条小町邸跡」は若宮大路東辺の一画を占め、約 200 m四方の範囲をもつ。かつては「北条泰時・時頼邸跡」の遺跡名称もあった。これまでに 18 地点で発掘調査が行われているが、その多くが遺跡外縁部での調査で、若宮大路や小町大路の側溝など、屋敷地としての遺跡外郭線を示す遺構が確認されている。一方、遺跡中央付近での調査例は少なく、調査面積も狭小であるため、屋敷地中核部の様相は明確になっていないのが現状である。

「北条小町邸跡」は『吾妻鏡』承元四年（1210）十一月二十日条の「相模太郎殿小町御亭」や宝治元年（1247）七月十七日条にみえる「前武州禅室跡」といった記述に基づく遺跡名で、ここに鎌倉幕府第 3 代執権・北条泰時の邸宅が所在したと考えられている。秋山哲雄氏の考証によれば、泰時以後は彼の孫で第 4 代執権の経時に、次いで泰時の弟で連署として第 5 代執権時頼を補佐した重時が邸宅の一部ないし全体を相伝したという（秋山 2010）。この南隣地区は嘉禄元年（1225）に将軍御所が移転した宇津宮辻子幕府の比定地で、嘉禎二年（1236）には泰時邸の南側一画に将軍御所が再移転したと考えられている（若宮大路幕府・図 1）。嘉禄元年以降、若宮大路東側に将軍御所と執権邸が集約される形となり、元弘三年（1333）の幕府滅亡に至るまで、当地区は幕府政治の中枢機能を担う場となる。この間、若宮大路を基軸とした都市鎌倉の飛躍的展開があったことは、これまでの発掘成果が明白に物語っている。

【参考文献は第五章末（122 頁）に掲載した】

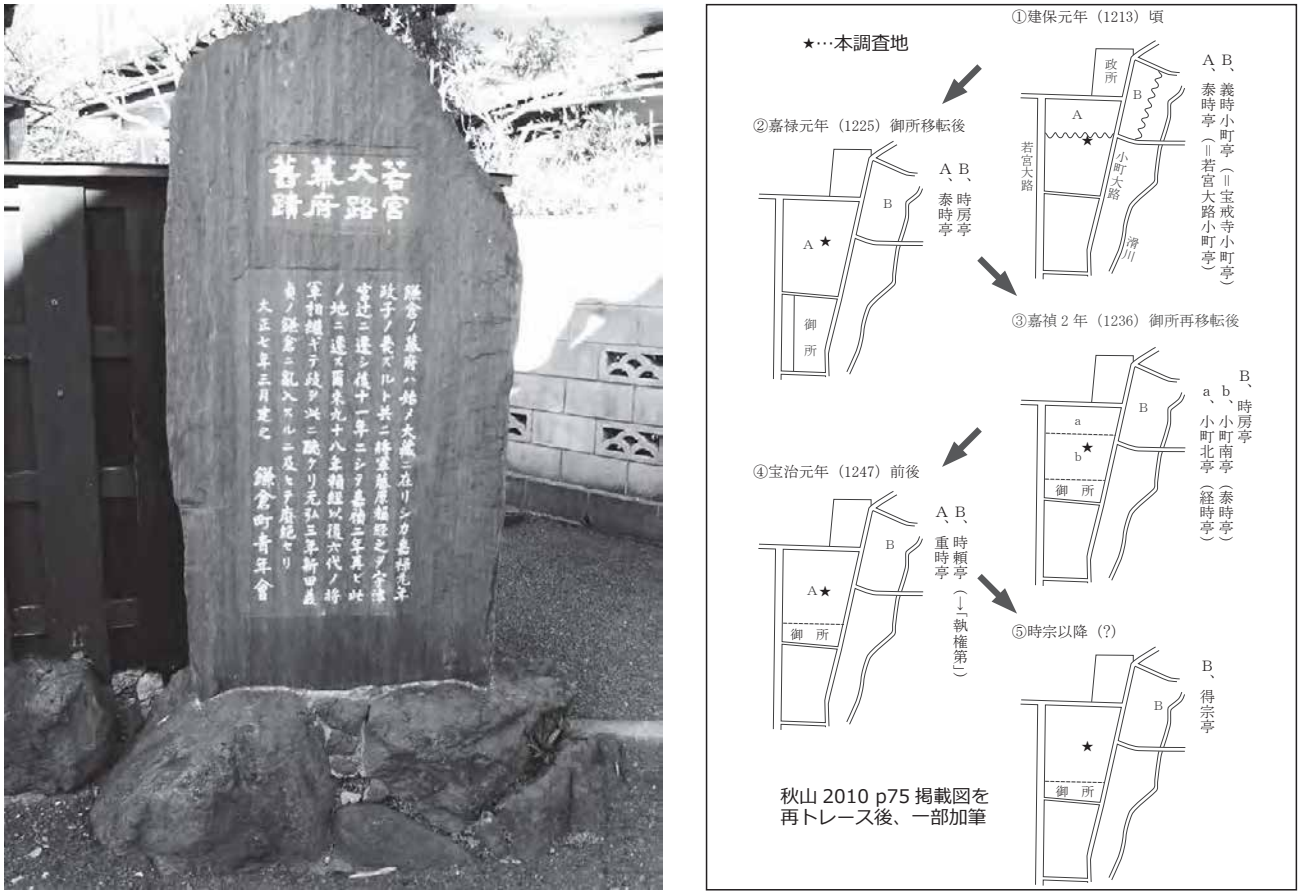


図 1　若宮大路幕府旧蹟碑（左写真）と「北条小町邸跡」の変遷（秋山 2010 を改変）

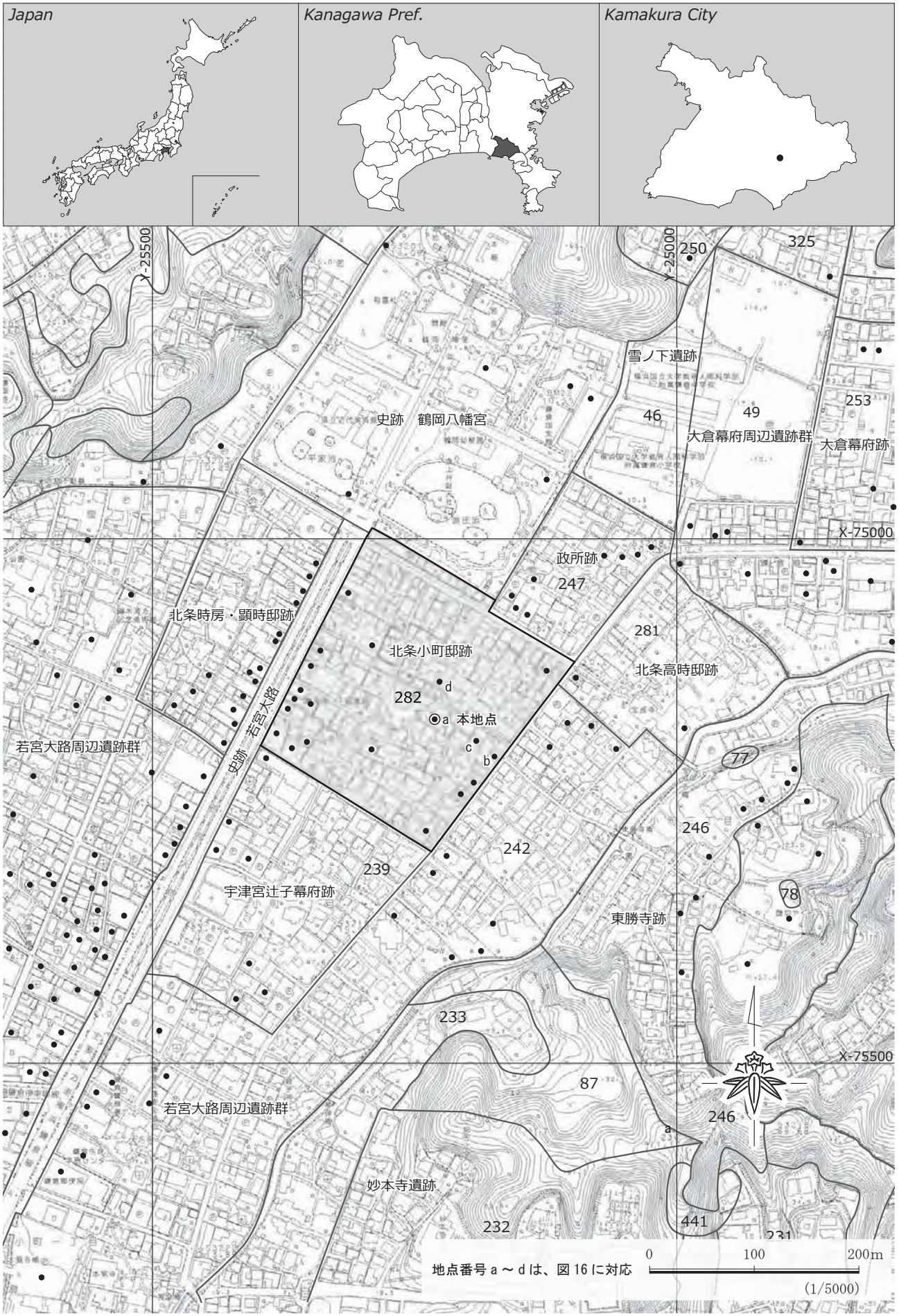


図 2　調査地の位置（鎌倉市発行 1：2,500 都市計画基本図を使用）

第二章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。

建築計画では基礎工事として現地表下 4.93 ｍまでの柱状改良を施すことから、市教委は平成 25 年 3 月 5 日と 6 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下約 50cm の表土層直下では破砕泥岩で整地された中世の遺構面が、地表下 110cm では中世基盤層が確認され、この上面が遺構面と判断された。この確認調査の結果を受け、建築計画の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

以上の手続きを経て、平成 25 年 10 月 10 日～ 12 月 27 日の約 2 ヶ月半をかけて現地での調査を実施した。

第２節　調査の方法

掘削に伴う発生土置場を確保する必要から、約 45㎡の調査範囲を二分割して調査を進めた（図 3）。

表土の除去は重機によって行い、東半のⅠ区の調査を終えた後、Ⅰ区の埋め戻しおよびⅡ区の表土掘削を行った。今回は十分な発生土置場を確保することが難したかったため、Ⅰ区とⅡ区の間には発生土の崩落防止を目的とする未掘削部分（中央ベルト）を残し、土層断面の観察にも利用した。

Ⅰ・Ⅱ区とも遺物包含層以下は全て人力によって掘削し、順次下層遺構面への掘り下げと遺構掘削、および写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に基づく基準軸を設定し、主に光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。国家座標値は、都市再生街区多角点の補助点「3A064」および「3A150」の二点間関係をもとに開放トラバース法で移動した。東日本大震災後の補正値を使用した。

第３節　調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 25 年 10 月 10 に開始した。Ⅰ→Ⅱ区の順に調査を進め、Ⅰ区は 11 月 18 日、Ⅱ区は 12 月 16 日にひととおりの調査を終えた。その後、下層東西柱穴列の構成ピットを確認する目的から中央ベルト北端部を拡張し、24 日までにはⅢb 層上面まで掘削と記録を終えた。27 日には調査用具を撤収し、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。平成 27 年度後半に遺物実測、挿図・写真図版・表組みの作成を行い、平成 28 年度の前半に文章執筆に当たった。

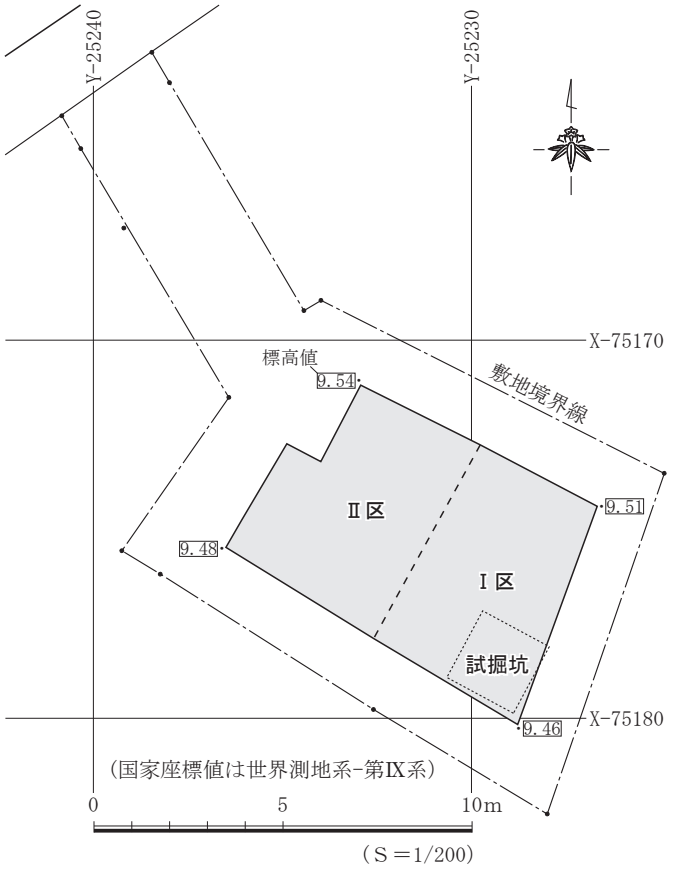


図３　調査区配置図

第三章　基本土層

本地点は、鎌倉市街地の基盤をなす沖積平野に立地している。現地表面の標高は 9.5 m前後を測り、高低差を殆ど感じない地形となっている。

今回は地表下 50cm 以下で､3 枚の中世遺構面を確認した。最下層は中世基盤層（Ⅲ b 層）の上面で、調査区の北辺付近で東西溝（遺構 34）など少数の遺構を確認したが、上部を上層の遺構群に削平され本来の掘り込み面を把握できなかったため、本報告では中世下層の遺構面に帰属させ、この最古段階の遺構として提示することとした。Ⅰ・Ⅱ区ともに中世遺構の調査を終えた後、Ⅲ b 層以下を掘り下げて古代以前の遺構・遺物について確認を試みた。その結果、かわらけ他の中世遺物が少量と、須恵器坏の小片が 1 点出土したのみで遺構は発見されなかった。Ⅲ b 層以下で中世遺物が出土している点について、調査での多少の掘り残しがあった可能性は否定できないが、Ⅲ b 層上面が中世で最初の生活面となっていた可能性を示唆している。

Ⅲ b 層は灰黒色の強粘質土で、上面の標高は 8.35 ～ 8.6 m を測り、東側での確認レベルが低かった。層厚は 20㎝ほどで、その下位には黒褐色～黒灰色粘質土（Ⅲ c 層）が堆積し、標高 8.2 ～ 8.3 m前後で灰黒色シルト質土（Ⅲ d 層）が検出された。やはり調査区東側での確認レベルが低い。Ⅲ c 層は古代の遺物包含層となる可能性があるが、Ⅲ d 層以下は無遺物層と考えられたため、これより下位の掘削は行わなかった。

Ⅰ区では、Ⅲ d 層を切って南北に蛇行して走る噴砂痕を確認している（図版 7-7・8)。中世下層面の東西溝（遺構 25）の埋土が被っているので（図版 4-6)、13 世紀代以前の地震に伴う液状化痕跡として理解できる。Ⅰ区ほど明瞭ではないが、Ⅱ区のⅢ d 層上でも南北に走る細い亀裂を確認している（図版 7-5)。

なお、本地点は地下水レベルが遺構確認面より低かったため、木製品は殆ど残っていなかった。本来であれば区画溝の護岸板や柱材、礎板といった形で木材が使用されていたのだろうが、今回は腐植した粘質土として、その痕跡が窺えたに過ぎない。

調査区壁の土層断面は、図 4 ～ 6 に示した。

基本土層説明

0	暗褐色土	表土。砂質土。締まり弱い。
Ⅰ	暗褐色土	砂質土。
Ⅰ b	褐色土	泥岩ブロック多量。
Ⅱ a	暗灰褐色土	泥岩粒・炭粒多量。
Ⅱ b	黒褐色土	Ⅲ層土がベース。炭粒微量。粘性あり、締まりややあり。
Ⅱ c	暗灰色土	粘質土。Ⅲ層土がベース。締まり強い。
Ⅲ a①	黒灰色土	粘質土。締まり強い。中世遺物ごく少量包含。
Ⅲ a②	黒灰色土	粘質土。締まり強い。中世遺物ごく少量包含。
Ⅲ b	灰黒色土	粘質土。中世基盤層。
Ⅲ c	黒褐色土	弱粘質土。白色・褐色粒少量。
Ⅲ d	灰黒色土	シルト質土。

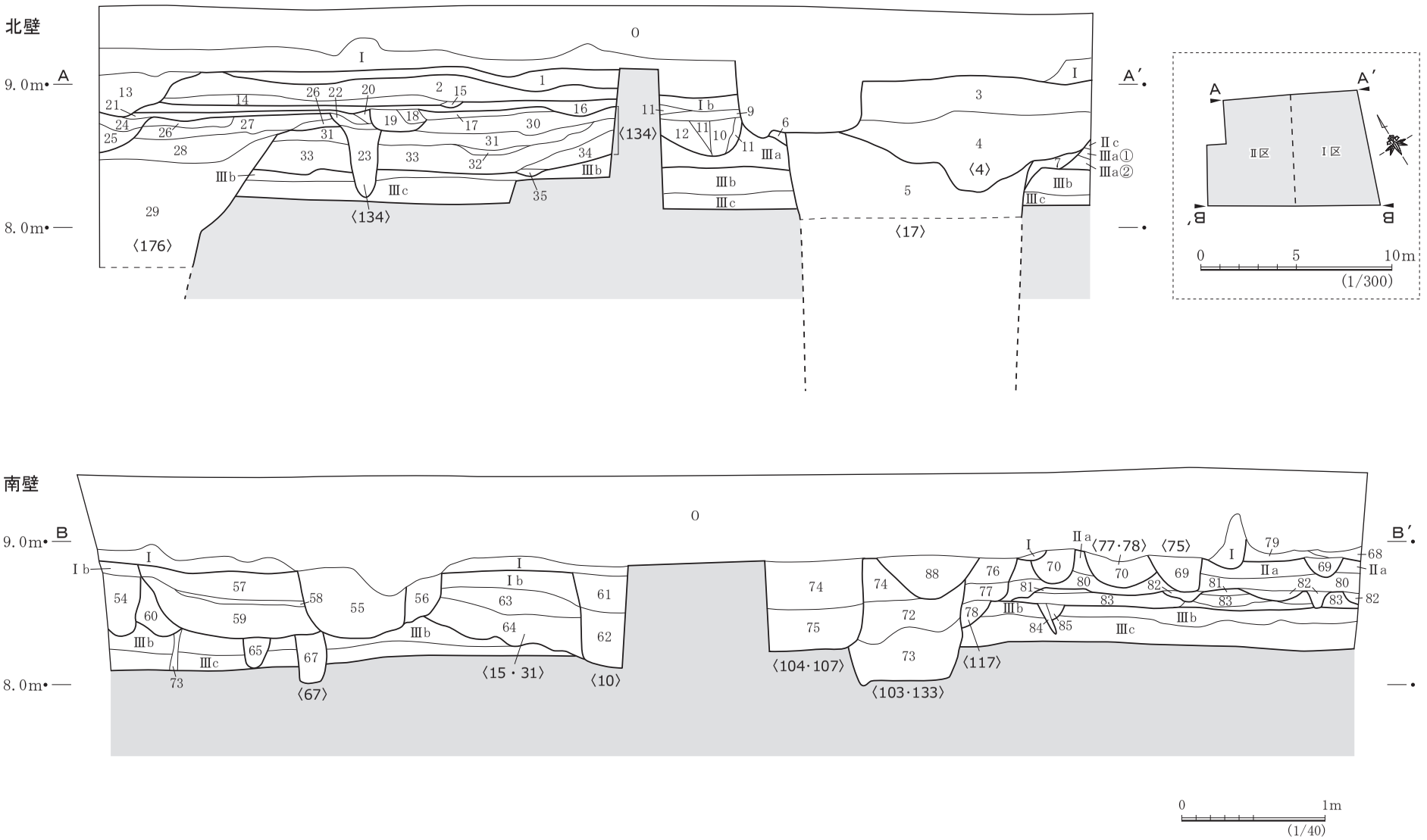


図４　調査区セクション図①

1	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。締まりややあり。
2	灰褐色土	泥岩粒ごく少量。締まり弱い。
3	黄褐色土	泥岩ブロック多量。
4	灰褐色土	砂質土。泥岩ブロック少量。遺構 44
5	灰褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 17
6	暗灰褐色土	粘質土。
7	黒褐色土	粘質土。泥岩粒少量。
8	灰褐色土	砂質土。
9	黄褐色土	泥岩粗粒が主体。
10	暗褐色土	炭粒、泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 57 ヵ
11	灰褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 57 ヵ
12	灰褐色土	遺構 57 ヵ
13	灰褐色土	泥岩粒、灰色砂少量。
14	暗灰褐色土	砂＋土。締まり強い。
15	暗灰褐色土	砂主体。
16	暗灰褐色土	泥岩微粒多量。締まりあり。
17	黄褐色土	締まり強い。
18	暗褐色土	泥岩粒多い。締まり強い。遺構 99･134
19	暗褐色土	泥岩粒少量、炭粒多い。
20	灰色砂	混貝砂主体。
21	黄褐色土	泥岩粒多い。締まりあり。
22	黄褐色土	泥岩粒多い。
23	黒褐色土	炭粒少量。粘性あり。遺構 134
24	暗灰褐色土	炭粒少量
25	暗灰褐色土	粘質土。炭粒少量。
26	暗褐色土	混貝砂混入。
27	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。
28	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。遺構 176
29	暗褐色土	粘質土。炭粒少量。遺構 176
30	暗褐色土	泥岩粒微量。粘性あり、締まりややあり。
31	暗褐色土	粘性あり。遺構 34
32	黒色土	炭粒主体。締まり弱い。遺構 34
33	暗褐色土	弱粘質土。やや赤色味を帯びる。遺構 34
34	暗褐色土	弱粘質土。遺構 34
35	暗褐色土	弱粘質土。白色・褐色粒少量。遺構 34
36	灰褐色土	砂質土。赤色砂ブロック少量。遺構 34
37	暗褐色土	砂質土。締まり弱い。
38	暗褐色土	砂質土。泥岩粒少量。
39	暗褐色土	締まり弱い。柱材の腐植痕跡か。遺構 40
40	暗褐色土	粘質土。締まりあり。遺構 40
41	暗褐色土	砂質土。締まり弱い。
42	黄褐色土	泥岩粒密。
43	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。遺構 27
44	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。49 層より締まりあり。遺構 27
45	灰褐色土	砂質土。遺構 8・25
46	灰褐色土	赤色砂ブロック、炭粒多量。遺構 8・25
47	灰褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 8・25
48	灰褐色土	白色粘土粒少量。52 層より締まり強い。遺構 8・25
49	暗灰色土	砂質土。泥岩ブロック少量。
50	暗灰色土	泥岩粒少量。
51	灰褐色砂	部分的に混入。
52	黒褐色土	粘質土。泥岩粒少量。遺構 18
53	灰褐色土	砂質土。遺構 18
54	灰褐色土	砂質土。泥岩粒、炭粒微量。
55	暗褐色土	上部に泥岩ブロック多い。炭粒多量。
56	暗褐色土	62 層に近似し、締まりやや強い。
57	灰褐色土	Ⅰb層に近似。泥岩ブロック多量。
58	暗褐色土	泥岩ブロック多量。締まりあり。
59	暗褐色土	泥岩ブロック多量。締まりややあり。
60	灰褐色土	砂質土。
61	灰褐色土	Ⅰb層に近似。泥岩ブロック多量。遺構 10
62	灰褐色土	泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 10
63	灰褐色土	砂質土。泥岩粒少量。遺構 15・31
64	暗褐色土	炭粒、泥岩ブロック多量。締まり弱い。遺構 15・31
65	暗褐色土	粘質土。泥岩粒、炭粒微量。
66	灰黄色砂	地山砂の噴砂痕。微細・シルト質。
67	暗褐色土	粘質土。泥岩粒微量。遺構 67
68	灰褐色土	泥岩粒少量。締まりあり。
69	灰褐色土	泥岩粒、炭粒少量。遺構 75 など
70	灰褐色土	泥岩ブロック多量。締まりあり。遺構 77・78 など
71	暗褐色土	泥岩粒多量。締まりあり。遺構 103・133
72	暗褐色土	泥岩粒多量。締まりややあり。遺構 103・133
73	暗褐色土	Ⅲ層土ブロック少量。粘性ややあり。遺構 103・133
74	暗褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 104・107
75	暗褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 104・107
76	暗灰褐色土	泥岩粒、炭粒多量。遺構 117
77	暗灰褐色土	泥岩粒少量。締まりややあり。遺構 117
78	暗灰褐色土	泥岩粒多量。遺構 117
79	灰褐色土	泥岩粒多量。締まりあり。
80	赤褐色砂	微細で均質。締まり弱い。
81	暗灰色土	混貝砂と腐植土の混交層。締まりあり。
82	暗赤褐色砂	赤褐色砂と腐植土の混淆土。締まりあり。
83	灰黄色砂	混貝砂。締まりややあり。
84	暗灰褐色土	泥岩粒少量。粘性強く、締まり弱い。
85	暗灰褐色土	泥岩粒少量。粘性強く、締まりあり。
86	黄褐色土	泥岩ブロック主体。
87	灰褐色土	砂質土。泥岩粗粒多量。

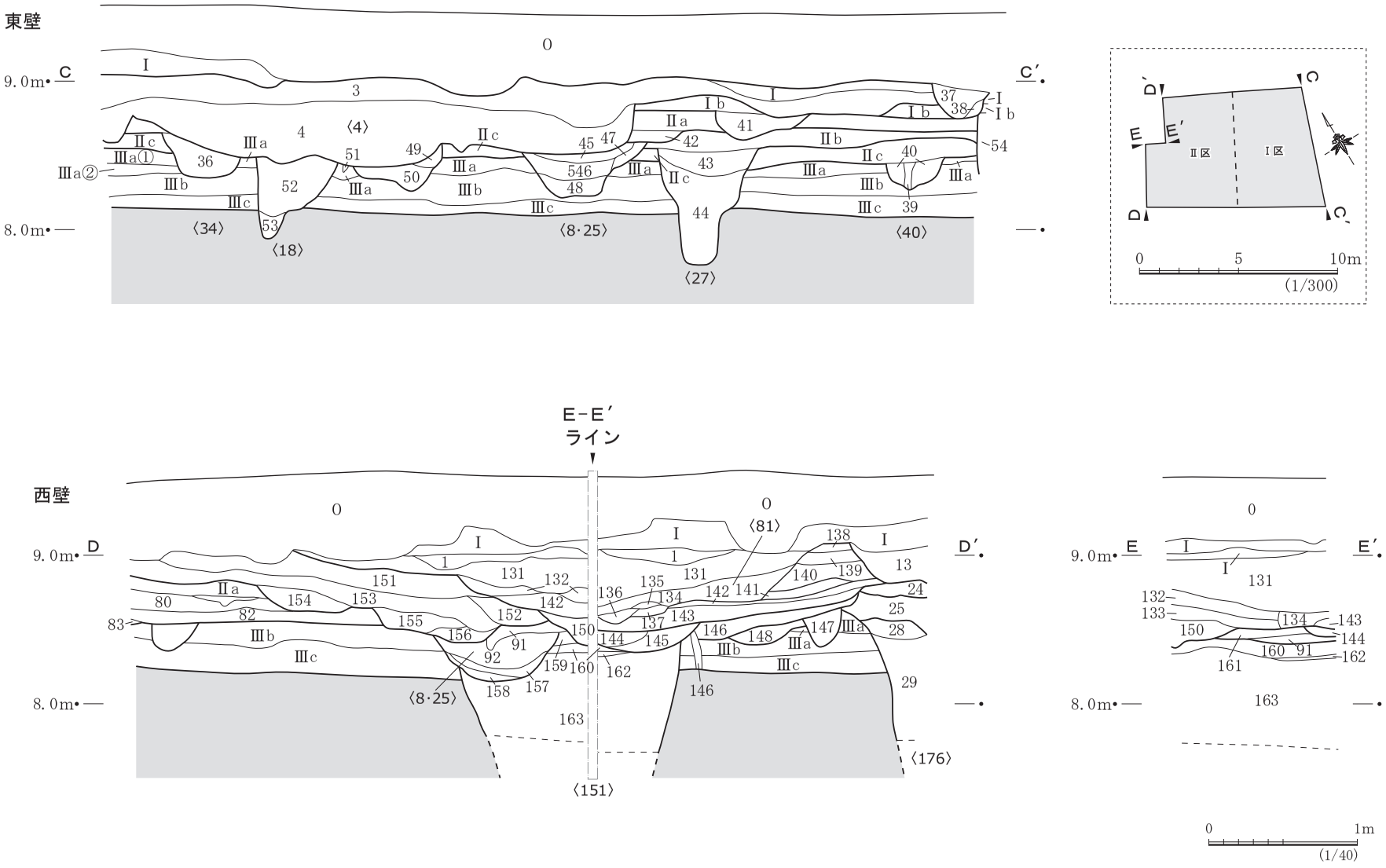
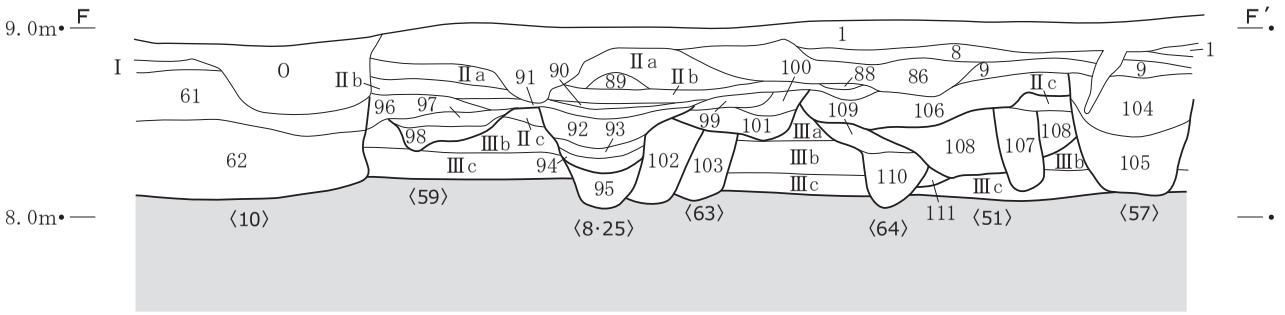
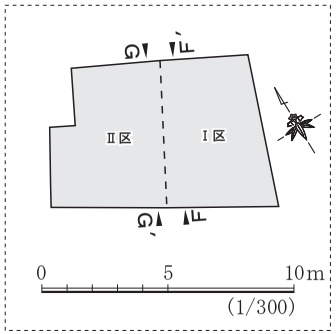


図５　調査区セクション図②

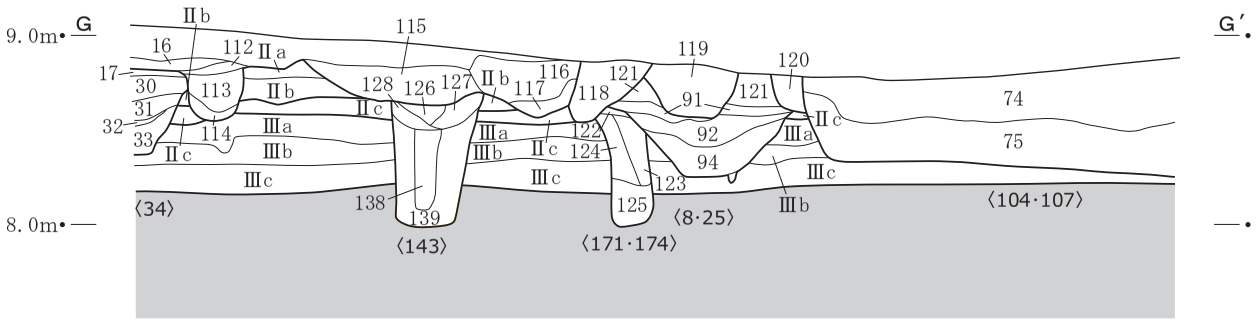
88　暗褐色土　粘質土。締まり弱い。
89　灰褐色砂　貝殻粒多量。
90　赤褐色砂　締まり弱い。
91　黒色土　Ⅲ層土に近似。炭粒多量。締まり弱い。
92　灰褐色土　砂質土。遺構 8・25
93　灰褐色土　粘質土。遺構 8・25
94　灰褐色土　砂質土。
95　灰褐色土　粘質土。
96　灰褐色土　砂質土。
97　灰褐色土　砂質土。
98　灰褐色土　砂質土。かわらけ片非常に多い。泥岩粒、炭粒多量。
99　灰褐色土　泥岩微粒多量。
100　暗褐色土　粘質土。
101　暗褐色土　粘質土。100 層より締まり強い。
102　灰褐色土　粘質土。締まり強い。
103　灰褐色土　粘質土。締まり強い。
104　黒褐色土　粘質土。
105　黒褐色土　粘質土。104 層より締まり強い。
106　灰褐色土　泥岩粒少量。
107　暗褐色土　粘質土。締まりあり。
108　灰褐色土　粘質土。炭粒多量。
109　暗褐色土　粘質土。
110　暗褐色土　粘質土。109 層より締まりあり。
111　灰褐色土　粘質土。炭粒少量。
112　暗灰褐色土　泥岩粒少量。締まりあり。
113　暗褐色土　泥岩ブロックやや多い。締まりあり。
114　暗褐色土　締まり弱い。
115　黄褐色土　泥岩粒密。締まり強い
116　黄褐色土　泥岩粒密。締まり強い。
117　暗褐色土　泥岩粒少量。締まり強い。
118　灰褐色土　泥岩粒多量。締まりあり。
119　灰褐色土　泥岩粒少量。
120　灰褐色土　泥岩粒少量。
121　灰褐色土　砂質土。締まりややあり。
122　暗褐色土
123　黒褐色土　粘性あり、締まり弱い。遺構 171･174
124　黒褐色土　粘性あり、締まりややあり。遺構 171･174
125　黒褐色土　粘性、締まりあり。遺構 171･174
126　黒褐色土　泥岩粒少量。締まりあり。遺構 143
127　黒褐色土　泥岩粒、炭粒少量。締まりあり。遺構 143
128　黒褐色土　泥岩粒少量。締まりあり。遺構 143
129　暗褐色土　泥岩粒少量。締まり弱い。遺構 143
130　黒褐色土　粘質土。締まりあり。遺構 143
131　暗褐色土　泥岩粒多量。締まりあり。遺構 81
132　黒褐色土　粘質土＋炭粒。締まりややあり。遺構 81
133　黒色土　微細な炭粒主体。締まり弱い。遺構 81
134　黒色土　微細な炭・灰。締まり弱い。遺構 81
135　黒色土　炭主体。焼土少量。遺構 81
136　暗褐色土　粘質土。締まりややあり。遺構 81
137　暗褐色土　泥岩ブロック少量。遺構 81
138　暗褐色土　泥岩粒多量。締まりあり。遺構 81
139　暗褐色土　泥岩粒少量。締まりあり。遺構 81
140　暗黄褐色土　泥岩粒密。締まりあり。遺構 81
141　暗赤褐色土　微細な焼土・灰が主体。締まり弱い。遺構 81
142　灰色土　粘土床。締まり弱い。遺構 81
143　暗黄褐色土　泥岩ブロック多量。締まり強い。遺構 81
144　灰褐色土　焼土粒少量。締まり弱い。遺構 81
145　灰褐色土　炭・灰粒少量。締まり弱い。遺構 81
146　暗褐色土　泥岩粒多量。
147　暗褐色土　泥岩粒少量。
148　暗褐色土　粘質土。炭粒少量。
149　暗褐色土　締まり弱い。植物根の痕跡
150　赤褐色土　焼土主体。上面やや硬化。
151　暗褐色土　泥岩粒やや多い。
152　暗褐色土　泥岩粒多量。
153　暗灰褐色土　灰色砂、泥岩粒少量。
154　暗褐色土　泥岩粒、炭粒少量。
155　暗褐色土　泥岩ブロック多量。
156　暗褐色土　泥岩粒多い。
157　暗褐色土　粘質土。締まり弱い。遺構 8・25
158　灰褐色砂　締まり弱い。遺構 8・25
159　灰褐色土　砂質土。上面に混貝砂＋泥岩粒が多く、締まりやや強い。遺構 151
160　灰褐色土　砂質土＋少量の粘質土。締まり弱い。遺構 151
161　灰褐色土　炭・灰粒少量。締まり弱い。
162　黒色土　粘質土。遺構 151
163　暗褐色土　粘質土。木片、炭粒少量。締まり弱い。遺構 151
164　黄褐色土　泥岩ブロック主体。
165　暗褐色土　泥岩粒多量。締まりややあり。
166　暗黄褐色土　泥岩ブロック多量。締まりあり。
167　暗黄褐色土　泥岩粒多量。締まりあり。
168　黄褐色土　微細な泥岩粒主体。締まりあり。
169　暗灰褐色土　泥岩ブロック多量。締まり弱い。
170　暗灰褐色土　粘質土。泥岩粒少量。
171　暗灰褐色土　泥岩粒ごく微量。
172　暗灰褐色土
173　暗灰褐色土　弱粘質土。

Ⅰ区西壁





Ⅱ区東壁



Ⅱ - 拡張区東壁

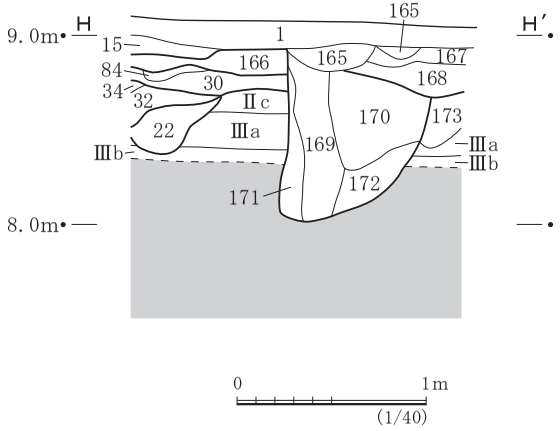


図６　調査区セクション図③

第四章　発見された遺構と遺物

前章で述べたように、中世の遺構面は上・下層の 2 枚に大別できるものと考えた。上層の遺構面では南北に長軸を持つ長方形土坑や不整形の落ち込み、粘土床を持つカマド状遺構などが検出された。下層遺構面では一転して 2 条の東西溝や東西・南北に並ぶ柱穴列といった区画施設の遺構が展開する状況を確認した。こうした遺構形態の違いは、下層から上層への時間的推移に伴う空間利用の転換を示唆しているものと考えている。以下、上層から順に、主な検出遺構と出土遺物について説明する。

第 1 節　中世上層の遺構と遺物（図 7・8）

表土直下の標高 8.9 ～ 9.1 m前後で確認した。Ⅰ区全域からⅡ区の南部にかけては遺構が稠密で確認が難しかったため､本来の検出面より 10 ～ 15cm ほど掘り下げて平面プランの確認を行った。その結果、調査区の南半部で重複する長方形土坑群が検出され、Ⅰ区北部で不整形の落ち込みを、Ⅱ区の北部ではカマド状遺構を確認した。

表土～上層遺構面の出土遺物

図 12-1 ～ 12 に示した。7 は古瀬戸前期様式Ⅱ～Ⅲ期の卸皿。本地点では瀬戸窯製品が非常に少なく、全体の器形を復元できたのは、この 1 点のみである。8 は軒平瓦の瓦当部片。陽刻の下向き剣頭文で、瓦当部は顎貼り付け技法で平瓦に接着される。

遺構 4（落ち込み）

Ⅰ区の北部で検出された、平面形の不明瞭な落ち込みである。土層断面の観察では標高 8.9 m以下に埋土が堆積し、この上位に層厚 10 ～ 15cm で泥岩ブロックを多量に含む黄褐色土が被っていた。後者は版築などは施されないものの、遺構廃絶後の埋め立て・整地に関わる土層と考えられる。この黄褐色土までを本落ち込みに伴うものとすると、他の上層遺構群よりも上位から掘り込まれていたことになる。

ただ、表土層との境近くに堆積の乱れがあり、確実な立ち上がりは把握できていない。落ち込み自体はなだらかで､底面は弱い段差を持ちながらも緩い擂鉢状を呈していた。最も低いところで標高 8.35 mを計測した。埋土は泥岩ブロックを多く含む灰褐色砂質土で、底面から 10cm ほど浮いた位置では砂質凝灰岩切石（鎌倉石）の破損品や人頭大の泥岩塊が集積していた。これらは標高 8.7 ～ 8.9 mで上端のレベルがまとまっており、この上に先述の黄褐色土が被っていた。遺構の用途については判断が難しいが、平面・断面とも不整形で企画性を見出せない点は池などを想起させる。その場合、集積状態の石材は、護岸材や景石が廃棄されたものとも見なせようか。

本遺構から出土した遺物は、図 13-67 ～ 72 に示した。

土坑群

土坑は調査区の南半部に集中して検出された。南北に長軸を持つ長方形プランのものが主体で、垂直に掘り込まれ、下底面はフラットで箱形の断面形を呈する。調査区の南外に続き、土坑間の重複も多いため全体規模を把握できたものは殆どないが、短軸の幅は 90cm ほどでまとまり、長軸ラインは N25° E 前後で揃うことから、一定の制約に則って掘削されたものと考えられる。確認面からは、60 ～ 90cm の深さを有する。一部の土坑では炭とともに大量のかわらけ片で埋まっており、火災後のゴミ処理を目的に掘られた可能性がある。

各土坑から出土した遺物は、図 12・13 に提示した。

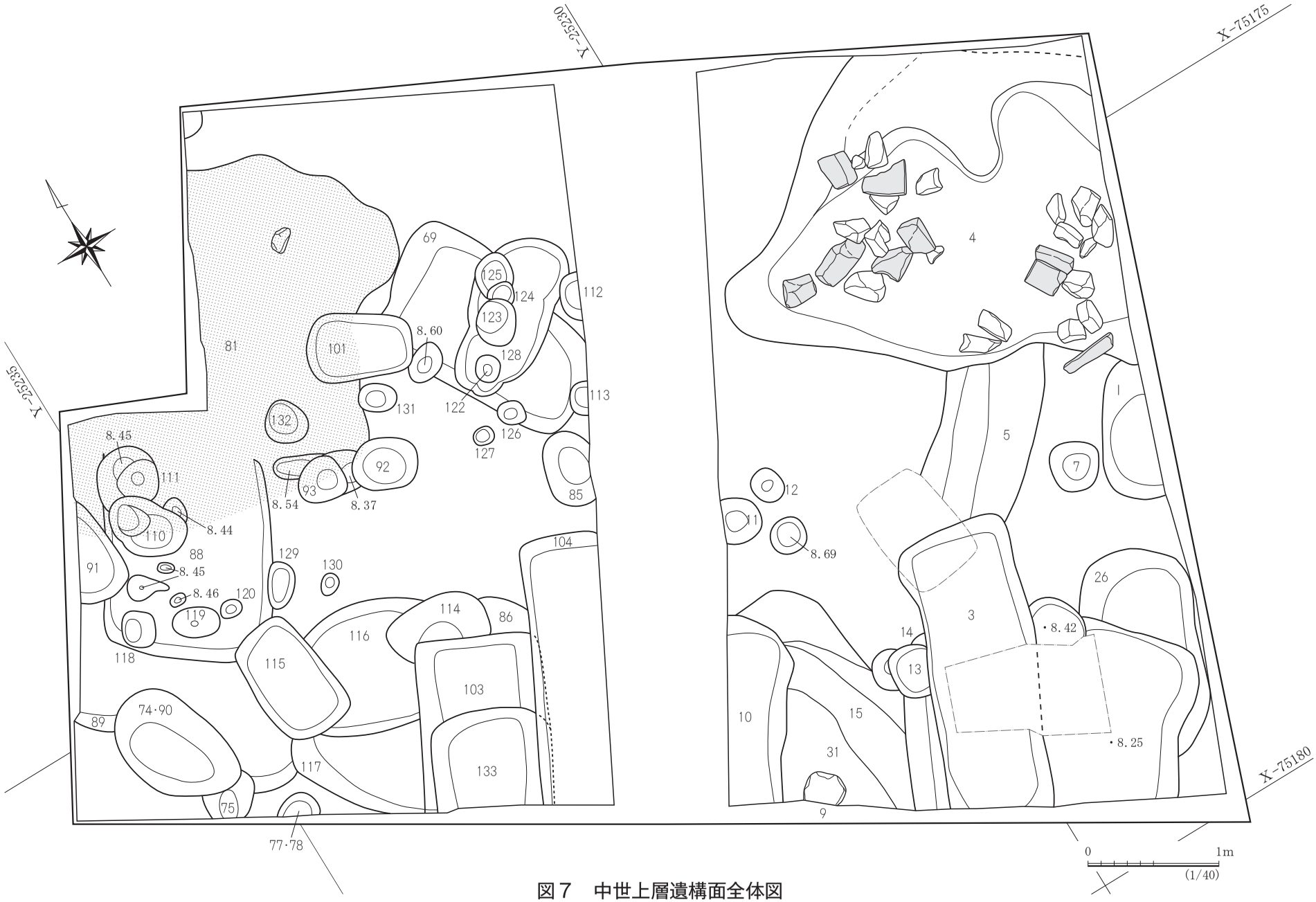


図７　中世上層遺構面全体図

中世上層遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）	遺構 No.	底面標高（m）
1	8.56	12	8.57	85	8.50	103	8.14	116	8.32	125	8.54
3	8.22	13	8.29	86	—	104	8.31	117	8.43	126	8.55
4	8.35	14	—	88	8.47	110	8.24	118	8.22	127	8.58
5	8.46	15·31	8.18	89	8.55	111	8.17	119	8.48	129	8.45
7	8.47	69	8.59	91	8.49	112	8.46	120	8.48	130	8.43
9	8.52	74·90	8.68	92	8.41	113	8.55	122	8.27	131	8.54
10	8.12	75	8.66	93	8.25	114	8.37	123	8.44	132	8.48
11	8.62	77·78	8.65	101	8.61	115	8.34	124	8.47	133	8.01

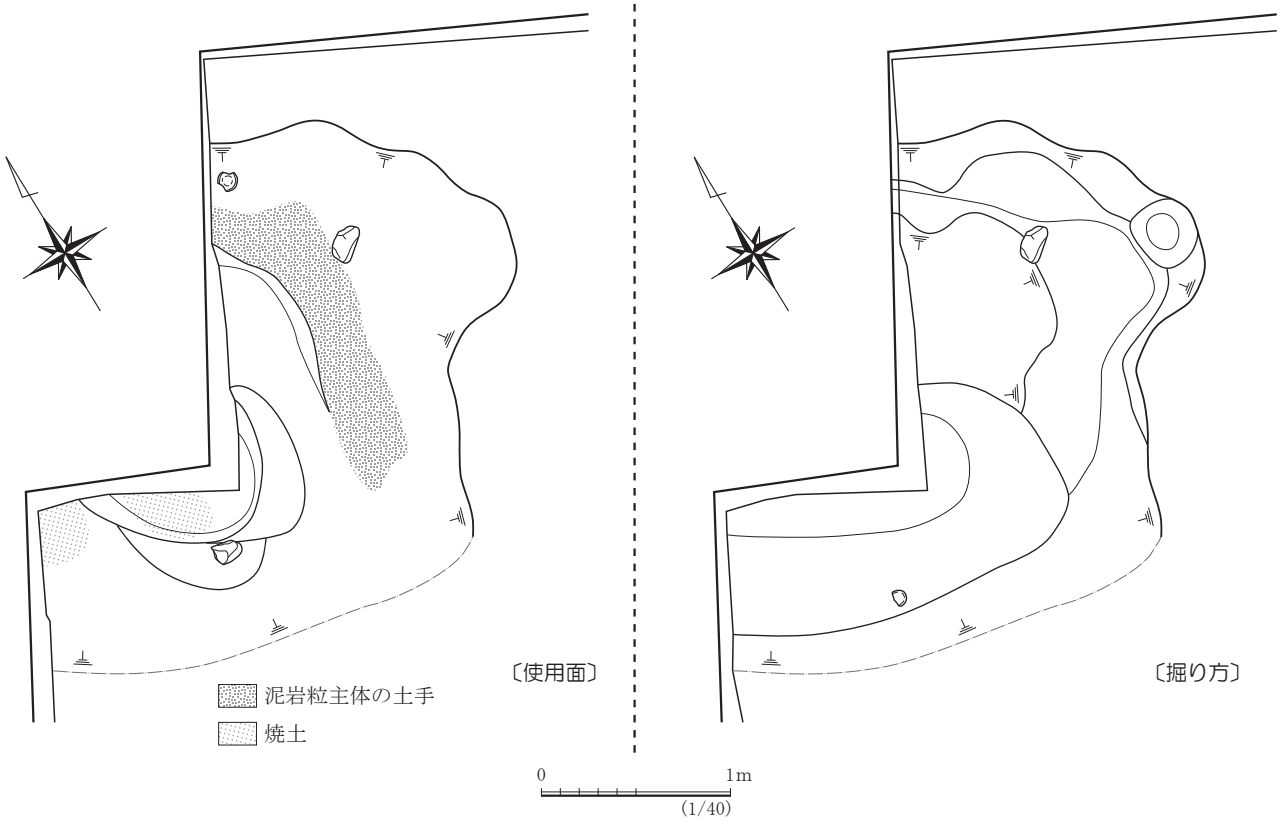


図8　中世上層遺構 81（カマド状遺構）

遺構 81（カマド状遺構）

Ⅱ区の西壁際で検出された。西は調査区外に続き、南は土坑に切られるため全体の規模と形状は不明だが、東西 1.6 m、南北 2.2 mの平面プランを確認できた。遺構自体は浅い窪みで、標高 8.8 m前後の確認面レベルでは外縁に炭混じりの細砂面が、周縁に沿った内側には泥岩粒を充填した 35 ～ 40cm 幅の帯状整地土が確認された。細砂と泥岩整地土を除去すると灰色粘土を貼った床面が検出された。粘土床は外縁側が高く内側（南西側）に向けてなだらかに下がる。ちょうど調査区がＬ字状に屈曲する部分の真下付近が最も低くなり、標高は 8.55 m前後であった。この上位には焼土混じりの薄層や小泥岩塊が被っていた。粘土床の下位には泥岩ブロックを多用した整地面があり、やはり南西に向けてなだらかに落ち込んでいた。最も低い箇所は標高 8.5 m弱で、ここにも焼土の薄層が覆っていた。さらに下位にも泥岩粒を主体とした整地面があり、その下部には炭粒を混じえた粘質土層の堆積が見られた。これらを全て除去した掘り方の底面はⅢｃ層に達しており、標高は 8.4 m弱であった。南北軸の断面図（図 5 の D-D′ 右半部）からは落ち込みの北端部が土手状に盛り上がっている様子が分かるが、これが確認面で見られた泥岩粒主体の帯状整地土と連続する。整理すると、掘り方外周より一回り小さい土手を築き、その内側に緩く傾斜した粘土床を貼る構造であった。緩斜面の裾に焼土の薄層が被り、ここから粘土床にかけての上位には炭層が堆積していた。土手の南西側は開いていた可能性が高

く、検出範囲の規模や形態をもとに推算すると、東西幅 2 m × 南北長 1.5 m程度の馬蹄形に復元できる。同様に、外周部も含めた掘り方の東西幅は 3.2 m前後に復元でき、その中心軸は N20° E 前後であったと見られる。土手の下底部から外周側にかけても炭層の広がりが確認されているので、同形態の土手を崩してから再構築された可能性がある。

以上の状況から、火処としての用途を考えて大過ないであろうが、天井部の痕跡を把握しておらず、

元来、天井が架構されていなかったのか、後世の削平によって失われてしまったのかは定かにできない。ただ、粘土床上の炭層が純層に近い状況を見ると、天井を有して外部からの混入要因が少ない閉塞空間が保たれていた可能性は高いように思う。本報では、天井の存在を想定して「カマド状」と呼称した。

本遺構に伴って出土した遺物は殆どがかわらけで、ロクロ：手づくねの重量比は、大皿で 9：1 に、

小皿で 8：2 となる（表 1 ②）。図 12-14 ～ 24 に図示した。ロクロかわらけの小皿には、底径が小さく身深となるもの（17 ～ 19）が含まれる。20 はロクロかわらけの中皿で、破片資料では大皿との見分けが難しい。

第 2 節　中世下層の遺構と遺物（図 9・10）

標高 8.6 ～ 8.8 mで確認した。掘り込み層序の違いや切り合い関係から、少なくとも 2･3 時期の遺構

変遷が考えられる。先述のように、Ⅲ層上面で検出された東西溝（遺構 34）も中世下層に含めた。

上層～下層遺構面の出土遺物

図 13-77 ～ 84 にはⅠ区出土分を、の図 13-85 ～図 14-94 にはⅡ区で出土した資料を掲げた。かわらけ全体におけるロクロと手づくねの重量比は、大皿・小皿ともロクロが 84％を占めていた（表 1 ①）。

遺構 8・25（東西溝①）

Ⅰ区～Ⅱ区を横断する。上幅 80 ～ 90cm､底幅 20 ～ 30cm で､逆台形ないしU字形の断面形を呈する。掘り込み面からの深さは 30 ～ 40cm で､底面標高は 8.15 ～ 8.25 mを測り西に向けてなだらかに下がる。埋土は灰褐色砂質土がベースで、埋没後の上面を黒色粘質土が覆っている箇所も見られた。走行中心軸は、N62° W を指す。図 14-114 ～ 133 に本遺構の出土遺物を示した。かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は、大皿で 8：2、小皿で 7：3 という結果であった（表 1 ④）。

遺構 34（東西溝②）

下層遺構面で最も古い遺構である。調査区の北辺で検出され、Ⅰ区の東壁外およびⅡ区の北壁外へと続く。上層遺構の削平を受けているが、掘り込み面レベルでの上幅は 80cm 前後に復元できる。底幅は 30cm を測り、断面逆台形を呈する。深さは 30cm ほどで、底面標高は 8.35 mを測るも確実な流下方向は把握できなかった。走行中心軸は、N55° W を指す。埋土はⅢ b 層土を基調として砂粒を均質に含むが、泥岩粒が殆ど混入しておらず、この点で他の下層遺構群とは明瞭に区別できる。出土遺物はごく少量で、かわらけにロクロ成形品は含まれず、手づくねのみであった（表 1 ④）。全て小片で、図示できる資料はなかった。

東西柱穴列

Ⅰ区からⅡ区を横断する柱穴列で、調査範囲のなかでは 7 基の並びを確認した。芯々間の距離は 105cm（約 3 尺半）で、柱間の中心軸は N62° W を指す。確認レベルからの深さは軒並み 80cm を測るが、本来の掘り込み面はさらに 20cm ほど高いレベルにあったことが土層断面の検討から推測できる。柱穴 182 は中央ベルトをⅡ区側から拡張して確認した。完掘はせず、半載状況で写真を残した（図版

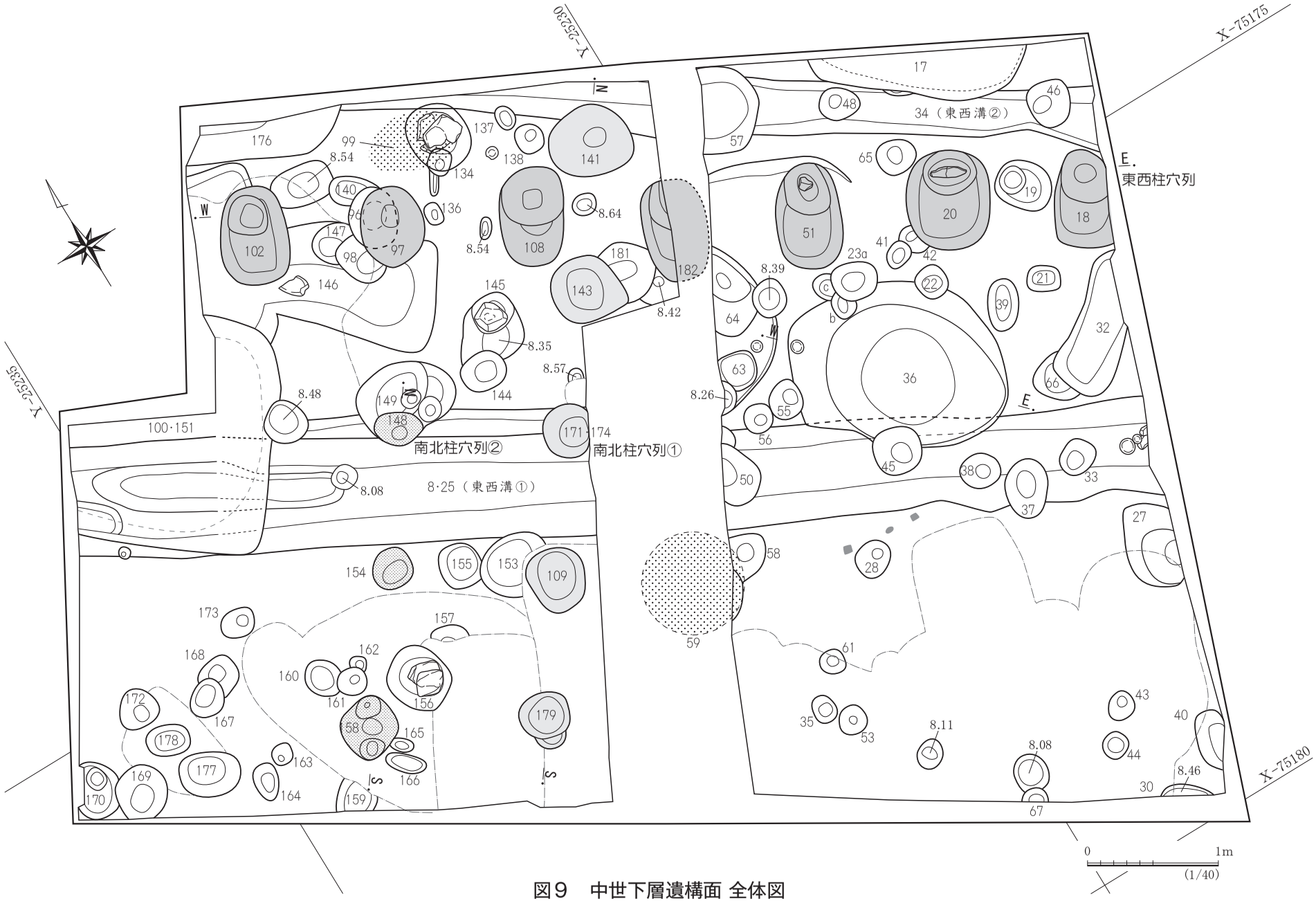


図９　中世下層遺構面 全体図

中世下層遺構の底面標高

遺構 No.	底面標高（m）
19	8.09
21	8.30
22	8.34
23a	8.32
23b	8.35
23c	8.39

遺構 No.	底面標高（m）
27	7.77
28	8.20
35	8.25
37	8.00
38	7.93
39	8.35

遺構 No.	底面標高（m）
41	8.42
42	8.33
43	8.03
44	8.06
45	8.04
46	8.07

遺構 No.	底面標高（m）
48	8.12
50	8.03
53	8.20
55	8.11
56	8.25
57	8.10

遺構 No.	底面標高（m）
58	8.22
61	8.03
63	8.34
64	8.05
65	7.98
67	8.02

遺構 No.	底面標高（m）
96	8.53
98	8.30
113	8.55
122	8.27
136	8.54
137	8.61

遺構 No.	底面標高（m）
138	8.59
140	8.63
144	8.22
145	8.28
146	8.49
147	8.51

遺構 No.	底面標高（m）
149	8.56
153	8.45
155	8.48
156	7.94
157	8.26
159	8.42

遺構 No.	底面標高（m）
160	8.25
161	7.84
162	8.31
163	8.50
164	8.41
165	8.32

遺構 No.	底面標高（m）
166	8.35
167	8.46
168	8.13
169	8.17
170	8.31
171·174	8.01

遺構 No.	底面標高（m）
172	8.29
173	8.14
177	8.22
178	8.21
181	8.42

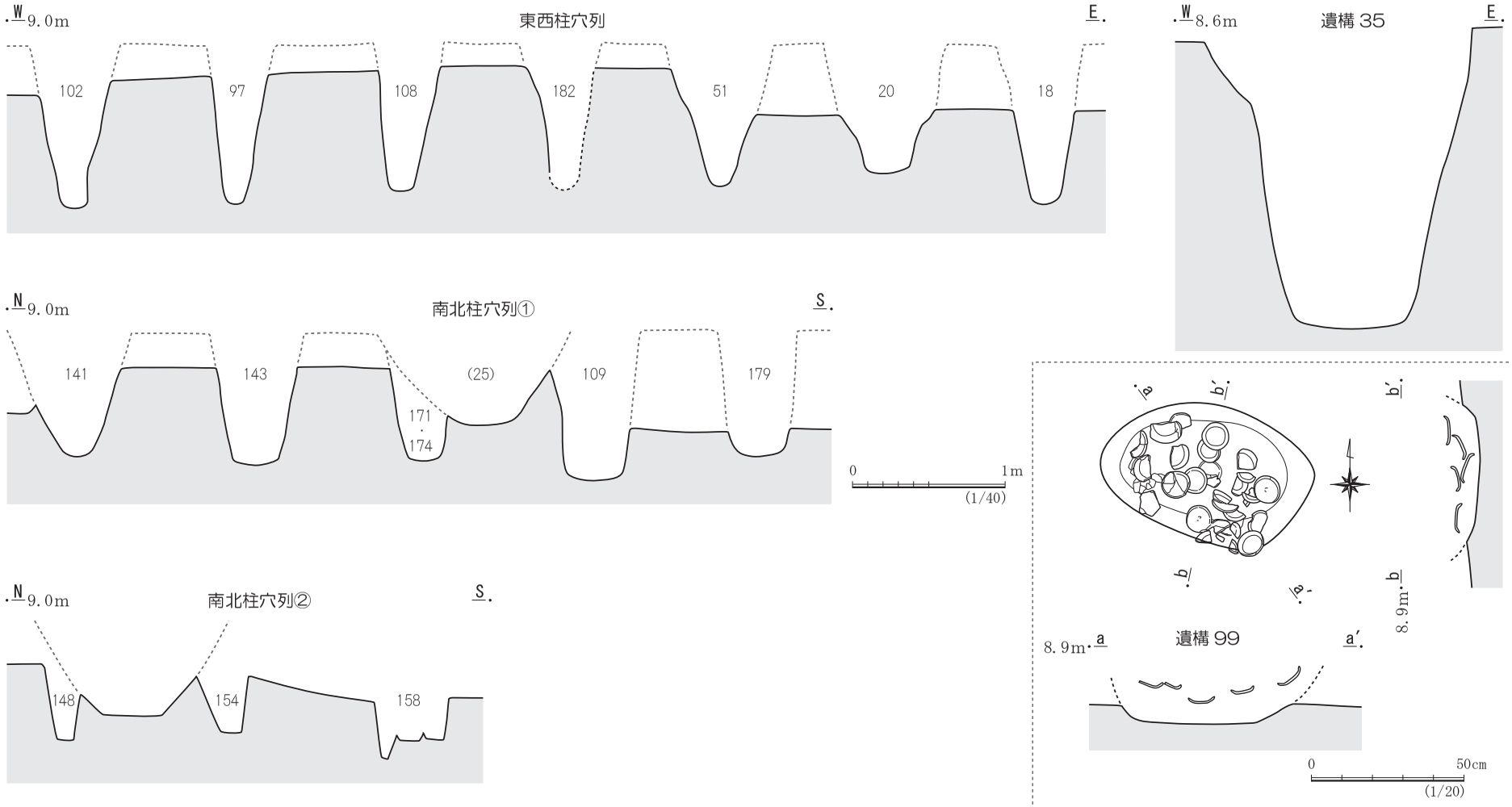


図 10　中世下層遺構面 検出遺構 個別図

5-8)。掘り方の北側に直径 15cm ほどの柱抜き取り穴があり、抜き取り時に裏込め土上位～南側に続く整地層を掘り崩した形跡が見て取れた。整地層は版築ではないものの泥岩粒を緻密に充填して構築されており（写真右手)、こうした状況から柱列と東西溝①の間には基底部幅 1.5 m程度の土手または通路が通っていた可能性がある。ただ、上層遺構の影響もあって平面的な確認には及ばなかった。

東西溝①と同じ方向軸で延び、柱芯と溝の中心間距離は 2.1 m前後（約 7 尺）を測る。不分明ながら上述した泥岩整地層の痕跡も踏まえ、一時的にでも両者が「板塀＋渠」というセットになって区画施設としての役割を担っていた可能性が指摘できる。

図 14-95 ～ 110 には柱穴 102・182 から出土した遺物を示した。95・102・104 は柱穴 102 から、それ以外は全て柱穴 182 からの出土である。かわらけ（95 ～ 107）は、全て小片から器形復元したものである。表 1 ②～④を参照すると（柱穴 18・102・108 は上層遺構の表 1 ②・③に入れているが、下層に訂正)、かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比（概算）は、柱穴 108 で大・小ともにロクロかわらけが多く［大 6：4、小 7：3］、柱穴 51 では［大 6：4、小 2：8］、柱穴 102 では［大 4：6、小 3：7］、柱穴 182 で［大 3：7，小 2：8］、柱穴 18 で［大 2：8、小 9：1］、柱穴 20 では全点が手づくねとなっている。柱穴 97 からの出土遺物は皆無であった。柱穴ごとにばらつきがあるが、その理由は明確でない。重複する遺構からの影響や、部分的な柱の付け替えといった要因が考えられるが証跡はなく、単純に入り方の差として理解することも可能だろう。東西溝①よりロクロの比率が低い点は、遺構埋没までの時間差を考慮すれば、先述した両遺構の同時期性を否定する材料とはならない。

南北柱穴列①

Ⅱ区の東辺に沿って 5 基の並びが確認された。柱の芯々間距離は 110cm で、中心軸は N36° E を指す。中央ベルトの土層断面からは、柱穴 171（174）が東西溝①に切られ、柱穴 141 が東西溝②を切っていることが分かる。よって、東西溝①との同時期性を想定できる東西柱穴列より古い可能性があり、中世で最古段階に位置付けられる東西溝②と概ね直交方向に並ぶ点からも、Ⅰ：東西溝②→Ⅱ：南北柱穴列①→Ⅲ：東西柱穴列・東西溝①という変遷を考えることができる。各遺構上部の堆積土層が後世の削平のため安定していないが、以上の変遷過程を考えた。

確認レベルから 60cm 前後の深さを測るが、本来の掘り込み面は 20cm ほど高いレベル（標高 8.8 m）にあった（図 6 の G-G′ における柱穴 141 の掘り込み面レベルから)。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土で、柱穴 143 には直径 12cm ほどの柱の抜き取り穴が見て取れた（図 6 の G-G′、図版 6-6)。上部の層序の乱れは、抜き取りに際して掘り返した形跡だろうか。

出土遺物で図示できたのは、柱穴 141 から出土した手づくねかわらけの小皿 1 点である（図 14-111)。表 1 ④から出土かわらけ全体でのロクロ:手づくねの重量比を見ると、柱穴 141 で［大・小とも 1：9］、柱穴 171 では［大 2：8、小 0：10］となり、柱穴 143 では大・小とも全て手づくねであった。柱穴 109 と 179 は出土遺物が皆無であった。いずれの柱穴も出土遺物が少ないので、参考程度に留めたい。

南北柱穴列②

南北柱穴列①から西に 1.3 m離れた位置で検出された。3 基の柱穴が芯々間 110cm、N36° E の方向軸で並ぶ。柱穴 148 が北端で、南側は調査区外に続く可能性がある。柱穴 148 は、東西溝①に切られる。確認レベルからは 50cm ほどの深さを有する。

各柱穴から出土した遺物は僅少で、図示できる資料はなかった。出土かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は、柱穴 154 で［大 10：0、小なし］、柱穴 158 では［大なし、小 0：10］であった。柱穴 148 では出土遺物が皆無であり、いずれもごく少量の資料から割り出した数値なので、傾向を示

すデータとはいえない。

遺構 36（井戸）

Ⅰ区中央部で検出された。東西溝①に切られる他、重複する全ての小穴より古い。東西に長軸を持つ長径 1.7 m×短径 1.2 mの楕円形プランとして確認でき、他遺構に切られた部分を復元すると直径 1.6 ～ 1.7 mの円形を呈していたと推測できる。坑底は直径 70cm、断面はやや開き気味の円筒形で、西と北側の上部には緩く傾斜するテラスが見られた。確認レベルからの深さは 1.9 m、底面標高は 6.57 m を測る。黒褐色粘質土が埋土で、草履芯など若干量の木製品も遺存していた。木枠を持たないが、単に土坑と呼ぶには深いので井戸とした。

表１④に見るように、本遺構からの出土遺物は僅少であった。図 14-112・113 に手づくねかわらけの小皿と青磁櫛描（掻）文碗を掲げた。

遺構 151（井戸）

Ⅱ区西壁際に位置する。調査区外に続くため、安全面を配慮して埋土を完掘することはできなかった。南半部を東西溝①に切られる。遺構の軸線は同溝と殆ど変わらない。把握できた南北規模は 1.8 mで、一辺が同規模となる方形の掘り方であったと考えられる。確認レベルから１mまで掘り下げたが井戸枠は確認できず、埋土中から廃材と思しき板片が出土したのみであった。埋土は、掘削できた深さまでは炭混じりの単一層として確認され、人為的に埋め戻された様子であった。東西溝①の開削など土地区画の再整備に先立って既存施設の撤去・廃絶が進められた結果かとも考えられる。

本遺構も出土遺物が僅少で、かわらけは手づくねの重量比が大皿で 96％、小皿では 100％を占める。図 14-114 ～ 116 に実測図を示した。116 は舶載陶器の褐釉壺。釉薬は内外面に施され、緑がかった発色を呈する。

遺構 17（井戸）

Ⅰ区の北壁際で検出された。上層の落ち込み（遺構 4）と攪乱の直下にあるため現地では上層遺構群とともに確認されたが、土層断面や出土遺物を検討した結果、下層遺構に含め得ると考えた。安全面を配慮して確認レベルから 60cm の深さまでしか掘削できず、井戸枠は検出されなかった。埋土は炭粒を多く含む灰褐色土の単一層で、少なくとも上部は人為的に埋め戻されたようである。

上層遺構分の挿図に掲載してしまったが、図 12-13 に本遺構出土の手づくねかわらけ小皿を示した。灯明皿としての使用痕が認められる。ごく一部の掘削に留まったこともあり、出土遺物はかわらけのみが少量出土したに過ぎない。ロクロ：手づくねの重量比は、大１：9、小 4：6 という結果であった。

遺構 176（井戸）

Ⅱ区の北東隅に位置し、ごく部分的な検出に留まった。東西溝②を切っており、埋没後は東西柱穴列などの掘り込み面となる整地層に覆われていた。平面的には、東西 120cm、南北 30cm までを計測した。確認レベルからは深さ 100cm までを掘削し、やや外開きの断面形態となることは確認できた。埋土には泥岩粒が含まれず、客土を伴う土地利用が行われる以前に埋没していた可能性が高い。

本遺構も部分的な掘削に留まったため、出土遺物はごく少量でに留まった。表１④で示したように、

かわらけ全体におけるロクロ：手づくねの重量比は大皿で１：9 となり、小皿は全て手づくねが占めていた。また、細片ながら白磁の端反碗が出土するなど、鎌倉時代でも初期に近い様相が認められた。

遺構 58・59（かわらけ集積土坑）

Ⅰ区の西壁際で検出され、大部分は中央ベルトの下部に位置していた。Ⅰ区の調査が完了する直前にベルト断面から遺物を抜き始めたところ、完存品を含むかわらけが次々と出土したため、横追いす

る形で遺物の取り上げを行った。よって明確な平面規模と形態は確認できなかったが、Ⅱ区へは続いていないことから、大よそ図 9 に示した程度の範囲に収まるものと推定している。埋土の下層には炭が多く混入していたが、かわらけを洗浄した時に炭化穀物が多く含まれていることが判明した。穀物の種類は同定できていない。遺構 59 が集積土坑本体で、遺構 58 はピットである。多少の遺物混在が考えられるため、ここでは両番号を示した。

本遺構の出土遺物は全てかわらけが占めており、採集漏れもあるが 12615g を取り上げた（表 1 ④）。ロクロかわらけが圧倒的に多く、手づくねも含めたかわらけ全体での重量比は大皿で 96％強、小皿で 88％を占めていた。中皿の存在も窺えるものの破片資料では大皿との違いが不明確であるため、大皿に含めてカウントした。

主なものを図 15-135 ～ 166 に示した。小皿が大皿よりも多いのは破損率が低いためで、各器種とも完形品の平均重量（ａ）を求めた後、その数値で破片を含む総重量を割って算出した個体数（ｂ）は、以下のとおりとなる。ロクロ大［ａ 217.5g、ｂ約 38 個］、ロクロ小［ａ 64.2g、ｂ約 54 個］、手づくね大［完形品なし］、手づくね小［ａ 62.7g、約 7 個］。手づくね大は破片資料のみで 320g が出土しているので、1 個体強に推算できよう。実測図を見ると、大・小ともにロクロと手づくねの器形・法量が相似している印象を受ける。

遺構 99（かわらけ集積）

Ⅱ区の北辺部で検出され、東西溝②が埋没した後の整地層を掘り込んだ小土坑で、そのなかに完形の手づくね小皿を中心とするかわらけが一括廃棄されていた。東西に長軸を持つ楕円形の平面プランを呈し、長径 70cm、短径 50cm、確認面からの深さは 25cm を測り、掘り方底面の標高は 8.64 ｍであった。遺構 134（ピット）の上に重複する。

本遺構の出土遺物は全てかわらけであった。ロクロ：手づくねの重量比は、大 1：9、小 2：8 となる。

完形品として重量を計測できたのは手づくね小皿のみで、5 個体から割り出した平均重量は 75g となる。この数値を分子とした場合約 13 個体が出土したことになるが、重量の分布域が 65g 前後と 80g 台とに別れるため、参考として示すに留めたい。大皿については、ロクロと手づくねを合算しても 1 個体分に届く程度である。一括廃棄の事例としては非常に小規模で、かつ偏りのある器種構成といえるだろう。図 15-167 ～ 179 に実測図を掲げた。手づくねかわらけは、大・小とも口縁端部に面取り状のナデ整形を施した資料が見られず、尖り気味、もしくは丸味をもって仕上げられていた。

その他の遺構などから出土した遺物については、図 15 ならびに表 2 の遺物観察表を参照されたい。図 15-188 の手づくねかわらけ小皿は、底部 - 体部境に回転方向のナデを施した後、底部内面に櫛歯状工具によるナデ仕上げを施している。古手のかわらけに間々見られる技法である。

第 3 節　中世層基盤層下の確認調査（図 11）

Ⅰ・Ⅱ区ともに中世下層遺構面の調査を終えた後、Ⅲｂ層以下の掘り下げを行って古代以前の遺構・遺物について確認を試みた。第三章でも述べたようにⅢｂ層には若干量の中世遺物を包含しているため、厳密な意味での中世基盤層（中世地山）という呼び方は当たらない。Ⅲｃ層以下がそれに相当しよう。Ⅲｂ～Ⅲｃ層で出土した古代遺物は須恵器坏の小片 1 点のみであったため、Ⅲｃ層以下は無遺物に近い状況であったことが考えられる。標高 8.2 ～ 8.3 ｍ前後で灰黒色シルト質土（Ⅲｄ層）を確認し、この上面を精査したものの遺物が包含されている様子はなく、無遺物層と判断された。この面で確認できたのはⅠ区を南北に貫く噴砂痕のみで、断面観察により中世遺構の直下まで吹き上がることを確認した。他、中世ピットの掘り残し部分を確認・完掘して調査を終えた。

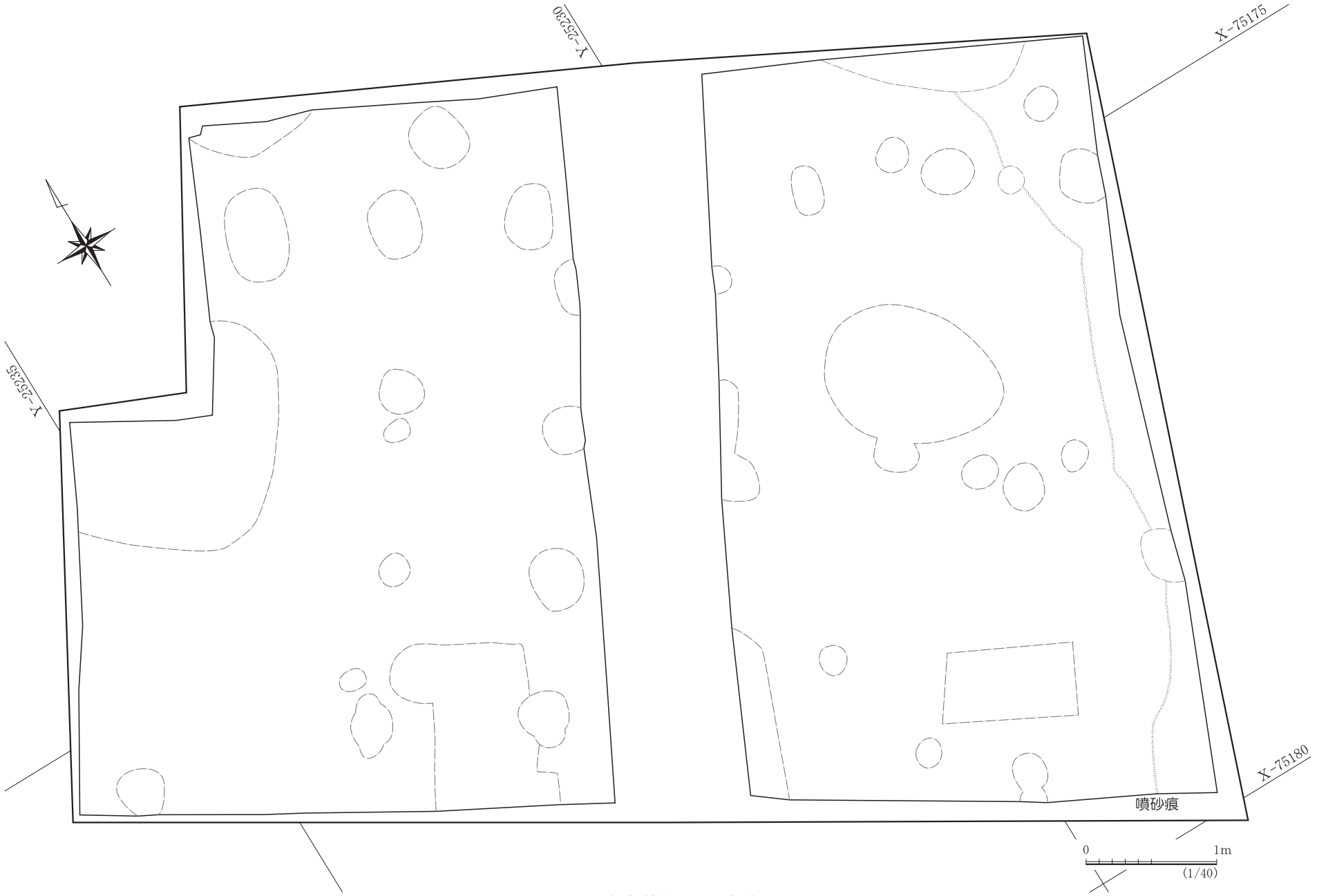


図 11　中世基盤層下 全体図

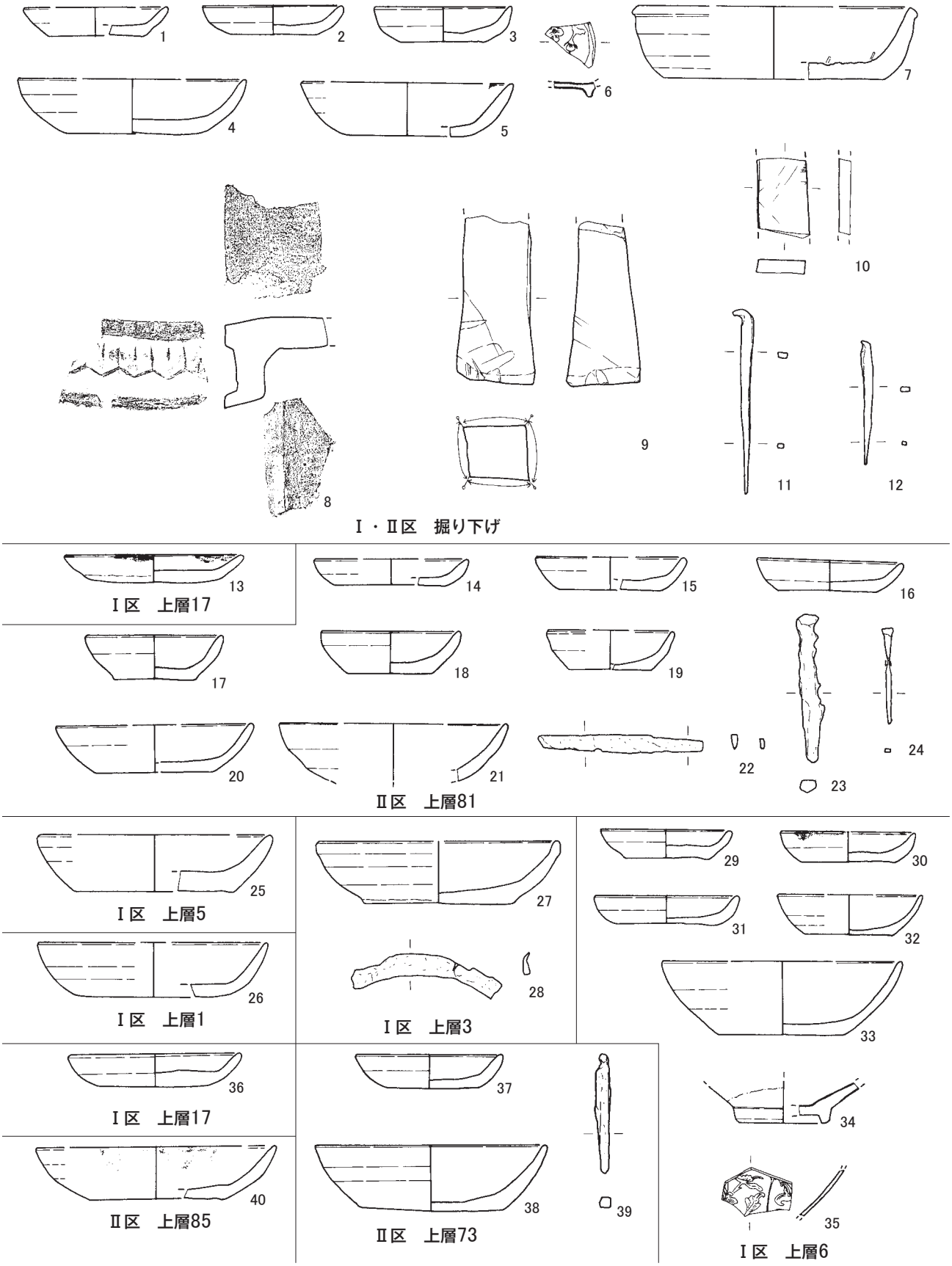

Ⅰ・Ⅱ区　掘り下げ
Ⅰ区　上層17
Ⅱ区　上層81
Ⅰ区　上層5
Ⅰ区　上層1
Ⅰ区　上層3
Ⅰ区　上層17
Ⅱ区　上層85
Ⅱ区　上層73
Ⅰ区　上層6
0　(1/3)　10cm

図 12　出土遺物（1）

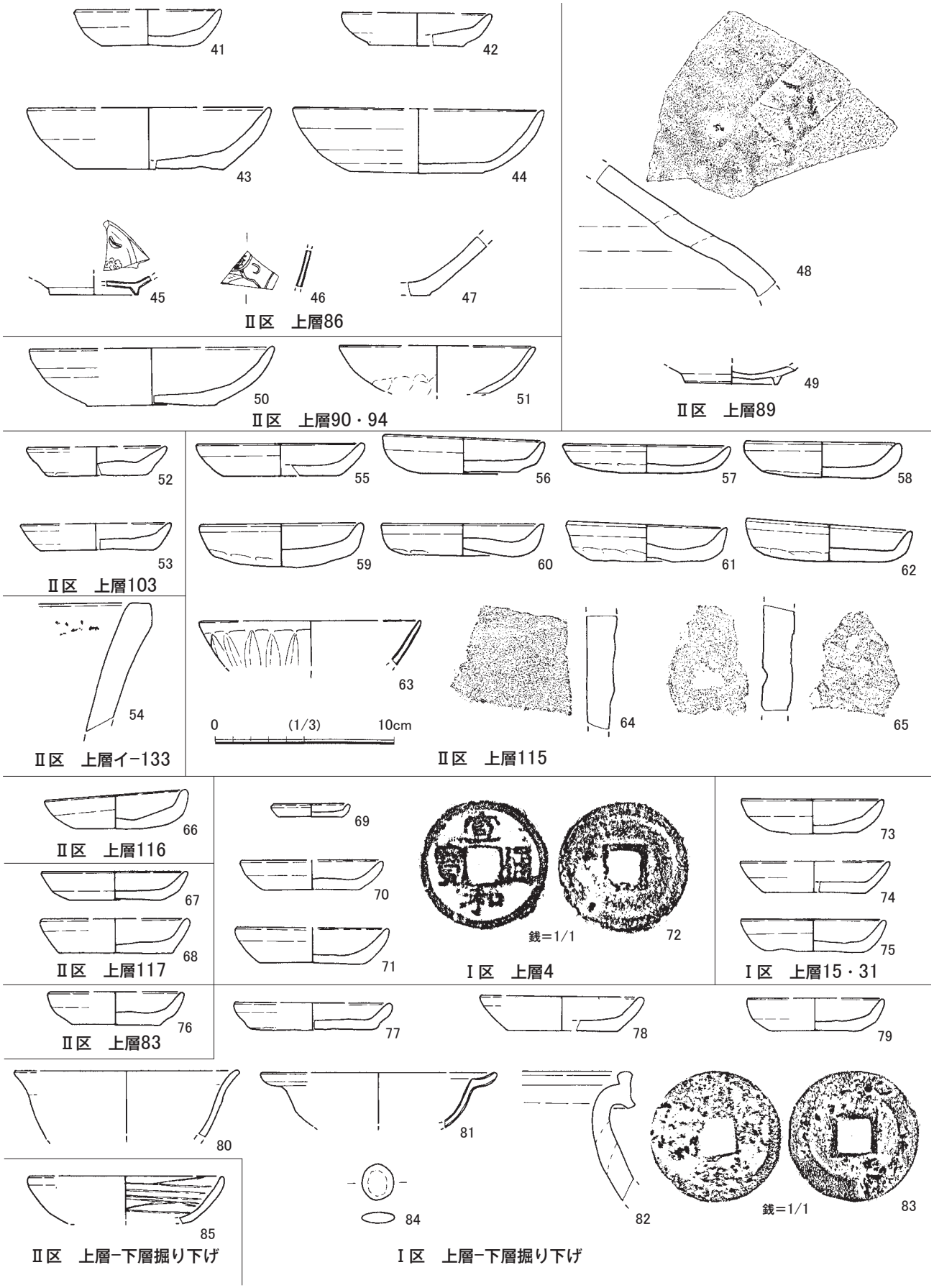

41
42
43
44
45
46
47
Ⅱ区　上層86
48
49
Ⅱ区　上層89
50
51
Ⅱ区　上層90・94
52
53
Ⅱ区　上層103
55
56
57
58
59
60
61
62
54
Ⅱ区　上層イ−133
63
0　(1/3)　10cm
64
65
Ⅱ区　上層115
66
Ⅱ区　上層116
67
68
Ⅱ区　上層117
69
70
71
銭＝1/1
72
Ⅰ区　上層4
73
74
75
Ⅰ区　上層15・31
76
Ⅱ区　上層83
77
78
79
80
81
82
銭＝1/1
83
84
85
Ⅱ区　上層−下層掘り下げ
Ⅰ区　上層−下層掘り下げ

図 13　出土遺物（2）

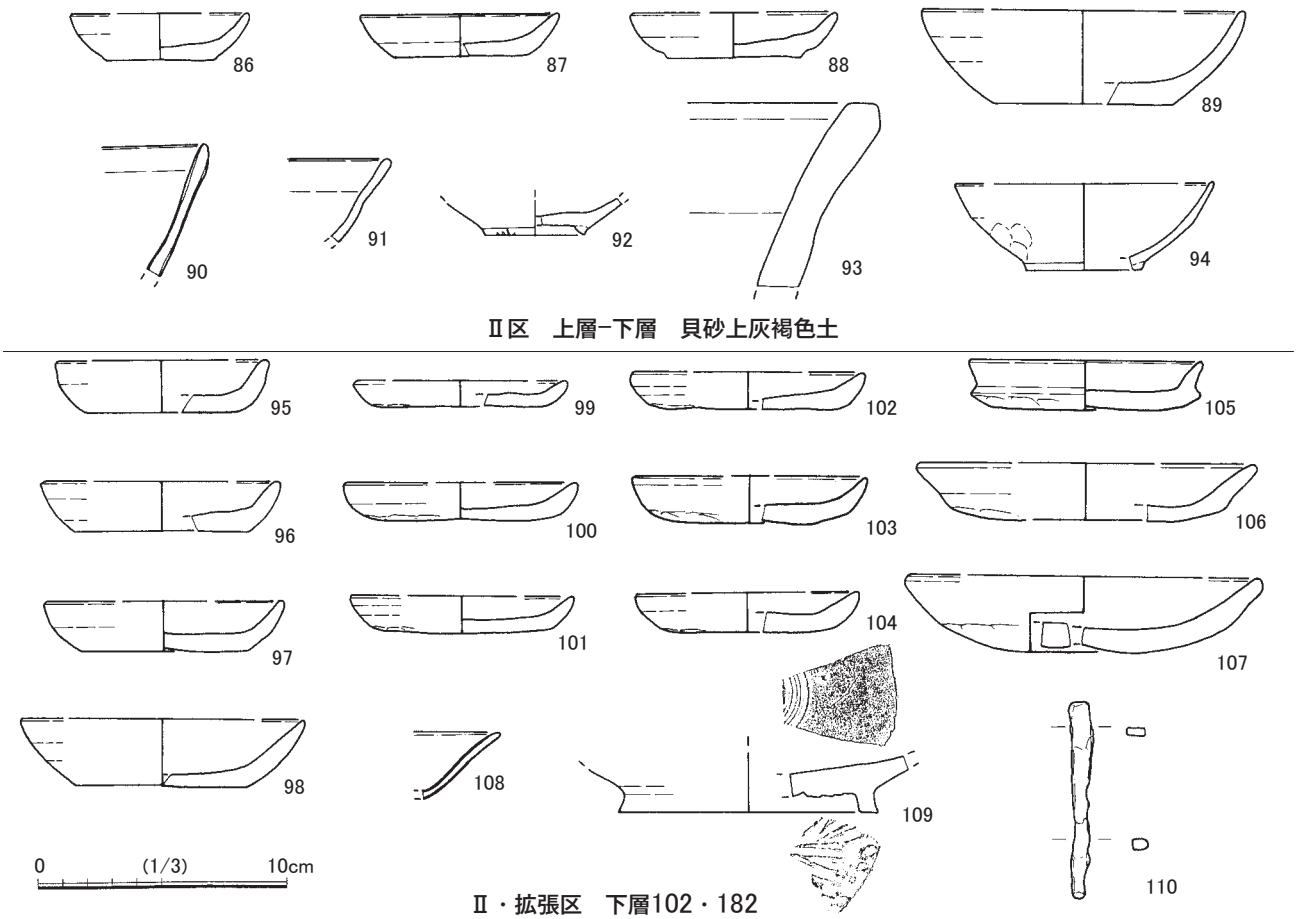

86
87
88
89
90
91
92
93
94
Ⅱ区　上層−下層　貝砂上灰褐色土
95
99
102
105
96
100
103
106
97
101
104
107
98
108
109
110
0
(1/3)
10cm
Ⅱ・拡張区　下層102・182
111
拡張区　下層141
112
Ⅰ区　下層36
113
114
115
116
Ⅱ区　下層100・151
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
Ⅰ・Ⅱ区　下層8・25

図 14　出土遺物（3）

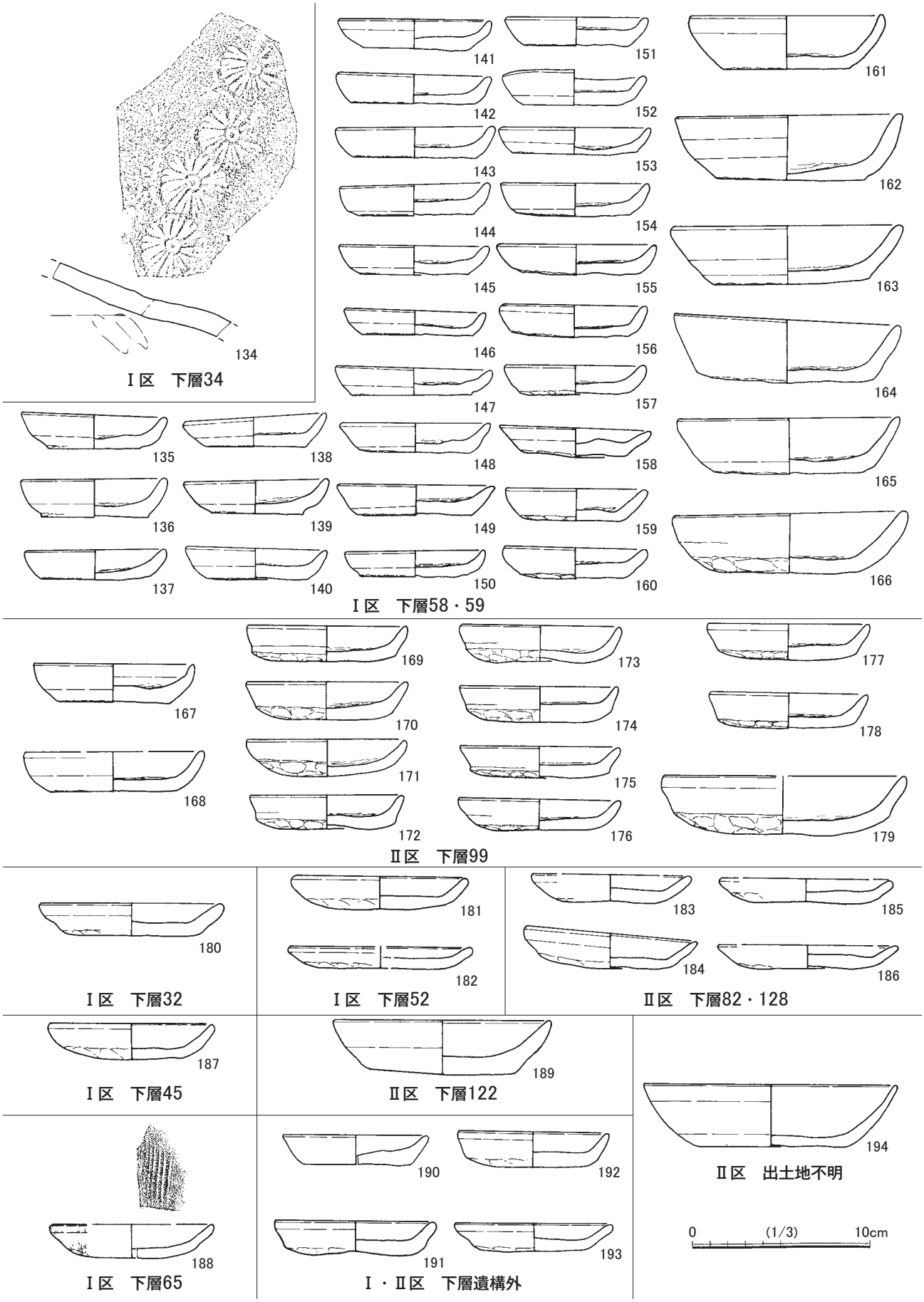
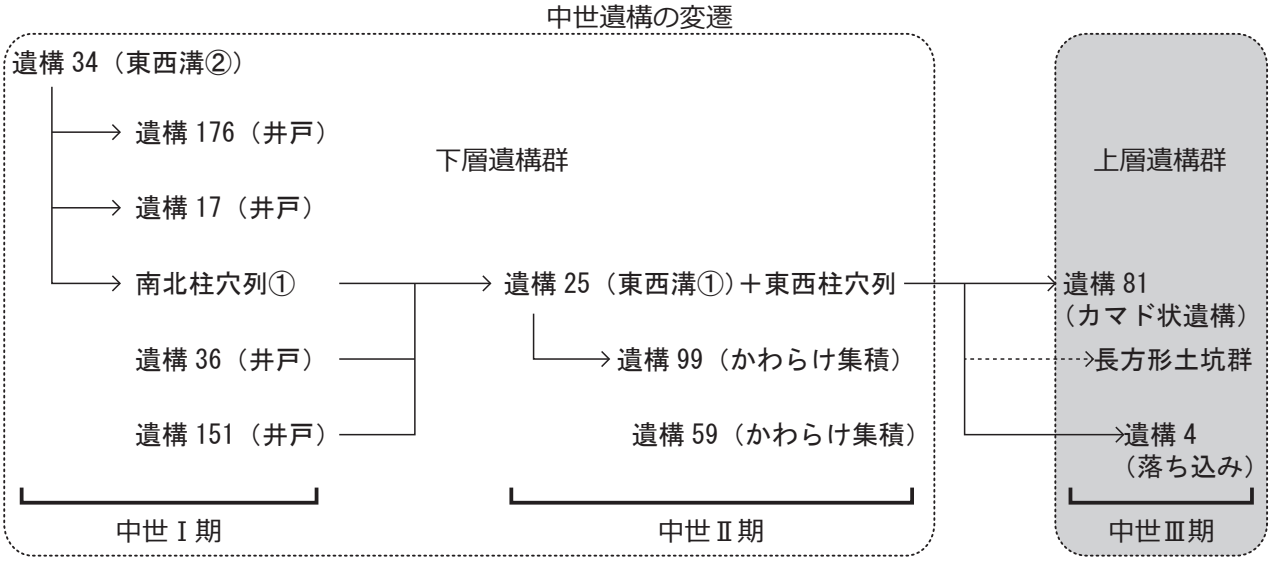

134
Ⅰ区　下層34
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
Ⅰ区　下層58・59
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
Ⅱ区　下層99
180
Ⅰ区　下層32
181
182
Ⅰ区　下層52
183
184
185
186
Ⅱ区　下層82・128
187
Ⅰ区　下層45
189
Ⅱ区　下層122
188
Ⅰ区　下層65
190
191
192
193
Ⅰ・Ⅱ区　下層遺構外
194
Ⅱ区　出土地不明
0　(1/3)　10cm

図 15　出土遺物（4）

第五章　調査成果のまとめ

本地点の調査では、北条氏邸比定地の一画において、土地利用の跡を窺うことができた。以下、出土遺物の様相を基に中世の遺構変遷について整理し、本報告のまとめとしたい。

層序および遺構間の重複関係を基に遺構変遷を示すと、以下のとおりとなる。



遺構 34（東西溝②）は、遺構の重複関係では最も古い。手づくねかわらけが出土しているので中世の遺構と判断できるが、埋土には夾雑物が殆ど含まれず、土地利用が活発化する以前に埋没した可能性が高い。これより後発の井戸も概して出土遺物が少なく、主体となるのは手づくねかわらけであった。ここまでを中世Ⅰ期とし、大よそ 13 世紀前葉の年代観が考えられる。この段階では真北から 35° ほど東に傾いたラインが各施設の主軸線を規定し、東西溝②はこれに直交する方向で走っていた（図 16）。軸線に基準を置いて考えれば、南北柱穴列②もこの段階に含めることができよう。

遺構 25（東西溝①）がⅠ期南北柱穴列①・②を切って開削され、遺構の中心ラインは 7 ～ 8° 西振れとなる。同方向で並ぶ東西柱穴列が、同時期に併存していた可能性を持つ。この東西区画施設の整備期を中世Ⅱ期と考えた。この段階の出土かわらけは、東西柱穴列ではロクロと手づくねの重量比が拮抗、もしくは手づくねがやや優勢で、最終埋没時期の違いからか、東西溝①ではロクロ成形品が 7 ～ 8 割を占めるようになる。こうした遺物構成比の変化は、13 世紀中葉までに進んだものと考えられる。Ⅰ期からⅡ期への主軸変更を伴う区画施設の再整備を考察する時、やはり嘉禎二年（1236）の将軍御所移転との関連は視野に入れなければならないだろう。史料考証のとおり本遺跡が北条泰時の邸宅であり将軍御所を内包していたとすれば、御所新造に伴って土地利用にも一大画期を求めることは自然な発想だろう。筆者には可能性としての提示しかできないが、Ⅰ期～Ⅱ期の画期を 13 世紀第 2 四半期中に置くことは、土器編年の研究蓄積を見ても格別に無理な推論ではないと考えている。

上層遺構面では、さらに大きな土地利用の変化が見て取れた。調査区南半部では長方形の土坑が重複して検出され、その幾つかには、かわらけ片や炭粒を多く混じえた土で埋め戻された様子が見られた。また、Ⅱ区の北西部では東西溝①が完全に埋没した後、その上部を覆うように遺構 81（カマド状遺構）が構築される。この段階になると、出土かわらけの 8 割以上がロクロ成形品となり、手づくねかわらけが商品として生産・使用されていた可能性は考えにくくなる。今回の調査では窯産品の出土が少なく、

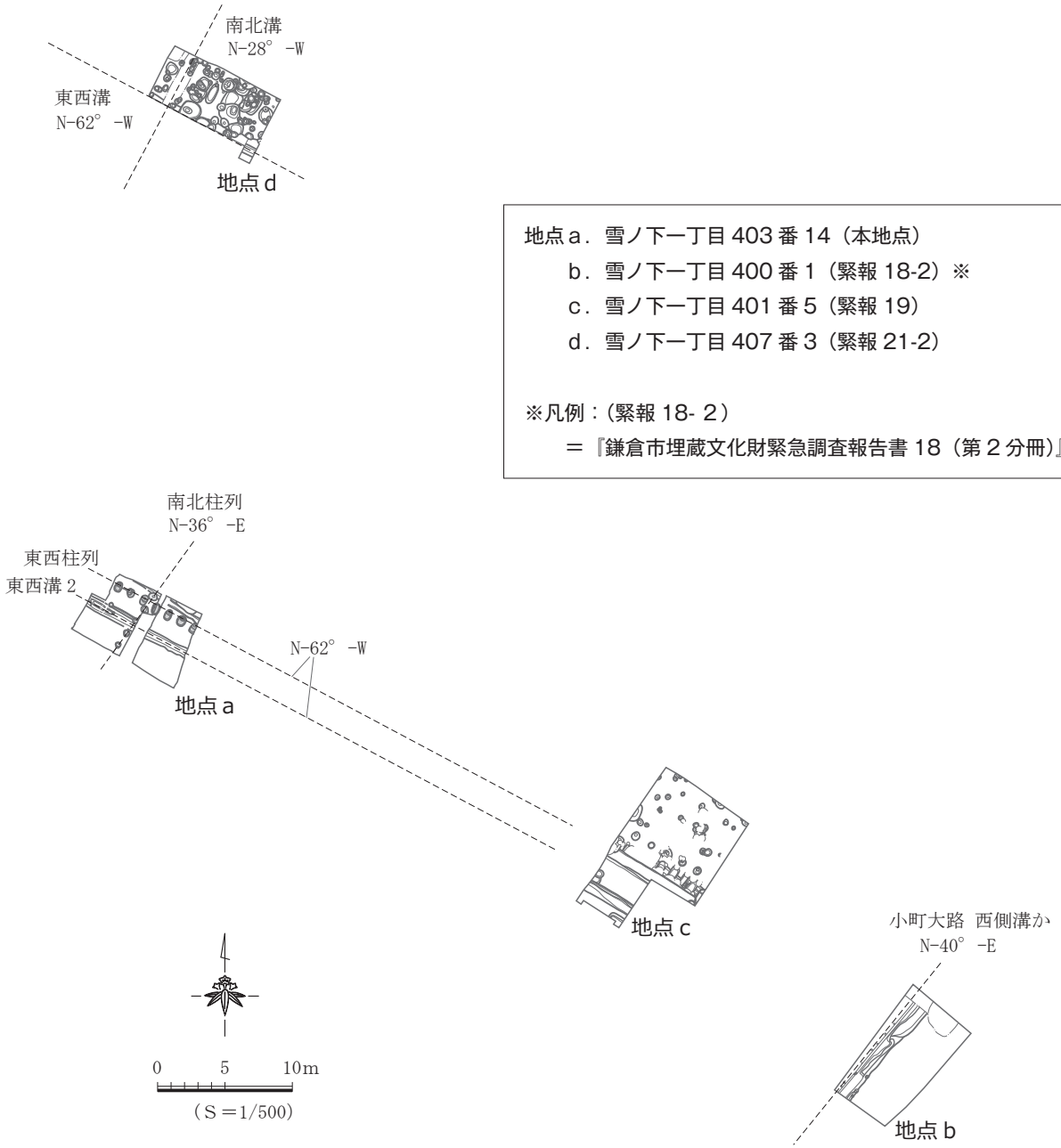


図 16　周辺調査地点合成図

かわらけの年代観を補う資料には恵まれなかったが、上述した手づくねかわらけの消長も加味すれば、13 世紀後葉～ 14 世紀前葉の幅で捉えられよう。大幅な空間利用の変化を重視すれば、北条氏邸および将軍御所の盛衰に関連付けて考察することもできるかもしれない。この段階を、中世Ⅲ期とする。

非常に狭い範囲での調査であったため本地点の情報だけで遺跡の性格を語ることはできないが、周辺の調査成果に目を向けることで幕府政治の中枢域とされる場所ではどのような土地利用がなされ、また如何なる変遷を辿るのかが多少とも見えてくるのではないかと思う。試みに、周辺地点との簡易合成図を掲げた（図 16）。年代的対比も含めた検証は必要であるが、本遺跡地内における土地割の基本ラインは読み取れるのではないかと思う。

最後に、図 11 に示した噴砂痕について触れておきたい。中世遺構の直下まで吹き上がり、Ⅰ期井戸（遺構 17）の埋土を突き抜けていないことを確認している。ここからは、地震の発生年代を 13 世紀前

葉を上限とすることしか示し得ず、また、どの程度の地震に伴う痕跡であるのかも不明である。専門研究者の見解を知りたいところでる。今後、同類の事例を確認した際には必要な分析を行い、鎌倉における災害史の貴重な研究材料として蓄積を図るとともに、過去からの警鐘として広く市民に情報を提供していく姿勢も必要となろう。

参考文献

秋山哲雄　2010 『都市鎌倉の中世史』 吉川弘文館

馬淵和雄・鍛治屋勝二・松原康子　2002「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目 400 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18（第 2 分冊)』 図 16- 地点 b

馬淵和雄・鍛治屋勝二　2003「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目 401 番 5 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19』 図 16- 地点 c

原　廣志・須佐直子　2005「北条小町邸跡（No.282）雪ノ下一丁目 407 番 3 の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21（第 2 分冊)』 図 16- 地点 d

表 1　出土遺物カウント・計量表

表 1①　掘り下げ時の出土遺物

帰属遺構面	かわらけ										白かわらけ				白磁					
	ロクロ				手づくね				小片		ロクロ		手づくね		口禿皿		口禿碗		皿	
	大		小		大		小				大		大							
	点数	*重量*																		
表土	119	*1765*	17	*165*	1	*10*	2	*15*					1	*10*	1	*5*				
上層まで	582	*6670*	93	*765*	1	*15*			52	*180*					2	*15*			1	*5*
上層～下層	611	*6760*	127	*1160*	98	*1305*	35	*380*	76	*250*	1	*5*					1	*15*		
下層下	8	*50*	1	*5*	7	*40*	4	*50*												

帰属遺構面	青磁（龍泉窯系）								舶載陶器		瀬戸						渥美・湖西		
	劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿		壺類		緑釉盤		卸皿		折縁深皿		瓶類		甕		
	点数	*重量*																	
表土															1	*40*	1	*55*	
上層まで			3	*20*			1	*5*			1	*160*	1	*15*					
上層～下層	1	*10*			1	*25*			1	*25*									
下層下																			

帰属遺構面	尾張・常滑						瓦器		瓦質土器		瓦									
	甕		山茶碗		片口鉢 I類		碗		火鉢		軒平瓦						丸瓦			
													永・女C類		不明		永・男D類		不明	
	点数	*重量*																		
表土	8	*605*							1	*200*	1	*60*			1	*120*				
上層まで	15	*910*			1	*50*			3	*100*	1	*165*			10	*875*			4	*265*
上層～下層	15	*620*	1	*5*	1	*65*	1	*10*	1	*10*			1	*35*	1	*260*	1	*20*		
下層下	1	*50*																		

帰属遺構面	銅製品		鉄製品		石製品				肥前系磁器		近世磁器		土師器		須恵器		獣骨			
	銭		釘		碁石		砥石		染付碗		不明		甕		坏		ウシ・ウマ	イルカ	不明	
	点数	*重量*																		
表土			4	*20*			1	*125*												
上層まで			3	*25*			2	*220*	1	*5*	1	*5*							1	
上層～下層	1	*5*	3	*40*	1	*5*							2	*15*			4	1	1	
下層下			1	*5*											1	*5*				

凡例
点数＝破片数
重量単位＝ g

表１②　中世上層遺構（1 ～ 90･94）の出土遺物

帰属遺構面	遺構	かわらけ														白かわらけ		土器	
		ロクロ								手づくね						小片		手づくね		吉備系	
		大		中		小		内折れ極小		大		小		内折れ				大		碗	
		点数	重量																		
上層	1	4	110			2	25									8	25				
上層	2	25	190			8	45			1	5										
上層	3	229	2060			37	235														
上層	3b	15	215			1	5														
上層	4	234	2525			41	320			23	310	5	70	1	10						
上層	5	22	340			2	15			9	175										
上層	8	22	240			1	10			14	175	2	40								
上層	9	4	35			6	30			15	15										
上層	10	319	3985			56	410			2	30										
上層	15	76	750			31	245														
上層	16	32	325			1	5														
下層	17	4	40			1	90			28	420	9	125								
下層	18	1	15			5	35			8	50	1	5								
上層	68	12	180			4	40														
上層	69	18	170			3	15														
上層	70	22	235			5	35														
上層	71	14	200			2	15														
上層	72	18	110			3	15														
上層	73	33	540			11	125			1	20										
上層	74	29	235			6	300														
上層	75	10	75			2	10														
上層	81	88	805	1	40	26	310			6	85	5	65								
上層	82	59	500			10	60														
上層	83a	58	460			20	145														
上層	83b	37	325			5	25														
上層	84	2	30							1	15										
上層	85	7	90			3	25														
上層	86	338	3730			45	385														
上層	87	4	50			2	10			13	100	8	135								
上層	88	40	600			9	75														
上層	89	90	1330			18	170													1	10
上層	90	32	475			25	180														
上層	90･94	127	1815			14	150													1	15

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	白磁														青白磁		青磁（龍泉窯系）			
		口禿皿		口禿碗		皿		碗		合子蓋		四耳壺		瓶類		梅瓶		蓮弁文碗		碗・皿	
		点数	*重量*																		
上層	1																				
上層	2															1	*10*				
上層	3			1	*5*																
上層	3b																				
上層	4	1	*5*					1	*5*												
上層	5																				
上層	8													1	*10*						
上層	9																				
上層	10			1	*25*			1	*5*									1	*5*		
上層	15													1	*85*						
上層	16																				
下層	17																				
下層	18																				
上層	68																				
上層	69																				
上層	70																				
上層	71																				
上層	72																				
上層	73																				
上層	74																				
上層	75																				
上層	81											1	*5*								
上層	82																				
上層	83a																			1	*5*
上層	83b																				
上層	84																				
上層	85																				
上層	86					1	*5*	1	*5*												
上層	87																				
上層	88																				
上層	89																				
上層	90																				
上層	90･94																	1	*15*		

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	舶載陶器		瀬戸		渥美 ・湖西				尾張 ・常滑								東濃		東遠	
		褐釉 壺		瓶類		甕		鉢		甕		壺		山茶碗		片口鉢 Ⅰ類		山茶碗		山茶碗	
		点数	*重量*																		
上層	1																				
上層	2									1	*15*										
上層	3											1	*30*								
上層	3b															1	*50*				
上層	4									3	*170*			1	*5*	1	*25*				
上層	5																				
上層	8																				
上層	9																				
上層	10	1	*50*							2	*235*	2	*50*			1	*20*				
上層	15	1	*25*																		
上層	16																				
下層	17																				
下層	18																				
上層	68																				
上層	69									1	*15*										
上層	70									1	*55*										
上層	71																				
上層	72																				
上層	73									1	*45*										
上層	74																				
上層	75																				
上層	81									2	*60*					1	*15*				
上層	82																				
上層	83a																				
上層	83b									1	*230*										
上層	84									1	*25*										
上層	85																				
上層	86							1	*40*												
上層	87									1	*20*										
上層	88															1	*5*				
上層	89									2	*350*										
上層	90																				
上層	90･94									1	*20*										

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	備前		瓦器		瓦質土器		瓦質							
		甕		碗		火鉢		平瓦						丸瓦	
								永・女C類		永・女D類		不明		不明	
		点数	*重量*												
上層	1														
上層	2														
上層	3														
上層	3b														
上層	4					1	*15*	1	*150*			1	*75*		
上層	5														
上層	8														
上層	9														
上層	10											1	*65*	1	*160*
上層	15					1	*95*								
上層	16														
下層	17														
下層	18														
上層	68														
上層	69														
上層	70									1	*155*				
上層	71														
上層	72														
上層	73														
上層	74														
上層	75					1	*30*								
上層	81					1	*45*							1	*80*
上層	82														
上層	83a														
上層	83b														
上層	84														
上層	85					1	*110*								
上層	86					2	*50*								
上層	87														
上層	88											1	*20*		
上層	89														
上層	90														
上層	90・94														

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	銅製品				鉄製品						石製品		獣骨	
		銭		不明		釘		鎌		不明		滑石鍋		不明	魚類
		点数	*重量*												
上層	1														
上層	2														
上層	3			1	*10*										
上層	3b														
上層	4	1	*5*			1	*15*	1						1	
上層	5														
上層	8														
上層	9														
上層	10					2	*15*								
上層	15														
上層	16					2	*30*								
下層	17														
下層	18														
上層	68														
上層	69														
上層	70														
上層	71														
上層	72														
上層	73					1	*15*								
上層	74					1	*5*								
上層	75														
上層	81					2	*25*			1	*10*				
上層	82														
上層	83a														
上層	83b														
上層	84														
上層	85														
上層	86													1	
上層	87														
上層	88														
上層	89														
上層	90														
上層	90･94														

アミフセの行は下層遺構に訂正

表１③　中世上層遺構（92 ～ 133）・上層遺構外の出土遺物

帰属遺構面	遺構	かわらけ																白かわらけ		土器	
		ロクロ								手づくね						小片		手づくね		吉備系	
		大		中		小		内折れ極小		大		小		内折れ				大		碗	
		点数	重量																		
上層	92	1	10							1	10										
上層	93	5	130							1	15										
上層	96	6	35			3	15														
上層	98	3	45							1	10	2	25								
上層	100	2	35							4	60	2	30								
上層	101	12	115			2	15			1	5										
下層	102	13	90			10	90			13	130	16	195								
上層	103	139	1470			20	170			1	60	1	25								
上層	104	11	140																		
上層	105	21	280			2	15														
上層	106	3	41																		
上層	107	1	10			2	15														
下層	108	9	85			1	10			3	55	1	5								
上層	110	7	55																		
上層	111	4	45																		
上層	112	1	25							2	15	1	15								
上層	114	5	70			1	15														
上層	115	47	810			11	185					8	500					1	5		
上層	116	117	1155			35	345					1	10							1	5
上層	117	86	860			11	160														
上層	119					1	5														
上層	120									1	25										
上層	121	1	25									2	25								
上層	122	2	175							1	5										
上層	123	2	30									1	10								
上層	124											1	10								
上層	125	1	10							2	25										
上層	127																				
上層	128									11	130	4	60								
上層	129	1	10			1	5														
上層	131									1	10										
上層	133	17	230			5	45														
上層	遺構外	305	3350			62	590	1	5	2	30	3	165							1	10

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	白磁														青白磁		青磁（龍泉窯系）			
		口禿皿		口禿碗		皿		碗		合子蓋		四耳壺		瓶類		梅瓶		蓮弁文碗		碗・皿	
		点数	*重量*																		
上層	92																				
上層	93																				
上層	96																				
上層	98																				
上層	100																				
上層	101																				
下層	102									1	*5*										
上層	103																				
上層	104																				
上層	105																				
上層	106																				
上層	107																				
下層	108																				
上層	110																				
上層	111																				
上層	112																				
上層	114																				
上層	115																	1	*15*		
上層	116																				
上層	117																				
上層	119																				
上層	120																				
上層	121																				
上層	122																				
上層	123																				
上層	124																				
上層	125																				
上層	127					1	*5*														
上層	128																				
上層	129																				
上層	131																				
上層	133																				
上層	遺構外																			1	*15*

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属 遺構面	遺構	舶載陶器		瀬戸		渥美 ・湖西				尾張 ・常滑								東濃		東遠	
		褐釉 壺		瓶類		甕		鉢		甕		壺		山茶碗		片口鉢 Ⅰ類		山茶碗		山茶碗	
		点数	*重量*																		
上層	92									1	*20*										
上層	93																				
上層	96																				
上層	98																				
上層	100					1	*30*			2	*195*										
上層	101																				
下層	102									1	*20*										
上層	103	1	*40*							1	*50*										
上層	104																				
上層	105																				
上層	106																				
上層	107																				
下層	108																				
上層	110																				
上層	111																				
上層	112																				
上層	114																				
上層	115																				
上層	116															1	*10*				
上層	117																				
上層	119																				
上層	120																				
上層	121																				
上層	122																				
上層	123																				
上層	124																				
上層	125																				
上層	127																				
上層	128									1	*15*										
上層	129																				
上層	131																				
上層	133																				
上層	遺構外									1	*55*							1	*15*	1	*10*

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	備前		瓦器		瓦質土器		瓦質土器							
		甕		碗		火鉢		平瓦						丸瓦	
								永・女C類		永・女D類		不明		不明	
		点数	*重量*												
上層	92														
上層	93														
上層	96														
上層	98														
上層	100													1	*15*
上層	101														
下層	102														
上層	103	1	*70*									1	*55*		
上層	104														
上層	105														
上層	106														
上層	107														
下層	108														
上層	110														
上層	111														
上層	112														
上層	114														
上層	115			1	*15*										
上層	116														
上層	117											1	*20*		
上層	119														
上層	120														
上層	121														
上層	122														
上層	123														
上層	124														
上層	125														
上層	127														
上層	128														
上層	129														
上層	131														
上層	133											1	*90*		
上層	遺構外													1	*95*

アミフセの行は下層遺構に訂正

帰属遺構面	遺構	銅製品				鉄製品						石製品		獣骨・歯	
		銭		不明		釘		鎌		不明		滑石鍋		不明	魚類
		点数	*重量*												
上層	92														
上層	93													1	
上層	96														
上層	98														
上層	100														
上層	101														
下層	102														
上層	103														
上層	104													1	
上層	105														
上層	106														
上層	107														
下層	108														
上層	110														
上層	111														
上層	112														
上層	114														
上層	115														7
上層	116														
上層	117														
上層	119														
上層	120														
上層	121														
上層	122														
上層	123														
上層	124														
上層	125														
上層	127														
上層	128														
上層	129														
上層	131														
上層	133														
上層	遺構外											2	*45*		

アミフセの行は下層遺構に訂正

表１④　中世下層遺構・下層遺構外の出土遺物

帰属遺構面	遺構	かわらけ													
		ロクロ								手づくね				小片	
		大		薄丸大		中		小		大		小			
		点数	重量												
下層	19											2	10		
下層	20									7	55	1	10		
下層	22	1	20					1	10						
下層	23a	1	10												
下層	23b									2	15				
下層	23c	1	15												
下層	25	1663	1431	8	70			31	425	27	390	9	195		
下層	26	1	5							10	80				
下層	27									4	35				
下層	32							1	5	15	150	1	50		
下層	34									4	50	3	15		
下層	36	4	40							11	80	5	135		
下層	41									2	10				
下層	45									1	10	1	40		
下層	46									1	15				
下層	49	20	260					4	35	30	420	19	400		
下層	51	10	100					5	25	6	65	8	80		
下層	52									13	135	7	175		
下層	54									2	50				
下層	55	1	10												
下層	57									4	35	2	10		
下層	58･59	274	8250			1	70	155	3370	7	320	13	465	3	5
下層	59	7	50					7	85						
下層	62											3	30		
下層	64							1	5	3	25	4	30		
下層	65											1	25		
下層	67	1	5							1	5				
下層	99	2	25					7	205	10	190	28	940		
下層	132	1	15												
下層	134									2	15	1	15		
下層	141	2	15					1	5	21	215	1	30		
下層	143									3	35	2	15		
下層	149									1	20				
下層	151	2	15							21	340	1	5		
下層	154	3	20												
下層	155													1	5
下層	156									1	10	1	20		
下層	158									1	5				
下層	159	1	5												
下層	164	5	45												
下層	168	1	10												
下層	170									4	20				
下層	171	1	5							1	20				
下層	172	1	10												
下層	173									1	55	1	5		
下層	176									6	65	3	10		
下層	176下層	1	10							1	20				
下層	177	3	30												
下層	180									1	10				
下層	181									2	10	3	10		
下層	182	32	365					14	150	56	710	67	765		
下層	遺構外	1	15							6	50	1	60		

帰属遺構面	遺構	白磁								青白磁		青磁(同安窯系)		青磁(龍泉窯系)						舶載陶器	
		口禿皿		口禿碗		端反碗		瓶類		合子蓋		櫛描文碗		劃花文碗		蓮弁文碗		碗・皿		褐釉壺	
		点数	重量																		
下層	19																				
下層	20																				
下層	22																				
下層	23a																				
下層	23b																				
下層	23c																				
下層	25			1	10					1	5	1	5								
下層	26																				
下層	27																				
下層	32																				
下層	34																				
下層	36											1	55	1	10						
下層	41																				
下層	45																				
下層	46																				
下層	49																				
下層	51																				
下層	52																				
下層	54																				
下層	55																				
下層	57																				
下層	58・59																				
下層	59																				
下層	62																				
下層	64																				
下層	65																				
下層	67																				
下層	99																				
下層	132																				
下層	134							1	10									1	25		
下層	141																				
下層	143																				
下層	149																				
下層	151																			1	40
下層	154																				
下層	155																				
下層	156																				
下層	158																				
下層	159																				
下層	164																				
下層	168																	1	5		
下層	170																				
下層	171																				
下層	172																				
下層	173																				
下層	176					1	5														
下層	176下層																				
下層	177																				
下層	180																				
下層	181																				
下層	182	1	10													1	5	1	10		
下層	遺構外																				

帰属遺構面	遺構	瀬戸				渥美・湖西						尾張・常滑				瓦質土器		瓦	
		灰釉底卸目皿		瓶類		甕		壺		こね鉢		甕		片口鉢Ⅰ類		火鉢		丸瓦不明	
		点数	*重量*																
下層	19																		
下層	20																		
下層	22																		
下層	23a																		
下層	23b																		
下層	23c																		
下層	25											7	*425*						
下層	26																		
下層	27																		
下層	32																		
下層	34											2	*290*						
下層	36											3	*465*						
下層	41																		
下層	45																		
下層	46																		
下層	49					2	*70*					1	*10*						
下層	51					1	*60*												
下層	52																		
下層	54																		
下層	55																		
下層	57																	1	*25*
下層	58･59																		
下層	59																		
下層	62																		
下層	64					1	*65*												
下層	65																		
下層	67																		
下層	99																		
下層	132											1	*20*						
下層	134															1	*110*		
下層	141																		
下層	143																		
下層	149													1	*10*				
下層	151											4	*185*	1	*210*				
下層	154																		
下層	155																		
下層	156																		
下層	158											1	*115*						
下層	159																		
下層	164																		
下層	168																		
下層	170																		
下層	171																		
下層	172																		
下層	173																		
下層	176																		
下層	176下層																		
下層	177																		
下層	180																		
下層	181											1	*30*						
下層	182	1	*40*					1	*45*			2	*85*	1	*15*	1	*45*		
下層	遺構外									1	*15*								

帰属遺構面	遺構	鉄製品				石製品				木製品・木材		土師器		須恵器				獣骨
		釘		不明		石英片		砥石		草履芯	箸	高坏		甕		坏		不明
		点数	重量															
下層	19																	
下層	20																	
下層	22																	
下層	23a																	
下層	23b																	
下層	23c																	
下層	25	2	*10*			1	*5*					1	*30*					2
下層	26																	
下層	27																	
下層	32																	
下層	34							1	*5*									
下層	36			1	*55*					1	2							
下層	41																	
下層	45																	
下層	46																	
下層	49																	
下層	51																	
下層	52																	
下層	54																	
下層	55																	
下層	57																	
下層	58･59																	
下層	59																	
下層	62	1	*5*															
下層	64																	
下層	65																	
下層	67																	
下層	99																	
下層	132															1	*5*	
下層	134																	
下層	141													1	*5*			
下層	143																	
下層	149																	
下層	151																	
下層	154																	
下層	155																	
下層	156																	
下層	158																	
下層	159																	
下層	164																	
下層	168																	
下層	170																	
下層	171																	
下層	172																	
下層	173																	
下層	176																	
下層	176下層																	
下層	177																	
下層	180																	
下層	181																	
下層	182	1	*15*															
下層	遺構外																	

表２　出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1)(図12)						
1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.6	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
2	土器	ロクロかわらけ・小	(7.7)	(4.8)	1.6	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
3	土器	ロクロかわらけ・小	(7.5)	(4.6)	1.9	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
4	土器	ロクロかわらけ・大	(12.4)	(7.2)	3.0	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
5	土器	ロクロかわらけ・大	(11.4)	(7.2)	2.9	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色　備考：口縁部煤付着
6	磁器	白磁皿	—	—	—	底小片　胎土：白色、緻密　釉薬：透明　施釉：薄い　底部接地面露胎
7	陶器	瀬戸卸皿	(14.8)	(12.0)	4.0	1/3　胎土：精良、灰白色　釉：オリーブ灰色（灰釉）
8	瓦	軒平瓦	長さ[5.5]	幅[5.5]	厚さ1.7	下向剣頭文　瓦当部幅：高さ4.5cm　胎土：灰色　砂粒　白色粒　小石粒 凸面：縄目痕、ナデ、離れ砂　凹面：ヘラケズリ、離れ砂
9	石製品	砥石	長さ[9.0]	幅3.4	厚さ3.0	残存率不明　灰白色　伊予中砥　3面使用、一部茶色に変色
10	石製品	砥石	長さ[4.1]	幅2.1	厚さ0.6	残存率不明　灰白色　鳴滝産仕上げ砥
11	鉄製品	釘	長さ10.0	幅0.5	厚さ0.3	[8.5]g
12	鉄製品	釘	長さ6.7	幅0.5	厚さ0.3	[4.6]g
13	土器	手づくねかわらけ・小	(9.4)	—	1.5	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色　　備考：口縁部に煤付着
14	土器	ロクロかわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.4	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
15	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	(5.6)	1.8	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
16	土器	ロクロかわらけ・小	7.9	5.2	1.7	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
17	土器	ロクロかわらけ・小	(7.3)	(4.4)	2.4	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
18	土器	ロクロかわらけ・小	(7.4)	(4.6)	2.3	5/6　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
19	土器	ロクロかわらけ・小	(6.8)	(4.6)	2.1	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
20	土器	ロクロかわらけ・中	(10.7)	(6.6)	2.6	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
21	土器	ロクロかわらけ・大	(12.4)	—	—	1/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
22	鉄製品	用途不明	長さ8.9	幅0.8	厚さ0.4	刀子か？　[8.1]g
23	鉄製品	釘	長さ8.1	幅0.8	厚さ0.7	[12.6]g
24	鉄製品	釘	長さ5.2	幅0.3	厚さ0.2	[1.6]g
25	土器	ロクロかわらけ・大	(12.6)	(8.8)	3.1	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
26	土器	ロクロかわらけ・大	(12.4)	(8.6)	3.0	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙褐色
27	土器	ロクロかわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.5	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙褐色
28	鉄製品	用途不明	長さ8.1	幅1.2	厚さ0.3	[9.3]g
29	土器	ロクロかわらけ・小	7.1	4.5	1.6	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
30	土器	ロクロかわらけ・小	(7.2)	(5.0)	1.6	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色　灯明皿　口縁部煤付着
31	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.5	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
32	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(4.8)	2.2	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
33	土器	ロクロかわらけ・大	(13.0)	(7.0)	4.0	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
34	磁器	白磁碗	—	(4.8)	—	底部1/3　胎土：灰白色、緻密　釉薬：灰白色　施釉：薄い
35	磁器	白磁印花文碗	—	—	—	胴小片　胎土：白色、緻密　釉薬：白色　施釉：薄い

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
36	土器	ロクロかわらけ・小	9.3	6.0	1.8	完形　88g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
37	土器	ロクロかわらけ・小	7.9	5.2	1.8	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
38	土器	ロクロかわらけ・大	12.5	8.0	3.6	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
39	鉄製品	釘	長さ 6.5	幅 0.5	厚さ 0.5	[7.6]g
40	土器	ロクロかわらけ・大	(13.0)	(7.4)	2.9	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
出土遺物(2)(図13)						
41	土器	ロクロかわらけ・小	(8.0)	(5.0)	2.0	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
42	土器	ロクロかわらけ・小	(8.3)	(5.4)	1.8	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
43	土器	ロクロかわらけ・大	(13.4)	(8.2)	3.5	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
44	土器	ロクロかわらけ・大	(13.9)	(7.4)	3.6	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
45	磁器	白磁梅月文碗	(5.0)	—	—	底部1/4　胎土：白色　緻密　釉薬：淡青白色　施釉：薄い
46	磁器	白磁碗か皿	—	—	—	体小片　胎土：白色、緻密　釉薬：透明　施釉：薄い
47	陶器	捏鉢	—	—	—	底小片　胎土：灰色、砂粒、白色粒　色調：灰色 備考：片口鉢Ⅰ類？　渥美鉢？
48	陶器	常滑甕	—	—	—	胴小片　胎土：淡橙色　砂粒、黒色粒　色調：暗赤褐色　釉：オリーブ灰色（自然釉） 外面にスタンプ
49	土器	吉備系碗	—	(5.2)	—	高台部1/2　胎土：砂粒、白色粒、黒色粒　色調：灰白色　貼付高台
50	土器	ロクロかわらけ・大	(13.5)	(7.2)	3.2	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
51	土器	吉備系碗	(10.8)	—		1/5　胎土：砂粒、白色粒　色調：灰白色
52	土器	手づくねかわらけ・小	(7.6)	—	1.6	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
53	土器	ロクロかわらけ・小	(8.3)	(6.2)	1.5	1/4　胎土:雲母・白色針状物質　色調：黄橙色 備考：打ち欠き？1ヶ所
54	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口～体小片　胎土：灰色　砂粒　色調：暗灰色　口縁部ヘラケズリ 口縁部外面　焼成後に磨耗　備考：口縁部内面に漆？が付着　河野ⅠB類
55	土器	ロクロかわらけ・小	(9.2)	(6.4)	1.8	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
56	土器	ロクロかわらけ・小	(8.8)	(6.3)	2.0	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
57	土器	手づくねかわらけ・小	(9.2)	—	1.6	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
58	土器	手づくねかわらけ・小	8.9	—	2.0	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
59	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.4	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
60	土器	手づくねかわらけ・小	8.9	—	1.8	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
61	土器	手づくねかわらけ・小	8.7	—	2.1	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
62	土器	手づくねかわらけ・小	9.1	—	2.0	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
63	磁器	龍泉窯系青磁蓮弁文碗	(12.4)	—	—	1/6　胎土：灰白色　緻密　施釉：緑灰色　施釉：厚い　貫入あり　大宰府Ⅲ-2C類か
64	瓦	平瓦	長さ [5.8]	幅 [7.0]	厚さ 1.9	胎土：灰色　砂粒、白色粒、黒色粒　色調：灰色 凸面：剥離　凹面：離れ砂、布目痕
65	瓦	平瓦	長さ [5.7]	幅 [4.5]	厚さ 1.8	胎土：灰白色　砂粒、白色粒、黒色粒　色調：灰色 凸面：離れ砂、斜格子文　凹面：離れ砂
66	土器	ロクロかわらけ・小	7.8	5.4	1.9	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
67	土器	ロクロかわらけ・小	(8.0)	(5.0)	1.6	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
68	土器	ロクロかわらけ・小	(8.1)	(6.4)	1.9	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
69	土器	ロクロかわらけ・極小	(4.2)	(3.6)	0.7	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
70	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	(5.4)	1.7	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙褐色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
71	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(5.8)	1.9	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡黄橙色
72	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.5	厚さ 0.1	宣和通寶　中国北宋代・1119年初鋳
73	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.0	完形　56g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
74	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.6)	1.8	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙褐色
75	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3	1.8	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙褐色
76	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.0)	1.8	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
77	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.5	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
78	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.8)	(6.2)	1.9	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
79	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.2)	1.8	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
80	磁器	白磁 口兀皿	—	—	—	口小片　胎土：灰白色　釉薬：淡青灰色　施釉：薄い　大宰府IX類
81	磁器	龍泉窯系青磁 折縁皿（坏）	—	—	—	口小片　胎土：灰白色　釉薬：灰緑色　施釉：薄い
82	陶器	常滑 甕	—	—	—	口小片　胎土：灰色 砂粒・白色粒･黒色粒　色調：褐色
83	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.5	厚さ 0.1	銭銘不明
84	石製品	碁石	直径 1.8	厚さ 0.6	—	暗灰色　安山岩
85	瓦器	碗	(10.8)	—	—	1/6　胎土：灰色　砂粒　内面にヨコヘラミガキによる暗文
出土遺物(3)(図14)						
86	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.4)	1.8	1/2　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
87	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.2)	1.7	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：赤褐色
88	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.4)	1.8	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
89	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(7.0)	3.8	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
90	磁器	龍泉窯系青磁 無文碗	—	—	—	口小片　胎土：灰白色　緻密　施釉：緑灰色　施釉：薄い　貫入あり
91	陶器	東遠 山茶碗	—	—	—	口小片　胎土：灰色　精良　色調：灰色　備考：自然釉
92	陶器	東濃 山茶碗	—	—	(4.0)	底部1/4　胎土：灰白色　精良　色調：灰白色　貼付け高台　高台接着面に籾殻痕
93	瓦質土器	火鉢	—	—	—	口～体小片　胎土：灰色　砂粒　色調：暗灰色 口縁部ヘラケズリ　口縁部外面　焼成後に磨耗　河野ⅠB類か
94	土器	吉備系 碗	(10.2)	(4.6)	3.5	1/5　胎土：砂粒　白色粒　色調：灰白色　貼付高台
95	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.2)	2.1	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
96	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	(7.0)	2.0	1/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
97	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.4)	(6.6)	2.0	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
98	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	(7.0)	2.7	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
99	土器	手づくね かわらけ・小	(8.3)	—	1.0	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
100	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
101	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.5	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
102	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
103	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.9	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
104	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
105	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	2.0	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
106	土器	手づくね かわらけ・大	(13.0)	—	2.3	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
107	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.0	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色　　備考：焼成後に底部穿孔
108	磁器	白磁 口兀皿	—	—	—	口小片　胎土：灰白色　緻密　釉薬：乳白色　備考：内外面に気泡あり 大宰府IX類
109	陶器	瀬戸 底卸目皿	—	(10.5)	—	底1/6　胎土：黄灰白色　砂粒　白色粒　施釉：灰緑色
110	鉄製品	釘	長さ 7.9	幅 0.8	厚さ 0.4	[10.2]g
111	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	—	1.5	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
112	土器	手づくね かわらけ・小	9.6	—	1.7	完形　83g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
113	磁器	青磁 櫛掻文碗		—	4.8	底部1/2　胎土：灰色　緻密　釉薬：灰緑色　施釉：薄い　同安窯系Ⅰ-1b類か
114	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.2	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
115	土器	手づくね かわらけ・大	(13.1)	—	2.8	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色　備考：内外面　煤付着
116	施釉陶器	褐釉 壺	—	—	—	口～体小片　胎土：茶褐色　砂粒　精良　色調：茶褐色　施釉：薄い
117	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.5	1.1	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色　備考：底部焼成後に穿孔
118	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(6.2)	1.2	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.0	1.6	完形　42g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.8)	1.6	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.0)	1.8	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	(6.0)	1.7	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明黄褐色
123	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	(8.0)	3.2	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
124	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.8)	2.9	2/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
125	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	8.0	2.8	5/6　　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
126	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.1)	(7.8)	2.6	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
127	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	9.2	2.6	5/6　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(8.8)	3.4	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
129	土器	手づくね かわらけ・小	(8.6)	—	1.9	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
130	土器	手づくね かわらけ・小	(9.0)	—	1.6	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
131	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.5	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
132	土製品	かわらけ転用 円盤	直径 6.6	厚さ 0.9	—	胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
133	鉄製品	釘	長さ 6.7	幅 0.9	厚さ 1.2	2本が付着　[8.8]g
出土遺物(4)(図15)						
134	陶器	常滑 甕	—	—	—	胴小片　胎土：灰色　白色粒、長石粒　色調：褐色　外面に菊花文のスタンプ
135	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.2	2.1	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
136	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	2.2	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
137	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	6.0	1.7	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
138	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.7	2.0	完形55ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
139	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	5.2	1.4	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
140	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.7	1.9	完形　66ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
141	土器	ロクロかわらけ・小	8.4	5.8	1.7	5/6　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙褐色
142	土器	ロクロかわらけ・小	8.6	7.1	1.7	1/2強　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
143	土器	ロクロかわらけ・小	8.7	7.0	1.7	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
144	土器	ロクロかわらけ・小	8.3	6.7	1.8	完形　77ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
145	土器	ロクロかわらけ・小	8.3	6.1	1.7	1/2強　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
146	土器	ロクロかわらけ・小	7.8	6.2	1.5	完形　49ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
147	土器	ロクロかわらけ・小	8.6	6.7	1.7	完形　70ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
148	土器	ロクロかわらけ・小	8.2	6.1	1.6	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
149	土器	ロクロかわらけ・小	8.8	6.5	1.8	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
150	土器	ロクロかわらけ・小	7.8	6.0	1.5	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
151	土器	ロクロかわらけ・小	7.8	5.9	1.6	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
152	土器	ロクロかわらけ・大	8.0	5.2	2.0	完形　62ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
153	土器	ロクロかわらけ・小	8.2	5.5	1.5	完形　62ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
154	土器	ロクロかわらけ・小	8.2	6.4	1.9	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
155	土器	ロクロかわらけ・小	8.7	6.7	1.8	完形　72ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
156	土器	ロクロかわらけ・小	8.0	4.5	1.9	完形　65ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
157	土器	手づくねかわらけ・小	7.7	—	1.7	完形　60ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
158	土器	手づくねかわらけ・小	8.5	—	1.7	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
159	土器	手づくねかわらけ・小	7.7	—	1.8	完形　59ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
160	土器	手づくねかわらけ・小	7.7	—	1.9	完形　69ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
161	土器	ロクロかわらけ･中	(10.6)	7.1	3.0	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
162	土器	ロクロかわらけ・大	12.4	8.3	3.7	完形　224g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
163	土器	ロクロかわらけ・大	12.8	8.8	3.3	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
164	土器	ロクロかわらけ・大	12.5	8.7	4.0	完形　211ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
165	土器	ロクロかわらけ・大	12.2	5.2	3.1	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
166	土器	手づくねかわらけ・大	12.8	—	3.6	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：明橙色
167	土器	ロクロかわらけ・大	9.0	6.4	2.1	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
168	土器	ロクロかわらけ・中	(10.0)	(7.0)	2.3	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
169	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.0	完形　86ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
170	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.1	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
171	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.1	完形　66ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
172	土器	手づくねかわらけ・小	8.6	—	1.9	完形　80ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
173	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.0	完形　81ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
174	土器	手づくねかわらけ・小	9.0	—	2.0	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
175	土器	手づくねかわらけ・小	8.9	—	1.7	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
176	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	1.6	完形　64ｇ　胎土：雲母、白色針状物質　色調：橙色
177	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
178	土器	手づくね かわらけ・小	8.8	—	1.9	略完形　胎土：雲母、白色針状物質　色調：淡橙色
179	土器	手づくね かわらけ・大	(13.5)	—	3.2	1/2弱　胎土：雲母、白色針状物質　色調：赤橙色
180	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.9	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
181	土器	手づくね かわらけ・小	9.5	—	1.9	完形　83g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
182	土器	手づくね かわらけ・小	(10.2)	—	1.2	1/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
183	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	—	1.6	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
184	土器	手づくね かわらけ・小	9.6	—	2.0	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
185	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.3	3/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
186	土器	手づくね かわらけ・小	(10.0)	—	1.3	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
187	土器	手づくね かわらけ・小	9.0	—	2.0	2/3　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
188	土器	手づくね かわらけ・小	(9.1)	—	1.9	1/4　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色 備考：外面の一部黒変　内底部にササラ状工具痕
189	土器	ロクロ かわらけ・大	12.1	8.2	3.1	完形　171g　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色
190	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.1)	(6.0)	1.7	1/2　胎土：雲母、白色針状物質・土丹粒　色調：淡黄褐色
191	土器	手づくね かわらけ・小	8.8	—	2.0	5/6　胎土：雲母・土丹粒・白色針状物質　色調：黄橙色
192	土器	手づくね かわらけ・小	8.4	—	2.0	略完形　胎土：雲母・土丹粒　色調：黄橙色　歪み大きい
193	土器	手づくね かわらけ・小	8.7	—	1.6	略完形　胎土：雲母　色調：黄橙色
194	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	8.2	3.5	4/5　胎土：雲母、白色針状物質　色調：黄橙色

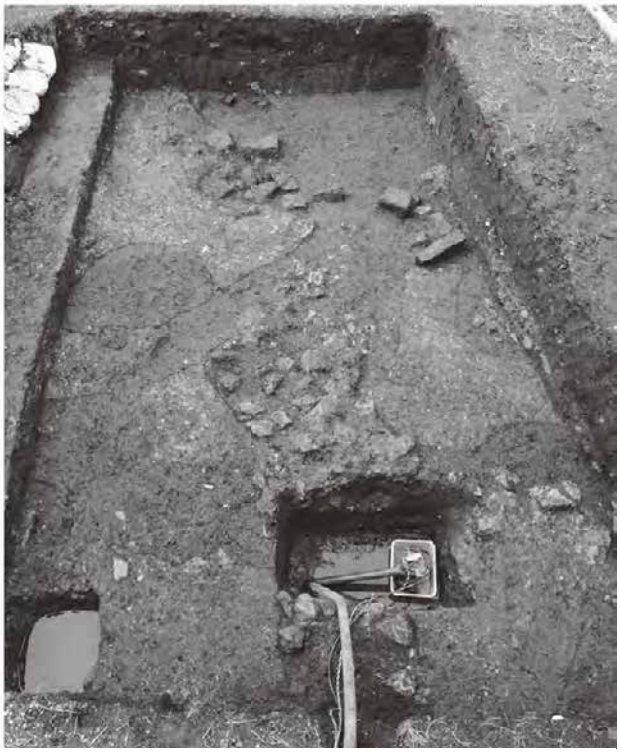
1．調査区設定状況（南東から）

2．調査区設定状況（北西から）

3．Ⅱ区　表土除去後（南から）

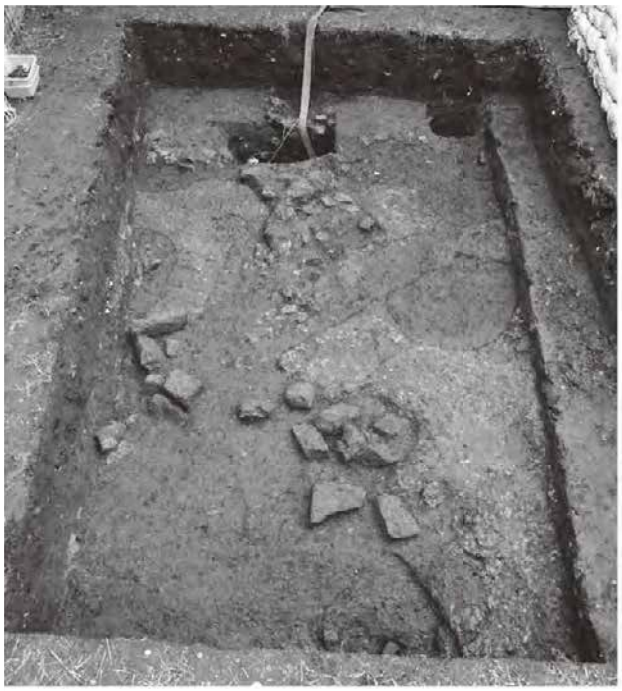
4．Ⅰ区　表土除去後（南から）

5．Ⅱ区　上層検出状況（南から）



6．Ⅰ区　上層検出状況（南から）

図版２



1. Ⅰ区　上層検出状況（北から）

2. Ⅰ区　上層　作業状況（北東から）

3. Ⅱ区　上層全景①（南から）

4. Ⅰ区　上層全景①（北から）

5. Ⅱ区　上層全景②（南から）

6. Ⅰ区　上層全景②（南から）

1. Ⅱ区上層　遺構 81 検出状況（南から）

2. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土貼り面：南から）

3. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土貼り面：東から）

4. Ⅱ区上層　遺構 81（粘土面除去後：南から）

5. Ⅱ区上層　遺構 81（南部縦断面：東から）

6. Ⅱ区上層　遺構 81（北部縦断面：東から）

7. Ⅱ区上層　遺構 81（横断面：南から）

8. Ⅱ区上層　遺構 81（縦断面：東から）

図版４

1. Ⅱ区下層　全景（東から）

2. Ⅰ区下層　全景（北から）

3. Ⅱ区下層　全景（南から）

4. Ⅰ区下層　全景（南から）

5. Ⅰ区２面　遺構８・25（東西溝①：西から）

6. Ⅰ区下層　遺構８･25　かわらけ出土状況（南西から）

7. Ⅱ区下層　遺構８・25（東西溝①：西から）

8. Ⅱ区下層　遺構８・25（東西溝①：東から）

1. Ⅰ区東壁　下層遺構 8･25 断面（東西溝①：南西から）

2. Ⅰ区西壁　下層遺構 8･25 断面（東西溝①：東から）

3. Ⅱ区下層　遺構 34（東西溝②：東から）

4. Ⅰ区東壁　上層遺構 34（東西溝②：西から）

5. Ⅰ区下層　遺構 34（東西溝②：東から）

6. Ⅱ - 拡張区下層　柱穴 182（東西柱穴列：西から）

7. Ⅱ区下層　東西柱穴列（東から）

8. Ⅱ - 拡張区東壁　柱穴 182 断面（東西柱穴列：西から）

図版６

1. Ⅱ区下層　遺構 99（かわらけ集積：南から）

2. Ⅱ区下層　遺構 99 完掘後（かわらけ集積：南から）

3. Ⅱ区下層　南北柱穴列①（Ⅲｂ層上面：南から）

4. Ⅱ区　東壁断面（西から）

5. Ⅱ区３面　柱穴 134 断面（南西から）

6. Ⅱ区東壁　柱穴 143 断面（南北柱穴列①：西から）

7. Ⅱ区東壁　東西溝①・柱穴 171 断面（西から）

8. Ⅱ区下層　かわらけ出土状況（東から）

1. Ⅰ区下層　遺構 36（井戸：東から）

2. Ⅰ区下層　遺構 36 完掘後（井戸：西から）

3. Ⅱ区上層遺構 81･下層遺構 25･151 断面（東から）

4. Ⅱ区下層　遺構 151（井戸：東から）

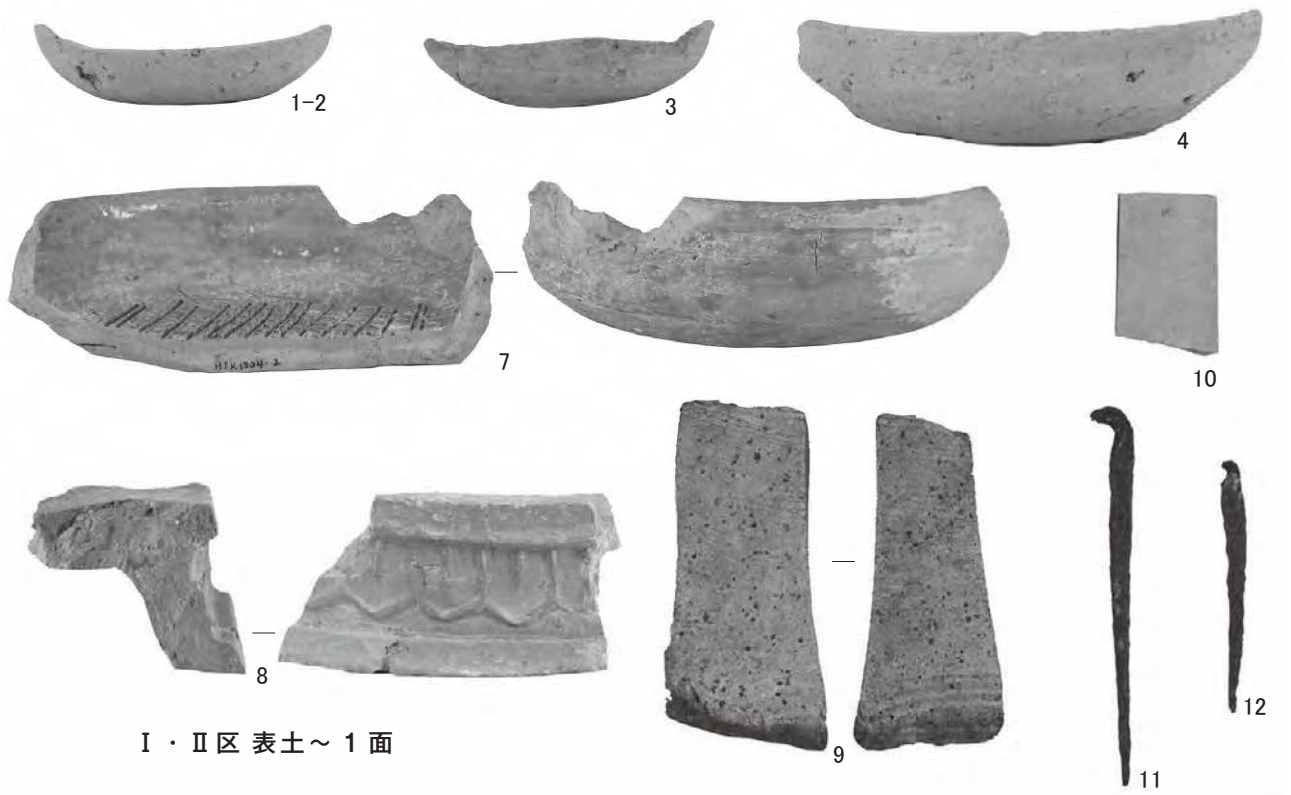
5. Ⅱ区Ⅲｃ層上面　全景（南から）

6. Ⅰ区Ⅲｃ層上面　全景（南から）

7. Ⅱ区Ⅲｃ層上面　噴砂痕検出状況（北から）

8. Ⅰ区南壁　噴砂痕断面（北から）

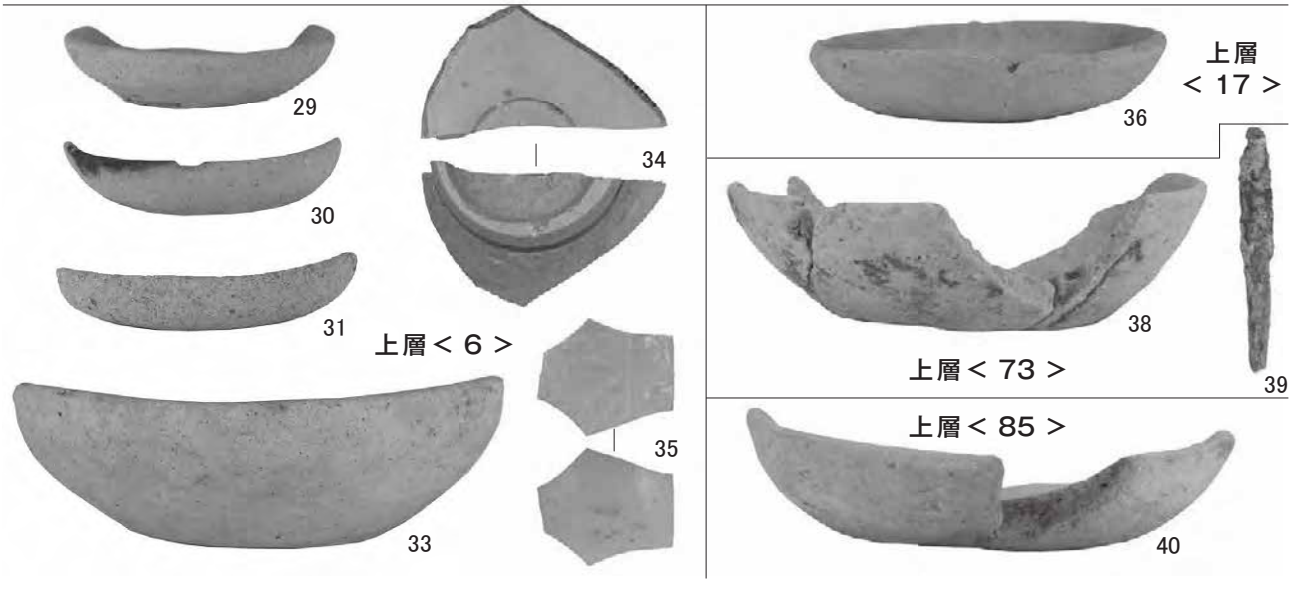
図版８

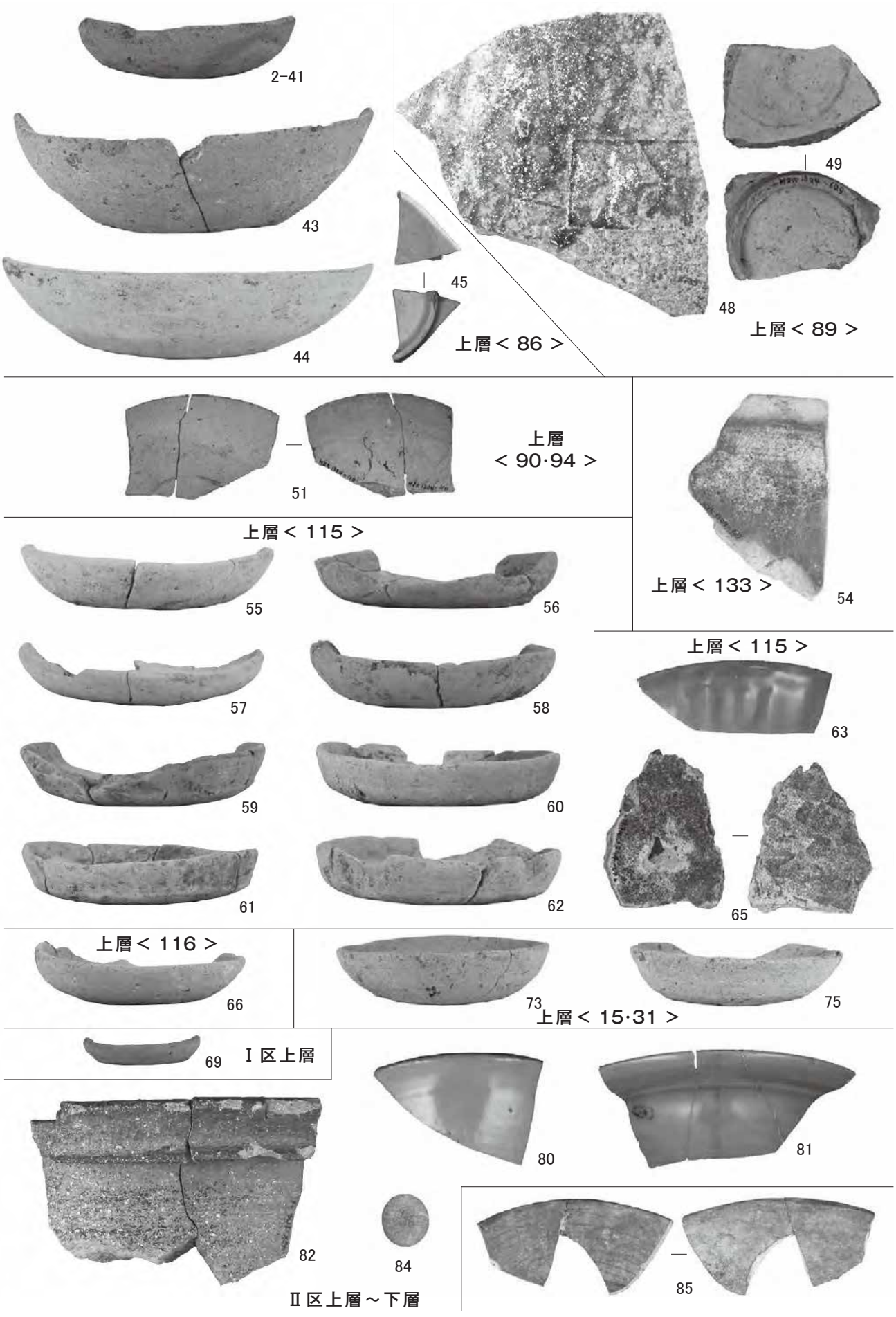


Ⅰ・Ⅱ区 表土～１面

上層＜81＞

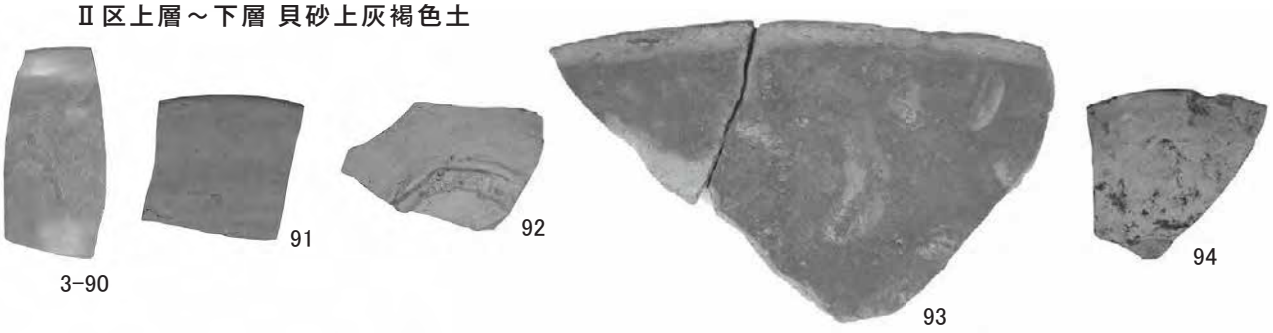
上層＜3＞

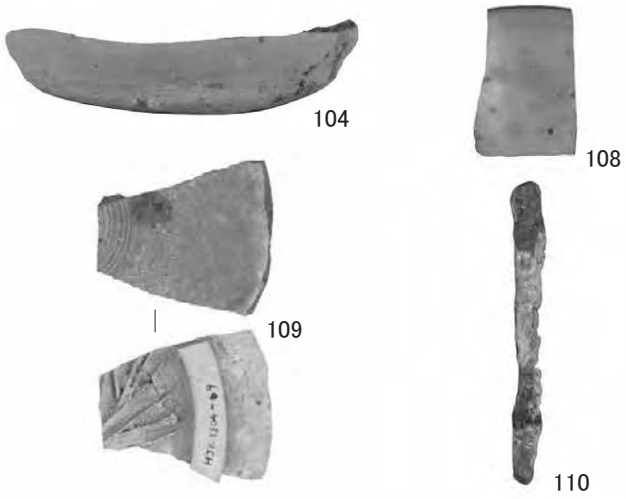



2-41
43
44
45
48
49
上層＜86＞
上層＜89＞
51
上層
＜90·94＞
上層＜115＞
54
上層＜133＞
55
56
57
58
59
60
61
62
上層＜115＞
63
65
上層＜116＞
66
73
75
上層＜15·31＞
69
Ⅰ区上層
80
81
82
84
85
Ⅱ区上層～下層

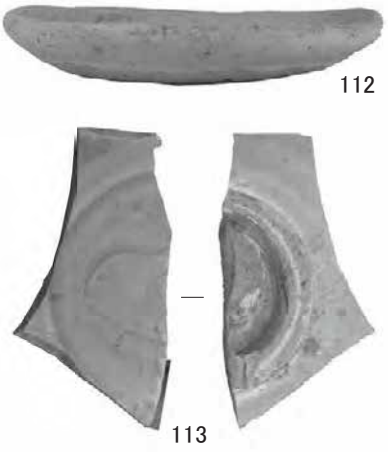
図版 10

Ⅱ区上層～下層 貝砂上灰褐色土



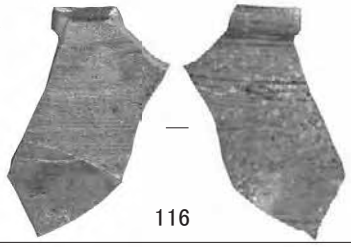


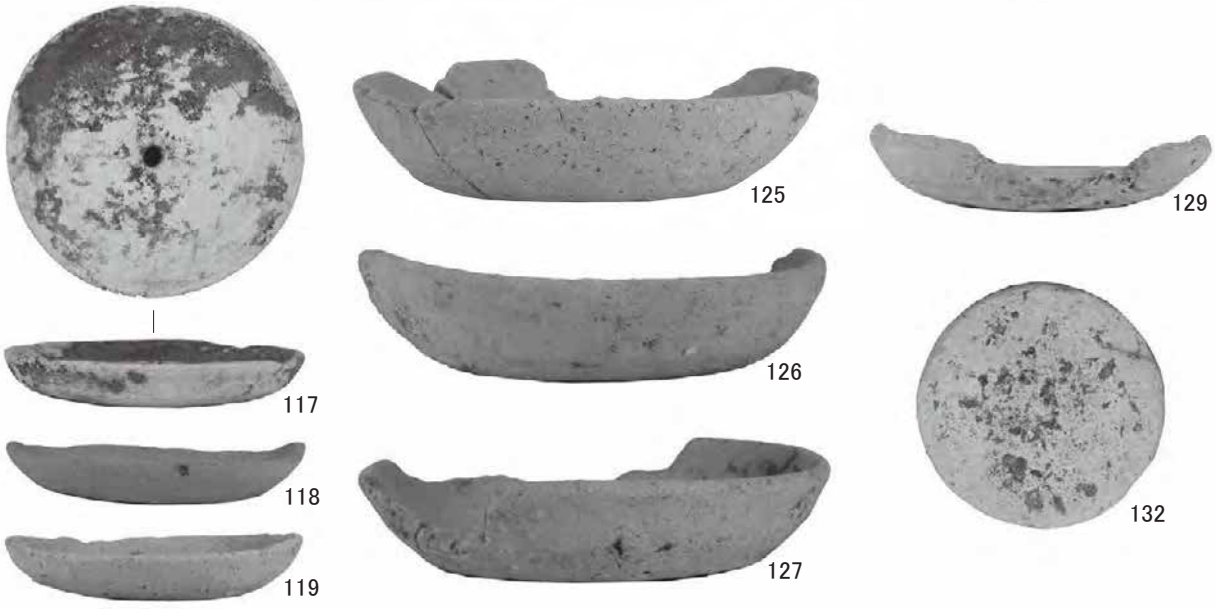
下層＜ 102･182 ＞



下層＜ 36 ＞

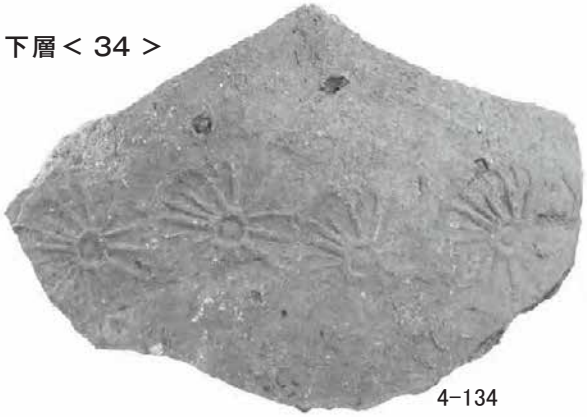
下層＜ 151 ＞



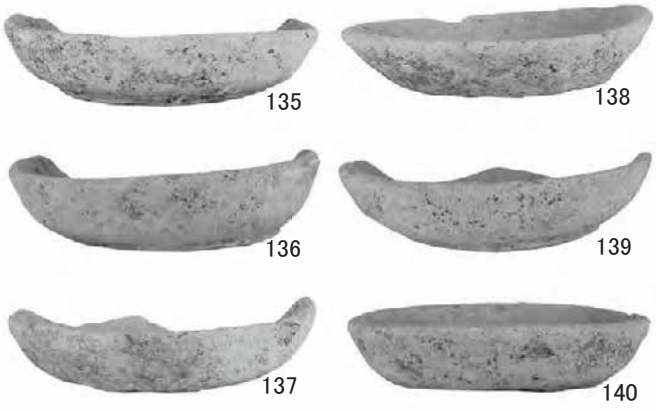


下層＜ 25 ＞

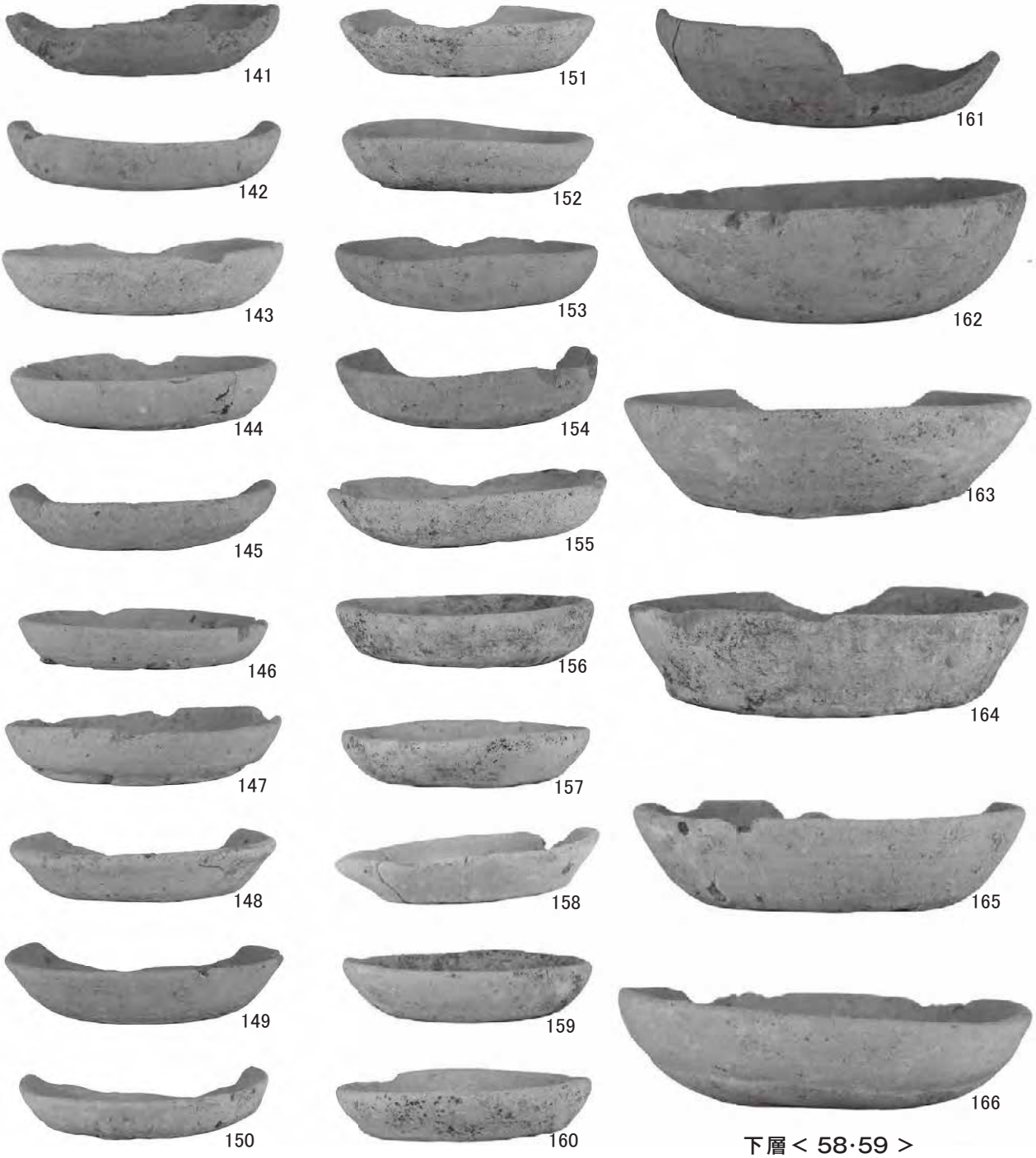
下層＜ 34 ＞



4-134



135 138 136 139 137 140



141 151 161 142 152 143 153 162 144 154 163 145 155 146 156 164 147 157 148 158 165 149 159 166 150 160

下層＜ 58･59 ＞

図版 12

167

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

下層＜ 99 ＞

181

182

下層＜ 52 ＞

184

185

187

下層＜ 87･128 ＞

189

下層＜ 122 ＞

190

191

192

193

下層 遺構外

長谷小路周辺遺跡（No.236）

由比ガ浜三丁目 194 番 71 地点

例　言

1．本報は、鎌倉市由比ガ浜三丁目 194 番 71 地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は平成 25（2013）年 11 月 1 日から平成 26（2014）年 3 月 7 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約 140㎡である。

3．発掘調査体制は以下のとおりである。

担　当　者：伊丹まどか
調　査　員：押木弘己・須佐仁和・田畑衣理・渡辺美佐子
調査補助員：松吉里永子
作　業　員：牛嶋道夫・赤坂進・吉澤巧・江津兵太・南齋敬資・久島忠敬・星栄人
（公益社団法人鎌倉市シルバー人材センター）

4．本報作成は以下の分担で行った。

遺構図版作成　押木弘己・松吉里永子
遺物実測　岡田慶子・松吉里永子・森谷十美
遺物図版作成　押木弘己・松吉里永子・森谷十美
観察表　押木弘己・松吉里永子・森谷十美
遺構写真　伊丹まどか・押木弘己・須佐仁和・松吉里永子
遺物写真　須佐仁和・松吉里永子
写真図版作成　押木弘己・松吉里永子

5．本報の執筆は、第一章第 1 節の図表の作成を後藤健が、第三章第 3 節を押木が、その他は松吉が行った。

6．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は「HKS1305」とし、出土品への注記その他に使用した。

7．本報の凡例は以下の通りである。

挿図縮尺　各図に縮尺を表記している。　遺構図版　水糸高は標高値を示す。
遺物図版　釉薬の範囲は・－・－・、加工痕・使用痕は➊← →➊で示した。また、遺物の煤痕は黒く塗りつぶして、表現をしている。

8．本報記載の「土丹」は凝灰質泥岩を示す。

9．整理段階において、遺物の分類及び編年は以下の論文を参考にした。

瀬戸産陶器：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
常滑産陶器：愛知県史編さん委員会編 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県
須恵器：田尾誠敏 2003「土器の変遷とその背景」『平塚市史』11 下別編考古（2）平塚市
古代の入間を考える会 2013『古代入間の土器と遺跡（Ⅱ）―須恵器坏の編年（9･10 世紀）―』

10．発掘調査及び報告書作成に関しては下記の方々よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。（敬称略・五十音順）

赤堀祐子・石元道子・太田美智子・沖元道・小野夏菜・河野眞知郎・古田土俊一・佐藤千鶴子・佐藤ななみ・汐見一夫・高橋慎一朗・滝澤晶子・栂岡渓音・原廣志・松吉大樹・馬淵和雄・吉田和枝・吉田桂子・山口正紀・山口裕子・山口優子

目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 159
第１節　遺跡の位置と歴史的環境
第２節　周辺遺跡の調査成果

第二章　調査の概要…… 167
第１節　調査経過と方法
第２節　堆積土層と面の概要

第三章　検出遺構と出土遺物…… 170
第１節　１面検出遺構と出土遺物
第２節　１面面上出土遺物と１面構成土出土遺物
第３節　古代検出遺構と出土遺物
第４節　Ⅱ区トレンチ上層出土遺物
第５節　表土出土遺物
第６節　中世面・古代面より出土した貝について

第四章　まとめ…… 191

挿図目次

図１　調査地の位置 …… 160
図２　調査区設定図 …… 167
図３　調査区北壁・東壁 堆積土層図 …… 169
図４　全体図（中世） …… 170
図５　１面遺構と遺物（1） …… 172
図６　１面遺構と遺物（2） …… 173
図７　１面遺構と遺物（3） …… 175
図８　１面遺構と遺物（4） …… 176
図９　１面遺構と遺物（5） …… 178
図 10　１面面上・１面構成土出土遺物 …… 179
図 11　全体図（古代） …… 180
図 12　竪穴住居（竪穴１・竪穴２） …… 181
図 13　竪穴住居（竪穴１・竪穴２）カマド … 182
図 14　竪穴住居（竪穴１・竪穴２）カマド内遺物出土状況 …… 183
図 15　竪穴住居（竪穴１・竪穴２）出土遺物（1） …… 184
図 16　竪穴住居（竪穴１・竪穴２）出土遺物（2） …… 185
図 17　竪穴住居（竪穴１・竪穴２）出土遺物（3） …… 186
図 18　Ⅱ区トレンチ上層出土遺物 …… 187
図 19　表土出土遺物（1） …… 188
図 20　表土出土遺物（2） …… 189
図 21　表土出土遺物（3） …… 190

表　目　次

表１　遺構計測表 …… 178
表２　遺物観察表（中世） …… 193
表３　遺物観察表（１面面上・１面構成土）… 195
表４　遺物観察表（古代竪穴２出土） …… 196
表５　遺物観察表（Ⅱ区トレンチ上層） …… 197
表６　遺物観察表（表土） …… 198
表７　貝の分類表 …… 202
表８　遺物集計表 …… 203

図　版　目　次

図版１ …… 205
1-1　調査地遠景
1-2　表土掘削状況
1-3　Ⅰ区１面全景（北から）
1-4　Ⅰ区深掘りトレンチ全景（東から）
図版２ …… 206
2-1　Ⅱ区古代面全景（北から）
2-2　Ⅱ区古代面竪穴住居跡（北西から）
図版３ …… 207
3-1　竪穴住居跡カマド検出状況（北西から）
3-2　竪穴住居跡カマド使用面（北西・低位から）
3-3　竪穴住居跡カマド使用面（北西から）
3-4　カマド支脚上遺物出土状況
3-5　カマド左袖内遺物出土状況
図版４ …… 208
4-1　竪穴住居跡カマド使用面②（北西から）
4-2　竪穴住居跡カマド使用面②（北西・低位から）
4-3　竪穴住居跡掘方（北西から）
4-4　柱穴内遺物出土状況
4-5　カマド堀方（北西・低位から）
図版５　出土遺物（中世・古代の貝） …… 209
図版６　出土遺物１（古代） …… 210
図版７　出土遺物２（古代） …… 211
図版８　出土遺物（表土） …… 212

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は、江ノ島電鉄由比ヶ浜駅手前の小道より住宅街に入った、鎌倉市由比ガ浜三丁目 194 番 71 地点に所在する（図 1: ★ 1)。本調査地は、県遺跡台帳 No.236「長谷小路周辺遺跡」の範囲に含まれる。

遺跡名にある「長谷小路」とは、現在の県道鎌倉葉山線（県道 311 号）（図 1 参照)、とくに長谷寺から六地蔵までの道「由比ガ浜大通り」のことを指す（『鎌倉事典』,p.242)。1685 年に刊行された『新編鎌倉志』は「今小路は、寿福寺の前に石橋あり。勝橋と云。鎌倉十橋の一なり。此より南を今小路と云。巽荒神の邊より南､長谷までの間は､長谷小路と云なり。」（『新編相模国風土記稿』第 6 巻 ,p.96）としている。1829 年に編纂された『鎌倉攬勝考』も「巽荒神の邊より、南は長谷村迄の所をいふ。是も古名にあらす。」（『新編相模国風土記稿』第 6 巻 ,p.191）と現在の今小路辺が想定される記述も見える。しかし、1841 年に編纂された『新編相模国風土記稿』には「下馬橋より、西方長谷村に達するの路次たるが故此唱あり､【東鑑】に武蔵大路と見えしは、即此舊名なりとぞ､」（『新編相模国風土記稿』第 4 巻 ,p.280）とあり、小路の範囲が曖昧になっていた様子が伺える。

小路名の由来について『鎌倉市史　総説編』は「（前略）長谷という地名は勿論長谷寺ができてからでなければならない。しかもそれは長谷寺がその存在を人々の間に明確にしてからであるというべきである。（後略)」（『鎌倉市史　総説編』,p.294）とし、『鎌倉事典』もまた「（前略）長谷の地名は長谷寺が創建された鎌倉中期以後であるから（鐘銘に文永元年［一二六四］新長谷寺とあるので、寺はそのころには建立されていた)、小路名も長谷の地名が人々の間に明確になってからであろう。（後略)」と推察する（『鎌倉事典』,p.242)。

なお､「長谷」という地名は『新編相模国風土記稿』には「江戸より行程十三里、小坂郷に屬す、觀音堂起立ありしより寺號によりて村名となすとなり、（後略)」（『新編相模国風土記稿』第 5 巻 ,p.36）という記述がみられる。また 1870 年に編纂された『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』では「（前略）往昔（年歴不詳）大和国長谷観音ノ像洪水二流サレ当国三浦郡長井浦へ漂着セシヲ此地二移シ新長谷寺ヲ建立セシヨリ自ラ長谷ヲ以テ地名トナスト云フ」（『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』,p.617）とあることから、長谷という地名は現在長谷 3 丁目に存在する長谷寺が由来であることがわかる。

地名成立の前提となる長谷寺の建立は、寺伝では奈良時代とされているものの、他の資料からは中世以前の寺の様子について知ることができない。『鎌倉市史　総説編』では「（前略）同寺の銅鐘の銘に新長谷寺の文字があり、それに文永元年七月十五日の年月が刻まれており、同寺所蔵の嘉暦元年十月九日の銘のある懸仏に、新長谷観世音菩薩の文字があることなどによって、同寺は大体鎌倉時代の中期にはできていたように思われる。（後略)」（『鎌倉市史　総説編』,p.294）と推察されており、各種資料から確実に長谷寺の存在が証明できるようになるのは 13 世紀後半からになろう。

また、長谷村の範囲について『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』は「此地鎌倉ノ盛時二於テハ其府内ニアリテ今ノ如ク村界ノ区別無クシテ徳川氏政治ノ初旧鎌倉府ノ小部分ナル甘縄ト深沢ノ里（一二深沢郷二作ル）ノ里ノ内トヲ合セテ今ノ長谷村トハナシタリ（後略)」（『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』,P.617）とあり、江戸時代には、甘縄・深沢の一部を範囲としていたとわかる。『神奈川の地名』によれば「現在の長谷１－５丁目･由比ガ浜３－４丁目･坂ノ下」（『神奈川の地名』,P.278）が該当するとされており、それに従えば今回の調査地点も、江戸時代においては長谷村の範囲内であっ

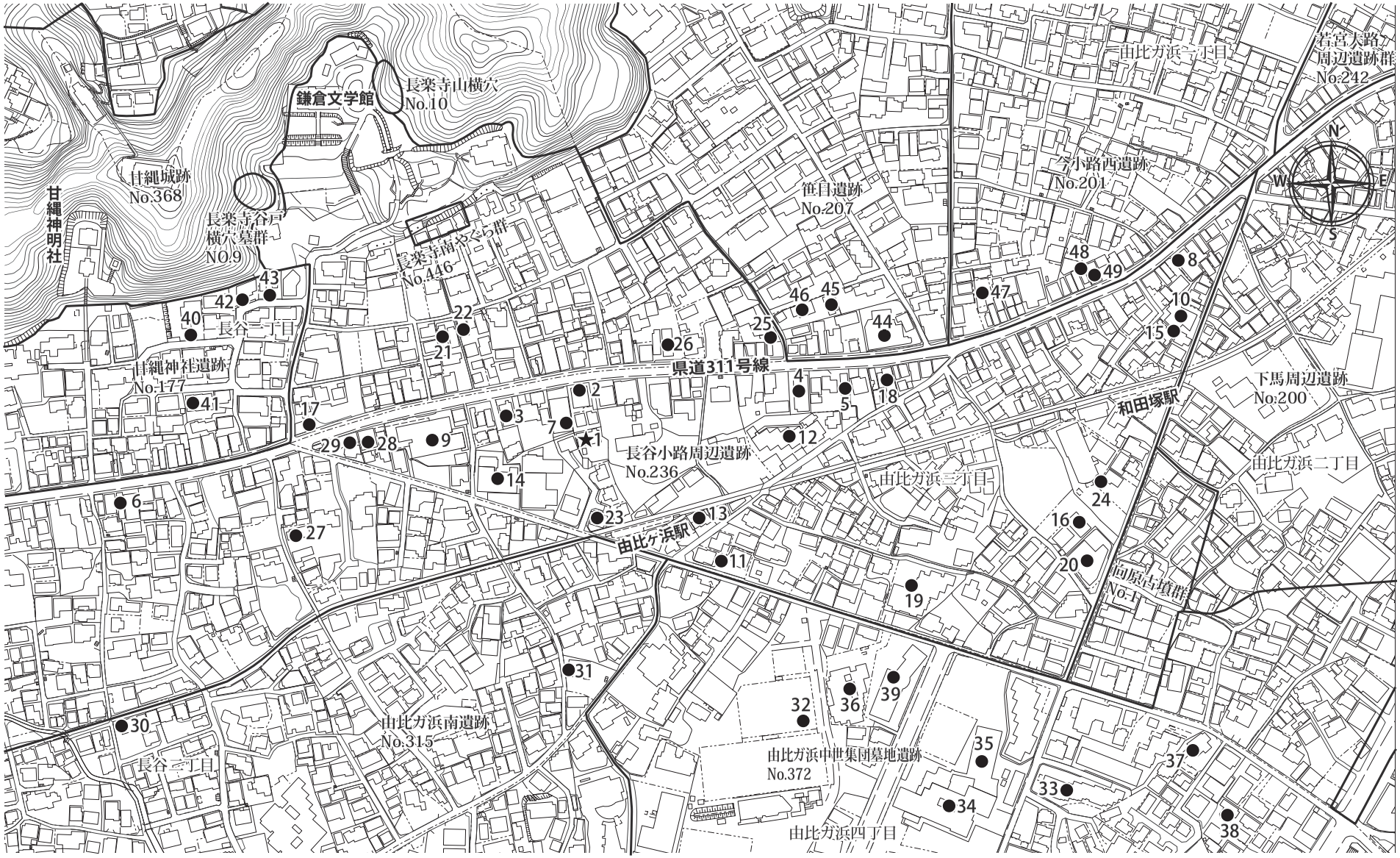

鎌倉文学館
長楽寺山横穴
No.10
甘縄城跡
No.368
甘縄神明社
長楽寺谷戸
横穴墓群
NO.9
長楽寺南やぐら群
No.446
笛目遺跡
No.207
今小路西遺跡
No.201
由比ガ浜一丁目
若宮大路
周辺遺跡群
No.242
長谷二丁目
甘縄神祇遺跡
No.177
県道311号線
下馬周辺遺跡
No.200
和田塚駅
長谷小路周辺遺跡
No.236
由比ガ浜二丁目
由比ガ浜三丁目
由比ガ浜駅
向原古墳群
No.1
由比ガ浜南遺跡
No.315
長谷二丁目
由比ガ浜中世集団墓地遺跡
No.372
由比ガ浜四丁目
N
W
E
S

図１　調査地の位置

たと考えられる。

さて、長谷小路周辺の地形の発達について、上本進二氏は縄文時代中～後期の急速な海退により「縄文時代前期に形成された砂州は砂丘となり、海側には新しい砂堤（海岸線に平行に形成される砂の堆積地形）が形成されるようになる」（上本 2004,p.9）とし、弥生時代中期～古墳時代前期に「海岸線が後退して飛砂が減少した長谷小路一帯には集落が形成され、砂丘の高まりは削平されて風下側の湿地は埋まった」としている（上本 2004,p.10）。上本氏は、これを「砂丘後背地」と呼んでいる。古墳時代後期～奈良・平安時代にかけ「砂丘後背地」は「御成町・由比ヶ浜 1 ～ 3 丁目まで広がり」、中世に「低湿地や砂丘間低地は埋め立てられて縮小し、少なくとも 4 列あった由比ヶ浜砂丘列は一体化した」と推察した。また、鎌倉時代後期には方形竪穴建物が建ち並ぶことから、この時期には「砂丘も移動を止めて固定されていたと考えるべきであろう」と想定している（上本 2004,p.10）。

砂丘については「飛砂によって旧湿地が覆われた結果、現況地形に近い土地が形成され、13 世紀末～ 14 世紀初頭になると方形竪穴建築址を中心に遺構群が営まれることになる」（斉木 1992,p.156）など諸説ある。

遺跡の地点と詳細は後で示すが、長谷小路周辺の発掘調査では、現代の堆積土下層に中世遺物包含層があり、その次の土層直上より中世の遺構や遺物が検出される。その下層には「白黄色砂層」（斉木 1989）（註 1）という中世基盤層（風成砂層）が堆積し、更に下層の「後背湿地」（註 2）と考えられる「黒褐色弱粘質土」（註 3）層内から 8 ～ 10 世紀代の竪穴住居等が確認されている。

長谷小路周辺遺跡を中心に発掘調査が行われた地点を図 1 に示した。1992 年までの発掘調査成果より、中世基盤層のレベルを抜き出し比較した齋木秀雄氏は「長谷小路周辺では、白黄色砂層が 9 ～ 10m の高いレベルで確認され（長谷小路南遺跡《地点 6》など）、この地域と若宮大路・一ノ鳥居を結ぶ線上に、鎌倉時代初期の自然砂丘の頂部があった」としている（斉木 1989,p.54）。砂丘の高まりについて調査成果から、地点 21 から地点 3 へ向けて砂丘が高まり、地点 3 から地点 11・地点 23 周辺に向けてなだらかに落ち、地点 31・32 あたりから再び高まっていく状況が分かってきている（註 4）。一方で、地点 49 は、地点 4 と地点 12 よりも浅いレベルから古代遺物が出土していることから、宗臺秀明氏は「『県道 311 号線』もしくは『長谷小路』より北側では『後背湿地』が最も深く、乾陸化も遅れたため飛砂の堆積もここまでおよばなかった」と推考している（宗臺 1993,p.13）。また、地点 42・43 からは長谷小路周辺遺跡・由比ガ浜南遺跡・由比ガ浜中世集団墓地遺跡で中世基盤層と想定される「白黄色砂層」は検出されていない（馬淵 2007; 福田 2013）。

近年、長谷小路周辺の発掘調査は増加傾向にあり、調査成果も集積されつつある。本遺跡の近隣からは、古墳時代後期から平安時代前半期（7 ～ 10 世紀）の遺構、中世は 13 世紀後半から 14 世紀代を中心とした遺構・遺物が検出することが分かってきている。ただし、古代と中世の間（11 ～ 12 世紀）の遺構・遺物は管見の限り確認できず、古代と中世の継続性は見ることができない。

古代の遺構・遺物については、地点 9・12・13・15・33（註 5）などから古代（古墳時代後期～平安時代前半（7 ～ 10 世紀）の竪穴住居跡が見つかっている。地点 11 では､遺構は検出されなかったが「類製塩土器」が出土しており、製塩を行っていた可能性が指摘されている（馬淵他 1994）。地点 14 からは「合体葬墓」1 基（宮田他 1997）、地点 16 からは「仰臥伸展葬の埋葬骨 1 体」と「火葬骨及び火葬址」が検出されている（宮田 2000）。地点 33 では「特殊遺構」や「祭祀遺構」も検出されている。地点 33 では、釣り針や土錘などの漁撈具と共に、穂摘み具や鋤先といった農工具も出土していることから、半農半漁で生計を立てていたのではないかと推察されている（大河内 1996）。

中世の遺構・遺物については、地点 4 では、鞴の羽口や坩堝と考えられる土製品などが出土していることから「手工業者集団に関わる生活址」が想定されている（斉木 1990）。地点 6 からは「炉状遺構」と大量の鞴の羽口、スラグなどが発見されたことから「職人集団の生活域」あるいは「工房区域」の可能性が指摘されている（斉木他 1989、斉木他 1990）。地点 9 からは「鋳造関係のスラグ、鞴の羽口、骨製品の完成品・未完品等が多く」出土しており、中でも「骨製品の「栗形」の未成品・加工途上で生じるチップ他が多く」これらの製作活動が行われていたと推察されている（斉木 1992）。地点 10 からは、アンペラ様の編み籠に入れて捨てられたかわらけや魚骨・鯨類頭骨が一括出土した他、硯の製作・修理、動物の解体から革なめし、骨製品用材切り出しなど、工芸に関係する遺構や遺物が多く出土している。地点 15 からは、出土遺物の様相から「硯や獣骨製栗型の製作といった工芸職人居住地」と想定されている（宗臺 1998）。地点 12 からは、周辺の発掘調査の成果との比較や「鏡の鋳型や鞴の羽口」といった遺物が出土したことから「鋳造作業」が行われていたことが推測されている（宗臺他 1995）。地点 16 からは、鋳造関係品、骨の未加工品などが出土していることから職人集団の居所または工房の可能性が指摘されている（宮田 2000）。地点 20 の溝 47 からは鋳造関連遺物が、まとまって出土していることから鋳造関連が盛んであったのではないかと想定されている（宗臺 2002）。地点 49 からは、模鋳銭と模鋳銭鋳型と共に仏具の一部と思われる鍍金の施された銅片が出土していることから、「銅細工・鋳物師などを生業とした職能民」が活動していたのではないかと考えられている（宗臺 1993）。

以上に記したこれまでの調査成果からわかる本調査地周辺の変遷は、次のように想定できる。海退による砂丘地帯の地形の変化により、古代から人が住み始めるようになり、当初は集落と墓が共存する地帯であったものの、古代末にあたる 11 ～ 12 世紀の一時期、本遺跡地周辺はあまり積極的な使用がなされなくなる。しかし、砂丘の移動が止まり、地形が固定化された 13 世紀後半には再び当該地に人が集まり始め、工房・居住・倉庫など様々な用途が推察される方形竪穴建物群が立地し、13 ～ 14 世紀代の長谷小路周辺には、骨製品の製造や鋳造関係、漁撈などを生業とした職能民あるいは職能集団の工房が存在し職能民が活発に活動する場所となっていた様子が窺える。

［註］

註 1 ：「白黄褐色砂層」（斉木 1992）、「黄灰色砂層」（汐見 2004）など砂層の色調表現については執筆者により異なる。

註 2 ：地点 4 の調査時に松島義章氏が、長谷小路周辺に堆積している「黒褐色弱粘質砂層」の成立について、「海岩砂丘背後の湿地様の状況が大きく影響している」と指摘し、これ以降「黒褐色弱粘質砂層」と「後背湿地」との関連が指摘されるようになった（斉木 1992）。

註 3 ：齋木秀雄氏は、1989 年に発行された「由比ガ浜三丁目 194 番 25 地点」の発掘調査報告書中、中世基盤層下に堆積する黒褐色の砂層を「黒褐色（ややチョコレート色に近い）」と表現した。以降、鎌倉では、この土層の色調について「チョコレート色」や「チョコ」といった表現がされている。

註 4 ：2002 年に汐見一夫氏が、「白黄色砂層」（中世基盤層）の標高に着目し、その高低差について「長谷小路周辺遺跡地形概念図」として報告を行った。

註 5 ：調査地点については図 1 を、調査地点の発掘調査報告書については、「第 2 節　周辺遺跡の調査成果」をご参照いただきたい。

［引用・参考文献］

鎌倉市教育委員会 1957『かまくら子ども風土記』上巻　鎌倉市教育委員会
鎌倉市教育委員会 1971『としよりのはなし鎌倉市文化財資料』第 7 集　鎌倉市教育委員会
相武史料刊行會 1930『新編　相模風土記』相武史料刊行會
神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1991『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』神奈川県図書館協会

蘆田伊人編 1970『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第 4 巻 雄山閣
蘆田伊人編 1970『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第 5 巻 雄山閣
蘆田伊人編 1970「新編鎌倉志」『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第 6 巻 雄山閣
蘆田伊人編 1970「新編鑓勝考」『大日本地誌大系（23） 新編相模国風土記稿』第 6 巻 雄山閣
上本進二 2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡』東国考古学研究所調査研究報告第 26 集 東国歴史考古学研究所
白井永二編 1976『鎌倉事典』東京堂出版
松尾宣方 1989「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世 3』平凡社
斎木秀雄 1989「鎌倉の地形を復元する」『よみがえる中世 3』平凡社
斉木他 1992『神奈川県・鎌倉市 長谷小路南遺跡―鎌倉市由比ヶ浜 3 丁目 202 番 2 外所在遺跡の発掘調査報告書―』長谷小路南遺跡発掘調査団
汐見他 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18―平成 13 年度発掘調査報告―第 2 分冊』鎌倉市教育委員会
汐見他 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20―平成 15 年度発掘調査報告―第 2 分冊』鎌倉市教育委員会
宗臺秀明 1993『今小路西遺跡 由比が浜一丁目 213 番 3 地点』今小路西遺跡発掘調査団
宗臺秀明 1994『長谷小路周辺遺跡由比ガ浜三丁目 228・229 番外（No.236）－中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明 1995『長谷小路周辺遺跡由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点（No.236）－中世都市外縁部市街地における町割りの調査―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明 2014「出土遺物からみた海浜地域の職能民」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
鈴木弘太 2013『ものが語る歴史 29 中世都市鎌倉の海浜地域と竪穴建物』同成社
高柳光寿 1959『鎌倉市史 考古編』 吉川弘文館
高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』 吉川弘文館
福田他 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29―平成 24 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会
松葉崇 2014「中世鎌倉の葬送―海浜地域を中心として―」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団
馬淵他 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23―平成 18 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会
萬年一剛 2014「掘削によってあきらかになった鎌倉・逗子の平野発達史」『神奈川県温泉地学研究所 平成 26 年度研究成果発表会講演要旨集』神奈川県安全防災局
森孝子 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―由比ヶ浜 3 丁目 2 番 200 地点（No.236）』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
山口正紀 2014「鎌倉（海浜地域）の概要」『考古学から見る公開セミナー 中世都市鎌倉の海浜地域』公益財団法人かながわ考古学財団

第 2 節 周辺遺跡の調査成果（図 1）

神奈川県遺跡台帳に登録されている遺跡名称と番号、調査地点一覧を図 1 に表した。調査地点の詳細については、以下の通りである。今回、未報告の調査地点は、図 1 及び調査地点一覧に示していない。

＜調査地点一覧＞

長谷小路周辺遺跡 NO.236

1．由比ガ浜三丁目 194 番 71（本調査遺跡）
2．由比ガ浜三丁目 194 番 25 他（斉木他 1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5―昭和 63 年度発掘調査報告―』鎌倉市教育委員会）、由比ヶ浜三丁目 194 番 25 外（斉木他 1990『由比ヶ浜三丁目 194 番 25 外遺跡調査報告書―長谷小路周辺遺跡群内、秋山ビル建設に伴う緊急発掘調査―』長谷小路遺跡発掘調査団）
3．由比ガ浜三丁目 199 番 1（斉木他 1990『神奈川県・鎌倉市 由比ヶ浜三丁目 199 番 1 地点遺跡調

査報告書―長谷小路周辺遺跡群内、福地ビル建設に伴う緊急発掘調査―』由比ヶ浜三丁目 199 番 1 地点所在遺跡発掘調査団）
4．由比ガ浜三丁目 258 番 8（斉木他 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6―平成元年度発掘調査報告―』鎌倉市教育委員会）
5．由比ガ浜三丁目 9 番 41（斉木他 1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』32 神奈川県教育委員会）
6．長谷二丁目 252 番 1(菊川他 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7―平成 2 年度発掘調査報告―』鎌倉市教育委員会）
7．由比ガ浜三丁目 194 番 24（宗臺他 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7―平成 2 年度発掘調査報告―』鎌倉市教育委員会）
8．由比ガ浜三丁目 223 番 11（斉木他 1991『神奈川県埋蔵文化財調査報告』33 神奈川県教育委員会）
9．由比ガ浜三丁目 202 番 2（斉木他 1992『神奈川県・鎌倉市　長谷小路南遺跡―鎌倉市由比ヶ浜 3 丁目 202 番 2 外所在遺跡の発掘調査報告書―』長谷小路南遺跡発掘調査団）
10. 由比ガ浜三丁目 229 番外（宗臺他 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9―平成 4 年度発掘調査報告―（第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会）
11. 由比ガ浜三丁目 1175 番 2（馬淵他 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10―平成 5 年度発掘調査報告―（第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会）
12. 由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点（斉木他 1995『神奈川県鎌倉市長谷小路周辺遺跡　由比ガ浜三丁目 258 番 1 地点（No．236）―中世都市外縁部市街地における町割りの調査―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団）
13. 由比ガ浜三丁目 194 番 40（大河内他 1997『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―由比ヶ浜三丁目 194 番 40 地点―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団）
14. 由比ガ浜三丁目 2 番 200（宮田他 1997『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡群発掘調査報告書―由比ヶ浜 3 丁目 2 番 200 地点（No.236）―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団）
15. 由比ガ浜三丁目 228 番 2（宗臺他 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14―平成 9 年度発掘調査報告―（第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会）
16. 由比ガ浜三丁目 1262 番 6（宮田他 2000『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査団調査報告書―由比ガ浜三丁目 1262 番 6 外地点（No.236）―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団）
17. 長谷一丁目 209 番 4（桝渕規彰 2000『神奈川県埋蔵文化財調査報告』43 神奈川県教育委員会）
18. 由比ガ浜三丁目 254 番 15（原他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17―平成 12 年度発掘調査報告―（第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会）
19. 由比ガ浜三丁目 1173 番（押木他 2001『鎌倉遺跡調査会調査報告 21 集 神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡―第 20 地点発掘調査報告―』鎌倉市長谷小路周辺遺跡発掘調査団）
20. 由比ガ浜三丁目 1262 番 2、1251 番 1・2（宗臺他 2002『東国歴史考古学研究所調査研究報告第 31 集 長谷小路周辺遺跡（No.236）由比ガ浜三丁目 1262 番 2、1251 番 1・2 地点発掘調査報告書―弥生中期～平安時代葬送地から中世方形竪穴建物群地域へ―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団／東国歴史考古学研究所
21. 長谷一丁目 205 番 12（汐見他 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18―平成 13 年度発掘調査報告―（第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会）
22. 長谷一丁目 199 番 20 外（斉木 2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』45 神奈川県教育委員会）

23. 由比ガ浜三丁目 194 番 50（汐見他 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20―平成 15 年度発掘調査報告―（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会）
24. 由比ガ浜三丁目 1256 番 4・5、1260 番 1・3・4・5（宮田・滝沢他 2005『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書（鎌倉市由比ガ浜三丁目 1256 番 4・5、1260 番 1・3・4・5 地点）』株式会社博通）
25. 長谷一丁目 270 番 1 外（2006『神奈川県埋蔵文化財調査報告』51 神奈川県教育委員会）
26. 長谷一丁目 265 番 19（伊丹他 2010『鎌倉市埋蔵文化財発掘調報告書 26―平成 21 年度発掘調査報告―（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会）
27. 長谷二丁目 171 番 4（熊谷他 2012『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』（有）鎌倉遺跡調査会）
28. 由比ガ浜三丁目 206 番 6 外(赤堀他 2015『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』31 鎌倉市教育委員会）
29. 由比ガ浜三丁目 207―1 外 3 筆地点（齊木他 2015『神奈川県・鎌倉市 長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―由比ガ浜三丁目 207―1 外 3 筆地点―』有限会社鎌倉遺跡調査会

由比ヶ浜南遺跡 NO.315

30. 長谷二丁目 122 番 9、10（1990『神奈川県埋蔵文化財調査報告』32）
31. 長谷二丁目 188 番 2 外（瀬田他 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11―平成 6 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会）

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 NO.372

32. 由比ガ浜四丁目 1181 番外（1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I―昭和 46 年度～ 52 年度―』鎌倉市教育委員会）
33. 由比ガ浜四丁目 1134 番 1（大河内他 1996『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書 鎌倉市由比ヶ浜四丁目 1134 番地点における古代および中世遺跡の埋蔵文化財調査報告（第 1 分冊・古代編）』由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団）
34. 由比ガ浜四丁目 1136 番（大河内他 1997『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書―由比が浜四丁目 1136 番地点（KKY 鎌倉若宮荘）―< 第一次調査 >（第 1 分冊）（第 2 分冊）』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団）
35. 由比ガ浜四丁目 1136 番 11（斉木他 1997『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書―由比が浜四丁目 1136 番地点（KKY 鎌倉若宮荘）―< 第二次調査 >』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団）
36. 由比ガ浜四丁目 1179 番 1 他（斉木他 2001『由比ヶ浜中世集団墓地遺跡―5 地点 1 次・2 次調査―』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会調査報告書）36 由比ガ浜四丁目 1171 番 3（未報告）
37. 由比ガ浜四丁目 1133 番 1 外（2003『神奈川県埋蔵文化財調査報告』46）
38. 由比ガ浜四丁目 1107 番 32（森他 2011『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28―平成 23 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会）
39. 由比ガ浜四丁目 6 番 9（斉木 1994『神奈川県・鎌倉市 由比ガ浜 4―6-9 地点発掘調査報告書―大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団）
39. 由比ガ浜四丁目 1170 番 1（宮田・滝澤他 2014『株式会社 博通報告書第 63 集 神奈川県 鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）発掘調査報告書（鎌倉市由比ガ浜四丁目 1170 番 1 地点）』株

式会社博通・株式会社斉藤建設）

甘縄神社遺跡群 NO.177

40. 長谷一丁目 227 番（1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I―昭和 46 年度～ 52 年度―』鎌倉市教育委員会）
41. 長谷一丁目 236 番 1（1992『神奈川県埋蔵文化財調査報告』34）
42. 長谷一丁目 227 番 25（馬淵他 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23―平成 18 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会）
43. 長谷一丁目 227 番 24（福田他 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29―平成 24 年度発掘調査報告―（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会）笹目遺跡 NO.207
44. 笹目町 287 番 1（2005『鎌倉の埋蔵文化財 8』鎌倉市教育委員会）
45. 笹目町 285 番 1 外(伊丹他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17―平成 12 年度発掘調査報告―（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会）
46. 笹目町 286 番 1 外（伊丹他 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17―平成 12 年度発掘調査報告―（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会）

今小路西遺跡 NO.201

47. 由比ガ浜一丁目 211 番 18、19 外（熊谷他 2013『今小路西遺跡発掘調査報告書 由比ガ浜一丁目 211 番 18,19 外』）
48. 由比ガ浜一丁目 213―12（熊谷他 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28―平成 23 年度発掘調査報告―（第 2 分冊）』鎌倉市教育委員会）
49. 由比ガ浜一丁目 213 番 3(宗臺他 1993『神奈川県鎌倉市 今小路西遺跡 由比ガ浜一丁目 213 番 3 地点』今小路西遺跡発掘調査団）

第二章　調査の概要

第１節　調査経過と方法（図２）

本発掘調査は、 個人住宅の建設に伴う事前の記録保存を目的として、鎌倉市教育委員会が実施した。本調査地周辺では発掘調査が多く行われており、その調査成果によって現地表面下 1m 前後で中世の遺跡が検出されることがわかってきている。当調査地点からも遺跡の検出が予想されたため発掘調査の実施に至った。

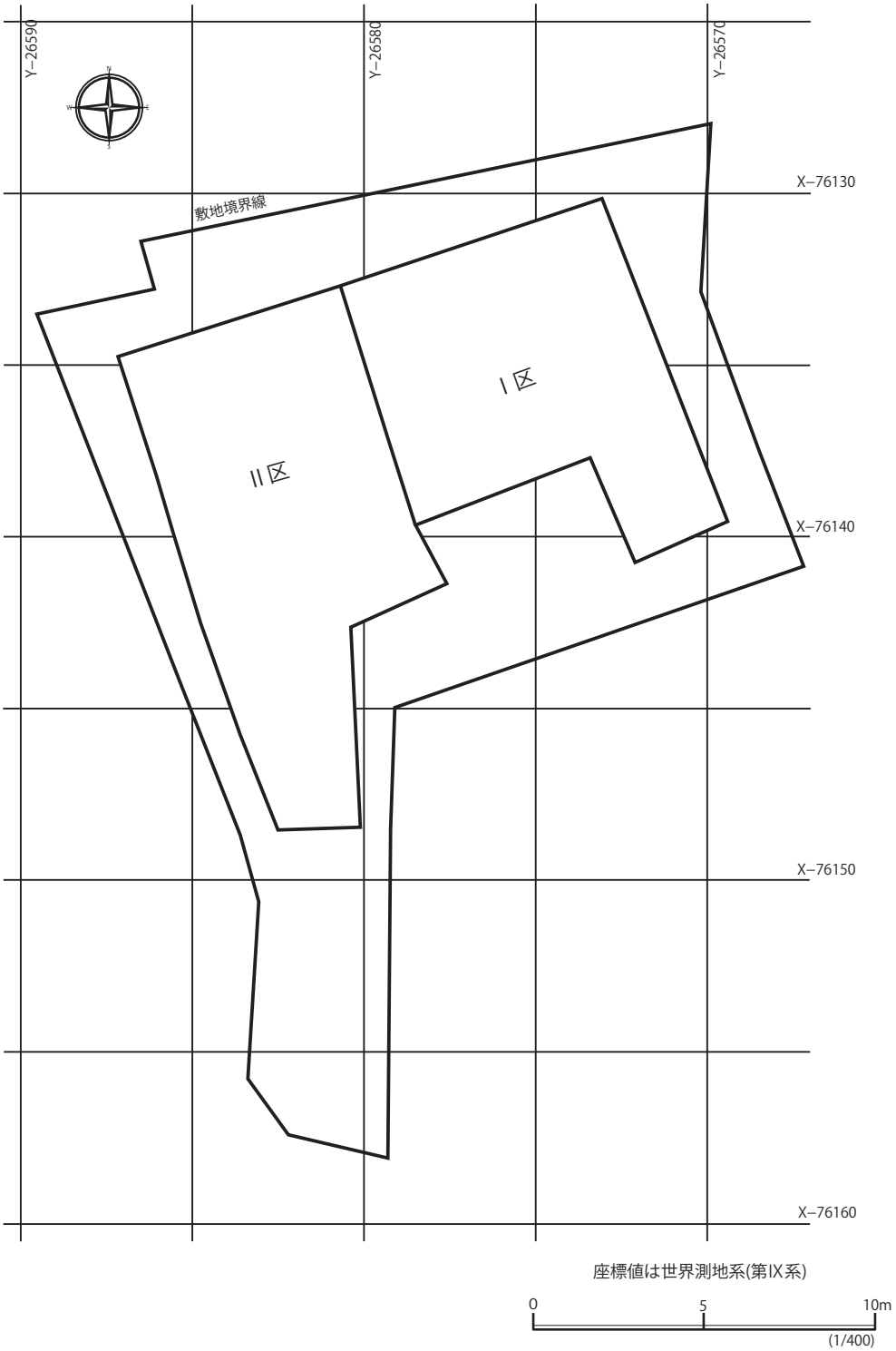


図２　調査区設定図

平成 25 年 11 月 1 日から平成 26 年 3 月 7 日までの実質 4 ヶ月にわたって発掘調査を行った。掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区を二分割し、先行して着手した東部をⅠ区、西部をⅡ区とした。11 月 5 日に重機によるⅠ区の表土掘削を行い、順次、遺構掘削と記録作業を進めた。1 面確認時点で、掘削深度が現地表面から 2m 近くになったことや堆積土が砂であることから、安全性に配慮し、下層での調査については調査面積を狭めトレンチを設定して確認作業を行った。12 月 24 日から 25 日にⅠ区の埋め戻し、Ⅱ区の表土掘削を重機で行った。平成 26 年 2 月 25 日までⅡ区の調査を進めた。2 月 7 日にⅡ区調査区の西壁が崩落したため、調査区を狭めトレンチを設定し確認調査を行った。3 月 7 日には調査器材の撤収を行い、現地での調査工程を全て終了した。

測量に当たっては公共座標系（世界測地系第Ⅸ系）に即した座標軸を設定し、都市再生街区基準点（補助点）「3A437」と「3A436」より光波測量機による開放トラバース測量で座標の数値を移動した。

第 2 節　堆積土層と面の概要（図 3）

図 3 に当調査地の調査区北壁・東壁の堆積土層を示した。Ⅰ・Ⅱ区の調査共に、掘削深度が 2m を超えたため、現地表面から 2m 以下の層位については、トレンチ調査で確認した堆積土層を合成している。

地表面と表土（図３　土層番号 1）

現地表面は標高 10.5m 前後である。近代の建物基礎により最も深い箇所で現地表面から深度 2.8 ～ 2.7m 程まで削平を受けている。

１面（図３　土層番号 4）

1 面の堆積はⅠ区でしか確認することができなかった。粒が細かく少し大きい貝殻片をやや多く包含する茶褐色砂質土である。第 1･2 層（図 3 参照）により中世の遺構覆土との区別が極めて困難であったが、炭化物や遺物など包含物の微量な差、覆土の色調の違いなどによって遺構が確認できたため第 4 層直上（図 3 参照）を中世面と判断した。海抜は 8.8m ～ 8.9m。

２面（図３　土層番号 6）

2 面の灰褐色砂質土は、土器など人為的な遺物を包含しない風成砂層（中世基盤層）である。海抜は 8.1m ～ 8.35m。

３面（図３　土層番号 23）

3 面は、やや粘性のある黒褐色砂質土で、漆黒砂や貝砂を包含している。腐植土層と考えられる。古代遺構面はⅡ区のみ確認できた。古代遺構は、中世遺構と思われる第 8 層（図 3 参照）より削平を受けている。海抜は 8.15m ～ 8.20m。

４面（図３　土層番号 24）

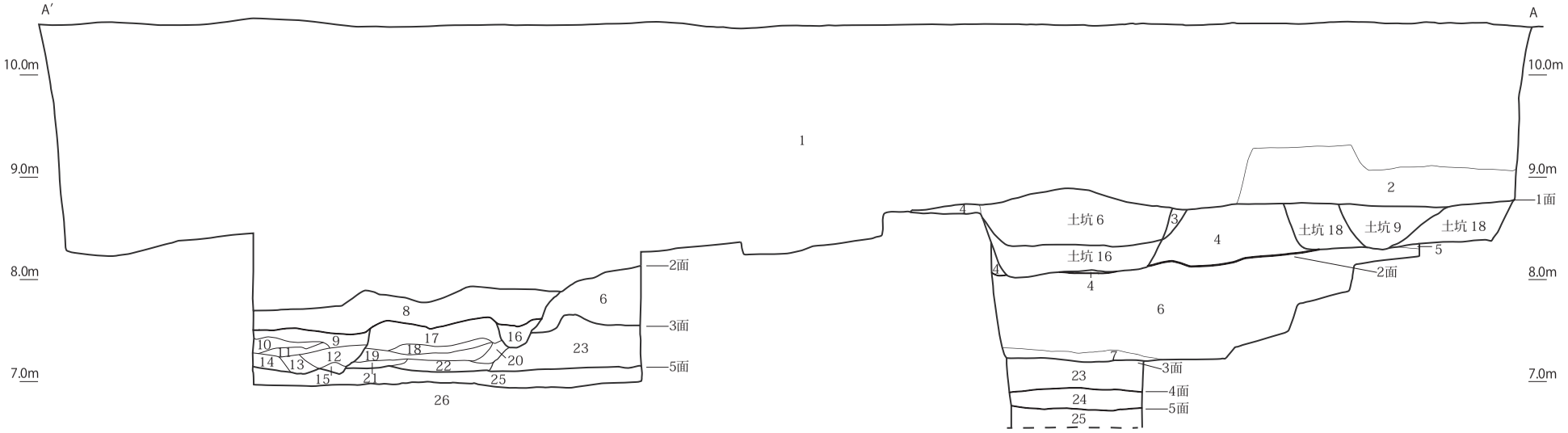
4 面は、しまりがあり、やや湿っている暗茶褐色砂質土で無遺物層である。海抜は 6.9m ～ 6.95m。

５面（図３　土層番号 25）

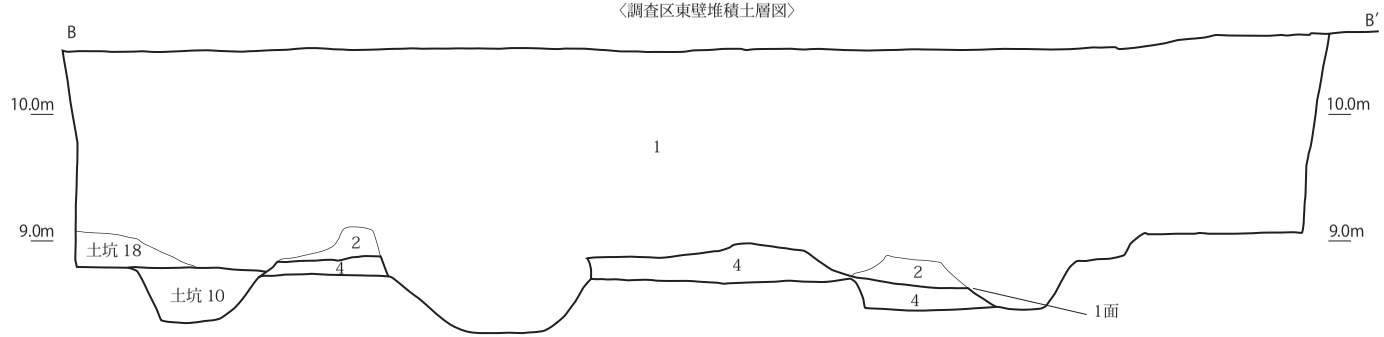
5 面は、黄褐色砂質土で粒状の黒色粘土・貝砂を含む無遺物層である。湧水のため壁面のみの確認となったが、遺物を全く含まない海砂層と思われる。海抜は 6.75m ～ 6.80m。

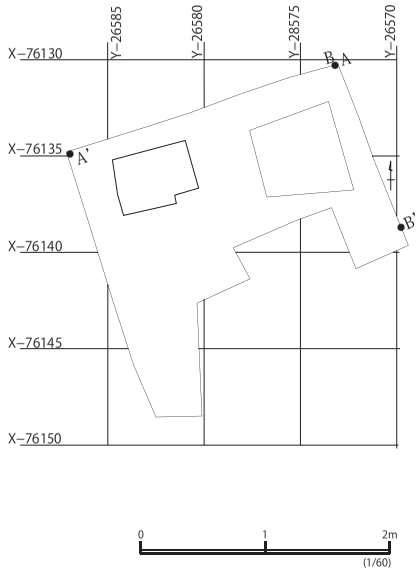
各層の詳細については、図 3 を参照されたい。

〈調査区北壁堆積土層図〉



〈調査区東壁堆積土層図〉





1. 現代の堆積(表土)
2. 暗褐色砂質土　炭化物・泥岩粒・貝砂 (中世遺物包含層)
3. 灰褐色砂質土　貝砂
4. 茶褐色砂質土　貝砂 (1面構成土)
5. 明茶褐色砂質土 貝殻片 多量・硬い
6. 灰褐色砂質土　貝砂 (中世砂層)
7. 暗褐色砂質土　円形に灰褐色砂が混じる
8. 暗茶褐色砂質土 中世遺物多く混入・炭化物・貝砂・粘土粒・泥岩粒
9. 褐色砂質土　泥岩粒・炭化物
10. 黒褐色粘質砂　粘土ブロック・焼土・炭化物
11. 黒褐色粘質土　焼土・炭化物
12. 暗褐色砂質土　粘土粒・炭化物
13. 暗褐色砂質土　粘土粒・炭化物・灰粒
14. 暗褐色砂　炭化物・下位の一部に灰粒混入
15. 暗褐色砂質土　炭化物・灰粒
16. 暗褐色砂質土　かわらけ片・炭化物 (中世遺構か?)
17. 褐色砂質土　粘土粒・炭化物微量
18. 褐色砂質土　上面に締まり強い粘土層が堆積 粘土粒・灰粒
19. 褐色砂質土　粘土粒・炭化物微量
20. 暗褐色砂
21. 黒褐色砂質土　炭化物
22. 褐色砂質土　炭化物微量
23. 黒褐色砂質土　漆黒砂・貝砂
24. 暗茶褐色砂質土 やや湿り有・若干締まりあり
25. 黄褐色砂質土　黒色粘土か粒状に堆積・貝砂
26. 灰褐色砂

図３　調査区北壁・東壁堆積土層図

第三章　検出遺構と出土遺物

中世第１面の上層には暗褐色砂質土（図３第２層）の中世遺物を含む堆積土が約 20 ～ 60cm堆積していたが、攪乱により大部分が削平されていたため、中世の遺構は確認されなかった。海抜 6.5m の無遺物層まで調査を行った。以下、１面から検出した遺構と遺物を順に述べていく。

第１節　１面検出遺構と出土遺物（図４～９）

１面は、現地表面より約 1.60m 掘り下げた標高 8.9m、図３第４層直上から遺構を確認した。検出した遺構は土坑 27 基、ピット６基である。Ⅱ区は、攪乱により全域が削平されていたため、中世の遺構を確認することができなかった。また、本調査地の堆積土が砂であったため調査期間中の降雪により西壁が崩落し、周辺の壁面も崩落する危険性があったため、安全を考慮しⅡ区全域の調査の継続を断

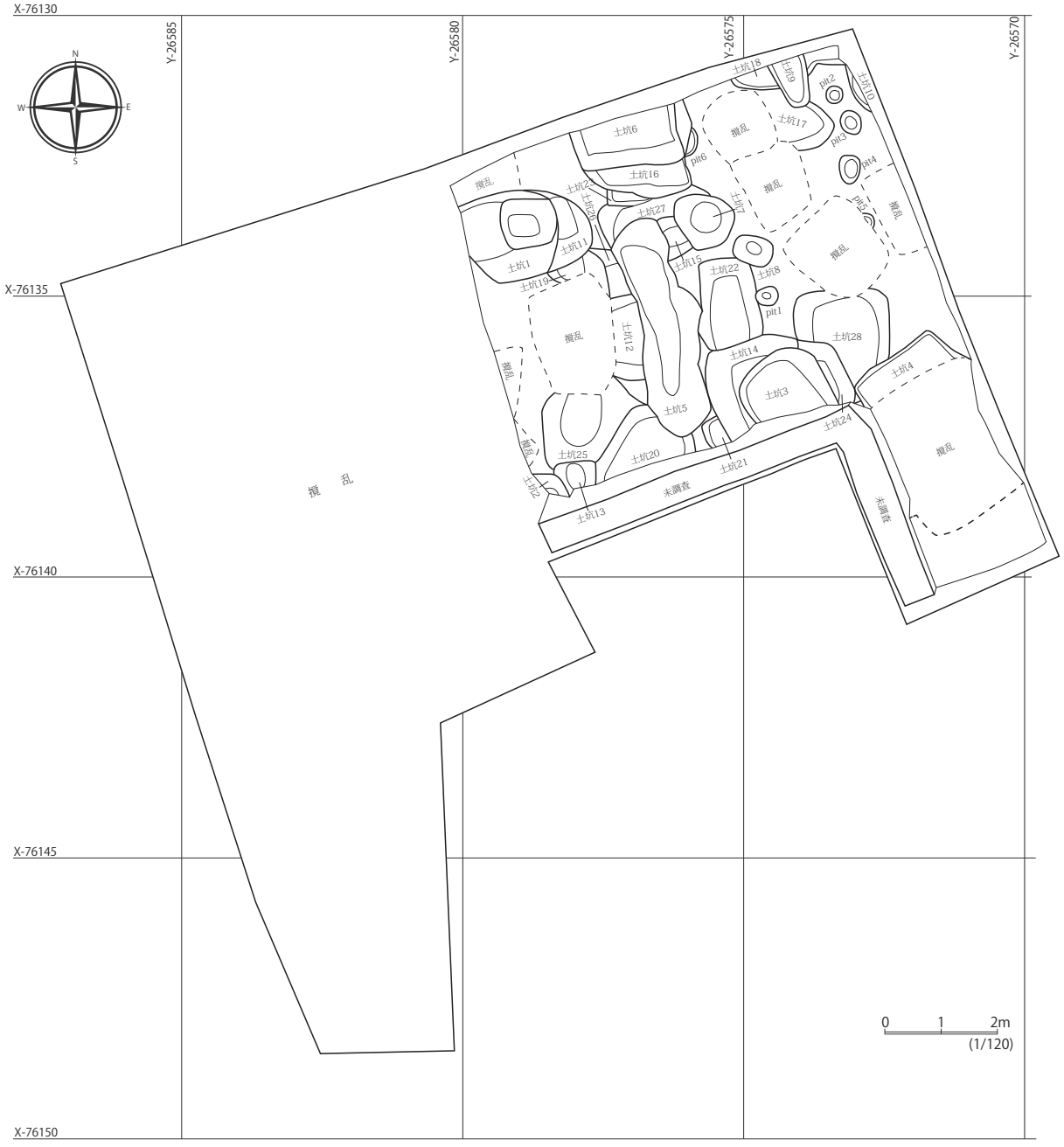


図４　全体図（ 中世）

念した。遺物の出土していない遺構は表 1 を、遺物の法量や特徴については表 2 を参照されたい。

土坑 1・11（図 5）

土坑 1 と 11 は調査区北西で発見した土坑である。土坑 1 は残存長軸 1.65m、残存短軸 1.6m、深さ 1m を測り、残存部孤状を呈する。土坑 11 は残存長軸 1.3m、残存短軸 0.62m、深さ 0.6m を測り、残存部は短辺に丸みを持つ楕円形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、2 基とも 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 11 より土坑 1 が新しい。

土坑 1 からは、かわらけ大皿片 5 点、瀬戸窯柄付片口片 1 点、常滑窯甕片 1 点、貝 7 点、土師器：武蔵型甕片 2 点・相模型甕片 1 点・相模型坏片 1 点が出土している。図 5-1 はかわらけ大皿である。土坑 11 からは、かわらけ大皿片 4 点とスラグ 1 点が出土している。図 5-2 は、かわらけの大皿である。

土坑 2・13（図 5）

土坑 2 は、調査区南西角で発見された。規模は残存長軸 0.4m、残存短軸 0.3m、深さ約 0.36m を測り、残存部形は弧状を呈する。土坑 13 の規模は残存長軸 0.7m、残存短軸 0.4m、深さ約 0.14m を測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 2 は土坑 13 より新しい。

土坑 2 からは、かわらけ小皿片 1 点、大皿片 17 点、瀬戸窯器種不明片（四耳壺の可能性有）1 点、産地不明陶器片 1 点、骨 1 点、貝 8 点、土師器：相模型坏片 1 点が出土している。図 5-3 は、かわらけの小皿 1 点、4 ～ 6 の大皿 3 点、7 の産地不明陶器片 1 点である。土坑 13 からは、出土遺物は骨 2 点、貝 6 点が出土しているが、小破片のため図示していない。

土坑 3（図 5）

調査区南東側で検出された。規模は残存長軸 1.2m、残存短軸 1m、深さ 0.2m を測る。残存部は楕円形を呈する。覆土は、上層は黒褐色系の砂質土である。下層は 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を有する。上層・下層とも貝殻粒を多く含んでいる。

土坑 3 からは、かわらけ小片 16 点、大皿片 67 点、器種不明青磁片 1 点、常滑窯甕片 2 点・壺片 1 点、釘 1 点、骨 1 点、貝 20 点、古代遺物（器種不明）1 点が出土した。図 5-8・9 はかわらけ小皿、10 は釘である。

土坑 4（図 5）

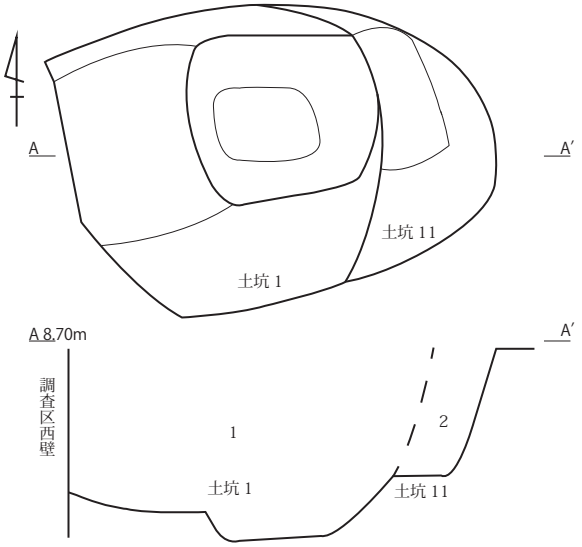
調査区南東側で発見した。遺構の南側は攪乱による削平を受けている。規模は残存長軸 1.75m、残存短軸 0.53m、深さ 0.13m を測る。覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

土坑 4 からは、かわらけ小皿片 2 点、大皿片 13 点、青白磁梅瓶片 2 点、常滑窯片口鉢 I 類片 1 点、スラグ 2 点、貝 2 点、須恵器：甕片 1 点・坏片 1 点、土師器：武蔵型甕片 2 点などが出土した。図 5-11・12 は青白磁梅瓶である。12 は、火を受けたのか釉が溶けて模様が確認できない。

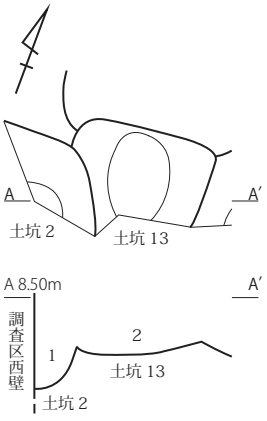
土坑 7・土坑 15（図 5）

土坑 7 は、長軸 1m、短軸 0.96m、深さ約 0.35m を測り、楕円形を呈す。土坑 15 の規模は、残存長軸 0.75m、残存短軸 0.31m、深さ約 0.22m を測り、残存部より楕円形と推定される。覆土は、混入物の違いはあるものの、2 基とも 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 7 は、土坑 15 より新しい。

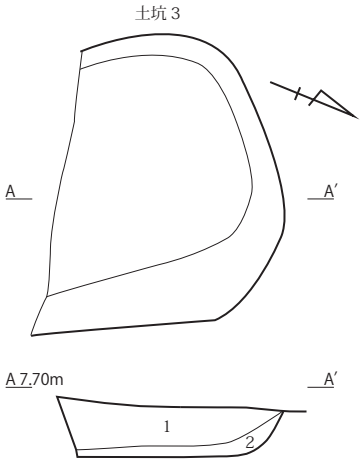
土坑 7 からは、かわらけ小皿 14 点、大皿片 29 点、常滑窯甕 3 点、常滑窯尾張型山茶碗 1 点、土鍋 1 点、釘 1 点、鍵 1 点、骨 4 点、貝 14 点が出土した。図 5-13 はかわらけ小皿、14 は常滑窯尾張型山



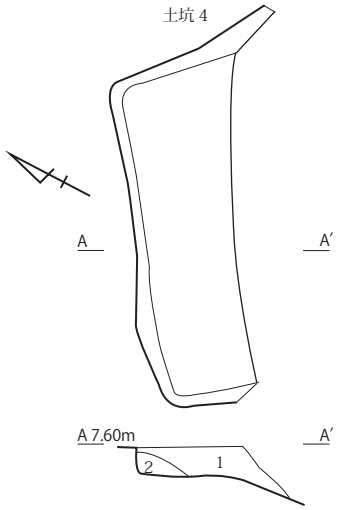
1. 暗褐色砂質土 : 黒色粘質土 泥岩
2. 暗褐色砂質土 : 泥岩粒・炭化物



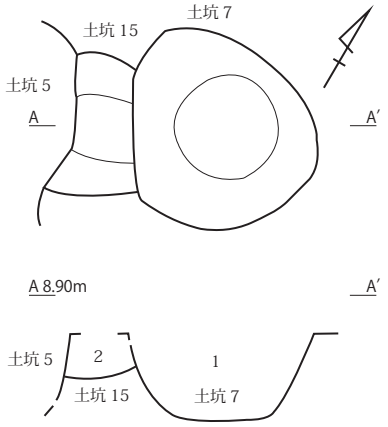
1. 暗褐色砂質土：土丹粒・炭化物・貝砂
2. 暗褐色砂質土：貝砂・炭化物・褐色砂



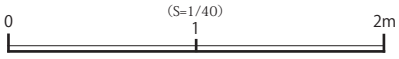
1. 黒褐色砂質土 : 土丹粒 微量・かわらけ粒 微量・貝殻粒
多量・炭化物 微量・締まりややあり
2. 暗褐色砂質土 : 貝殻粒 中量・炭化物 微量・締まりなし

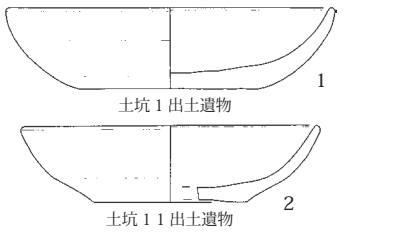


1. 暗褐色砂質土 : 黒色砂質土 少量・貝殻粒 微量
2. 暗褐色砂質土 : 貝殻粒 中量



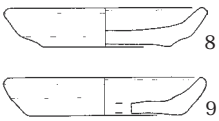
1. 暗褐色砂質土 : 炭化物・粘質土・泥岩粒・貝砂
2. 暗褐色砂質土 : 貝砂・炭化物・褐色砂



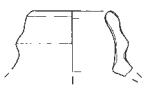


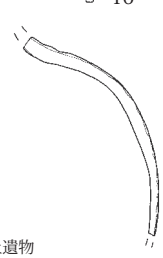
土坑 1 出土遺物

土坑 1 1 出土遺物

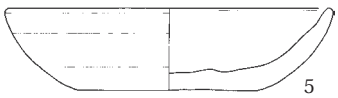


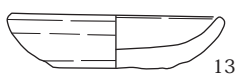
土坑 3 出土遺物

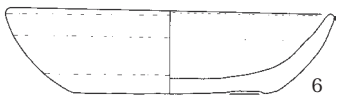


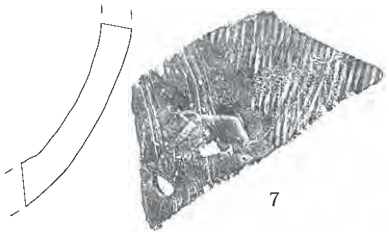


土坑 4 出土遺物

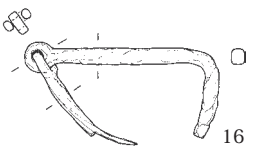








土坑 2 出土遺物



土坑 7出土遺物

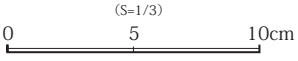


図５　１面遺構と遺物（1）

茶碗、15 は釘、16 は不明鉄製品である。16 の不明鉄製品は、形状から鍵の可能性がある。土坑 15 からは、かわらけ小皿片 2 点と渥美窯甕片 1 点が出土しているが、小破片のため図示していない。

土坑８（図６）

土坑 8 の規模は残存長軸 0.7m、残存短軸 0.5m、深さ約 0.22m を測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

土坑 8 からは、かわらけ大皿片 1 点のみ出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

土坑９･18（図６）

調査区北壁東側で発見された。調査時、同じ遺構として掘り上げたが、別の遺構である可能性が考えられる。規模は残存長軸 1.9m、残存短軸 0.8m、深さ約 0.5m を測り、残存部形は両方楕円形を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。

土坑 9･18 からは、かわらけ小皿片 2 点、中皿片 1 点、大皿片 5 点、滑石製鍋片 1 点、骨 1 点、貝 2 点が出土している。図 6-1 はかわらけ中皿である。

土坑 10（図６）

個別に図示していないが、調査区東壁の一番北側で発見された遺構である。規模は残存長軸 0.95m、残存短軸 0.15m、深さ約 0.39m を測り、残存部形は孤形を呈する。覆土は暗褐色粘質土である。

土坑 10 からは、かわらけ小皿片 12 点、大皿片 37 点、常滑窯甕 4 点、産地不明の甕片 1 点、不明金属製品 2 点、骨 3 点、貝 60 点が出土している。図 6-2 ～ 7 はかわらけ小皿片、8 ～ 10 はかわらけ大皿、11 は常滑窯甕、12 は産地不明の甕である。格子状の押印が施されている。

pit2（図６）

覆土は、混入物の違いはあるものの 4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。

pit2 からは、かわらけ大皿片 1 点のみ出土しているが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

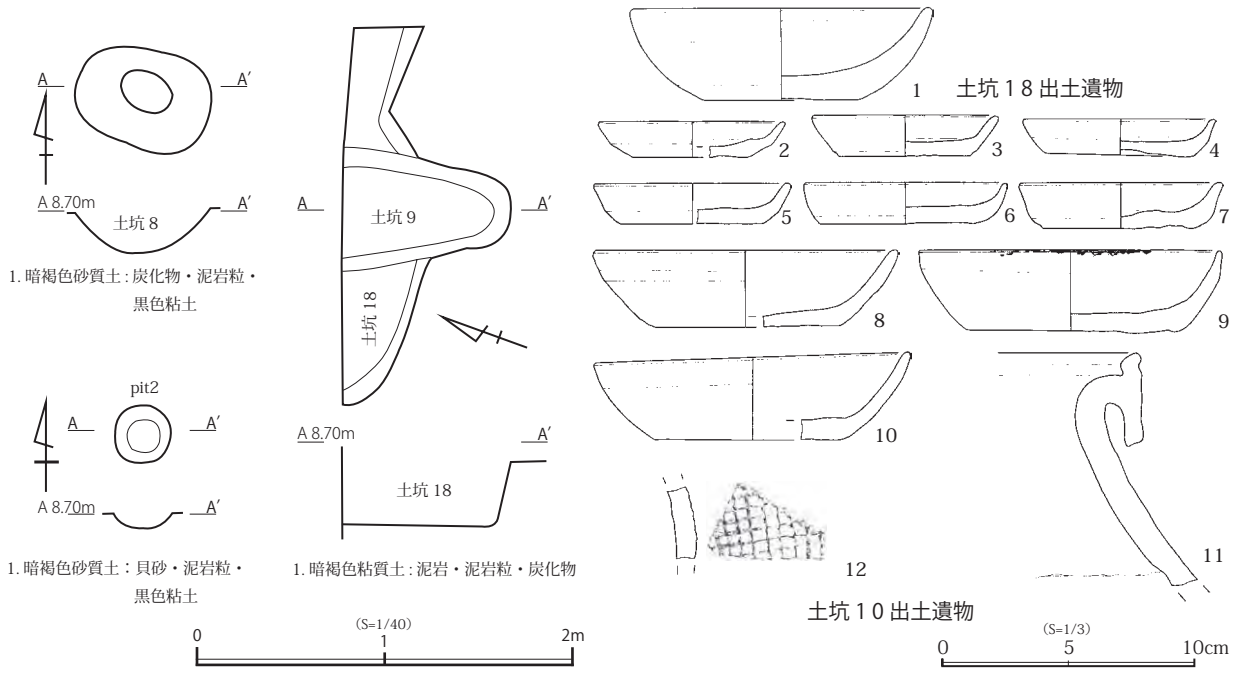


図６　１面遺構と遺物（2）

土坑５・６・16・20・23・27（図７）

多数の土坑が複雑に切り合っていたためⅠ区調査区中央に南北ベルトを残して土層の確認を行った。

土坑５（図７）

調査区中央に位置する。土坑５は長軸約 3.9m、短軸 0.85m、深さ約 1.2m を測り、残存部は細長い楕円形を呈す。覆土は茶褐色～暗褐色の砂質土である。土坑としたが、長軸 3m 以上、深さ 1.2m と周辺の遺跡で検出された土坑と比べ大型であることから他の機能を持つ遺構の可能性も考えられる（図７第１･２･３･４･５･６層）。上層の攪乱により一部削平をうけている。土坑 15･20･27 より新しい。

土坑５からはかわらけ小皿片 21 点、大皿片 153 点、青磁連弁文碗片１点、常滑窯甕７点、常滑窯壺類１点、常滑窯片口鉢Ⅰ類１点、鞴の羽口１点、銭１点、骨９点、貝 44 点が出土した。図 7-1 ～ 4 はかわらけ小皿、5･6 は大皿、7 は常滑窯片口鉢Ⅰ類、8 は元符通寶である。

土坑６･16（図７）

プラン確認時は１つの遺構と判断したが、南北ベルトを入れ覆土を確認したところ別々の遺構であることがわかった。土坑６は、残存長軸 1.9m、残存短軸 0.9m、深さ約 0.1m を測り、残存部は長方形を呈す。土坑 16 は、残存長軸 1.5m、残存短軸 0.6m、深さ約 0.4m を測り、残存部は歪な楕円形である。覆土は、混入物の違いはあるものの４層（図３）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする（図７第９層）。土坑６、16 の順に新しい。

土坑６からは、かわらけ大皿片２点、小皿片２点、貝 43 点、須恵器：甕片１点・長頸瓶片１点、土師器：武蔵型甕片１点・相模型甕片１点・三浦型甕片４点・相模型坏片２点が出土した。土坑 16 からは、かわらけ小皿片４点、大皿片 50 点、褐釉片１点、常滑窯甕片１点、加工痕のある土丹２点、釘１点、笄１点、骨 11 点、貝 69 点、須恵器：坏片１点、土師器：武蔵型甕片１点・三浦型甕片５点・土師器片２点･盤状坏の蓋片か？１点、須恵器転用品１点が出土した。図 7-9 はかわらけ大皿片、10 は釘、11 は笄、12 は須恵器転用品である。

土坑 20（図７）

土坑 20 の規模は残存長軸 1.5m、残存短軸 1.05m、深さ 0.16m を測り、残存部楕円形を呈する。覆土は､混入物の違いはあるものの､4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする（図７第７層）。土坑５に北東側を切られている。遺物は出土していない。

土坑 23（図７）

土坑 23 の規模は残存長軸 0.8m、残存短軸 0.25m、深さ 0.39m を測り、残存部長方形を呈する。覆土は茶褐色砂質土である（図７第 10 層）。土坑 16 より古く、土坑 27 より新しい。出土遺物はない。

土坑 27（図７）

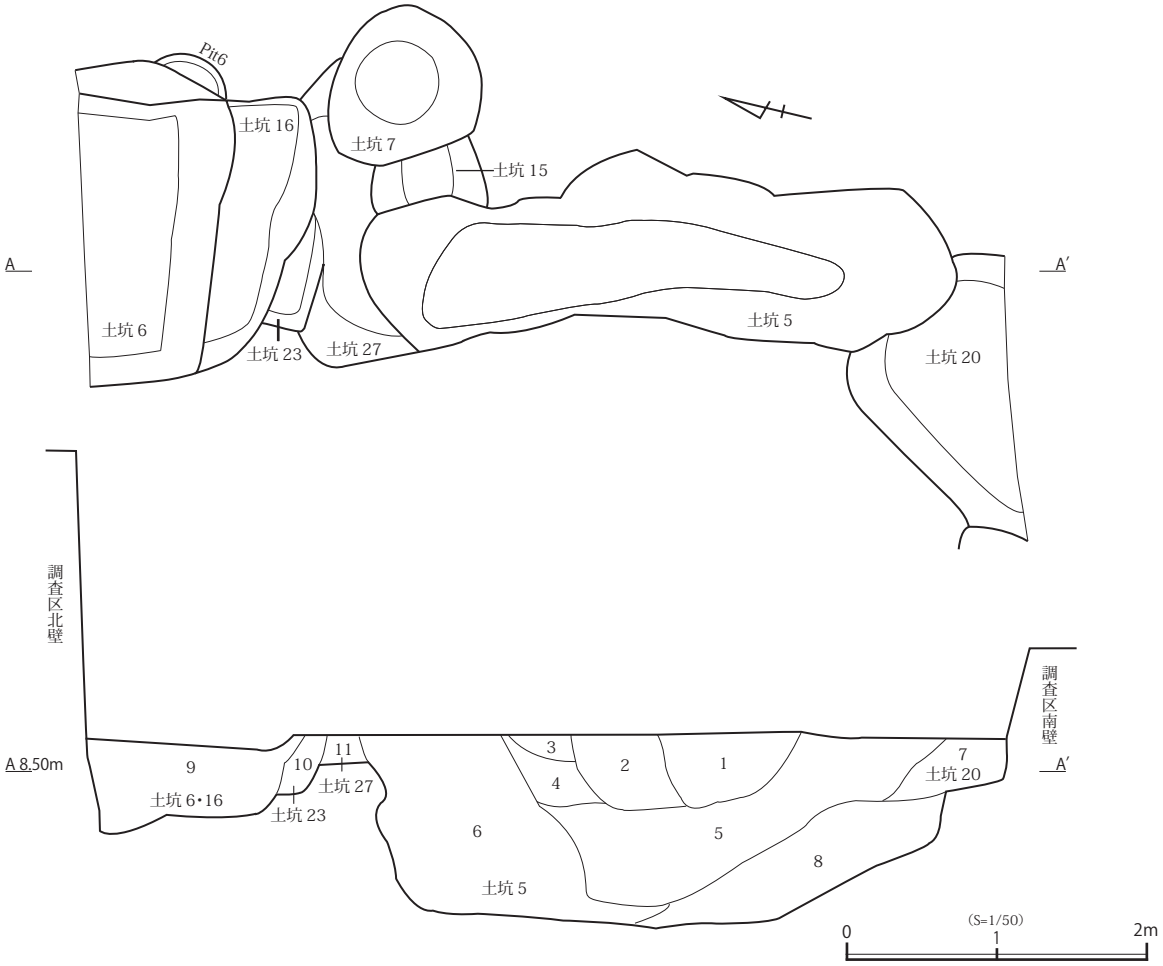
土坑 27 は、土坑 5･7･15･16･23 よりも古い。規模は残存長軸 0.19m、残存短軸 0.37m、深さ約 0.21m を測り、残存部形より楕円形が推定される。覆土は、混入物こそ違うが、土坑７と同じ茶褐色砂質土である（図７第 11 層）。

土坑 27 からは、小皿６点、大皿 12 片、貝３点、武蔵型甕１点が出土している。図 7-13 はかわらけ小皿、14 は釘である。

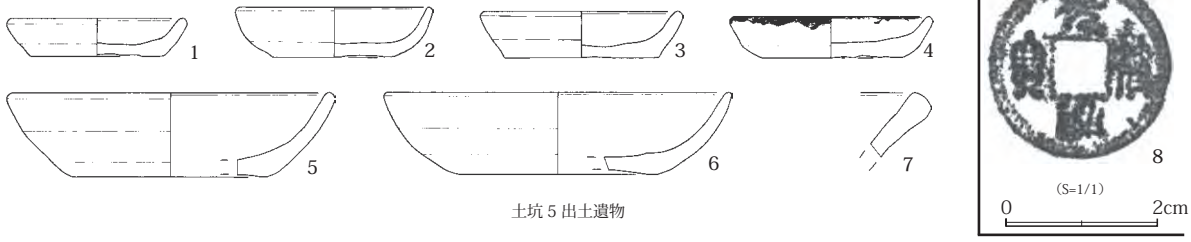
土坑 14・22・24・28（図８）

土坑 14（図８）

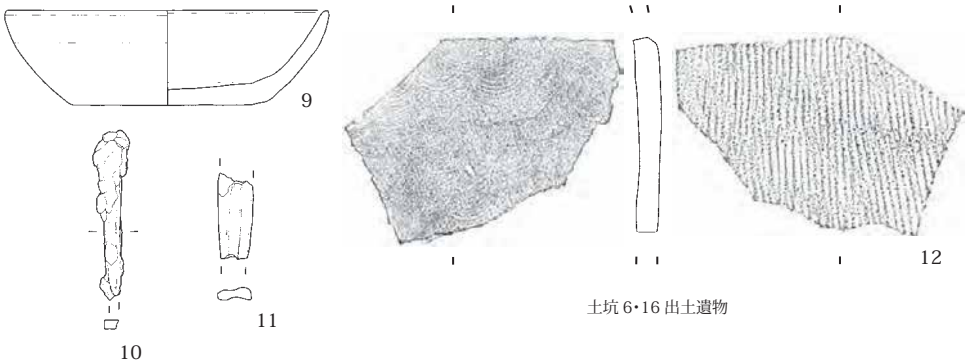
土坑 14 の規模は残存長軸 1.6m､残存短軸 1.5m､深さ約 0.91m を測り､残存部形は長方形を呈する。東側上層は土坑３による削平を受けている。覆土は、混入物の違いはあるものの、４層（図３）に由来



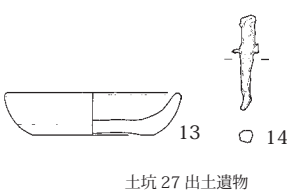
1. 暗褐色砂質土 貝砂・炭化物
2. 茶褐色砂質土 褐色砂・炭化物
3. 茶褐色砂質土 貝砂・炭化物
4. 茶褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・炭化物
5. 褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・炭化物
6. 暗褐色砂質土 灰褐色砂・貝砂・黒色粘土・炭化物 多量
7. 暗褐色砂質土 茶褐色砂・貝砂・土丹粒
8. 茶褐色砂質土 褐色砂・貝砂
9. 暗褐色砂質土 褐色砂・貝砂・炭化物・締まりあり
10. 茶褐色砂質土 褐色砂
11. 暗褐色砂質土 灰褐色砂・貝砂



土坑 5 出土遺物



土坑 6・16 出土遺物



土坑 27 出土遺物

(S=1/3)
0
5
10cm

図7　1面遺構と遺物（3）

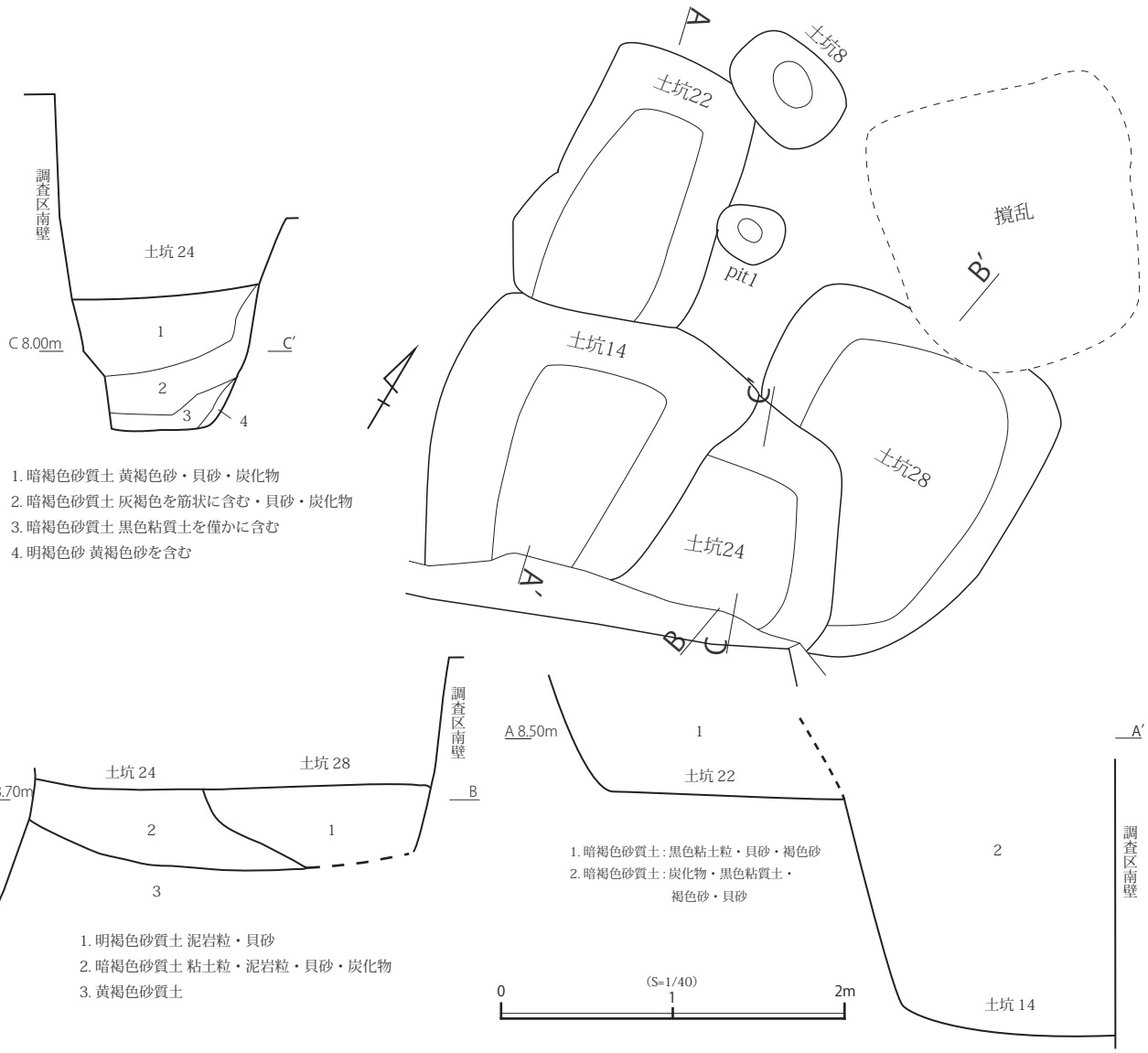

調査区南壁
土坑 24
C 8.00m
C′
1
2
3
4
1. 暗褐色砂質土 黄褐色砂・貝砂・炭化物
2. 暗褐色砂質土 灰褐色を筋状に含む・貝砂・炭化物
3. 暗褐色砂質土 黒色粘質土を僅かに含む
4. 明褐色砂 黄褐色砂を含む
A
A′
土坑8
土坑22
pit1
攪乱
B′
土坑14
土坑28
土坑24
B
C
調査区南壁
土坑 24
土坑 28
B′ 8.70m
B
2
1
3
1. 明褐色砂質土 泥岩粒・貝砂
2. 暗褐色砂質土 粘土粒・泥岩粒・貝砂・炭化物
3. 黄褐色砂質土
A 8.50m
1
A′
土坑 22
2
1. 暗褐色砂質土 : 黒色粘土粒・貝砂・褐色砂
2. 暗褐色砂質土 : 炭化物・黒色粘質土・
褐色砂・貝砂
調査区南壁
土坑 14
(S=1/40)
0
1
2m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
土坑 14 出土遺物
20
21
22
23
24
25
26
土坑 22 出土遺物
27
28
29
土坑 24 出土遺物
30
31
32
33
土坑 28 出土遺物
(S=1/3)
0
5
10cm

図8　1 面遺構と遺物 (4)

する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 22・24 より新しい。

土坑 14 からは、かわらけ小皿片 20 点、中皿片 5 点、大皿片 14 点、灯明皿大皿片 2 点、白磁器種不明片 1 点、常滑窯甕片 3 点、常滑窯片口鉢 I 類片 4 点、軽石 1 点、釘 1 点、骨 6 点、貝 51 点が出土している。図 8-1 ～ 7 はかわらけ小皿、8･9 はかわらけ中皿、10 ～ 15 はかわらけ大皿、16･17 は瀬戸窯片口鉢 I 類、18 は常滑窯片口鉢 I 類、19 は釘である。

土坑 22（図 8）

土坑 22 は調査区中央付近で検出された。規模は残存長軸 1.5m､残存短軸 1.0m､深さ約 0.35m を測り、残存部形は長方形を呈する。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 14、土坑 8、pit1 の方が新しい。

土坑 22 からは、かわらけ小皿片 14 点、中皿片 8 点、大皿片 46 点、瀬戸窯器種不明片 1 点、常滑窯甕片 3 点、常滑窯片口鉢 I 類片 1 点、鞴の羽口片 2 点、骨 4 点が出土している。図 8-20 ～ 23 はかわらけ小皿、24 はかわらけの中皿、25 はかわらけ大皿、26 は常滑窯片口鉢 I 類である。

土坑 24（図 8）

土坑 24 の規模は残存長軸 1.2m、残存短軸 1.2m、深さ約 0.72m を測り、残存部形は長方形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とし、一部明褐色砂が含まれる。土坑 28 より新しく、土坑 14 より古い。

土坑 24 からは、かわらけ小皿片 12 点、大皿片 46 点、青白磁梅瓶片 1 点、常滑窯片口鉢 I 類片 1 点、常滑窯器種不明片 1 点、スラグ 1 点、骨 4 点、貝 54 点が出土した。図 8-27 はかわらけの小皿、28 はかわらけ大皿、29 は青白磁梅瓶である。

土坑 28（図 8）

規模は残存長軸 1.7m、残存短軸 1.7m、深さ約 0.45m を測り、残存部形は楕円形を呈する。覆土は、明褐色砂質土である。北側を攪乱に南西を土坑 4 と 24 に削平されている。土坑 4、24 の方が新しい。

土坑 28 からは、かわらけ小皿片 14 点、大皿片 45 点、穿孔かわらけ小皿 1 点、常滑窯甕 1 点、常滑窯片口鉢 I 類 1 点、常滑窯片口鉢Ⅱ類 1 点、釘 1 点、貝 78 点、相模型甕片 3 点が出土している。図 8-30 はかわらけ小皿、31 は大皿、32 は常滑窯片口鉢Ⅱ類、33 は釘である。

土坑 19（図9）

土坑 19 の規模は、残存長軸 0.9m、残存短軸 0.25m、深さ 0.6m を測り、残存部より楕円形と想定される。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 26 より新しく、土坑 11 より古い。南側を攪乱により削塀されている。

土坑 19 からは、かわらけ小皿片 1 点、大皿片 24 点、かわらけ大皿（灯明皿）1 点、常滑窯壷 1 点、常滑窯尾張型山茶碗 1 点、スラグ 1 点、骨 3 点、貝 20 点、相模型坏 1 点が出土した。図 9-1 はかわらけ小皿、2･3 はかわらけ大皿、4 は常滑または備前の壺底部片、5 は常滑窯尾張型山茶碗である。

土坑 21（図 9）

南壁中央側で発見された。規模は残存長軸 0.48m、残存短軸 0.35m、深さ約 0.14m を測り、残存部形は長方形状である。覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。土坑 14 より古い。

土坑 21 からは、かわらけ小皿片 3 点、大皿片 8 点、常滑窯甕片 1 点、渥美窯甕片 1 点が出土している。図 9-6 ～ 8 はかわらけ小皿、9 は常滑窯甕である。

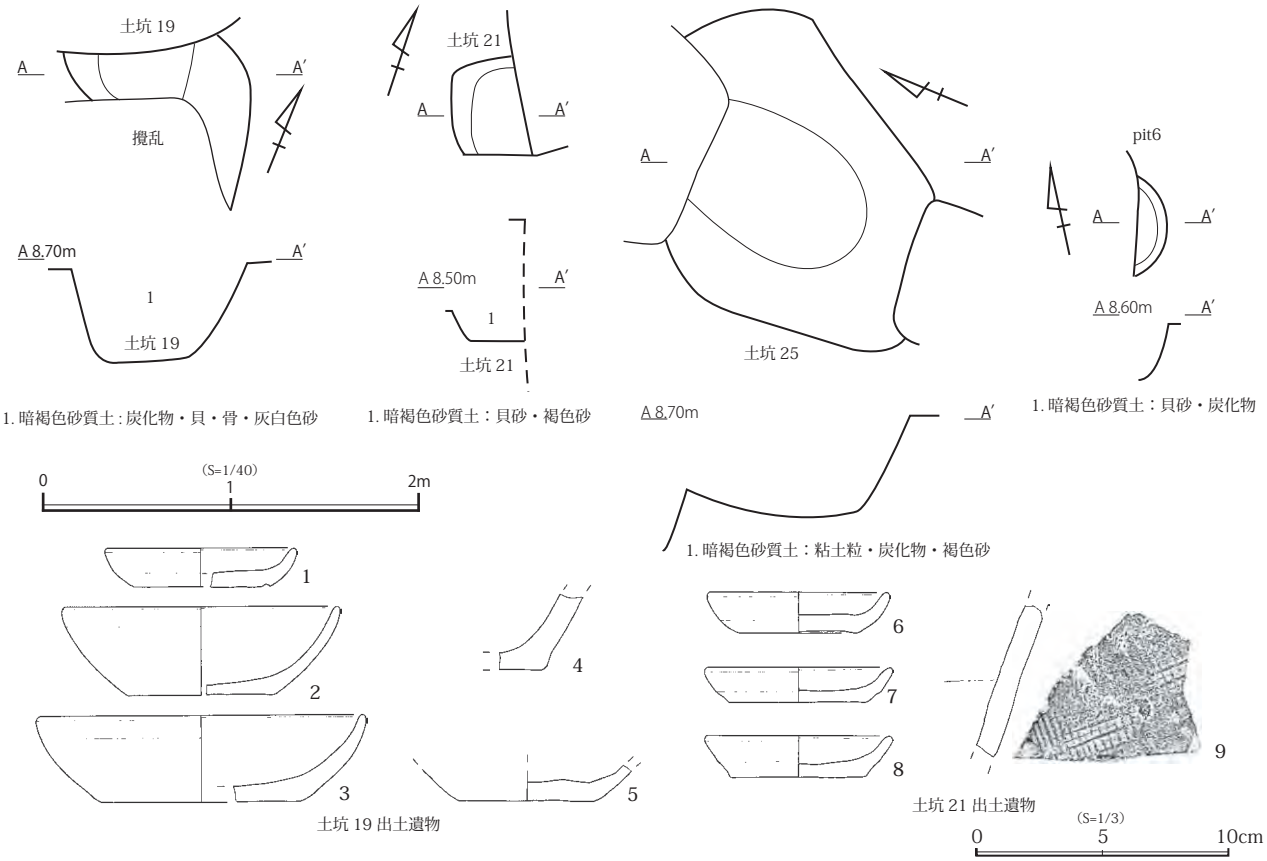


図９　１面遺構と遺物（5）

土坑 25（図 9）

調査区南西側で発見された。規模は残存長軸 1.57m、残存短軸 1.2m、深さ約 0.35m を測り、残存部形より楕円形と推定される。覆土は粘土粒・炭化物・褐色砂を含む暗褐色砂質土である。北側は攪乱、東側は土坑 20、南側は土坑 13 に切られている。

土坑 25 からは、かわらけ小皿片 6 点、大皿片 33 点、常滑窯甕片 3 点、骨 5 点、貝 21 点、須恵器：壺片 1 点、土師器：相模型甕 3 点・三浦型甕片か？ 2 点・相模型坏片 1 点・土師器坏片 1 点が出土しているが、小破片のため図示していない。

pit6（図 9）

覆土は、混入物の違いはあるものの、4 層（図 3）に由来する暗褐色系の砂質土を主体とする。pit6 からは、貝 1 点と南比企系須恵器甕片 2 点であるが、小破片のため図示し得るには至らなかった。

表 1　遺構計測表

遺構	長軸	短軸	検出標高	底面標高
土坑 12	1.5	0.54	8.58 ～ 8.46	8.34 ～ 8.18
土坑 17	1.6	0.87	8.70 ～ 8.68	8.64 ～ 8.57
土坑 26	0.87	0.32	8.68 ～ 8.57	8.35 ～ 8.30

遺構	長軸	短軸	検出標高	底面標高
pit1	0.4	0.35	8.72 ～ 8.67	8.42
pit3	0.45	0.35	8.74 ～ 8.69	8.55
pit4	0.5	0.37	8.71 ～ 8.67	8.64

（単位＝ m）

第 2 節　1 面面上出土遺物、1 面構成土出土遺物（図 10）

法量や遺物の特徴については表 3 を参照されたい。1 面面上からは、かわらけ小皿片 18 点、大皿片 97 点、常滑窯 8 点、常滑窯片口鉢 I 類 1 点、常滑窯尾張型山茶碗 1 点、火鉢 1 点、釘 3 点、金属製品釣針 1 点、骨片 5 点、貝 31 点が出土した。図 10-1･2 はかわらけ小皿、3･4 は大皿、5 は釣針、6･7･8 は釘である。1 面構成土からはかわらけの大皿片 1 点、銭 1 点、骨片 4 点、貝 3 点、須恵器：坏 1 点、土師器：古代以前の壷または甕類 1 点、三浦型甕 1 点が出土した。図 10-9 は銭 1 点である。

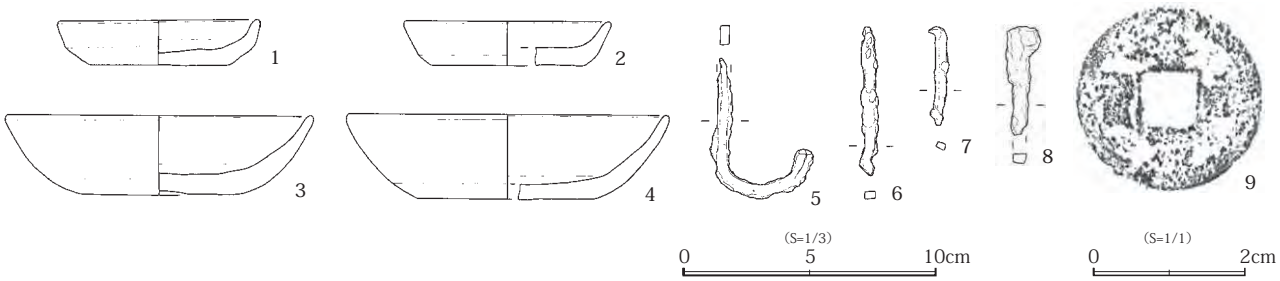


図 10　1 面面上・1 面構成土出土遺物

第３節　古代検出遺構と出土遺物（図 11 ～ 17）

Ⅰ区・Ⅱ区ともに１面以降は現地表下 2m 以上での作業となり堆積土が砂ということから、安全性を考慮し下層での調査については調査面積を狭めて作業を行った。Ⅰ区のトレンチ調査では遺構は検出されず堆積土の確認に留まった。Ⅱ区では調査中に調査区西壁が崩落と大雪のため調査区を狭め、トレンチを設定し調査を行った。

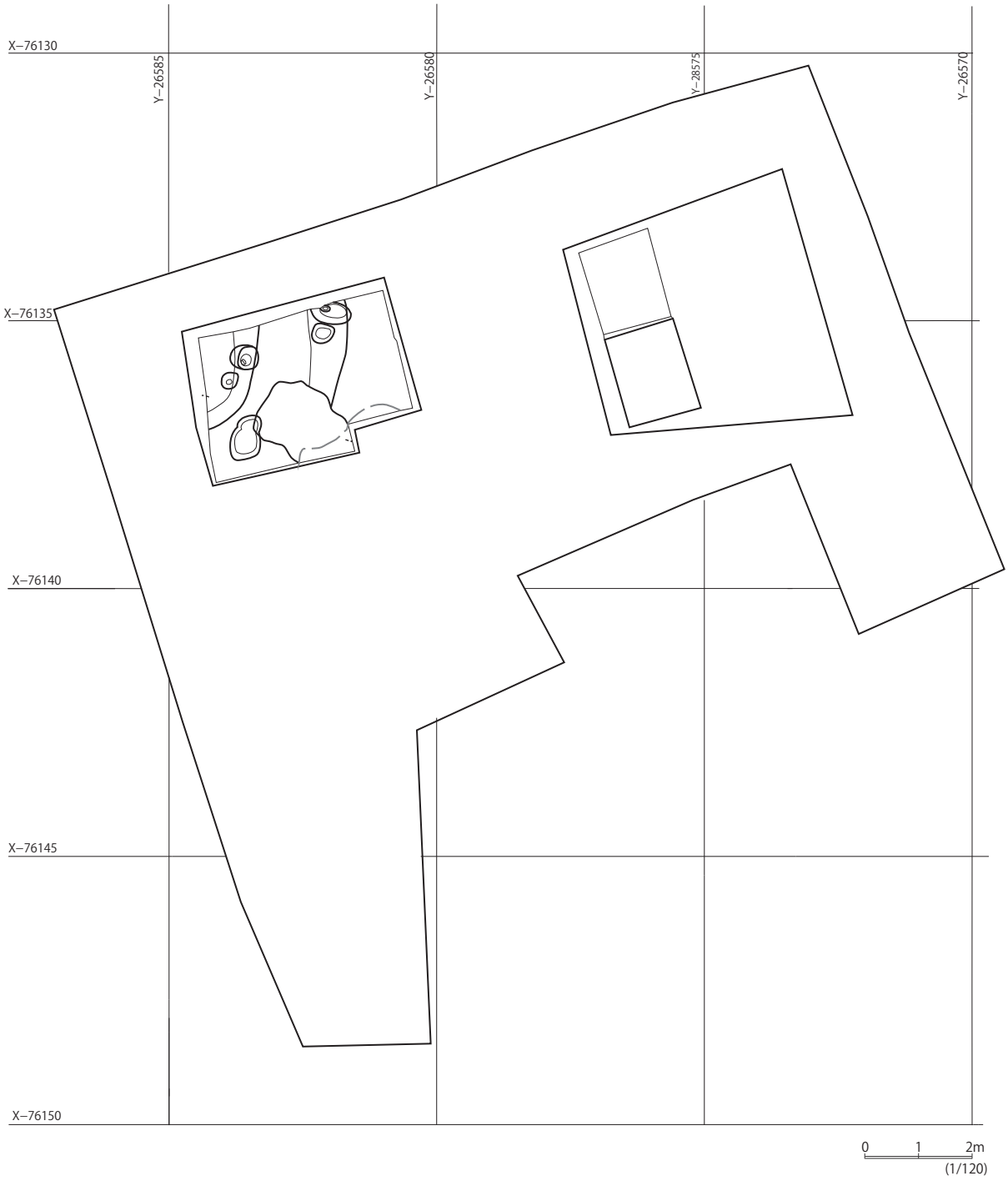
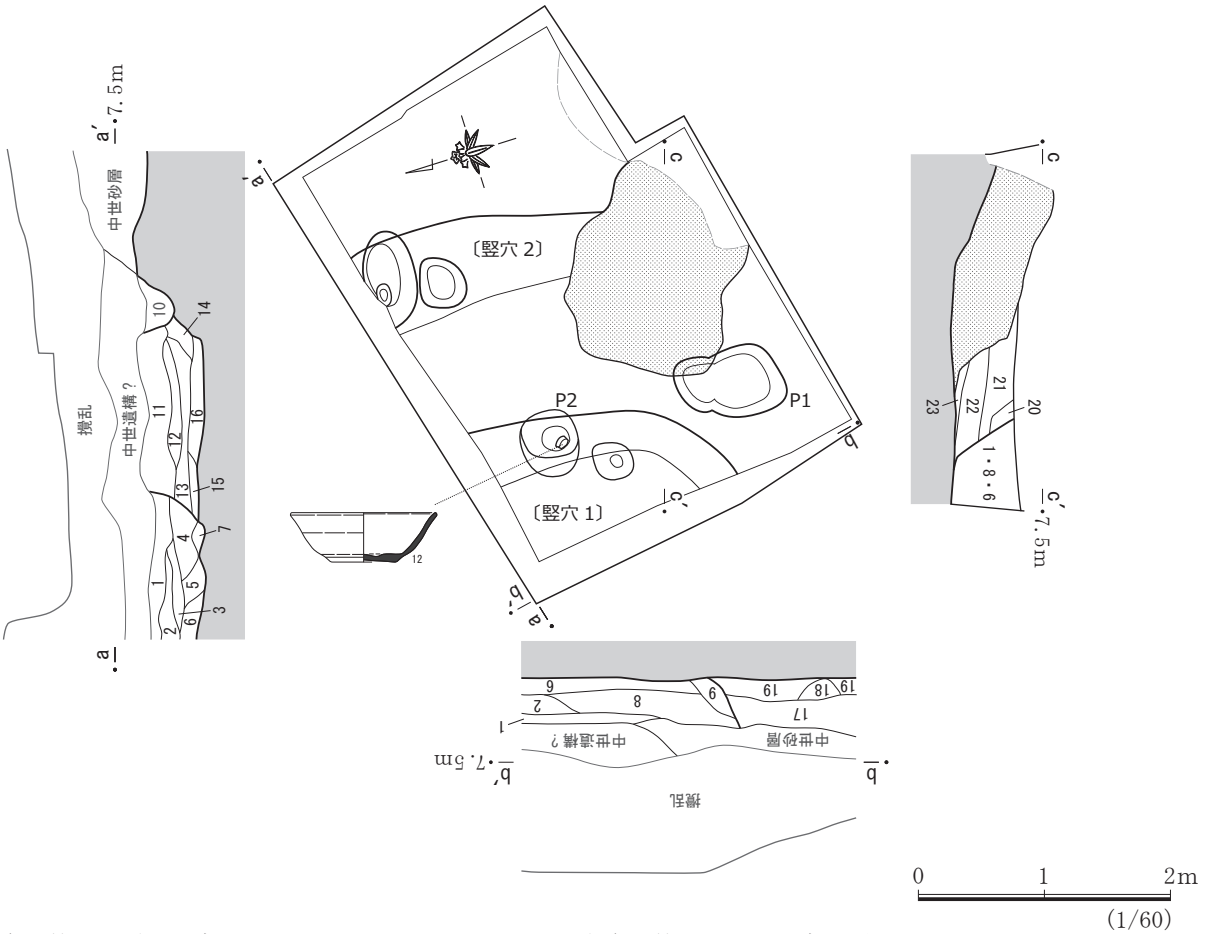


図 11　全体図（ 古代）

Ⅱ区北西部では、現地表面から 2.1 mほど掘り下げた標高 8.4 mで東西 4 m×南北 2.5 mのトレンチを設定・掘削し、中世以前の堆積状況および古代遺構の確認を行った。

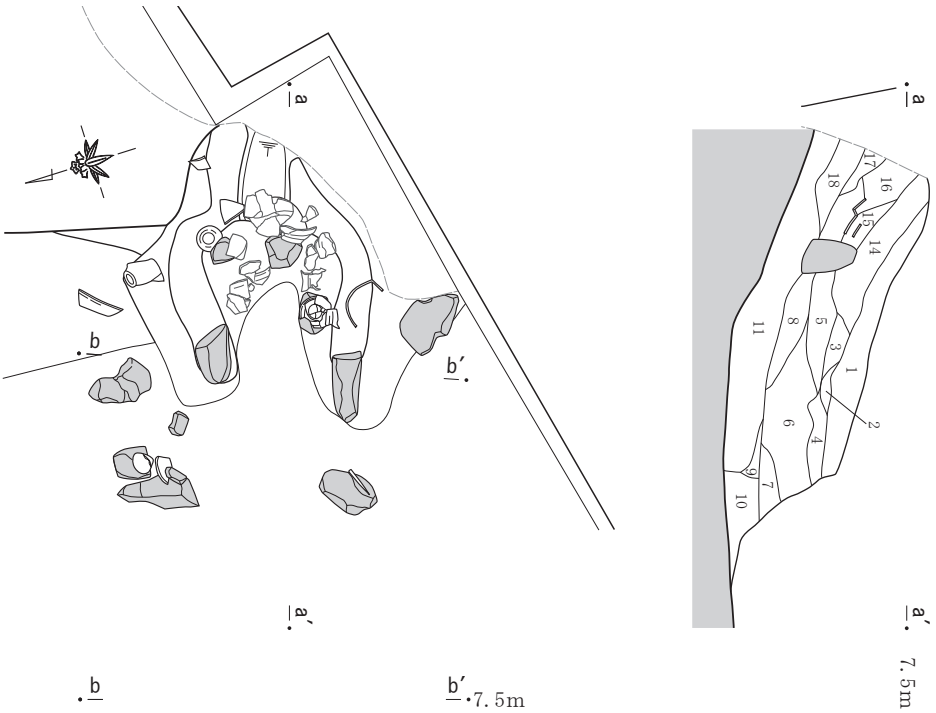
その結果、平安時代の竪穴住居跡 2 軒が検出され、このうち 1 軒でカマドが確認された（竪穴 2)。カマドの左袖部が設定トレンチの南外に続くことから、この範囲を確定すべく、遺構の遺存部分に限定して 50cm ほどトレンチの拡張を行った。

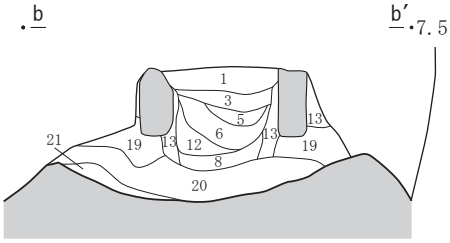
海岸砂丘という非常に軟質な地盤に加えて 2 mを超える掘削深度、そして予想外の積雪による調査区壁面の崩落といった要因も重なり、安全面への配慮から調査区の更なる拡張は断念した。

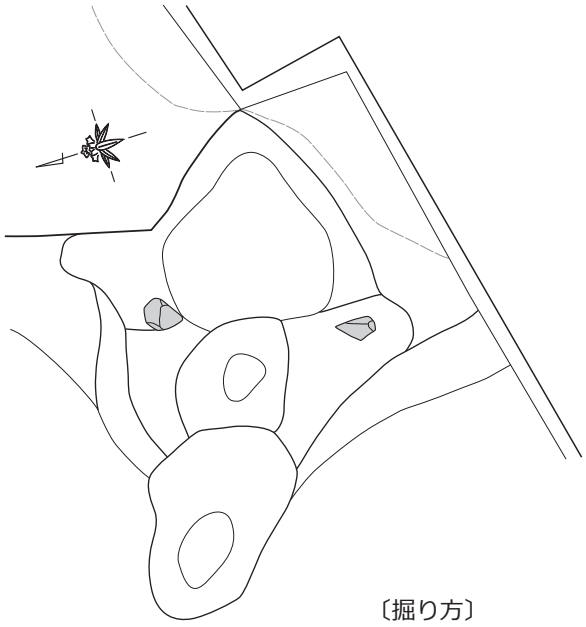


1　褐色砂質土　泥岩粒・炭化物混入。
2　黒褐色粘質土　粘土ブロック・焼土・炭化物混入。
3　黒褐色粘質土　焼土・炭化物混入。
4　暗褐色砂質土　粘土粒・炭化物混入。
5　暗褐色砂質土　粘土粒・炭化物・灰粒混入。
6　暗褐色砂　炭化物、下位の一部に灰粒混入。
7　暗褐色砂質土　炭化物・灰粒混入。
8　暗褐色砂質土　粘土粒多量、焼土・炭化物混入。
9　暗褐色砂質土　粘土ブロック混入。。
10　暗褐色砂質土　かわらけ片・炭化物混入。中世遺構か。
11　褐色砂質土　粘土粒・炭化物微量混入。
12　褐色砂質土　上面に締まり強い粘土層が堆積。
　　粘土粒・灰粒混入。
13　褐色砂質土　粘土粒・炭化物微量。
14　暗褐色砂
15　黒褐色砂質土　炭化物混入。
16　褐色砂質土　炭化物微量混入。
17　暗褐色砂質土　泥岩粒混入。
18　暗褐色砂質土　黄褐色砂多量混入。
　　焼土・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
19　暗褐色砂
20　暗褐色砂質土　泥岩粒混入。
21　暗褐色粘質土　粘土ブロック・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
22　暗黄褐色砂質土　粘土粒混入。
23　黄褐色砂　黒褐色砂質土混入。

図 12　竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）







1　暗褐色粘質土　貝殻・砂ブロック・黒褐色粘土混入。
　　天井崩落土。
2　暗褐色粘質土　貝殻・黒褐色粘土・泥岩粒・炭化物混入。
3　暗褐色粘質土　1層より砂質。灰粒多く混入。焚口～煙道。
4　暗褐色砂質土　黒色粘土・貝殻・泥岩粒・炭化物多量。
5　暗褐色粘質土　炭化物・黒褐色粘土混入。
　　3層より灰粒少ない。
6　暗褐色砂質土　貝殻・泥岩粒・炭化物・黒褐色粘土混入。
7　暗黄褐色砂質土　貝殻・泥岩粒・炭化物少量混入。
8　暗黄褐色砂　黒褐色粘土、焼土・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
9　暗黄褐色砂　黒褐色粘土多量、炭化物混入。
10　黄褐色砂　黒色砂・炭化物混入。
11　暗黄褐色砂　黒褐色砂・炭化物混入。
12　暗黄褐色砂質土　焼土主体で締まり強い。
　　上面に炭化物が薄く堆積する。
13　暗褐色粘質土　袖構築土。
14　暗褐色粘質土　貝殻・泥岩粒・炭化物多量混入。
15　暗褐色粘質土　泥岩粒・炭化物多量。
16　褐色粘土　貝殻・泥岩粒・炭化物混入。
17　褐色粘土　貝殻・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
18　暗褐色砂　焼土・焼けた泥岩粒・炭化物混入。
19　暗黄褐色土　焼けた泥岩粒・炭化物多量混入。
20　暗黄褐色砂　炭化物・黒褐色砂混入。
21　暗黄褐色砂　混入物少なく締まり弱い。

0　1m
(1/30)

図 13　竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）カマド

以下、トレンチ内で検出された遺構と出土遺物について説明を行う。

トレンチ上端から深さ 60cm（標高 7.7 m前後）までは現代の攪乱層で、濁りの強い暗褐色の砂質土が堆積していた。この下には 20 ～ 50cm の厚さで中世の基盤層および遺構覆土とみられる褐色砂質土が堆積し、これを取り除いた標高 7.4 ～ 7.5 mでキメの細かい腐植土をベースとする黒褐色砂質土が検出された。無遺物層であり、古代遺構の基盤層と考えられる。

トレンチ内で検出された遺構は竪穴住居（2 軒）とピット 5 基で、ピットのうち中世遺物が出土した 1 基（図 12-10 層）以外は古代に属するものと考えている。

竪穴住居は、トレンチ壁断面の観察から 2 軒が重複した状態で確認されたものと捉え、西側で新しいものを竪穴 1、これに切られていたものを竪穴 2 と分けて呼称した。掘り方底面は、竪穴 1 の方がわずかだが低い。ただ、限定された調査範囲であり、両遺構の出土遺物には明確な年代差がないことも考慮すれば、同一遺構内の覆土様相の差異といった可能性も完全には排除できない。

竪穴 1 は断面観察による計測値として、東西 120cm、南北 210cm 以上の規模となることを確認した。深さは 50cm ほどで、掘り方底面の標高は 6.7 ～ 6.8 mを測る。明瞭な貼り床は確認できなかったが、図 12-23 層がこれに相当すれば、厚さは 10㎝程度である。

竪穴 2 は東辺のみが確認でき、全体の規模・形状は不明である。南北 400cm、東西 275cm までを計測し得た。掘り方底面までの深さは 50cm で、底面標高は 6.8 mを測る。図 12-14･15 層が貼り床であった可能性がある。竪穴の東壁にカマドを付設しており、これを正面に見た場合の遺構中心軸は N-110°-E 前後を指す。カマドは東壁から 40㎝ほど突出したところで現代攪乱に切られるが、煙道の立ち上がり具合から、これよりも大きくは突出せずに煙出し施設があったものと考えている。カマド全体では

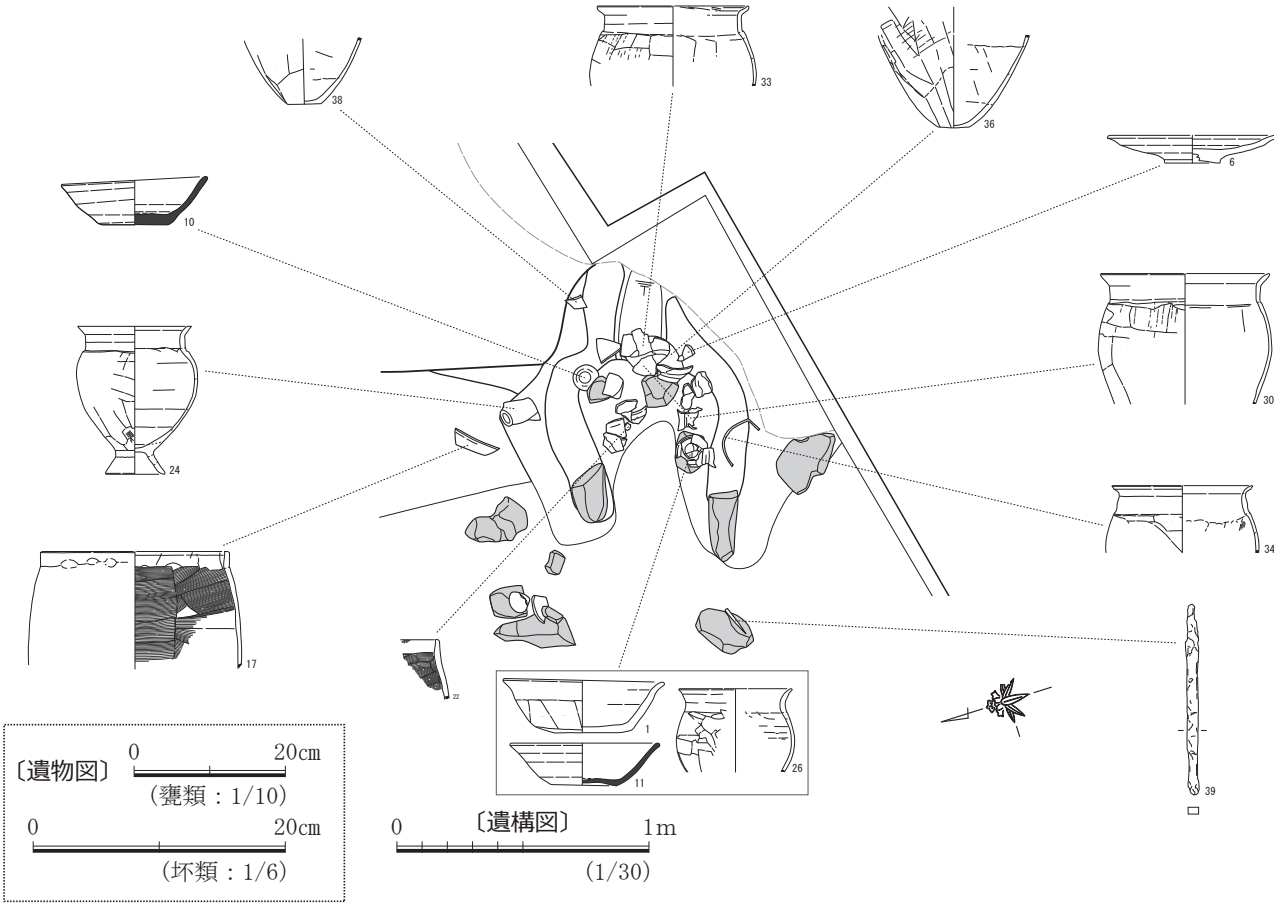


図 14　竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）カマド内　遺物出土状況

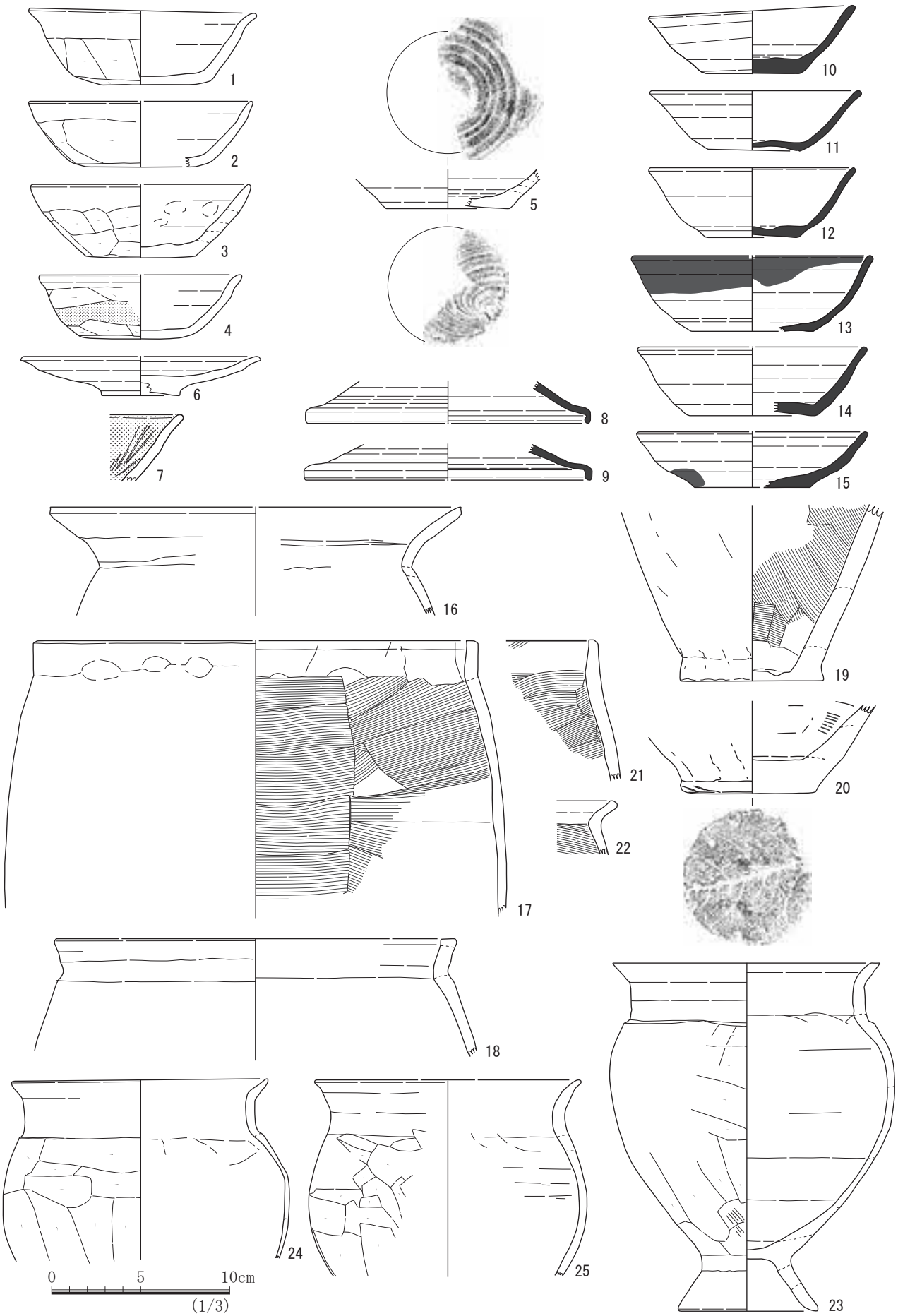


図 15　竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）出土遺物（1）

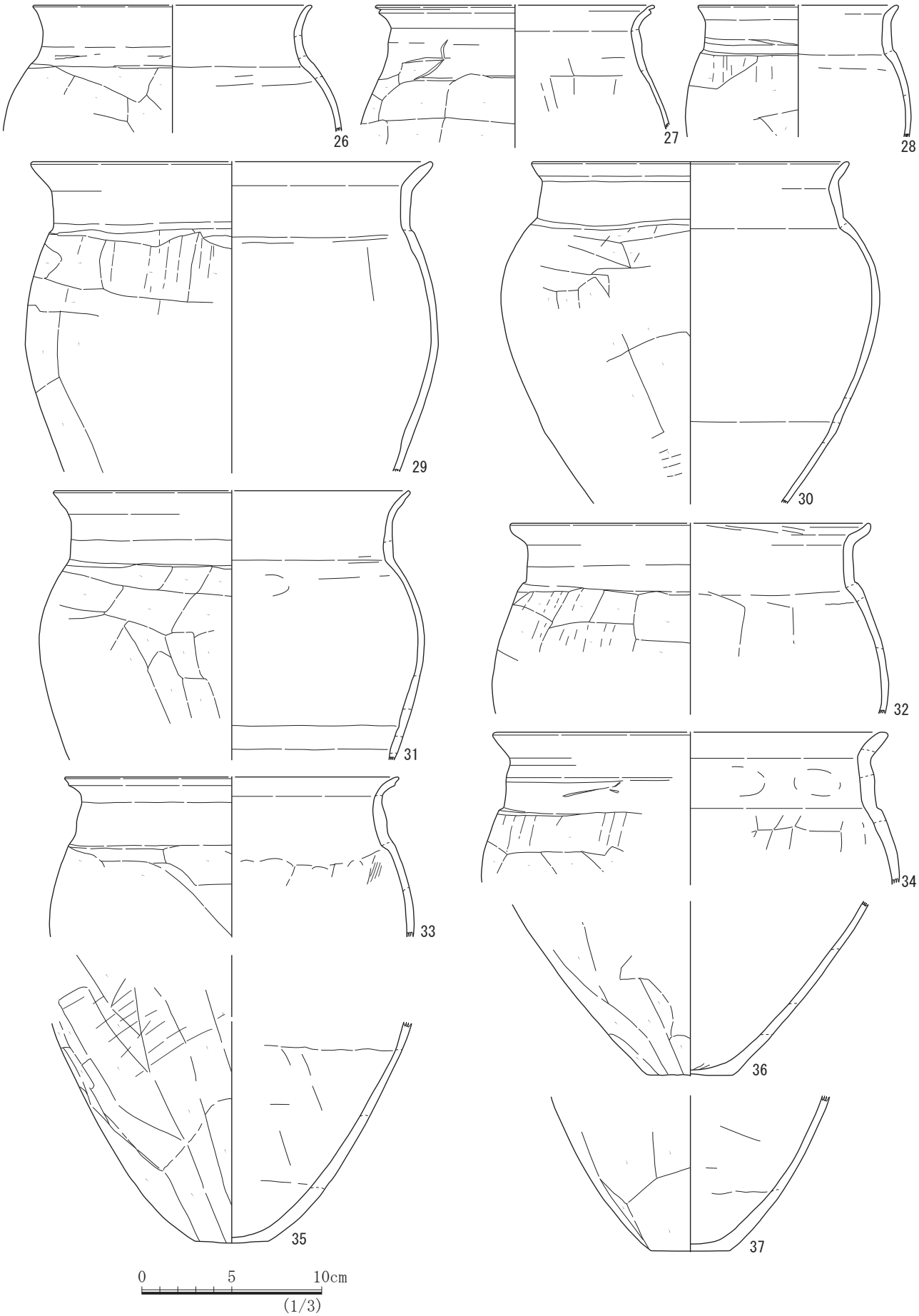


図 16　竪穴住居（竪穴 1・竪穴 2）出土遺物（2）

長さ 160cm 以上、両袖幅は 110cm 前後となり、燃焼部では 40㎝ほどの高さが遺存していた。焚口から煙道ににかけての両袖には高さ 20cm 前後の凝灰岩が一定間隔で立てられ、これに灰白色の粘土を貼り付けて形成されていた。凝灰岩は掘り方底面の砂層上だけでなく焼けた粘土の上に置かれるものもあったことから、使用による劣化と補修とが繰り返された様子が窺える。右袖の南外では切り出し痕のある扁平な凝灰岩が出土しており、形状・位置から袖石に架構天井石が転げ落ちたものと考えられる。燃焼部には、支脚とみられる 23cm 高の円柱状凝灰岩が据えられていた。カマド内では煮炊具以外の土器も出土しており、不要となった土器が補修時の混和材となった様子が窺えた（図 13)。

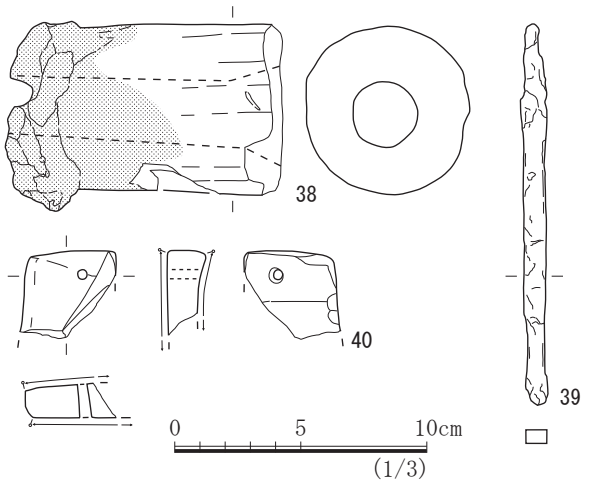


図 17　竪穴住居（竪穴 1･竪穴 2）出土遺物（3）

竪穴の掘り方底面では小規模なピットが検出されているが、展開状況も明らかでなく柱穴となるかは定かでない。このうち、P2 としたものは 30cm ほどの深さをもち、底面の標高は 6.5 m を測る。底面付近から、南比企窯産の須恵器坏が出土している（図 15-12)。

図 15 ～ 17 には、竪穴 2 の出土遺物を掲げた。ここでは全体の様相を述べることとし、個々の資料の詳細は、遺物観察表を参照されたい（ただし、器種分類の目安となる成形・整形方法についてはイレギュラーなケースを除いて省略している)。

土師器の相模型坏は口径が 12cm 前後で口径 / 底径比が 50％以上のものが主体を占める。体部外面は一段ないし二段の横ヘラケズリを施している。『平塚市史』における d 段階の資料が中心といえよう。須恵器の坏・坏蓋は南比企窯の製品が主体で、坏の底部外面には右回転の糸切り痕が無調整で残る。坏は口径 11cm 台と 12 ～ 13cm の二法量に区別でき、加えて口径 / 底径比および口径 / 内底径比がともに 50％前後を示すことから、概ね鳩山Ⅷ期に比定できる。15 は体部が他の資料より開いており、中世の山茶碗となる可能性も残る。

土師器の甕は、台付甕を含む武蔵型の製品が 10 個体以上と主体をなしており、これに三浦型が次ぐ。相模型の甕は非常に少なく、図示できたには 16 の 1 点のみであった。

38 の鞴羽口は、カマド構築材として再利用されたものとみられる。39 の鉄製品は角棒状を呈するが、用途は不明である。40 の砥石は、中世上野砥に似た石材である。　土師器および須恵器の供膳具は 9 世紀後葉の特徴を備え、カマド内の出土資料も同様であることから、住居の使用期間もこの時期と考えることができる。

本地点では、現地表面から 3 m掘り下げないと古代の遺構面に達しなかった。周辺の調査例では中世以降も人的活動の退潮に伴う砂丘の発達経過が把握されており（地点 40)、古代以前の地形復元および土地利用の実態を掴むためには問題意識だけでなく多大な労力が必要である。それでも、小規模とはいえ発掘調査の積み重ねこそが課題の克服のために最も有効な手段であることは間違いない。

第 4 節　Ⅱ区トレンチ上層出土遺物（図 18）

この他、Ⅱ区トレンチ内から出土した遺物を述べていく。標高 7.7m 前後をトレンチ上層、標高 7.5m 以下をトレンチ下層とわけた（図 3・図 11)。法量や遺物の特徴については表 5 を参照されたい。

上層ではかわらけ小皿片 2 点、大皿片 25 点、青磁蓮弁文碗片 1 点、褐釉であろうか器種不明 1 点、常滑甕 5 点、常滑片口鉢Ⅱ類 1 点、火鉢 1 点、土錘 5 点、土丹 1 点、スラグ 1 点、骨片 6 点、貝 7 点、近代瓦 1 点、須恵器:杯（南比企）片 4 点、土師器:甲斐型杯片 1 点、相模型甕片 5 点、三浦型甕片 5 点、相模型杯片 3 点、相模型甕片 3 点が出土した。図 18-1 はかわらけ小皿、2 は大皿、3 は常滑片口鉢Ⅱ類、4 ～ 8 は土錘である。

下層からは、かわらけ小皿片 2 点、大皿片 30 点、常滑甕片 3 点、常滑片口鉢Ⅰ類 1 点、土製品鞴の羽口 1 点、軽石 4 点、石 13 点、焼けた土丹 176 点、土丹 28 点、金属製品 4 点、骨角製品 2 点、骨 18 点、貝 326 点、須恵器:坏片 7 点、坏片（南比企）24 点、坏片（南多摩）2 点、坏片（渥美・湖西似）1 点、小型壺片か 2 点、蓋片（南比企）3 点、甕片 2 点、甕片（南比企）4 点、壺・甕類片 1 点、器種不明 1 点、土師器:相模型甕片 103 点、相模型坏片 47 点、相模小型甕片 1 点、相模型またはそれ以前の土器片 2 点、相模型系統坏片 1 点、三浦型甕片 268 点、三浦型甕片か 1 点、武蔵型甕片 410 点、武蔵型台付き甕片 2 点、土師器小片 59 点、古墳後期くらいの坏片か 1 点、甲斐型坏片 2 点、弥生の土器片か 1 点、弥生の壺または甕片 1 点、産地不明甕片 1 点、不明土器片 1 点、不明破片 10 点、三浦半島のロクロ土師器または坏片 2 点、土師器坏片 1 点、坏片 1 点が出土したが小破片のため図示していない。

Ⅱ区トレンチ出土遺物の中に、近代遺物やかわらけ等が混入しているのは、近代の攪乱による影響である。

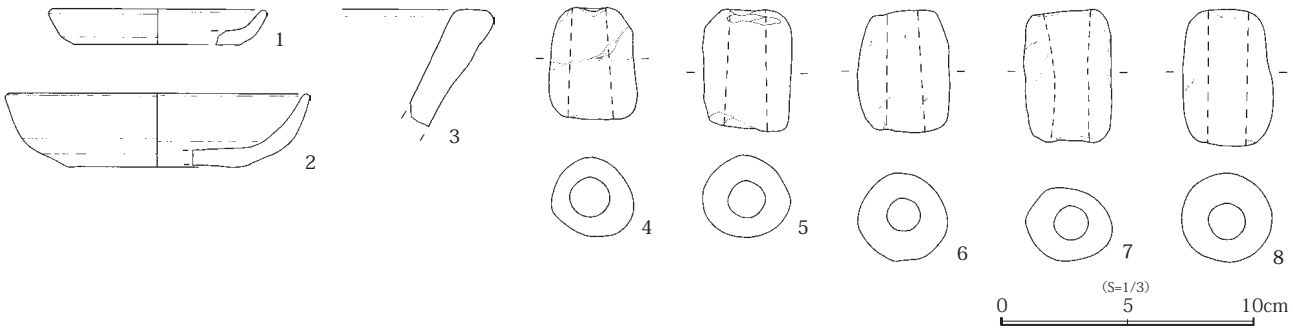


図 18　Ⅱ区トレンチ上層出土遺物

第 5 節　表土出土遺物（図 19 ～ 21）

図 19 ～ 21 には表土から出土した遺物を図示した。法量や遺物の特徴については表 6 を参照されたい。図 19-1 ～ 30 がかわらけの小皿、31 ～ 35 はかわらけの中皿、36 ～ 51 はかわらけの大皿、52 ～ 55 は青磁の鎬蓮弁文碗、56 は白磁の口兀皿、57 は白磁の口兀碗、58・59 は青白磁の梅瓶、60 は瀬戸窯壺類の底部、61・62 は瀬戸窯の折縁深皿、63 は瀬戸窯の卸目皿、64 は瀬戸窯の器種不明品である。図 20-65 ～ 77 は常滑窯片口鉢Ⅰ類、78 ～ 84 はⅡ類、85 は常滑窯の鉢類としたが、他産地の別器種の可能性も考えられる。86 ～ 88 は常滑窯の甕、89 は渥美窯の甕、90 は東濃型山茶碗、91 は常滑窯尾張型山茶碗、92 は鞴の羽口、93~95 は火鉢、96 は器種不明瓦質製品の脚、97 は土錘、98・99 は砥石である。図 21-100 ～ 122 は釘、123 は不明鉄製品で頭頂部に丸く穴が開けられている。124 ～ 126 は骨製品である。125 は穿孔がみられるため紐などを通して使用するものかもしれない。126 は用途不明骨製品で

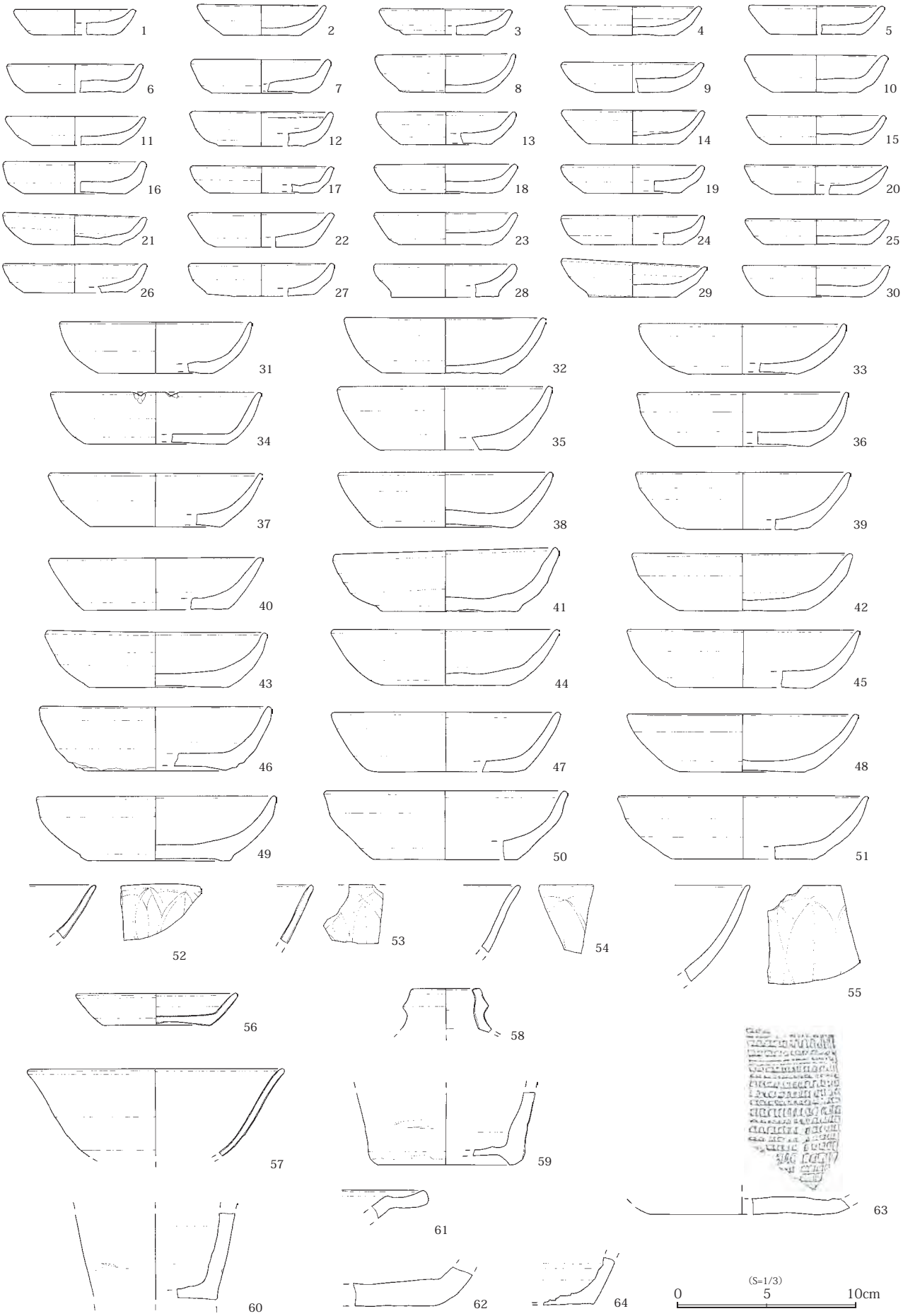

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
58
57
59
63
61
60
62
64
(S=1/3)
0
5
10cm

図 19　表土出土遺物（1）

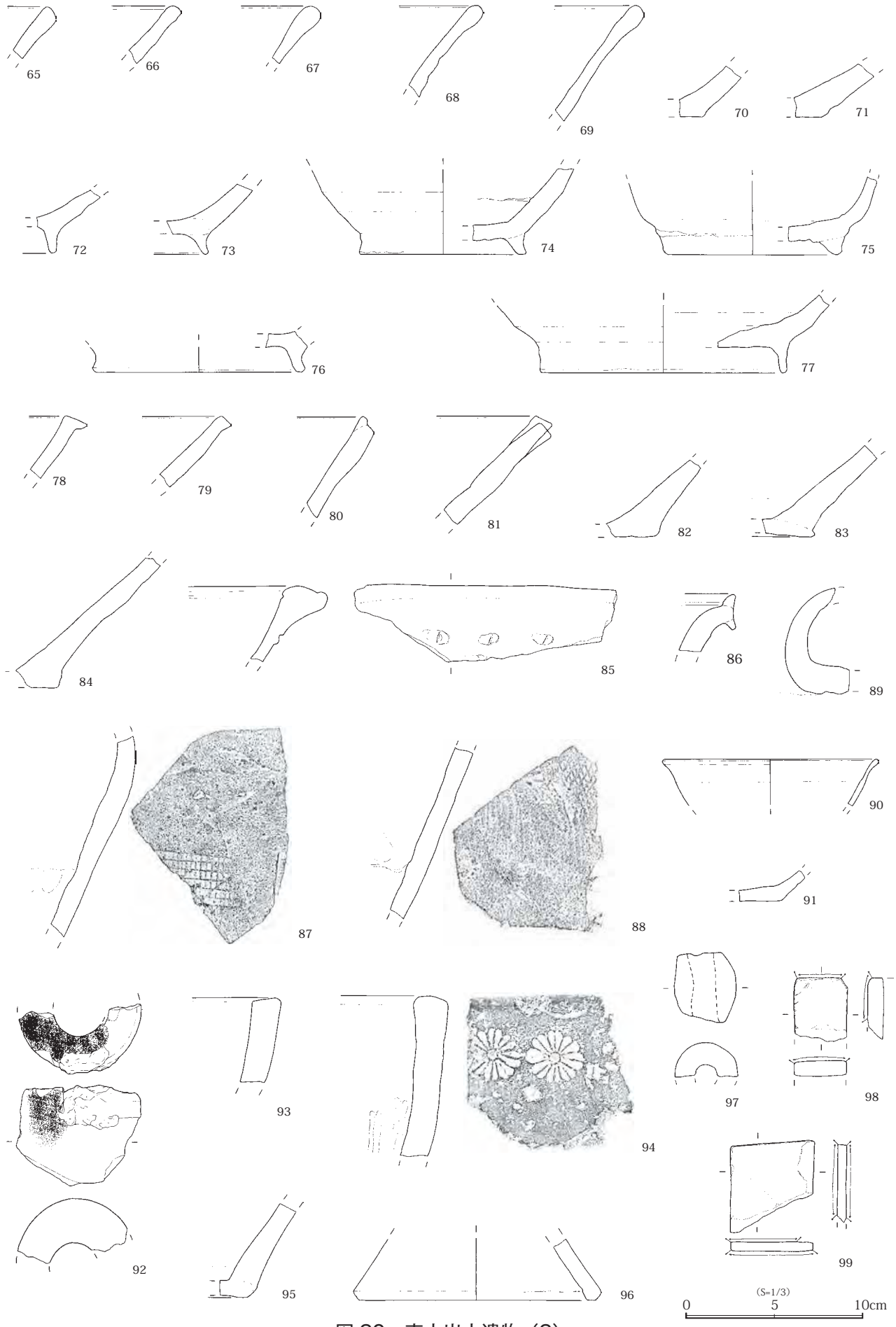

65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
89
87
88
90
91
97
98
93
94
92
95
96
99
(S=1/3)
0
5
10cm

図 20　表土出土遺物（2）

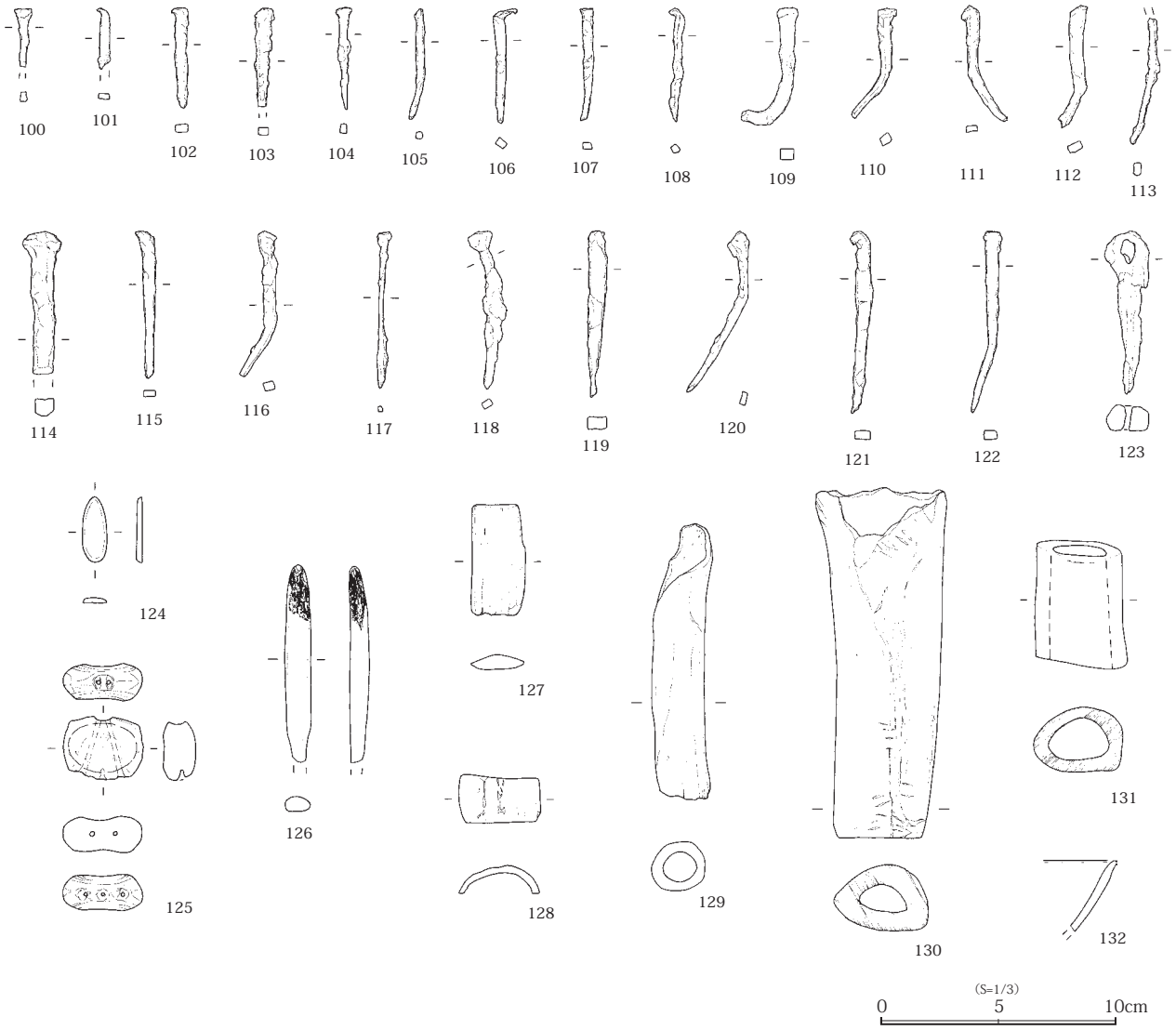


図 21　表土出土遺物（3）

楕円形で薄く先端に丸みを持ち、先端が黒くなっている。127 ～ 131 は加工途中もしくは端材の骨である。刃物で切られたような痕跡が残っている。132 は須恵器の坏の口縁部片である。

第 6 節　中世面・古代面より出土した貝について

当遺跡地から出土した貝の種類、生息域、出土面、個体数を表 7 にまとめた。

貝の分類に際して、アワビやカキについては、破片資料がほとんどであったため「アワビ」、「カキ」と一括した。種類が特定できなかった貝は不明とし、二枚貝は出土点数をそのまま数えた。サザエは有棘種・無棘種とも一緒に数えた。

古代の遺構から多く出土した貝は、アサリ・チョウセンハマグリ・ヤマトシジミ・サザエ・ハマグリの順である。特にシジミ・ヤマトシジミ・アサリ等、汽水域や砂浜域などに生息していた貝を中心に出土した。

中世の遺構から多く出土した貝は、チョウセンハマグリ・ハマグリ・サザエ・ダンベイキサゴ・アサリ・イボキサゴ・キサゴ・アカニシである。内湾や砂浜域などでとれる二枚貝類を中心に、アワビ、サザエ、アカニシといった肉厚な巻貝が出土している。

古代はアサリの出土量が特に多いが、中世はチョウセンハマグリ・ハマグリという内湾や海浜域で採取するような貝の検出状況がみられる。変わって古代から出土する貝は、汽水域や砂浜域で採取する種類のものが多い傾向がみられた。本調査地周辺では、古代にはシジミなどが生息していたことが推察される。中世は、シジミなどの汽水域や砂浜域で採取される貝の検出量が極端に減少することから古代と中世の間に大きな環境の変化があった様子が窺える。

古代と中世とも遺構から多量に貝が出土しているが、遺構の面積と貝の出土量を比較すると遺物の出土量は少なく、ゴミ穴と判断し難い状態であった。ゴミ穴だった場所を壊し、方形竪穴建物群の内側の空間地という場所に転用されたのかもしれないが憶測の域をでない。本調査地点の貝の検出状況からは、遺構の機能について比較することは非常に難しいが、古代と中世の貝の検出状況の変化がわかる事例と考えられる。今後、長谷小路周辺遺跡内より出土している貝を精査することにより、採取されていた貝の傾向、古代との比較、調査地周辺の環境・生息していた貝の種類などを想定する材料になるのではないかと思われる。

［引用・参考文献］

奥谷喬司・波部忠重 1983『学研生物図鑑 貝Ⅱ〔二枚貝・陸貝・イカ・タコほか〕』学習研究社
奥谷喬司・波部忠重 1983『学研生物図鑑 貝Ⅰ［巻貝］』学習研究社
池田等 2012『見て、さわって、不思議を学ぶ！貝の図鑑＆採集ガイド』実業之日本社
池田等・松沢陽士 2009『海辺で拾える貝ハンドブック』文一総合出版

第四章　まとめ

長谷小路周辺では、1989 ～ 2015 年までの間に計 29 件の発掘調査が行われている。2002 年に報告された「長谷一丁目 205 番 12」では、長谷小路周辺の地形概念図により 13 世紀代の中世基盤層（風成砂層）と現在の道路の高低差がほぼ同じであることが指摘されている（汐見 2002,p.162）。

この調査成果をもとに、長谷小路周辺遺跡の現地表面・中世基盤層（風成砂層）の標高を抜き出してみた。本調査地点では、第二章でも述べたがⅡ区は近代の造成による攪乱で削平されていたため、中世基盤層が確認できたのはⅠ区だけであった。図 1 調査地点図の遺跡地点番号､地点 21(現地表標高:約 9.3 ～ 9.0m、中世基盤層標高:7.80 ～ 7.75m）から地点 3（現地表標高:9.6m、中世基盤層標高:8.8m）へ向けて砂丘が高まり、地点 3 から地点 23（現地表標高:8.6m、中世基盤層標高:7.5m）・地点 11（現地表標高：8.3 ～ 8.1m、中世基盤層と考えられる風成砂層は確認されていない）周辺に向けてなだらかに落ち、地点 31（現地表標高：10.6 ～ 10m、中世基盤層標高：9.5 ～ 9.3m）・地点 32（現地表標高：約 9m、中世基盤層標高:7.9m）あたりから再び高まっていく状況が分かってきている。本調査地点は、図 1 の地点 1 に所在し、地点 3 と地点 23 の間に位置する場所である。本調査地点は、現地表標高：約 10.5m 前後、中世基盤層標高：8.30m で現地表面は、地点 3 に比べ 1m ほど高くなる。図示していないが中世基盤層は地点 3 から当地点で一旦下がり、当地点から地点 23 へむけ緩やかに上がる様子が、Ⅰ区トレンチ西壁で確認できた。当地点と地点 23 の間に標高が少し高まる場所があり、そこから地点 23 に向けなだらかに傾斜していく様子が推考できる。

これまでの長谷小路周辺遺跡における発掘調査で、検出・出土した遺構・遺物の傾向を鑑みると、当遺跡地周辺の状況は、方形竪穴建物が建ち並び、漁撈や骨製品などの加工・制作を生業とする職能民が生活していた場であったと想定される。本調査地点では中世・古代ともに生活面の上部が現代の

攪乱による削平をうけていたが、9 世紀後葉と 14 世紀代、下って近代の生活の痕跡は確認されたが、それぞれの継続性は見られなかった。

本調査地点からは周辺遺跡で検出されている方形竪穴建物は検出されおらず、図 7 の土坑 5･6･7･15･16･23･27･20 のように切り合いが集中していることから土坑を頻繁に作り変える必要がある場所であったと想定される。しかしながら、土坑の検出数に比べ、遺物の出土量が非常に少ない。本調査地点周辺の地点 2・3・4・7・9・12・13・14（図 1 参照）などからは多くの方形竪穴建物が発見されおり、中には職人集団との関連を想起させる遺物も多く出土している。しかし、本調査地点より検出された遺構や遺物からは、職人に関連するような遺構や遺物は発見されなかったことから、方形竪穴建物が立ち並ぶ中の空間として、何かに利用されていた場とも考えられる。

Ⅱ区北西部で行ったトレンチ調査の結果、古代の竪穴住居跡が 2 軒確認され、竪穴 2 からはカマドを検出した。時期は出土した須恵器や土師器から 9 世紀後葉と推定される。住居址に伴うカマドは、その一部を近代の撹乱により破壊されていたが、カマドの構築材として須恵器の坏や鞴の羽口、武蔵型甕、相模型甕、三浦型甕などが使用されていたのは注視される。特に武蔵型甕の出土量が多い傾向にあり、甕の種類に偏りがみられた。周辺遺跡からも古代の遺構や遺物が出土しているが、本遺跡との関連性は未詳である。周辺遺跡の調査事例の増加を待ちたい。

表２　遺物観察表（中世）①

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
5-1	1面 土坑1	かわらけ	口縁 2/7 ～底部 4/7	(12.8)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
5-2	1面 土坑11	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/5	(11.5)	(6.0)	3.0	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 赤色粒 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
5-3	1面 土坑2	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 1/4	(6.9)	(4.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-4	1面 土坑2	かわらけ	口縁 1/8 ～底部 1/2	(11.9)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 二次焼成か全体に煤付着
5-5	1面 土坑2	かわらけ	口縁～底部 1/3	(12.6)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-6	1面 土坑2	かわらけ	略完形	12.6	7.9	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-7	1面 土坑2	中世不明陶器	胴部片	—	—	［7.25］	a: 上部ﾀﾀｷ目 下部ﾍﾗﾅﾃﾞ b: 暗灰色 微砂 白色粒 c: 暗灰色 e: 良好 硬質
5-8	1面 土坑3	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/5	(7.6)	(5.0)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-9	1面 土坑3	かわらけ	口縁～底部 1/4	(7.6)	(6.0)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
5-10	1面 土坑3	鉄製　釘	完形	長 4.7	幅 0.5	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.7g
5-11	1面 土坑4	青白磁　梅瓶	口縁部小片	(3.0)	—	［2.6］	b: 白色 精良緻密土　d: 淡水青色
5-12	1面 土坑4	青白磁　梅瓶	胴部片	—	—	［7.9］	b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 淡水青色不透明　f: 外面に模様 全体に二次焼成を受け釉がとりべ状になっている
5-13	1面 土坑7	かわらけ	口縁 1/8 欠 ～底部全	8.2	4.4	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
5-14	1面 土坑7	山茶碗	底部小片	—	(6.2)	［1.3］	a: 輪積み成形のち轆轤整形 外底糸切 内底ﾅﾃﾞ b: 灰色 小石粒 c: 灰色 f: 産地・型式不明
5-15	1面 土坑7	鉄製　釘	完形	長 5.4	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.3g
5-16	1面 土坑7	鉄製品	完形	L型：長 7.7 I型：長 5.8	幅 0.6 幅 0.4	厚 0.5 厚 0.2	f:L 型 - 頭部外φ 1.2 内φ 0.5　I 型–頭部外φ 1.2 内φ 0.7 重 20.0g
6-1	1面 土坑18	かわらけ	口縁～底部 1/7	(11.6)	(6.0)	3.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
6-2	1面 土坑10	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/3	(7.2)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-3	1面 土坑10	かわらけ	口縁 2/7 ～底部 4/7	(7.2)	(5.2)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 黄灰色 e: 良好
6-4	1面 土坑10	かわらけ	完形	7.4	5.7	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-5	1面 土坑10	かわらけ	口縁 1/3 ～底部 3/7	(7.6)	(5.6)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-6	1面 土坑10	かわらけ	口縁 4/7 ～底部 3/5	7.8	6.4	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-7	1面 土坑10	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/4	(7.8)	(6.6)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 黒色粒 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
6-8	1面 土坑10	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/3	(11.8)	(7.4)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-9	1面 土坑10	かわらけ	一部欠損	11.8	8.2	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 裏に焼成痕
6-10	1面 土坑10	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 2/3	12.3	7.6	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
6-11	1面 土坑10	常滑　甕	口縁部片	—	—	［9.2］	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 長石粒 礫片 c: 暗灰褐色 e: 良好 硬質 f: 中野編年 7 型式
6-12	1面 土坑10	亀山　甕	胴部小片	—	—	［2.8］	b: 黄橙色 白色粒 粗胎 c: 暗灰褐色 f: 内面の器表剝離
7-1	1面 土坑5	かわらけ	口縁 1/3 ～底部 3/8	(6.8)	(5.2)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-2	1面 土坑5	かわらけ	口縁 3/7 ～底部 1/2	(7.4)	(4.8)	1.95	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
7-3	1面 土坑5	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 1/3	(7.6)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好

表２　遺物観察表（中世）②

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
7-4	1面 土坑 5	かわらけ	口縁 2/5 ～底部 3/7	(7.7)	(5.4)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 小石粒 粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好 f: 灯明皿 口縁部に煤付着
7-5	1面 土坑 5	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 1/6	(12.5)	(7.7)	3.3	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-6	1面 土坑 5	かわらけ	口縁 1/18 ～底部 1/5	(13.5)	(7.8)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-7	1面 土坑 5	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［2.5］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 灰色 小石粒 c: 灰色
7-8	1面 土坑 5	銅銭	完形	外径 2.4	内径 2.0 孔径 0.7	厚 0.1	f: 元符通寶 北宋 1098 年 篆書 重 3.5g
7-9	1面 土坑 6・16	かわらけ	口縁 1/8 ～底部 1/3	(12.6)	(8.0)	3.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 白色粒 雲母 赤色粒 海綿骨針 良土 c: 橙色 e: 良好
7-10	1面 土坑 6・16	鉄製　釘	下部欠損	長［6.7］	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 8.7g
7-11	1面 土坑 6・16	骨製品　笄？	両端欠損	長［3.4］	幅 1.3	厚 0.4	f: 両面中央に溝状の加工
7-12	1面 土坑 6・16	須恵器　甕	胴部片	—	—	［7.7］	b: 灰色 黒色微粒 精良土 c: 淡灰黄色の自然釉 e: 良好 硬質 f: 中世での再利用の可能性あり 上端一部に切り出し痕・磨耗
7-13	1面 土坑 27	かわらけ	口縁 1/8 ～底部 1/5	(6.7)	(4.8)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
7-14	1面 土坑 27	鉄製　釘	完形	長 3.7	幅 0.5	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.9g
8-1	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 3/7 ～底部 3/5	(7.2)	5.0	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
8-2	1面 土坑 14	かわらけ	口縁～底部 1/7	(7.5)	(5.4)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
8-3	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 2/3 ～底部 4/5	7.5	5.9	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 泥岩 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-4	1面 土坑 14	かわらけ	完形	7.6	5.2	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-5	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 1/3	(7.8)	(5.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-6	1面 土坑 14	かわらけ	口縁～底部 3/5	7.9	6.4	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 金雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-7	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/3	(8.1)	(6.0)	1.65	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 磨滅激しい
8-8	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/7 ～底部 1/3	(10.8)	(6.0)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 金雲母 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 橙色 e: 良好
8-9	1面 土坑 14	かわらけ	口縁～底部 1/6	(10.8)	(6.4)	2.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや良土 c: 橙色 e: 良好
8-10	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/3 ～底部 1/5	(11.6)	(6.4)	3.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-11	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/8 ～底部 3/7	(12.2)	(7.6)	3.25	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-12	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/4 ~ 底部略完形	12.3	7.5	3.45	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-13	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 2/7 ～底部全	12.6	7.4	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-14	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 4/7	(12.6)	(8.2)	3.25	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好 f: 二次焼成か内外面一部に煤付着
8-15	1面 土坑 14	かわらけ	口縁 ~ 底部 1/2	(13.6)	(9.0)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや良土 c: 橙色 e: 良好
8-16	1面 土坑 14	瀬戸 片口鉢	口縁部小片	—	—	［4.9］	b: 灰色 長石粒 小石粒 緻密 c: 灰色 e: 良好 f:13c 第 3
8-17	1面 土坑 14	瀬戸 片口鉢	底部小片	—	(9.8)	［2.8］	a: 外面工具ﾅﾃﾞ b: 灰色 小石粒 c: 灰色 e: 良好 f:13c 第 4
8-18	1面 土坑 14	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［2.7］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 灰色 1 ～ 7 ㎜大小石粒 c: 灰色 f: 第 2 段階
8-19	1面 土坑 14	鉄製　釘	下部破損	長［3.4］	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 1.9g
8-20	1面 土坑 22	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(6.8)	(5.0)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-21	1面 土坑 22	かわらけ	口縁～底部 1/3	(7.8)	(5.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好

表２　遺物観察表（中世）③

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
8-22	1面 土坑 22	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 3/7	(7.8)	(5.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ後外周ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-23	1面 土坑 22	かわらけ	口縁 2/5 ～底部 3/7	(8.2)	(6.2)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ後外周ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
8-24	1面 土坑 22	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 2/5	(10.6)	(6.4)	3.0	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-25	1面 土坑 22	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/5	(11.8)	(6.2)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
8-26	1面 土坑 22	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	［6.5］	a: 輪積み b: 淡灰橙色 白色粒 赤色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 c: 淡灰橙色 e: 良好
8-27	1面 土坑 24	穿孔かわらけ	口縁 1/5 ～底部 2/5	(7.4)	(5.8)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-28	1面 土坑 24	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/3	(12.0)	(6.8)	3.25	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
8-29	1面 土坑 24	青白磁　梅瓶	口縁部小片	(3.2)	—	［2.4］	b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 淡水青色半透明 貫入
8-30	1面 土坑 28	かわらけ	口縁～底部 2/7	(7.6)	(5.6)	1.9	a: 轆轤 外底糸切痕 b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 灯明皿 口縁部に煤付着
8-31	1面 土坑 28	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(12.6)	(8.8)	3.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
8-32	1面 土坑 28	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	［5.1］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ 外底砂目痕 b: 暗灰色 長石粒 小石粒 c: 茶褐色 f: 内面磨滅・灰緑色の自然降灰
8-33	1面 土坑 28	鉄製　釘	完形	長 6.2	幅 0.5	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 4.1g
9-1	1面 土坑 19	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(7.4)	(5.4)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
9-2	1面 土坑 19	かわらけ	口縁～底部 1/6	(10.8)	(5.8)	3.5	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 金雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
9-3	1面 土坑 19	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 1/5	(12.6)	(8.2)	3.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針泥岩粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好
9-4	1面 土坑 19	渥美　甕	底部小片	—	—	［2.9］	a: 輪積み　b: 暗灰色茶色 白色粒　良土 粘性あり c: 暗灰褐色 e: 良好 硬質 ※備前の可能性も有
9-5	1面 土坑 19	山茶碗	底部小片	—	5.4	［1.4］	a: 轆轤整形 b: 灰白色 黒色粒 白色粒 礫片 やや粗胎 c: 灰白色 e: 良好 f: 内底面磨耗・ｺﾃ痕、尾張型（型式不明）
9-6	1面 土坑 21	かわらけ	口縁 4/7 ～底部 2/3	7.0	4.6	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-7	1面 土坑 21	かわらけ	口縁 3/8 ～底部 2/5	(7.2)	(5.4)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-8	1面 土坑 21	かわらけ	口縁～底部 1/3	(7.2)	(5.4)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
9-9	1面 土坑 21	常滑　甕	胴部片	—	—	［6.0］	a: 輪積み b: 灰橙色 白色粒 黒色粒 長石粒 礫片 c: 茶色 e: 良好 f: 外面に格子状の叩き目あり

表３　遺物観察表（１面面上・１面構成土）

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
10-1	1面面上	かわらけ	口縁 3/5 ～底部 2/3	7.8	5.8	1.75	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-2	1面面上	かわらけ	口縁 1/4 ～底部 2/5	(8.0)	(6.2)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-3	1面面上	かわらけ	口縁 1/3 ～底部 1/2	(12.0)	(6.0)	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-4	1面面上	かわらけ	口縁一部 ～底部 3/7	(12.6)	(7.4)	3.3	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 金雲母 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
10-5	1面面上	鉄製　釣針	完形	長（8.7）	幅 0.8	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 10.4g
10-6	1面面上	鉄製　釘	完形	長 5.9	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 4.0g
10-7	1面面上	鉄製　釘	完形	長 3.9	幅 0.3	厚 0.25	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 1.9g
10-8	1面面上	鉄製　釘	下部欠損	長［4.3］	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 4.3g
10-9	1面構成土	銅銭	完形	外径 2.5	内径 1.9 孔径 0.7	厚 0.1	f: 判別不能

表４　遺物観察表（古代竪穴２出土）①

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

挿図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）				観察項目
				口径	底径	器高	内底径	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
15-1	カマド	土師器 相模型　坏	略完形	12.6	8.0	4.3	—	b: 砂粒 金雲母 赤色粒 c: 淡橙色 e: 良好 硬質
15-2	覆土	土師器 相模型　坏	口縁部 1/3 ～ 底部 1/4	(12.6)	(8.0)	3.7	—	b: 砂粒 赤色粒 c: 橙色 e: 良好 硬質 f: 一部煤付着
15-3	覆土	土師器 相模型　坏	口縁部 1/4 ～ 底部 2/3	(12.0)	(5.6)	4.1	—	b: 砂粒、赤色粒、白色粒 c: 橙色 e: 良好 f: 内面に粘土紐痕
15-4	覆土	土師器 相模型　坏	口縁部 1/4 ～ 底部略完形	(11.4)	6.6	3.6	—	b: 砂粒 金雲母 赤色粒 海綿骨針 c: 淡橙色 e: 良好 硬質 f: 一部火を受けて黒変
15-5	覆土	ロクロ土師器 坏	底部 1/2	—	(6.7)	［2.2］	—	a: 底部外面回転糸切り痕 b: 砂粒、金雲母、白色粒、海綿骨針 c: 赤橙色 e: 良好 硬質 f: 内面に粘土紐痕
15-6	カマド	ロクロ土師器 皿	口縁部 1/8 ～ 底部 1/8	(13.4)	(4.3)	(2.2)	—	a: 底部糸切り後ヘラナデか？ b: 砂粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好 硬質 f: 復元径は参考値
15-7	覆土	内黒土器 埦 or 坏	口縁部 1/8	—	—	［3.3］	—	a: 内面黒色処理＋暗文 b: 砂粒、赤色粒 c: 外面：赤橙色、内面：黒色 e: 良好 硬質 f: 甲斐など中部地方の製品か
15-8	覆土	須恵器 坏蓋	口縁部 1/4 ～ 天井部の一部	(15.8)	—	［2.3］	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、白色粒、角閃石、海綿骨針 c: 灰～黒灰色 e: 良好 硬質 f: 外面の一部に煤付着。南比企産。9 と同一個体か
15-9	覆土	須恵器 坏蓋	口縁部 1/4 ～ 天井部の一部	(16.0)	—	［2.0］	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、白色粒、海綿骨針、小石粒 c: 青灰色 e: 良好 硬質 f: 南比企産。一部に煤付着。8 と同一個体か
15-10	カマド	須恵器 坏	口縁部 2/3 ～ 底部完形	11.6	5.3	3.2 ～ 3.8	5.1	a: 底部外面回転糸切り 底部脇ヘラケズリ 底面内面に渦巻状痕跡 b: 砂粒 赤色粒 白色粒 c: 青灰色～灰褐色 e: 良好 硬質 f: 東金子産
15-11	カマド	須恵器 坏	口縁部 1/2 ～ 底部完形	(11.2)	5.1	3.3	5.7	a: 底部外面回転糸切り b: 赤色粒 白色粒 c: 青灰色～灰褐色 e: 良好 硬質 f: 粘土板底部に粘土紐巻き付けか。北武蔵産か
15-12	P-2	須恵器 坏	口縁部 1/4 ～ 底部完形	11.3	5.3	3.9	5.7	a: 底部回転糸切り b: 砂粒 海綿骨針 c: 青灰色 e: 良好 硬質 f: 南比企産
15-13	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ～ 底部 1/3	(13.2)	(6.6)	4.25	—	a: 底部外面回転糸切り b: 白色粒、角閃石、海綿骨針、泥岩粒 c: 灰色 e: 良好 硬質 f: 口縁部に煤付着
15-14	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ～ 底部 1/3	(12.5)	—	［3.8］	—	a: 底部外面回転糸切り b: 砂粒、白色粒、赤色粒、海綿骨針 c: 灰色 e: 良好 硬質
15-15	覆土	須恵器 坏	口縁部 1/4 ～ 底部 1/2	(12.7)	(6.4)	［3.1］	—	a: 底部外面回転糸切り b: 砂粒、金雲母、白色、角閃石 c: 白灰色 e: やや良好 軟質 f: 一部煤付着　中世山茶碗の可能性あり
15-16	カマド	土師器 相模型　甕	口縁部 1/4	(23.0)	—	［8.1］	—	a: 内外面ナデ b: 砂粒、金雲母、赤色粒、角閃石、海綿骨針１本、小石粒　c: 黄橙色 e: 良好 f: 一部に煤付着
15-17	カマド	土師器 三浦型　甕	口縁部 1/4	(24.4)	—	［15.5］	—	a: 口唇部ヘラによる面取り b: 砂粒、赤色粒、白色粒、角閃石、石英？ c: 橙色 e: 良好 f: 内面の一部に黒色の付着物、不明付着物、外面の剥落顕著
15-18	覆土	土師器 三浦型　甕	口縁部小片	(22.6)	—	［6.8］	—	a: 口唇部面取り 口縁部と胴部の接合部分ヘラナデ 胴部ナデ？外面の剥落顕著 b: 砂粒 赤色粒 白色粒 角閃石 粗土 c: 淡橙色 e: やや良好 軟質
15-19	覆土	土師器 三浦型　甕	底部完形	—	7.8	［9.9］	—	a: 内面刷毛ナデ、ヘラ痕 b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 灰褐色 e: 不良 f: 被熱のため底部外面の器表剥落。一部煤付着
15-20	覆土	土師器 三浦型　甕	底部完形	—	7.1 ～ 7.5	［5.2］	—	a: 底部外面木葉痕 胴部ヘラケズリ後ナデ？内面ナデ b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 赤褐色 e: 良好
15-21	カマド	土師器 三浦型　甕	口縁部小片	—	—	［8.0］	—	b: 微砂、赤色粒、白色粒、角閃石、海綿骨針、粗土 c: 黄橙色 e: 良好 f: 一部に煤付着。器表の剥落顕著
15-22	覆土	土師器 甕	口縁部小片	—	—	［2.9］	—	a: 胴部外面タテハケ、内面ヨコハケ b: 砂粒 金雲母 白色粒 角閃石 粗土 c: 赤褐色～黒褐色 e: 良好 f: 古墳時代？
15-23	カマド	土師器 武蔵型 台付甕	口縁部 1/8 ～ 底部略完形	(15.0)	7.9	19.4	—	a: 口唇部ヘラの押圧痕？b: 砂粒 金雲母 白色粒 c: 橙褐色 e: 良好 硬質 f: 内外面黒変
15-24	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁略完形～ 胴部 2/3	14.2	—	［10.2］	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙色 e: 良好 硬質
15-25	カマド他	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/2 ～ 胴部 1/8	(14.8)	—	［11.0］	—	b: 金雲母 白色粒 海綿骨針 c: 赤橙色 e: 良好 f: 外面の一部黒変
16-26	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/4	(15.4)	—	［7.1］	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙褐色 e: 良好 硬質 f: 外面の一部黒変
16-27	覆土	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/2	(15.2)	—	［8.0］	—	b: 砂粒 赤色粒 白色粒 角閃石 c: 褐色 e: 良好 硬質
16-28	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/3	(11.0)	—	［7.3］	—	b: 金雲母 白色粒 c: 淡橙色 e: 良好 f: 外面の一部に煤付着
16-29	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/4 ～ 胴部 1/4	(22.2)	—	［17.2］	—	b: 砂粒 赤色粒 角閃石 c: 橙色 e: 良好 硬質 f: 内面に白色の付着物
16-30	覆土	土師器 武蔵型　甕	口縁部 7/8 ～ 胴部 1/8	16.9	—	［9.0］	—	b: 砂粒 金雲母 白色粒 海面骨針 c: 赤橙色 e: 良好 硬質 f: 内面の一部に黒色の付着物
16-31	覆土	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/4 ～ 胴部 1/4	(19.8)	—	［15.0］	—	b: 砂粒 金雲母 白色粒 c: 赤橙色 e: 良好 f: 内面に黒色の付着物あり

表４　遺物観察表遺物観察表（古代竪穴２出土）②

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

挿図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）				観察項目
				口径	底径	器高	内底径	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
16-32	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/2	(20.0)	—	［10.6］	—	b: 砂粒 金雲母 c: 橙色 e: 良好 硬質 f:
16-33	カマド	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/2	(18.4)	—	［8.9］	—	b: 砂粒 金雲母 角閃石 c: 橙色　e: 良好 硬質
16-34	覆土	土師器 武蔵型　甕	口縁部 1/4	(21.8)	—	［8.4］	—	b: 砂粒 角閃石 金雲母 海面骨針 c: 赤褐色 e: 良好 硬質 f: 内面の一部に白色の付着物
16-35	カマド他	土師器 武蔵型　甕	胴部 1/2 ～ 底部完形	—	3.5 ～ 4.0	［12.3］	—	b: 砂粒 金雲母 銀色粒 赤色粒 c: 淡橙色 e: 良好 f: 底部内面に黒色の付着物、外面に煤付着
16-36	カマド	土師器 武蔵型　甕	胴部 1/4 ～ 底部 2/3	—	4.6	［9.7］	—	b: 砂粒 c: 橙褐色 e: 良好 f: 内面に白い付着物有り
16-37	カマド	土師器 武蔵型　甕	胴部一部～ 底部 1/2	—	4.4	［8.6］	—	b: 赤色粒 小石粒 c: 赤褐色 e: 良好
17-38	覆土	土製品 鞴　羽口	略完形	長 11.0	最大径 7.4	孔径 2.6	重 437.1g	a: 外面ヘラで面取り状の整形 b: 砂粒 雲母 白色粒 角閃石 小石粒 粗土 c: 赤褐色 e: 良好 f: カマド構築材として再利用か。
17-39	覆土	鉄製品 用途不明	完形？	長 15.2	幅 0.9	厚 0.6	—	f: 全体に錆が付着
17-40	覆土	石製品 砥石	1/2 以下	長 ［3.4］	幅 ［3.7］	厚 ［1.5］	—	a: 表裏二面を使用 b: 流紋岩質凝灰岩 c: 淡黄色 f: 中世の上野産中砥（砥沢）に似る

表５　遺物観察表（Ⅱ区トレンチ上層）

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

挿図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
18-1	Ⅱ区トレンチ上層	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(8.2)	(6.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 橙色　e: 良好
18-2	Ⅱ区トレンチ上層	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/4	(11.8)	(7.0)	2.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 良土 c: 橙色 e: 良好
18-3	Ⅱ区トレンチ上層	土器質　火鉢	口縁部小片	—	—	［4.7］	a: 輪積み 外面口縁部下ﾖｺﾅﾃﾞ b: 微砂 礫片 c: 灰橙色 e: 良好 f: 口縁部及び外面は二次焼成を受けたか Ⅰb 類？
18-4	Ⅱ区トレンチ上層	土錘	完形	長 4.5	幅 3.2	厚 3.1	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-5	Ⅱ区トレンチ上層	土錘	完形	長 4.8	幅 3.4	厚 3.3	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-6	Ⅱ区トレンチ上層	土錘	完形	長 4.8	幅 3.6	厚 3.5	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-7	Ⅱ区トレンチ上層	土錘	完形	長 5.1	幅 3.4	厚 2.9	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好
18-8	Ⅱ区トレンチ上層	土錘	完形	長 5.4	幅 3.4	厚 3.5	b: 雲母 黒色粒 白色粒 良土 c: 灰橙色 e: 良好

表６　遺物観察表（表土）①

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
19-1	表土	かわらけ	口縁一部～底部 1/5	(6.6)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-2	表土	かわらけ	口縁一部～底部 1/3	(7.0)	(4.4)	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
19-3	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 2/7	(7.0)	(4.6)	1.4	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 金雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-4	表土	かわらけ	口縁 2/7～底部 1/3	(7.4)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 黒色粒 海綿骨針 赤色粒 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-5	表土	かわらけ	口縁 2/7～底部 1/3	(7.4)	(5.0)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-6	表土	かわらけ	口縁 1/16～底部 1/4	(7.4)	(5.4)	1.55	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 白色粒 良土 c: 橙色 e: 良好
19-7	表土	かわらけ	口縁一部～底部 1/6	(7.4)	(5.4)	1.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-8	表土	かわらけ	完形	7.5	4.8	2.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-9	表土	かわらけ	口縁 1/6～底部 1/4	(7.6)	(4.2)	1.65	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや良土 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-10	表土	かわらけ	口縁 1/7～底部 3/5	(7.6)	4.6	2.05	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-11	表土	かわらけ	口縁一部～底部 2/5	(7.6)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-12	表土	かわらけ	口縁～底部 1/5	(7.6)	(4.8)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-13	表土	かわらけ	口縁 1/6～底部 1/7	(7.6)	(5.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-14	表土	かわらけ	口縁 1/7～底部 3/5	(7.6)	(5.0)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-15	表土	かわらけ	口縁一部～底部 1/3	(7.6)	(5.2)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-16	表土	かわらけ	口縁 1/7～底部 1/3	(7.6)	(5.6)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石粒 粗胎 c: 淡灰黄色 e: やや不良
19-17	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(7.6)	(5.8)	1.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 淡橙色 e: やや良好 f: 内底面に一条の沈線
19-18	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 1/3	(7.7)	(5.0)	1.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 雲母 粗胎 c: 赤橙色 e: 良好
19-19	表土	かわらけ	口縁～底部 2/5	(7.7)	(5.2)	1.55	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 小石 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-20	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 1/4	(7.8)	(4.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 黒色粒 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-21	表土	かわらけ	口縁 4/7～底部全	(7.8)	5.0	1.7	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-22	表土	かわらけ	口縁 1/10～底部 1/4	(7.8)	(5.0)	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-23	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 1/3	(7.8)	(5.2)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 小石粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 橙色 e: やや不良
19-24	表土	かわらけ	口縁 1/6～底部 1/5	(7.8)	(5.6)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-25	表土	かわらけ	口縁～底部 1/4	(7.8)	(5.8)	1.4	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 良土 c: 淡橙色 e: 良好
19-26	表土	かわらけ	口縁 3/8～底部 1/3	(7.8)	(5.8)	1.6	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 小土粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-27	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(7.8)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-28	表土	かわらけ	口縁 1/8～底部 1/5	(7.8)	(6.0)	1.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 b: 微砂 雲母 白色粒 黒色粒 海綿骨針 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-29	表土	かわらけ	口縁 2/3～底部全	7.9	5.0	1.9	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-30	表土	かわらけ	口縁 1/3～底部全	(8.0)	5.4	1.75	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-31	表土	かわらけ	口縁～底部 1/6	(10.6)	(6.4)	2.8	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 やや良土 c: 橙色 e: 良好
19-32	表土	かわらけ	口縁 6/7～底部全	11.0	6.8	3.0	a: 轆轤 外底糸切・ｽﾉｺ状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-33	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 2/7	(11.2)	(6.2)	2.8	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-34	表土	かわらけ	口縁 1/5～底部 2/7	(11.6)	(7.8)	2.85	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 灯明皿 内面全体～口縁部に薄く煤付着

表６　遺物観察表（表土）②

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
19-35	表土	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/3	(11.6)	(7.0)	3.55	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡赤橙色 e: 良好
19-36	表土	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/3	(11.6)	(7.4)	3.5	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 良土 c: 橙色 e: 良好
19-37	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/4	(11.7)	(7.3)	2.95	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡黄橙色 e: 良好
19-38	表土	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/2	(11.7)	7.4	3.05	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 雲母 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-39	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 1/6	(11.8)	(7.4)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 白色粒 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-40	表土	かわらけ	口縁 1/9 ～底部 1/4	(11.8)	(8.0)	2.9	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 やや粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-41	表土	かわらけ	口縁 1/2 ～底部 2/3	12.2	7.5	3.35	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好 f: 黒胎芯
19-42	表土	かわらけ	口縁 1/2 ～底部 3/5	(12.2)	(7.6)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 灰橙色 e: 良好
19-43	表土	かわらけ	一部欠損	12.2	7.8	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 赤色粒 黒色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-44	表土	かわらけ	口縁 1/2 ～底部 3/5	(12.4)	(7.4)	3.1	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-45	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 2/7	(12.4)	(8.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-46	表土	かわらけ	口縁一部 ～底部 2/5	(12.6)	(8.0)	3.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 粗胎 c: 橙色 e: やや不良 黒胎芯
19-47	表土	かわらけ	口縁 1/16 ～底部 1/5	(12.5)	(7.4)	3.3	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-48	表土	かわらけ	口縁 1/5 ～底部 1/4	(12.7)	(7.0)	3.2	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-49	表土	かわらけ	口縁 4/7 ～底部全	13.1	7.9	3.6	a: 轆轤 外底糸切・板状圧痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 雲母 赤色粒 白色粒多量 黒色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや粗胎 c: 橙色 e: 良好
19-50	表土	かわらけ	口縁～底部 1/7	(13.2)	(7.8)	3.85	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 微砂 赤色粒 黒色粒 海綿骨針 雲母 泥岩粒 やや粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
19-51	表土	かわらけ	口縁 1/6 ～底部 1/5	(13.8)	(8.0)	3.5	a: 轆轤 外底糸切痕 内底ﾅﾃﾞ b: 雲母 赤色粒 白色粒 海綿骨針 泥岩粒 やや良土 c: 橙色 e: やや不良
19-52	表土	青磁 鎬蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	［3.0］	a: 轆轤整形 b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 灰緑色半透明 施釉やや厚い e: 堅緻
19-53	表土	青磁 鎬蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	［3.3］	b: 灰色 黒色粒極少量 精良緻密土 d: 灰緑色半透明
19-54	表土	青磁 鎬蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	［3.8］	b: 灰白色 黒色微粒 精良緻密土 d: 灰緑色半透明 施釉薄い e: 堅緻
19-55	表土	青磁 鎬蓮弁文椀	口縁部小片	—	—	［5.4］	b: 黄灰色 黒色微粒 精良緻密土 d: 黄緑灰色不透明 e: 堅緻
19-56	表土	白磁　口兀皿	口縁～底部 1/4	(8.8)	(7.9)	1.75	b: 灰白色 黒色粒 緻密 d: 乳白色半透明 口縁部露胎
19-57	表土	白磁 口兀碗	口縁部小片	(14.2)	—	［4.9］	b: 灰白色 黒色粒 緻密 d: 乳白色半透明 口縁部露胎
19-58	表土	青白磁　梅瓶	口縁部小片	(3.6)	—	［2.3］	b: 白色 精良緻密土 d: 水青色不透明
19-59	表土	青白磁　梅瓶	底部小片	—	(7.6)	［4.0］	a: 削り出し高台 b: 灰白色 黒色粒 精良緻密土 d: 水青色透明 貫入 高台露胎　f: 外面に沈線あり
19-60	表土	瀬戸　壺類	底部小片 高台欠損	—	—	［4.8］	a: 内面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 灰色 黒色粒 c: 灰色 d: 緑灰色透明 貫入 外面のみ施釉 f: 外面に沈線 外底部に高台を付けるためﾍﾗでｷｻﾞﾐを入れてある
19-61	表土	瀬戸 折縁深皿	口縁部小片	—	—	［1.5］	b: 灰黄色　白色粒 礫片 良土 d: 二次焼成を受け不明 f: 前Ⅳ～中Ⅱか
19-62	表土	瀬戸 直縁大皿か	底部小片	—	—	［2.1］	a: 轆轤成形 b: 灰黄色 白色粒 良土 d: 鉄釉 e: 良好 f: 中世後期以降か
19-63	表土	瀬戸 卸皿	底部片	—	(10.2)	［1.0］	a: 轆轤成形 b: 黄灰色 黒色粒 白色粒 小石粒 良土 e: 良好 硬質 f: 割れ口の一部に煤付着
19-64	表土	瀬戸 器種不明	底部小片	—	—	［2.6］	a: 外底糸切 b: 淡黄色 黒色微粒　良土 d: 灰緑色半透明 e: 良好

表６　遺物観察表（表土）③

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
20-65	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［3.0］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 灰色 長石粒 小石 c: 灰色
20-66	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［3.2］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰褐色 白色粒 黒色粒 小石粒 石英粒 長石粒 粗胎 e: 良好
20-67	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［3.3］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 白色粒・石英粒・長石粒を多く含む 良土 c: 灰色 e: 良好
20-68	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片	—	—	［5.2］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 粗胎 c: 灰色 e: 良好 f: 内面磨滅
20-69	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片	—	—	［6.5］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 灰色 黒色粒 長石粒 小石粒 c: 灰色
20-70	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片 高台欠損	—	—	［2.8］	a: 輪積み 轆轤整形 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ b: 灰色　白色粒 黒色粒 礫片 良土 c: 灰色 e: 良好
20-71	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	［3.0］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 石英粒 長石粒 礫 良土 c: 灰色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-72	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	［3.6］	a: 輪積み　轆轤整形 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ b: 灰色 石英粒 長石粒 礫片 良土 c: 暗灰色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-73	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	—	［4.0］	a: 輪積み b: 灰色 長石粒 小石粒 白色粒 c: 灰色 f: 外面にﾍﾗ状工具による ﾖｺﾅﾃﾞ内面に灰緑色の自然降灰が薄く掛かる
20-74	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(9.4)	［4.8］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 良土 e: 良好 f: 外面下位に回転ﾍﾗ削り 内面に緑灰白色の自然降灰・下位に重ね焼き痕
20-75	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(9.6)	［4.4］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英 礫 良土 c: 灰色 e: 良好 f: 内底面に重ね焼き痕 内面磨耗 台形高台の古手（型式不明）
20-76	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部小片	—	(12.0)	［2.3］	a: 輪積み 轆轤整形 b: 灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 良土 e: 良好
20-77	表土	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片	—	(13.8)	［4.4］	a: 輪積み 轆轤整形 回転ﾍﾗｹｽﾞﾘ b: 灰橙色 長石粒 石英粒 礫片 やや良土 c: 茶色～茶褐色 e: 良好 f: 外底部一部に自然釉かかる
20-78	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［3.4］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ b: 暗灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 茶褐色
20-79	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［4.0］	a: 輪積み 口縁部ﾅﾃﾞ b: 暗灰色 白色粒 長石粒 礫片 良土 c: 赤褐色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-80	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［5.7］	a: 輪積み 内面～口縁部下までﾖｺﾅﾃﾞ b: 橙色 小石粒 c: 赤褐色 f:6b ～ 7 型式
20-81	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片	—	—	［6.4］	a: 輪積み 口縁部ﾅﾃﾞ b: 灰色 白色粒 黒色粒 長石粒 良土 c: 内外面共に赤褐色 口縁部～内面に黄緑灰色の自然降灰 e: 良好 硬質 f: 中野編年 8 ～ 9 型式
20-82	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	［4.4］	a: 輪積み 外側面下位にﾍﾗ状工具による調整痕 b: 暗灰色 微砂 石英粒 長石粒 礫片 やや粗胎 c: 暗橙色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-83	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	［5.2］	a: 輪積み 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ 外面工具ﾅﾃﾞ 外底砂目痕 b: 灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 茶褐色 内面に薄く緑灰色の自然降灰 f: 内面磨滅
20-84	表土	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部小片	—	—	［7.4］	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 c: 茶色 e: 良好 f: 内面磨耗
20-85	表土	常滑 浅鉢 or 鉢	口縁部片	—	—	［4.3］	b: 褐色 石英粒・長石粒・礫片をやや多く含む やや良土 c: 暗褐色 e: 良好 f: 外側面に工具による押印模様あり
20-86	表土	常滑　甕	口縁部小片	—	—	［3.6］	a: 輪積み b: 灰色 白色粒 長石粒 小石粒 c: 暗茶褐色の自然降灰が縁帯～内面に薄く掛かる f:6a 型式
20-87	表土	常滑　甕	肩部片	—	—	［11.4］	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫 粗胎 e: 良好 f: 内面に薄く指頭痕・一部黄灰色の付着物 器表に茶褐色自然降灰・格子目の叩き
20-88	表土	常滑　甕	胴部片	—	—	［9.6］	a: 輪積み b: 暗灰色 白色粒 黒色粒 石英粒 長石粒 礫片 粗胎 e: 良好 f: 内面に薄く指頭痕 器表に茶褐色自然降灰・格子目の叩き
20-89	表土	渥美　甕	頸部小片	—	—	［6.0］	a: 輪積み b: 暗灰色 精良土 c: 黒灰色 口縁部内側に黄緑灰色の自然降灰 d: 口縁部～頸部刷毛塗り e: 良好 硬質
20-90	表土	山茶碗　東濃	口縁部小片	(12.0)	—	［2.6］	a: 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ 口縁部ｼﾒﾅﾃﾞ b: 灰色 白色粒 緻密 c: 灰色 d: 口縁頂部～内面に暗緑灰色の自然降灰が極少量かかる
20-91	表土	山茶碗 尾張型　常滑	底部小片	—	—	［1.8］	a: 輪積み 轆轤整形 外底糸切 b: 白色粒 黒色粒 礫片 良土 c: 灰色 e: 良好
20-92	表土	土製品　羽口	小片	(7.0)	孔径 (3.0)	［5.3］	b: 微砂 白色粒 黒色粒 c: 黄橙色 e: 良好 f: 黒色～暗灰緑色のスラグが一部付着 外面全体に煤付着
20-93	表土	瓦器質　火鉢	口縁部小片	—	—	［4.8］	b: 暗灰色～灰橙色 白色粒 礫片　粗胎 c: 灰橙色（二次焼成の為か？）内面黒色処理　e: 良好　f: 器表面ﾐｶﾞｷ処理 輪花形
20-94	表土	瓦器質　火鉢	口縁部片	—	—	［9.0］	a: 輪積み b: 灰色 小石粒 敲片 やや 粗胎 c: 灰色 e: 良好 f: 器表面に菊花文（16 弁）のスタンプあり ﾍﾗﾐｶﾞｷ痕 河野分類Ⅲ類
20-95	表土	土器質　火鉢	底部小片	—	—	［5.2］	a: 内外面ﾖｺﾅﾃﾞ 外底砂目痕 b: 橙色 白色粒 黒色粒 小石粒 c: 橙色

表６　遺物観察表（表土）④

（　）＝復元値　［　］＝遺存値

指図番号	出土遺構	種別	遺存度	寸法（cm）			観察項目
				口径	底径	器高	a: 成形・整形 b: 胎土・素地・材質 c: 色調 d: 釉調 e: 焼成 f: 備考
20-96	表土	瓦質？系の脚	脚部片	—	（13.2）	［3.5］	b: 灰橙色 赤色粒 黒色粒　粗胎 c: 橙白色 e: 良好 f: 内面及び器表上部に煤付着
20-97	表土	土錘	半破損	長 4.0	幅 3.5	厚［1.2］	b: 雲母 黒色粒 白色粒 粗胎 c: 淡橙色 e: 良好
20-98	表土	砥石（仕上砥）	下部・裏面破損	長［3.5］	幅 3.0	厚［0.9］	b: 頁岩（流紋岩質細流凝灰岩）c: 橙色 f: 鳴滝産 上端部に切り出し痕 砥面 1 面磨滅 裏面は剝離している
20-99	表土	砥石（仕上砥）	下部破損	長［5.2］	幅［4.65］	厚［0.5］	b: 不明 c: 暗赤橙色 f: 産地不明 砥面 2 面磨滅
21-100	表土	鉄製　釘	下部破損	長［2.5］	幅 0.4	厚 0.2	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 1.4g
21-101	表土	鉄製　釘	下部破損	長［2.6］	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 1.4g
21-102	表土	鉄製　釘	完形	長 4.2	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.5g
21-103	表土	鉄製　釘	下部破損	長［4.2］	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.3g
21-104	表土	鉄製　釘	完形	長 4.4	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.1g
21-105	表土	鉄製　釘	一部欠損	長 4.7	幅 0.3	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 1.6g
21-106	表土	鉄製　釘	一部欠損	長 4.7	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.3g
21-107	表土	鉄製　釘	完形	長 4.8	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.1g
21-108	表土	鉄製　釘	完形	長 4.9	幅 0.35	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.4g
21-109	表土	鉄製　釘	端部欠損	長［5.0］	幅 0.6	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 6.2g
21-110	表土	鉄製　釘	完形	長 5.1	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.8g
21-111	表土	鉄製　釘	完形	長 5.2	幅 0.45	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.5g
21-112	表土	鉄製　釘	一部欠損	長 5.2	幅 0.6	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 5.9g
21-113	表土	鉄製　釘	上部破損	長［5.5］	幅 0.5	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.2g
21-114	表土	鉄製　釘	下部破損	長［6.1］	幅 0.8	厚 0.8	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 28.0g
21-115	表土	鉄製　釘	完形	長 6.3	幅 0.5	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 3.1g
21-116	表土	鉄製　釘	完形	長 6.4	幅 0.5	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 5.4g
21-117	表土	鉄製　釘	完形	長 6.6	幅 0.2	厚 0.2	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 2.3g
21-118	表土	鉄製　釘	完形	長 6.8	幅 0.4	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 5.9g、全体に錆付着
21-119	表土	鉄製　釘	完形	長 7.1	幅 0.8	厚 0.5	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 9.4g
21-120	表土	鉄製　釘	完形	長 7.5	幅 0.55	厚 0.3	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 6.0g
21-121	表土	鉄製　釘	完形	長 7.7	幅 0.7	厚 0.4	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 7.5g
21-122	表土	鉄製　釘	完形	長 7.8	幅 0.5	厚 0.35	a: 胴部四角形に鍛造　f: 重 4.4g
21-123	表土	不明鉄製品	一部欠損	長［7.0］	幅（1.8）	厚（1.1）	a: 頭頂部に穴が開けられている　f: 重 13.0g、全体に錆付着
21-124	表土	骨製品	完形	長 2.8	幅 1.0	厚 0.25	
21-125	表土	骨製品	完形	長 2.7	幅 3.4	厚 1.4	f: φ 0.2cm の穴が 3 箇所あり中 1 つは貫通していない
21-126	表土	骨製品	下部破損	長［8.4］	幅 1.1	厚 0.65	f: 上端部に茶色の付着物
21-127	表土	骨製品	完形	長 4.7	幅 2.3	厚 0.6	f: 加工途中か？
21-128	表土	骨製品	完形	長 2.9	幅 3.4	厚 0.3	f: 半円状に加工
21-129	表土	骨製品	完形	長 11.8	幅 2.2	厚 2.1	f: はっきりとした加工痕は認められないが頭頂部にうすく削った様な痕が残る
21-130	表土	骨製品	完形	長 15.0	幅 4.4	厚 4.2 ～ 2.8	f: 下端部にノコ状工具による切断痕 上部はぼ 1/4 を残し内外面共に研磨され滑らかに加工されている
21-131	表土	骨製品	完形	長 5.3	幅 3.7	厚 2.8	f: 両端断面にノコ痕？あり 内外面共に研磨され表面はなめらかになっている
21-132	表土	須恵器　坏	口縁部小片	—	—	［3.2］	a: 轆轤整形 b: 灰色 黒色粒 白色粒 礫片 海綿骨針 良土 e: 良好

表７　貝の分類表

		生息場所	表土	１面遺構	１面面上	１面構成土	Ⅰ区深堀トレンチ	Ⅱ区トレンチ上層	Ⅱ区トレンチ下層	古代遺構
岩礁	センジュガイモドキ	岩礁		1						
	ナミノコガイ	潮間帯砂浜の波打ち際							2	2
	キイロダカラ	潮間帯の岩礁							1	
	クボガイ	潮間帯の岩礁		3					1	2
	イシダタミ	潮間帯の岩礁、転石		1						
	スガイ	潮間帯の岩礁、転石	7	7						
	バテイラ	潮間帯～水深１0m 位の岩礁	2	3					4	1
	トコブシ	潮間帯から水深 10m 位の岩礁	1							
	オオヘビガイ	潮間帯～水深 20m 位の岩礁、転石	1	2						
	ウチムラサキ	潮間帯～水深 20m 位の岩礁の間の砂礫地								1
	サザエ	潮間帯～水深 50m 位の岩礁	29	36	2		1		24	27
	アワビ		4	13			3		3	
内湾	オオノガイ	内湾、干潟・潮間帯の砂泥地、泥地							2	7
	オキシジミガイ	内湾、干潟・潮間帯～水深 20m の砂泥地、泥地		1						
	ハマグリ	内湾・潮間帯～水深 10m の砂地、砂泥地	98	114	10			2	9	23
	サルボオ	内湾・潮間帯～水深 20m の砂泥地	1							2
	シオフキ	内湾・潮間帯～水深 20m の砂地、砂泥地	2	2			1		5	1
	アカニシ	内湾・潮間帯～水深 20m の岩礁、砂地、砂泥地	47	18	3	1	6	1	6	2
	カガミガイ	内湾・潮間帯～水深 30m の砂地、砂泥地	1	1					5	4
	カキ		1				4		2	1
砂浜	ダンベイキサゴ	潮下帯～水深 10m 位の砂地	31	36	1		1	1	4	4
	チョウセンハマグリ	潮下帯～水深 10m 位の砂地	20	138	10	1	5	1	27	64
	バイガイ	潮下帯～水深 30m 位の砂地、砂泥地	38	10	1			1	1	5
	アズマニシキ	潮下帯～水深 50m 位の岩礁						1		1
	ベンケイガイ	水深 5 ～ 20m 位の砂地、砂泥地							1	
	マツヤマワスレ	水深 5 ～ 50m 位の砂地	1							
	サトウガイ	水深 10 ～ 30m の細砂地、外洋性	1			1	1		3	1
	イタヤガイ	水深 10 ～ 100m 位の砂地、砂泥地	1							
	イボキサゴ	潮間帯～水深 10m 位の砂地	14	26						
	キサゴ	潮間帯～水深 10m 位の砂地	9	22	1					
	アサリ	潮間帯～水深 10m の砂地、砂泥地	5	36					24	113
	オキアサリ								6	10
	オニアサリ	潮間帯～水深 5m 位の岩礁の間の砂地、砂礫地								1
	ツメタガイ	潮間帯～水深 30m 位の砂地、砂泥地	4	1					4	3
	ウラシマ	水深 10 ～ 100m 位の砂地、砂泥地							1	
汽水域	ヤマトシジミ			2			1		104	64
	シジミ		2						80	2
不明	ヒダリマキマイマイ		4	1					1	1
	イガイ科不明									4
	イタヤガイ科不明									1
	イトマキボラ科不明			1						
	ウミニナ類			3	2				1	
	サトウガイまたはサルボウ１		1							
	タマガイ科									1
	二枚貝不明						2		1	15
	ハボウキガイ科またはイガイ科			1						
	フネガイ類								1	
	巻貝不明									22
	リュウテンサザエ科不明			1	1					
	不明		2				3			
	不明バイ目								1	
	不明フネガイ科								1	

表８　遺物集計表

種別		表土	１面遺構	１面面上	１面構成土	Ⅰ区深堀セクション	Ⅱ区トレンチ上層	Ⅱ区トレンチ下層	古代遺構
かわらけ	糸切り	小 205、中 35、大 1759	小 152、中 13、大 613	小 18、大 97	大 1		小 2、大 25	小 2、大 30	大 9、破片 16
	燈明皿	糸切大 5	大 3						
	穿孔		小 1						
舶載陶磁器	青磁	連弁文碗 18、文様不明小型鉢 1	連弁文碗 1、器種不明 1				連弁文碗 1		
	白磁	口冗皿 6、口冗碗 1、器種不明 1	壺 1						
	青白磁	梅瓶 8、碗 1	梅瓶 3						
	褐釉	褐釉？ 3	1				褐釉系統　器種不明 1		
国産陶磁器	瀬戸	袋物 2、瓶子 1、花瓶､器種不明 1、卸目皿 1、天目茶碗 1、折縁深皿 3、縁釉小皿 1、壺 1、鉢？ 1、壺類 1	行平鍋？ 1、器形不明 1、四耳壺か？ 1						
	常滑	甕 111、壺 3、浅鉢か？ 1、常滑転用品 1	甕 32、壺 2、壺類 1	甕 8			甕 5	甕 3	甕 1
	常滑片口Ⅰ類	17	7	1				1	
	常滑片口Ⅱ類	16	1				1		
	渥美		甕 2						
	備前	片口鉢 1、甕 1							
	亀山		甕 1						
	山茶碗	東濃 2、不明 5	尾張型 2	尾張型 1					
	不明	1	1						
土製品	火鉢	5、瓦質火鉢 4		1			1		
	その他	鞴の羽口 9、瓦質の燭台系の脚 1、不明土器片 2、土錘 1	鞴の羽口 3、土鍋 1				土錘 5	鞴の羽口 1	瓦 1
石製品	硯	砥石か？ 1							
	砥石	4							1
	滑石製品		鍋 1						
	その他	石 1 、硯の石材になる可能性のある石 1、土丹 3、火成岩 1、石 1	焼けた石 1、石 2、土丹 2、加工痕のある土丹 2、石 1、窯くそ 1 、炉壁か？ 1、軽石 1、土丹 3			軽石 3	穴あき土丹 1	軽石 4、石 13、焼けた土丹 176、土丹 28	土丹 332、軽石 4、石 16
金属製品	釘	26	5	4					
	銭		1		1				
	鉄滓	2	スラグ 5						3
	その他	不明鉄製品 7	鍵 1、不明 2				スラグ 1	4	不明鉄製品 2
骨角製品	加工品	10	笄 1					2	1
木製品	加工木製品		3						
自然遺物	骨	骨片 116、人歯 1	51、骨片 2	5	4		6	18	23

表８　遺物集計表

種別		表土	１面遺構	１面面上	１面構成土	Ⅰ区深堀セクション	Ⅱ区トレンチ上層	Ⅱ区トレンチ下層	古代遺構
貝		ハマグリ 98、チョウセンハマグリ 20、アカニシ 47、ダンベイキサゴ 31、イボキサゴ 14、スガイ 7、ツメタガイ 4、ヒダリマキマイマイ 4、バイガイ 38、サザエ 29、アワビ 4、カガミ貝 1、アサリ 5、シオフキ 2、シジミ 2、サトウガイまたはサルボウ 1、不明 2、オオヘビガイ 1、キサゴ 9、バテイラ 2、イタヤガイ 1、サルボウガイ 1、マツヤマワスレ ?1、トコブシ 1、サトウガイ 1	アサリ 36、アカニシ 18、アワビ 13、オオヘビガイ 2、ハマグリ 114、バイガイ 10、サザエ 36、ダンベイキサゴ 36、イボキサゴ 26、キサゴ 22、チョウセンハマグリ 138、ハボウキガイ科またはイガイ科 1、カキ 1、イシダタミガイ 1、スガイ 7、センジュガイモドキ 1、クボガイ 3、ウミニナ類 3、シオフキガイ 2、ヤマトシジミ 2、バテイラ 3、リュウテンサザエ科不明 1、イトマキボラ科不明 1、オキシジミガイ 1、ヒダリマキマイマイ 1、ツメタガイ 1、カガミ貝 1	リュウテンサザエ科不明 1、バイガイ 1、アカニシ 3、サザエ 2、チョウセンハマグリ 10、ダンベイキサゴ 1、キサゴ 1、ウミニナ類 2、ハマグリ 10	サトウガイ 1、アカニシ 1、チョウセンハマグリ 1	サトウガイ 1、アカニシ 6、ダンベイキサゴ 1、シオフキ 1、チョウセンハマグリ 5、二枚貝不明 2、サザエ 1、カキ 4、アワビ 3、不明 3、ヤマトシジミ 1	アカニシ 1、バイガイ 1、ダンベイキサゴ 1、チョウセンハマグリ 1、ハマグリ 2、アズマニシキ 1	アサリ 24、ヤマトシジミ 104、シジミ 80、チョウセンハマグリ 27、カキ 2、ダンベイキサゴ 4、バテイラ 4、ヒダリマキマイマイ 1、ツメタガイ 4、サトウガイ 3、クボガイ 1、アカニシ 6、オオノガイ 2、サザエ 24、シオフキ 5、ハマグリ 9、オキアサリ 6、カガミガイ 5、キイロダカラ 1、不明バイ目 1、ウラシマガイ 1、ウミニナ類 1、バイガイ 1、ナミノコガイ 2、フネガイ類 1、シオヤガイ ?1、不明フネガイ科 1、アワビ 3・破片 50、ベンケイガイ 1、二枚貝不明 1	アサリ 113、カガミガイ 4、オオノガイ 6、ヤマトシジミ 64、シジミ 2、サザエ 27、チョウセンハマグリ 64、ハマグリ 23、二枚貝不明 15、オキアサリ 10、オニアサリ 1、サルボウガイ 2、アズマニシキ 1、バイガイ 5、アカニシ 2、ツメタガイ 3、オオノガイ 1、ウチムラサキ 1、ヒダリマキマイマイ 1、クボガイ 2、バテイラ 1、ダンベイキサゴ 4、巻貝不明 22、シオフキ 1、サトウガイ 1、アワビ片 25、ナミノコガイ 2、イガイ科不明 4、イタヤガイ科不明 1、カキか？ 1、タマガイ科 1、
近代		擂鉢 1 、植木鉢 1 瓦 2、磁器 4、ガラス蓋 1	スレート 1				瓦 1		
古代遺物		須恵器甕 15、須恵器坏 10、相模型の前段階の坏 1、相模型甕 10、相模型 坏 5、相模型坏？ 1、三浦型甕 15、蔵型甕 8、武蔵型 甕？ 1、古墳後期くらいの坏 1、古墳時代の坏または鉢 1、古墳前半壺 1、不明土器片 5、不明 2、甕？ 1	古代？ 1、須恵器 甕 4、須恵器（南比企）甕 2、須恵器 坏 3、須恵器壺 1、須恵器長頸瓶 1、武蔵型 甕 7、相模型 甕 9、相模型坏 8、土師器片 2、三浦型甕 13、三浦型甕？ 2、盤状坏の蓋か？ 1、須恵器転用品 1、土師器坏 1		須恵器坏 1、古代以前の壺・甕類 1、三浦型甕 1	古墳後期須恵器甕または瓶類 4、南比企須恵器坏 1、甕？ 1（古墳期まで遡る可能性あり）、古墳時代壺類 1	南比企須恵器坏 4、甲斐型坏 1、相模型甕 5、三浦型甕 5、相模型坏 3、武蔵型甕 3	三浦型甕 378、相模型甕 121、相模型坏 11、武蔵型甕 382、産地不明 4、律令以前の土師器甕 3、武蔵系統産地不明 1、武蔵型台付甕脚付き 5、不明（参考資料）、古墳くらいの坏 1、ロクロ土師器 6、盤状坏系高台付皿 2、盤状坏の皿 1、ロクロ土師器皿 1、甲斐型坏 8、甲斐系の内黒坏 1、相模型または相模系統の坏 47、須恵器坏 24、須恵器（南多摩）坏 2、須恵器（南比企）坏 18、須恵器（埼玉系）坏 1、須恵器甕 6、須恵器（南比企）甕 10、須恵器小型壺 1、須恵器小型壺 1、須恵器（南比企）甕または壺 1、土師器坏 2	相模型甕 103、相模型坏 47、相模小型甕 1、相模型またはそれ以前 2、相模型系統坏 1、三浦型甕 268、三浦型甕？ 1、武蔵型甕 410、武蔵型台付き甕 2、土師器小片 59、古墳後期くらいの坏か？ 1、須恵器坏 7、須恵器（南比企）坏 24、須恵器（南多摩）坏 2、須恵器（渥美・湖西似）坏 1、須恵器小型壺？ 2、須恵器（南比企）蓋 3、須恵器甕 2、須恵器（南比企）甕 4、須恵器壺・甕類 1、須恵器器種不明 1、甲斐型坏 2、弥生ノ土器か？ 1、弥生の壺または甕 1、産地不明甕 1、不明土器 1、不明 10、三浦半島のロクロ土師器か？坏 2、土師器坏 1、坏 1
合計		2824	1468	166	12	38	78	1646	1756

1-1　調査地遠景

1-2　表土掘削状況

1-3　Ⅰ区Ⅰ面全景（北から）

1-4　Ⅰ区深掘りトレンチ全景（東から）

図版２

2-1　Ⅱ区古代面全景（北から）

2-2　Ⅱ区古代面竪穴住居跡（北西から）

3-1　竪穴住居跡 カマド検出状況（北西から）

3-2　竪穴住居跡 カマド使用面（北西・低位から）

3-3　竪穴住居跡 カマド使用面（北西から）

3-4　カマド支脚上 遺物出土状況

3-5　カマド左袖内 遺物出土状況

図版４

4-1　竪穴住居跡 カマド使用面②（北西から）

4-2　竪穴住居跡 カマド使用面②（北西・低位から）

4-3　竪穴住居跡 掘方（北西から）

4-4　柱穴内 遺物出土状況

4-5　カマド掘方（北西・低位から）

5-5
土坑 2

5-6
土坑 2

5-8
土坑 3

5-13
土坑 7

6-4
土坑 10

6-6
土坑 10

6-9
土坑 10

7-4
土坑 5

8-1
土坑 14

8-3
土坑 14

8-4
土坑 14

8-6
土坑 14

8-12
土坑 14

8-23
土坑 22

9-6
土坑 21

9-7
土坑 21

10-1
1 面面上

19-23
表土

古代遺構外出土

土坑 21
センジュガイモドキ

ウチムラサキ

不明

アズマニシキ

オオノガイ

不明

カガミガイ

サザエ (有棘 / 無棘)

ツメタガイ

アサリ

バテイラ

シオヤガイ？

ウラシマガイ

キイロダカラ

エガイ？

ヒダリマキマイマイ

シジミ

不明

表土

アカニシ

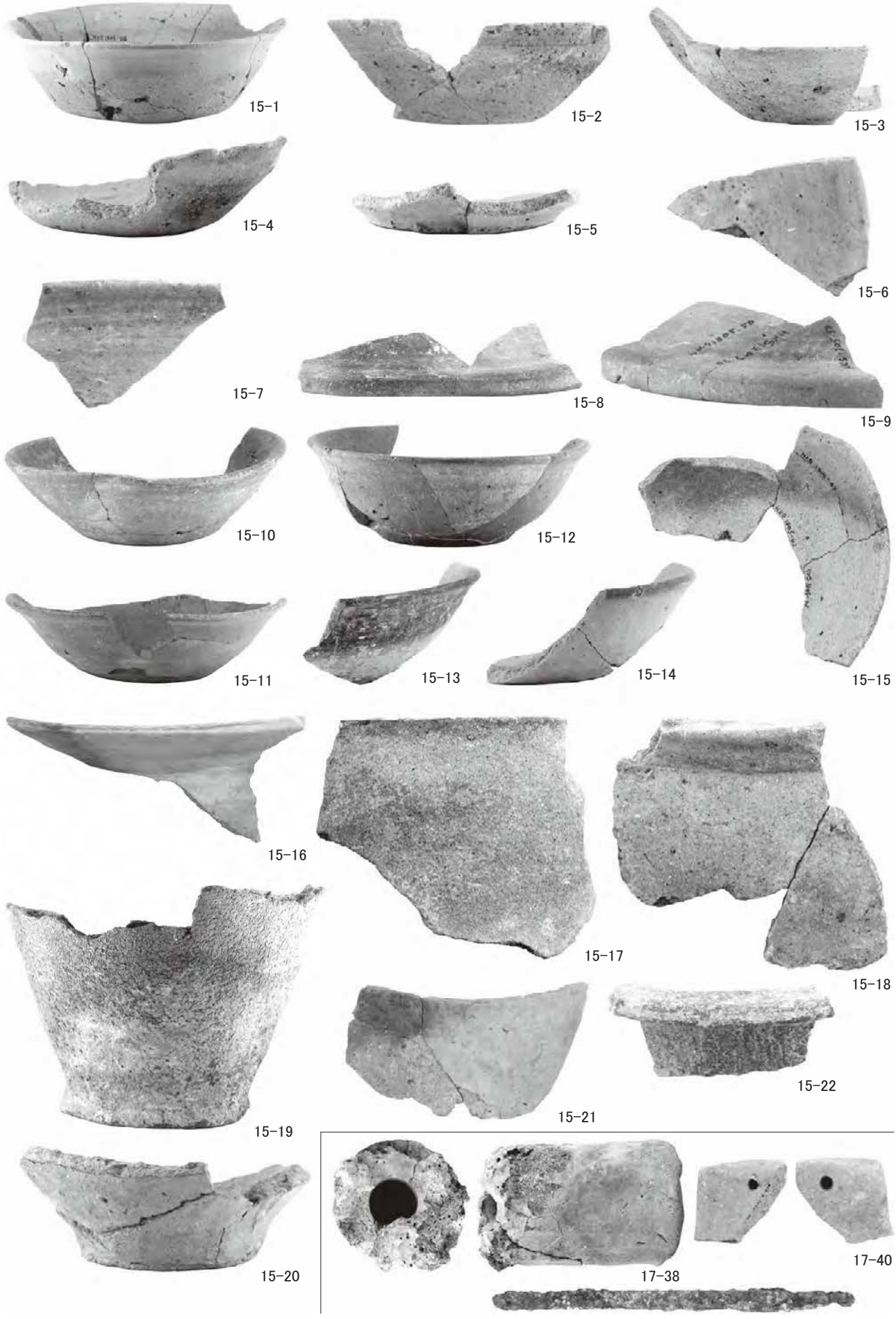
マツヤマワスレ？

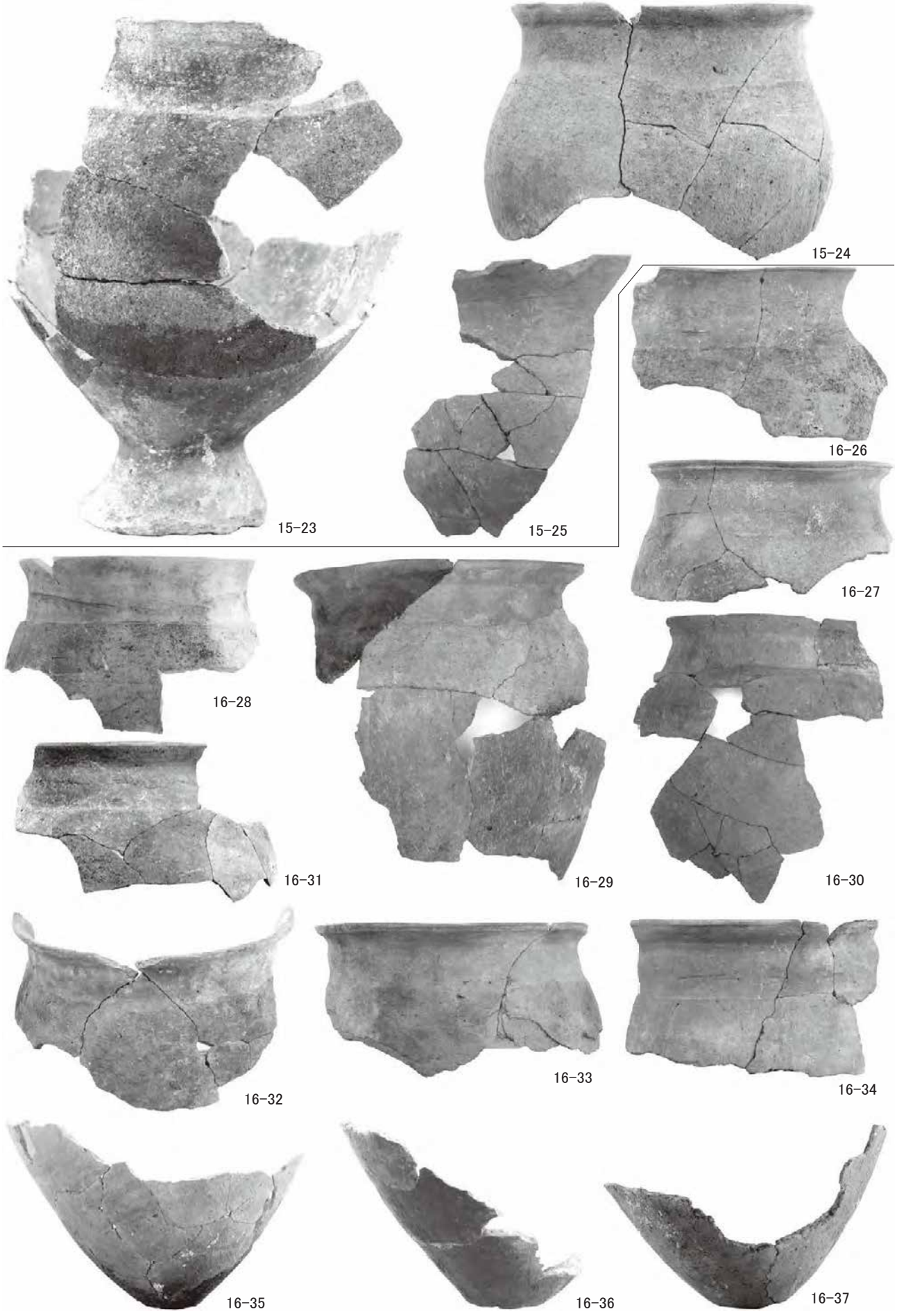
トコブシ？

チョウセンハマグリ

バイガイ

図版６


15-1
15-2
15-3
15-4
15-5
15-6
15-7
15-8
15-9
15-10
15-12
15-15
15-11
15-13
15-14
15-16
15-17
15-18
15-19
15-21
15-22
15-20
17-38
17-40


15-24
15-23
15-25
16-26
16-27
16-28
16-29
16-30
16-31
16-32
16-33
16-34
16-35
16-36
16-37

図版８

19–8

19–19

19–21

19–29

19–32

19–43

19–41

19–44

19–42

19–52

19–53

20–69

20–74

20–75

20–80

20–85

20–86

20–94

20–98

21–111

21–118

21–120

21–122

21–124

21–125

21–126

21–131

台山遺跡（No.29）

山ノ内 860 番 2 地点

例　言

1．本報告は、鎌倉市山ノ内 860 番 2 において実施した台山遺跡（鎌倉市 No.29）の発掘調査報告である。

2．発掘調査は平成 27 年 4 月 28 日から同年 6 月 23 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、69.6㎡である。

3．発掘調査体制は、以下のとおりである。

主任調査員　　押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

調　査　員　　赤堀祐子、小野夏菜、松吉里永子、遠藤綾子、佐藤千尋、吉田麻子
（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

作　業　員　　沼上三代治、牛嶋道夫、吉澤　功、鈴木道明、石黒　清、大澤清春
（公益社団法人　鎌倉市シルバー人材センター）

整理作業参加者　押木弘己、吉田桂子、菅野知子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）

4．本報告に掲図した中世瀬戸窯製品の器種分類と様式認定は、藤澤良祐氏（愛知学院大学）に依頼し、東濃窯製品は山本智子氏（多治見市美濃焼ミュージアム）にご教示を賜った。また、以下の諸氏からも出土品についてご教示を賜った（順不同、敬称・所属先略）。

中野晴久、浅野晴樹、池谷初恵、森まどか、伊藤真央

5．本報告の執筆と編集は、押木が行った。

6．本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。

7．本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「ＤＩ１５０１」とし、出土品への注記などに使用した。

凡　例

1．挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。

2．本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅸ系：東日本大震災後の補正後）に基づいている。

3．挿図に示した方位標は座標北（Ｙ軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ほど東に振れている。

4．遺構挿図中の水糸高は、海抜値を示す。

5．出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、 筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。

◆かわらけ・遺物全体の様相：宗臺秀明　2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

◆輸入陶磁器：太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』

◆瀬戸窯製品：藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

◆常滑・渥美窯製品：愛知県　2012『愛知県史』別編窯業３　中世・近世常滑系

目　　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境…… 217
第１節　遺跡の立地
第２節　周辺の調査成果

第二章　調査の方法と経過…… 220
第１節　調査に至る経緯
第２節　調査の方法
第３節　調査の経過

第三章　基本土層…… 221

第四章　発見された遺構と遺物…… 221

第五章　調査成果のまとめ…… 231

付　編　台山遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析…… 232

挿図目次

図１　台山遺跡における発掘調査地点 …… 218
図２　調査区配置図 …… 220
図３　調査区壁断面図 …… 222
図４　１面全体図 …… 223
図５　２面全体図 …… 224
図６　出土遺物（1） …… 226
図７　出土遺物（2） …… 227

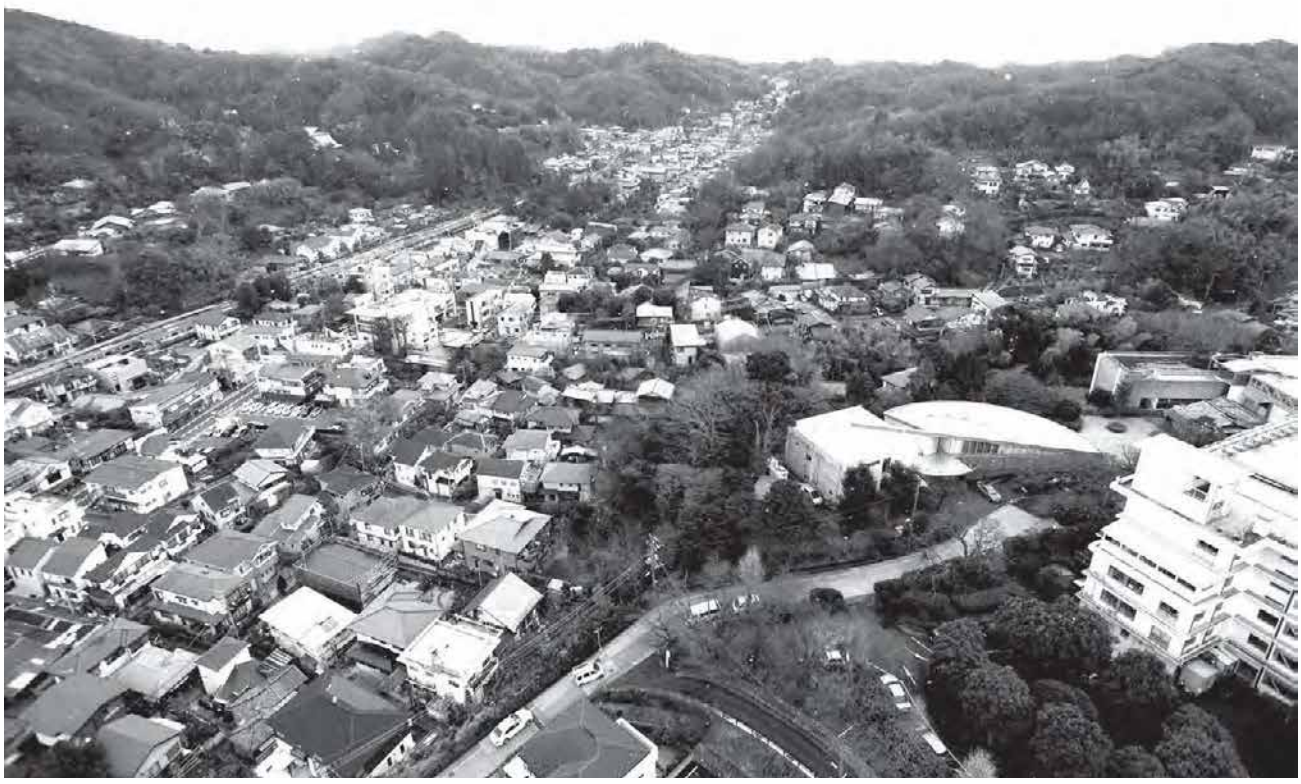
表　目　次

表１　出土遺物カウント表 …… 228
表２　出土遺物観察表 …… 229

図　版　目　次

図版１…… 235
1. 調査地遠景（東から）
2. Ⅰ区 表土掘削状況（北西から）
3. Ⅰ区１面 作業風景（南東から）
4. Ⅰ区１面 全景（東から）
5. Ⅰ区１面 溝１（北から）
6. Ⅰ区１面 溝１（北東から）
7. Ⅰ区１面 溝１土層断面（北から）
8. Ⅰ区２面 全景（東から）

図版 2 …… 236
1. Ⅱ区 表土掘削状況（西から）
2. Ⅱ区 1 面 全景（東から）
3. Ⅱ区 1 面 溝 1（南西から）
4. Ⅱ区 1 面 溝 1 かわらけ出土状況（南東から）
5. Ⅱ区南壁 土層断面（北から）
6. Ⅱ区 2 面 全景（東から）
7. Ⅱ区 2 面 土坑 3（南から）
8. Ⅱ区 測量作業状況（南西から）
図版 3･4　出土遺物 …… 237



調査地上空から東南東（巨福呂坂方面）を望む
2015 年 2 月 9 日撮影

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

台山遺跡は鎌倉市北部に位置し、鎌倉街道（主要地方道 横浜鎌倉線）と JR 横須賀線を北に見下ろす丘陵尾根の上部から裾部にかけて立地している。丘陵地形は多摩丘陵から三浦半島方面へ続くもので、鎌倉市北部の大部分を構成している。遺跡範囲は北西～南東に 700 m、北東～南西には 300 mの規模をもち、標高は 18 ～ 74 mを測る。本調査地は遺跡範囲の北東縁辺部に位置し、JR 北鎌倉駅から 300 mほど西の丘陵中腹部に所在する。小袋谷川に架かる藤源治橋を渡って北鎌倉女学園方面に上がる途上にあり、雛壇状に造成された宅地となっている。現況での標高は、30 m強を測る。

第２節　周辺の調査成果

台山遺跡では、これまでに 15 地点で発掘調査が実施され（平成 28 年 8 月現在）、本調査は 16 地点目の調査例となる。

図１には、遺跡内の調査地点を発掘調査実施順に示した。未報告の地点もあって具体的な調査成果が不明なケースもあるが、幾例か代表的な成果について紹介する。地点１では昭和 49 年、三上次男氏が学術調査を実施している。標高 60 m弱の丘陵上で弥生後期・古墳後期・時期不明の竪穴住居が各１軒検出され、中世ではかわらけが出土したという。地点 2･5･7 は北鎌倉女子学園の校舎建設に伴って実施され、周辺の小字から「台山藤源治遺跡」と呼ばれている。この第１次調査（地点 2）では縄文時代の陥とし穴１基、弥生中期以降の竪穴住居 18 軒、古墳時代の竪穴住居 13 軒、平安時代の竪穴住居 5 軒が検出されている。中世では道路状遺構や 14 ～ 16 世紀の遺物が発見されている。第 2 次調査(地点 5）でも縄文早期～前期の陥とし穴 2 基の他、弥生後期の竪穴住居１軒、奈良末～平安初期の竪穴住居１軒が検出されている。中世の遺構は確認されていないが、やはり 14 ～ 16 世紀の遺物が発見されている。第 3 次調査（地点 7）では弥生後期後半～古墳時代の竪穴住居 5 軒、平安時代の竪穴住居１軒が検出され、中世では段切り造成面やピット列が確認されている。中世の遺物は、14 ～ 15 世紀代の製品が中心となる。

この他、地点 3･4 では弥生後期を中心とする竪穴住居 8 軒が確認されており、地点 8 では中世後期の南北溝 2 条が確認されている。地点 9 では弥生後期の竪穴住居 4 軒、古墳時代に属する竪穴住居 2 軒と掘立柱建物１棟、古墳後期末～奈良時代前半の竪穴住居 2 軒が発見されている。古代以前の掘立柱建物や奈良時代の竪穴住居は、台山遺跡では初めての確認例となった。地点 10 は丘陵斜面に立地するため遺構・遺物とも少なかったが、弥生後期～古墳前期のピット 2 基が検出され、弥生中期後葉の宮ノ台式壺形土器が出土している。地点 11・14 は本地点と同じ造成平場に立地しており、地点 11 では調査深度に制限があったため明確な遺構の検出には至っていないが、南北朝期以降を中心とする中世遺物が出土している。地点 15 では古墳時代後期（終末期）にあたる 7 世紀中葉前後の竪穴住居が確認されている。同地点が所在する西ノ台地区は近代に入り海軍将校の宅地として造成されたため丘陵稜線が大幅に削平されており、その中でも損壊を免れた数少ない事例として特筆できる。

地点 12 は丘陵の北向き斜面中腹に立地し、雛壇状の平場において 3 枚の中世遺構面が確認されている。遺構は土坑とピットが中心で、一部のピットは並ぶ可能性がある。遺物の様相から、15 世紀の中葉～後半を中心に土地利用がなされていたようだ。距離的な隔たりはあるものの、当地点の立地、開発状況と近似した在り方といえる。

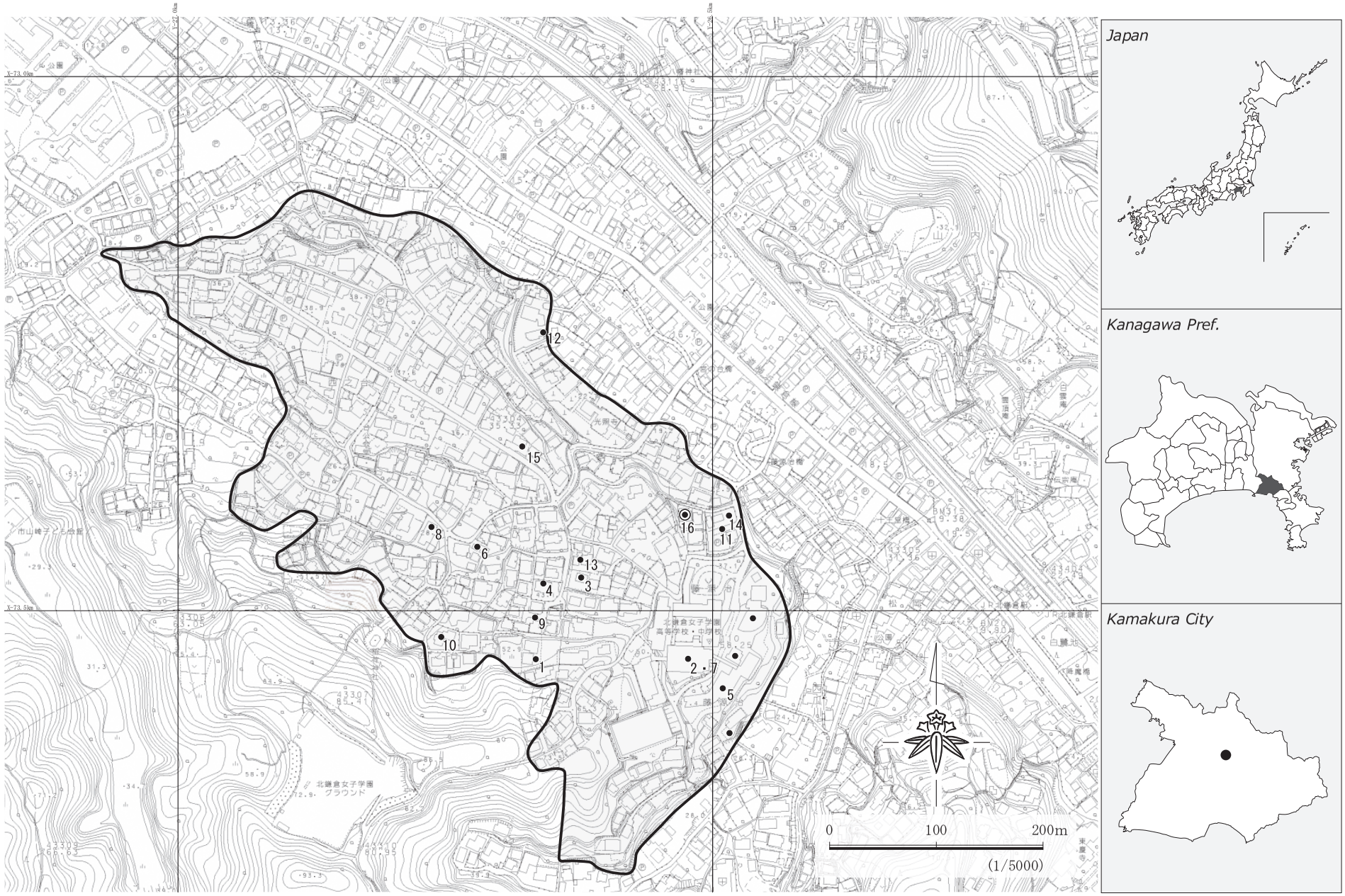


図１　台山遺跡における発掘調査地点（鎌倉市発行 1:2,500 都市計画基本図を使用）

以上を整理すると、台山遺跡では丘陵上を中心に広範囲にわたって弥生時代～平安時代の竪穴住居が分布しており、各時代の集落展開が把握されていることになる。集落の開始時期は弥生時代中期後葉の宮ノ台式期となろうが、この段階では発見されている住居の数も少なく、現時点の調査成果では大規模集落の存在は想定できない。弥生後期の久ヶ原式～弥生町式期に住居軒数が増加し、古墳時代前期まで一定規模の集落が継続するようである。古墳中期には地点 5･7 で竪穴住居が 3 軒、地点 9 で土坑 1 基が発見されており、他地域の例に漏れず退潮には入るものの完全には途絶しないようである。古墳後期になると再び住居軒数は増加に転じ、後期末～奈良時代前半に継続する状況も窺える。続く平安時代に入っても、一定規模の集落が存続するようである。以上は大まかな時期区分に基づく記述であるため、報告された各遺構の帰属時期を詳細に把握することで集落変遷の実相が明らかになってこよう。

また、縄文時代の発見遺構は今のところ陥とし穴に限られているが、早期～前期と比較的古い時期の遺構も含まれていることから、鎌倉周辺の縄文社会の形成過程を考える上で貴重な成果といえる。

中世においては 14 世紀後半～ 15 世紀代に土地利用が進んだことが明らかとなりつつあり、弘安五年（1282）の円覚寺創建に伴う土地開発は、本遺跡付近までは及ばなかったことが推測できる。本地点の北東に近い西台山英月院光照寺は時宗寺院で、藤沢市清浄光寺（遊行寺）の末である。境内に建武二年（1336）銘をもつ安山岩製板碑が現存することから 14 世紀前半に寺域の整備が進んだ可能性はあるが、この段階では周辺の広い範囲にまで開発が及ばなかった様子が、遺跡内容からは窺い知れる。

本章は、押木 2016 の第一章を一部改変後、転載した。

【図 1 に示した調査地点の報告書】

1．丑野　毅　1974 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文学科紀要』第 59 輯　東京大学教養学部人文科学科
2．手塚直樹他　1985 『台山藤源治遺跡』 台山遺跡発掘調査団
3．齋木秀雄・宗臺秀明　1985 「3. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1』 鎌倉市教育委員会
4．玉林美男他　1988 「6. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』 鎌倉市教育委員会
5．大河内　勉　1996 『台山藤源治遺跡　第 2 次調査報告』 台山遺跡発掘調査団
6．大上周三　1992 「4. 台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8』鎌倉市教育委員会
7．宗臺秀明　1993 『台山藤源治遺跡―第 3 次調査報告―』 台山藤源治遺跡発掘調査団
8．野本賢二　1997 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13（第 1 分冊）』 鎌倉市教育委員会
9．若松美智子　1998 『台山遺跡発掘調査報告書―西ノ台 1733-1 外地点―』 台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所 1999 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会
10. 継　　実　2001 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会
11. 森　孝子　2002 『台山遺跡発掘調査報告書』 有限会社 博通
12. 伊丹まどか　2004 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会
13. 2007 年度調査・未報告
14. 2009 年度調査・未報告
15. 押木弘己　2016 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 32（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会
16. 2015 年度調査・本報告

【参考文献】

鎌倉市史編纂委員会編　1959 『鎌倉市史　社寺編』 鎌倉市
白井永二編　1976 『鎌倉事典』 東京堂出版

第二章　調査の方法と経過

第１節　調査に至る経緯

今回の調査は個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存調査として鎌倉市教育委員会（以下、市教委）が実施した。

建築計画では基礎部分に深さ 6.4 ｍの鋼管杭を打ち込む予定であったため、市教委は平成 26 年 4 月 16・17 日の二日間にわたって埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下 100cm で中世の遺物包含層が検出され､地表下 2 ｍまでに 3 枚の中世遺構面が存在することを確認した。この内容を受け、建築工事の実施に先立って本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った。

現地での発掘は、平成 27 年 4 月 28 日～ 6 月 23 日の約 2 ヶ月をかけて実施した。建築面積に基づく調査予定範囲は約 84㎡であったが、安全対策などを取った後、最終的な調査面積は 69.6㎡となった。

第２節　調査の方法

調査区は、掘削に伴う残土置き場を確保する必要から南半部のⅠ区と北半部のⅡ区とに分割し、Ⅰ区からⅡ区の順に調査を進めた（図 2)。

表土掘削はⅠ・Ⅱ区とも重機によって行い、遺物包含層以下は全て人力によって掘削し、順次遺構の確認と掘削、次いで写真撮影・測量図作成といった記録作業を進めた。

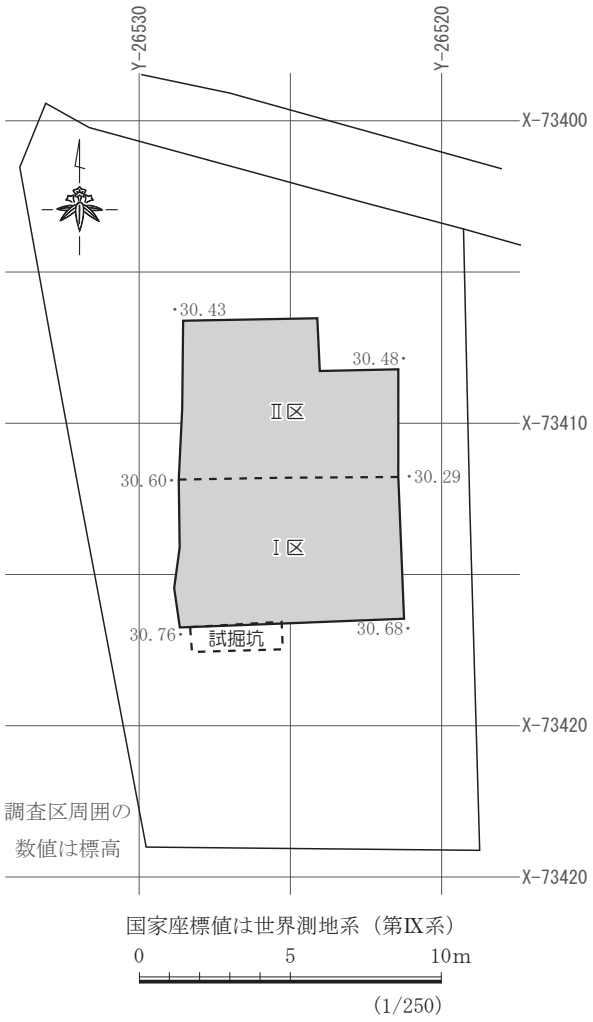


図２　調査区配置図

測量に当たっては、国家座標値を載せた基準杭を敷地内に設定し、主に光波測距儀で測定した座標値を方眼紙にプロットする方法で平面図を作成した。国家座標の移設は、市道上に設置された都市再生街区多角点「10B50」と同補助点「4A544」との二点間関係をもとに開放トラバース法で行った。標高は、多角点「10B26」（16.628 ｍ）を起点に直接水準測量を繰り返して敷地内の測量杭に移した。測量の基準として使用した多角点および補助点の国家座標値は、東日本大震災後の補正値である。

第３節　調査の経過

前述のとおり、調査はⅠ区からⅡ区の順に進めた。Ⅰ区の表土掘削は平成 27 年 4 月 23 日に実施し、28 日には調査用具を搬入して本格的に調査に着手した。遺構の確認と掘削、図面作成および写真撮影など記録作業を進め、6 月 4 日にはⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を行った。Ⅱ区でも掘削と記録を進め、6 月 17 日には全ての記録作業を終え、23 日には調査用具を撤収して、現地での調査

工程を全て終了した。Ⅱ区の埋め戻し作業は、器材撤収後に施工事業者によって行われた。

出土品および記録類の整理作業は平成 27 年度の後半に、報告書の執筆・編集作業は 28 年度の前半に、鎌倉市教育委員会文化財課分室において行った。

第三章　基本土層

本地点は丘陵中腹部の斜面地形に立地しており、現状では雛壇状の平場となっている。敷地の西側と南側に高位の平場があるが、特に西側の平場とは急傾斜の崖面で隔絶される格好となっている。崖面は間知ブロック積みの擁壁で保護されているが、この裾部の地表面には露頭岩盤が見られ、本地点の平場が山裾側では切り土によって、斜面下方では盛り土によって造成された様子が窺われた。

図 3 には、調査区壁の土層断面図を掲げた。確認調査では地表下 100cm で中世の遺物包含層との判断が示されたが、堆積土様相の変化からは地表下 65cm の 3 層以下が遺物包含層で、厚さ 10 ～ 40cm ごとに様相を違えながら地表下 170cm 前後で山裾溝などを掘り込んだ第 1 面となることを確認した。この間の層序には泥岩粒が密に入り、一見すると整地された生活面らしき土層も見られたが（3 層・13 層など）、上面での明確な掘り込みや遺物分布が認められなかったので、第 1 面までは全て遺物包含層と判断した。

上述の露頭岩盤は調査区の西壁際から落ちる傾斜度 55° の斜面となり、現地表下 190cm で平坦面となることが確認された。人工の切り土造成によるもので、少数ながら土坑などの掘り込みも確認できたので、ここを第 2 面とした。標高は 28.3 ～ 28.6 m で、北東に向けて低くなっていた。

中世層は暗褐色土をベースとし、泥岩粒の多寡などを基に分層することができた。

第四章　発見された遺構と遺物

前章で述べたように、本地点では 2 枚の遺構面が確認され、いずれも中世に帰属すると考えられる。1 面・2 面とも検出遺構が少なく出土遺物も非常に僅少であり、生活感が薄い印象を受けた。

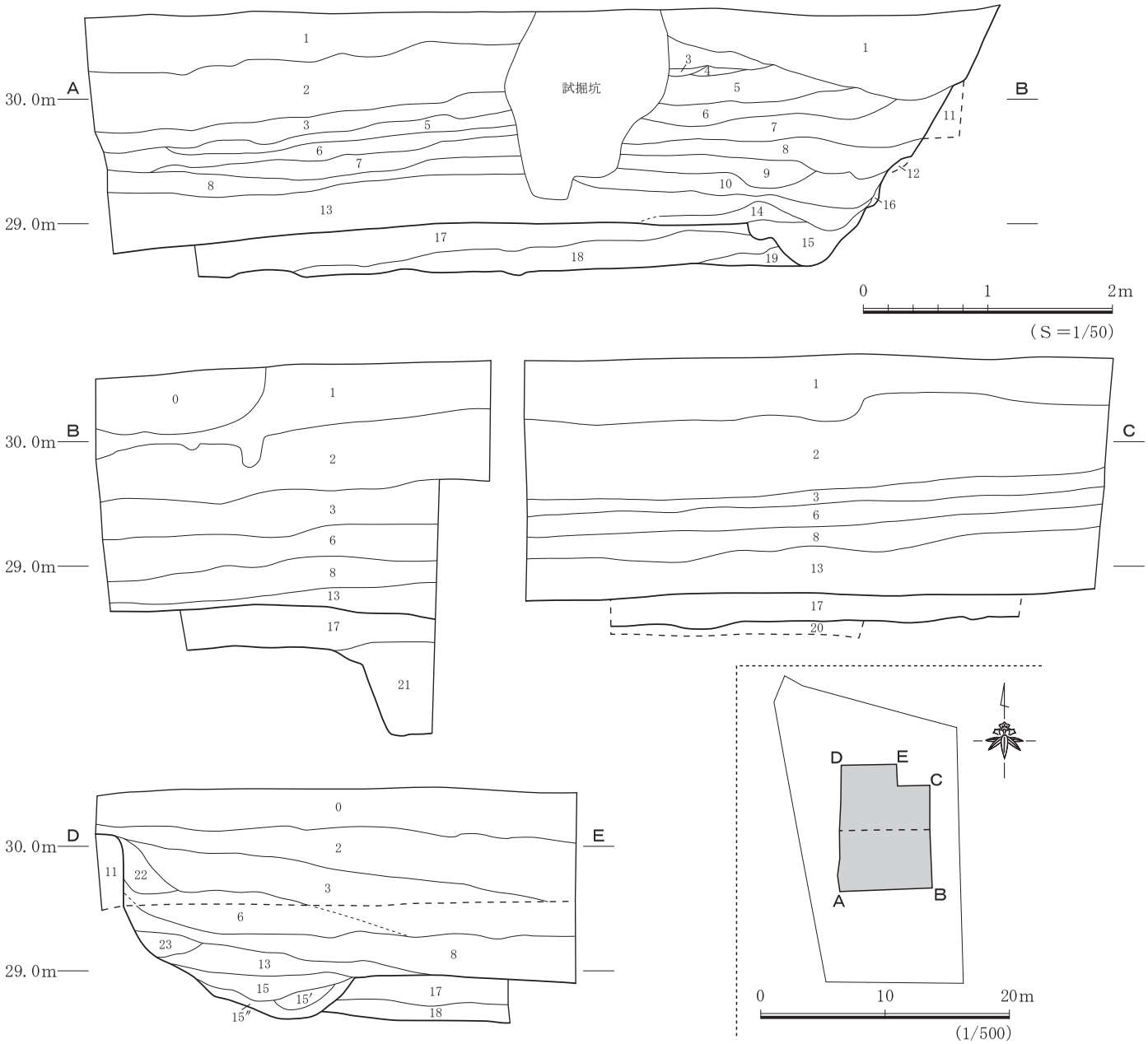
１面（図４）

標高 28.6 ～ 29.0 m で検出された。北東側が低くなっている。泥岩粒を多く含んだ暗黄褐色粘質土で構築されている。調査区の西壁外から露頭岩盤が斜面となって続くが、1 面レベルで斜面の裾に沿って南北に延びる溝 1 を確認した。上幅 130cm、下幅 30cm を測り、確認面からの深さは 30cm 強で、U 字状の断面形を呈する。底面標高は 28.6 m 前後で、明確な流下方向としては確認できなかったが、北側に向けてわずかに低くなるようである。山裾からしみ出る水を排水する目的で掘削されたものであろう。1 面上では他にピット状の浅い窪み 1 基が検出されたのみであるが、生活面を安定的に保持する意図は感じ取れた。

図 7-81 ～ 84 に溝 1 の出土遺物を示した。81 のロクロかわらけ小皿は器壁が厚く作りのシャープさに欠ける。底部には焼成後に穿った貫通孔があり、口縁の端部付近に油煤が付着している。83 は瀬戸の卸目付大皿。古瀬戸後期様式のⅣ期古段階まで下る。

２面（図５）

岩盤を人工的に削平した面で、標高 28.3 ～ 28.6 m で検出された。西側からの斜面裾は 1 面の溝 1 が開削されたことによって窪んでいる。2 面でも山裾に水切り溝が走っていた可能性はあるが、明確



0　暗褐色土　表土。コンクリートブロック混入。
1　暗褐色土　粘質土。表土。
2　暗褐色土　粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
3　暗黄褐色土　粘質土。泥岩粒多量、炭粒微量。
4　暗褐色土　粘質土。泥岩粒微量、炭粒ごく微量。
5　暗褐色土　泥岩粒少量、炭粒微量。
6　暗褐色土　粘質土。泥岩粒やや多い。炭粒微量。
7　暗褐色土　粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
8　暗褐色土　粘質土。泥岩粒少量、炭粒微量。
9　暗褐色土　粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
10　暗褐色土　粘質土。泥岩粒・炭粒微量。
11　暗青灰色土　粘　質土。風化した岩盤。
12　明褐色土　岩盤。
13　暗褐色土　粘質土。泥岩粒やや多い。炭粒少量。
14　暗褐色土　粘質土。泥岩粒多量、炭粒少量。
15　暗褐色土　粘質土。泥岩ブロック多量、炭粒少量。
15′　暗褐色土　粘質土。泥岩粒少量。
15″　暗褐色土　粘質土。
16　暗褐色土　崩落岩盤。
17　暗黄褐色土　粘質土。泥岩粒多量。締まりあり。
2面の構築土。
18　暗黄褐色土　粘質土。泥岩ブロック多量。
19　暗黄灰色土　砂質土。泥岩ブロック非常に多い。
20　黄褐色土　風化した岩盤。
21　暗褐色土　粘質土。
22　暗褐色土　泥岩ブロック多い。
23　暗褐色土　泥岩ブロック多い。

図３　調査区壁断面図

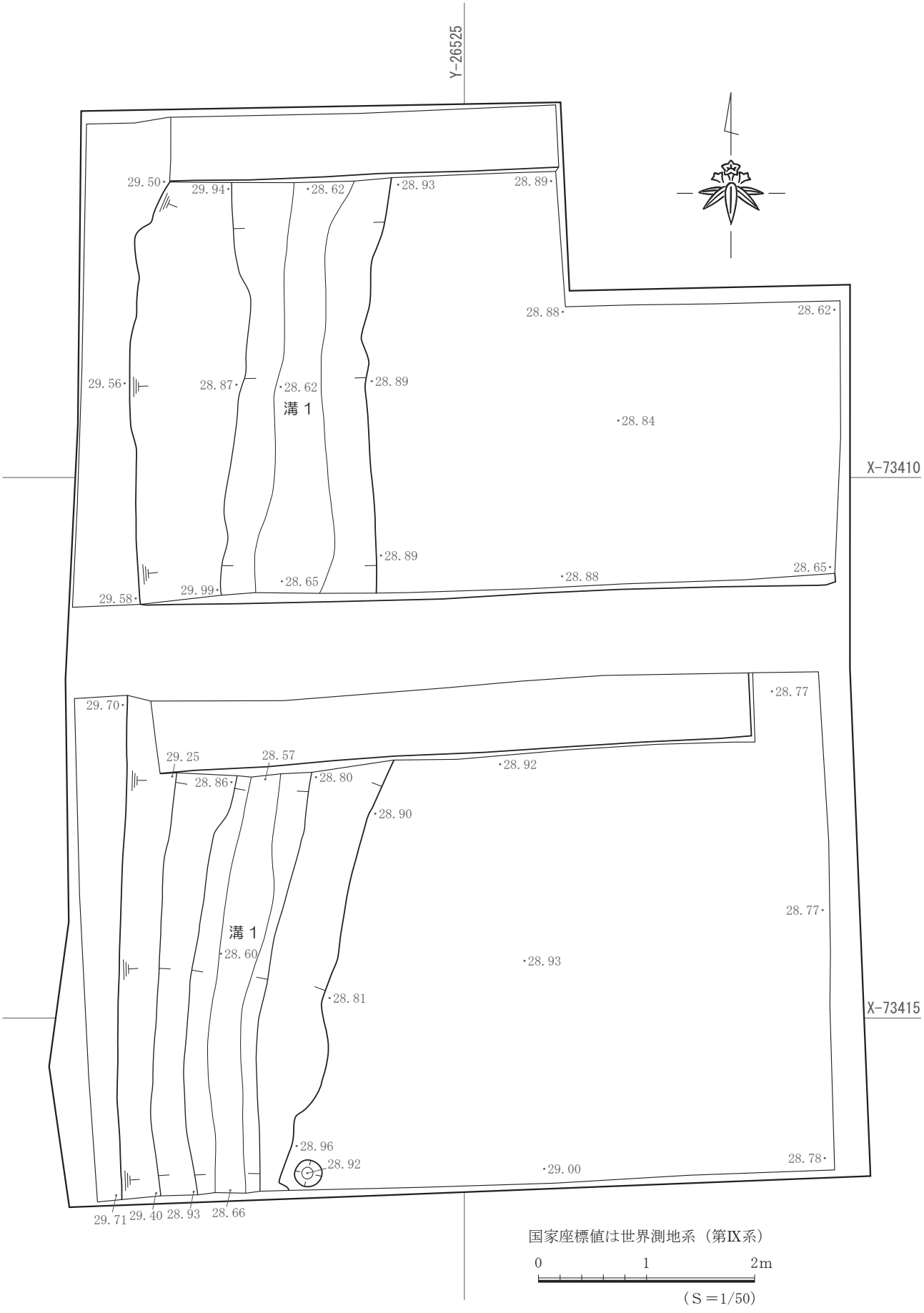

Y-26525
X-73410
X-73415
29.50
29.94
28.62
28.93
28.89
28.88
28.62
29.56
28.87
28.62
28.89
溝１
28.84
28.89
28.65
28.88
29.58
29.99
28.65
29.70
28.77
29.25
28.57
28.92
28.86
28.80
28.90
28.77
溝１
28.60
28.93
28.81
28.96
28.92
29.00
28.78
29.71
29.40
28.93
28.66
国家座標値は世界測地系（第Ⅸ系）
0
1
2m
（S＝1/50）

図４　１面全体図

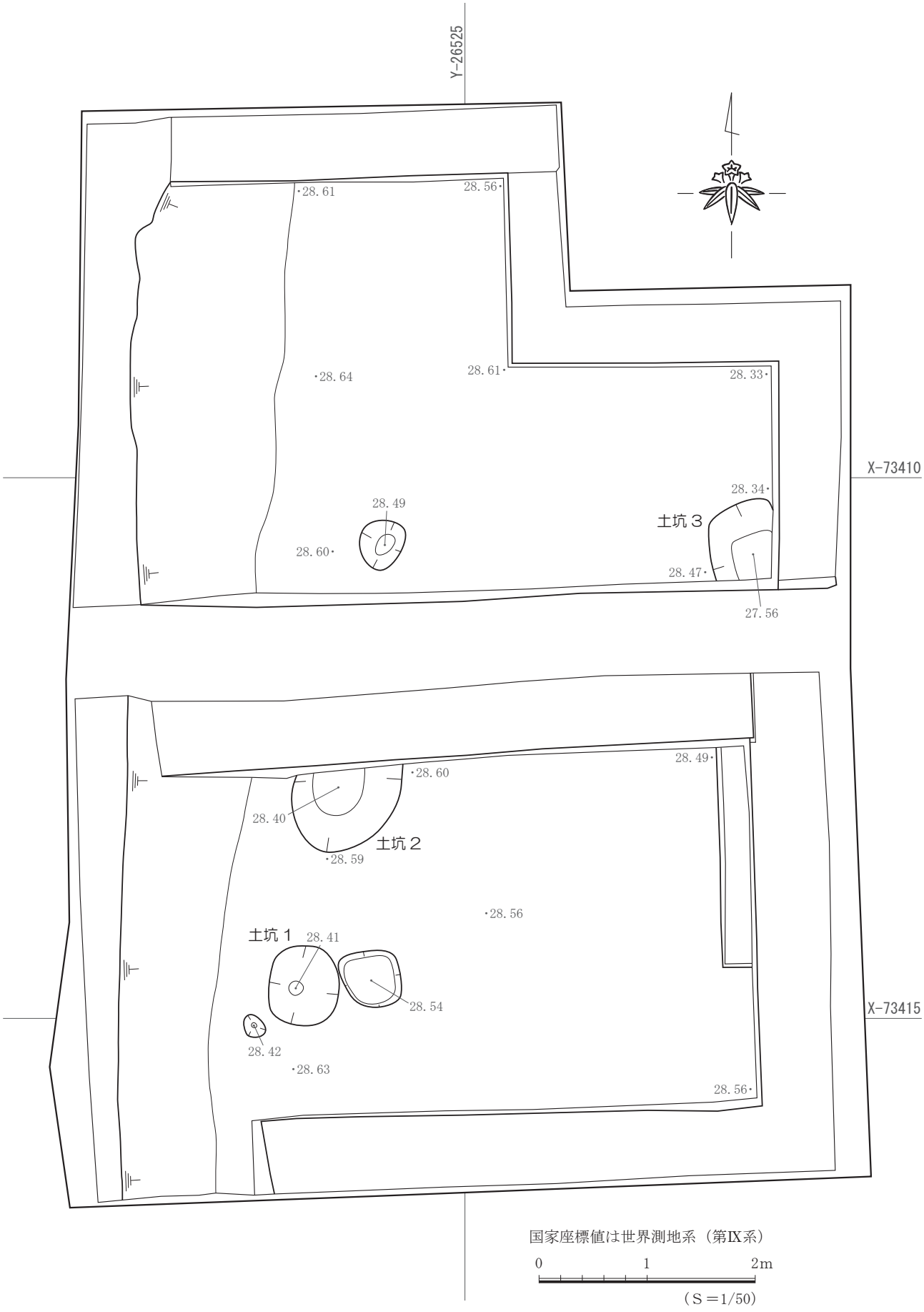

Y-26525
X-73410
X-73415
28.61
28.56
28.64
28.61
28.33
28.34
28.49
28.60
土坑３
28.47
27.56
28.49
28.60
28.40
土坑２
28.59
28.56
土坑１
28.41
28.54
28.42
28.63
28.56
国家座標値は世界測地系（第Ⅸ系）
0
1
2m
（S＝1/50）

図５　２面全体図

な痕跡は確認できなかった。面上では土坑と浅い落ち込みが 6 基確認されている。このうちⅡ区南西角に位置する土坑 3 は岩盤を垂直気味に掘り下げて平坦な底面を造作しており、確認面からの深さは 90cm を計測した。暗褐色粘質土で短期間の内に埋没した様子であるが、どのような用途を持っていたのかは定かでない。他の土坑・落ち込みについては確認面から 10 ～ 20cm 程度の深さしかなく、意図的には掘り込まれていないものもあるかもしれない 。

図 7-92 は、土坑 3 出土のロクロかわらけ小皿である。これより上位の層序から出土した資料よりも低平で丸味を帯びた体部を持つ。

１面までの出土遺物（図６・７）

本地点では１面までの遺物包含層が厚く、出土した遺物の多くがこの層中に含まれるものであった。出土した点数（破片数）と重量は、表１を参照されたい。かわらけは全てロクロ成形品が占めており、小皿･大皿とも器壁が厚く断面逆台形に近い資料が主体となる。灯明皿としての使用痕跡が散見される。また、小片資料のみで全体の器形を知り得る個体はなかったが、灰釉平碗や縁釉小皿、卸皿、折縁皿（中）といった古瀬戸の碗・皿が多い点が特記できる。後期様式に下る資料が主体であり、上述したかわらけの年代観を知る上で手掛かりとなる。常滑甕は口縁縁帯幅の長い 8 型式が主体となり、土器の鍔釜（鍋）は鍔の薄い袋状胴部となる資料が入っている。瓦質土器では火鉢の他に土風炉の小破片も見られ、全体として南北朝期以降の遺物様相と捉えることができる。これら中世遺物に混じって縄文時代～平安時代の土器片も出土している。斜面中腹という立地でもあり、古代以前に段切り造成を行って集落を営んでいたとは思えないが、前述のように丘陵上ではこの段階の竪穴住居が多く発見されているので、本地点へは斜面上部から土とともに流れ込んできたと考えるべきであろう。

１面下～２面の出土遺物（図７）

85 ～ 91 が 2 面（岩盤削平面）の検出までに出土した遺物である。かわらけに図示するものがなく、そのため古瀬戸製品が多い印象を受ける。中期様式～後期様式の資料が主体で、87 の平碗は後期様式のⅢ期まで下る。91 は鉄製品で、甲冑の小札。

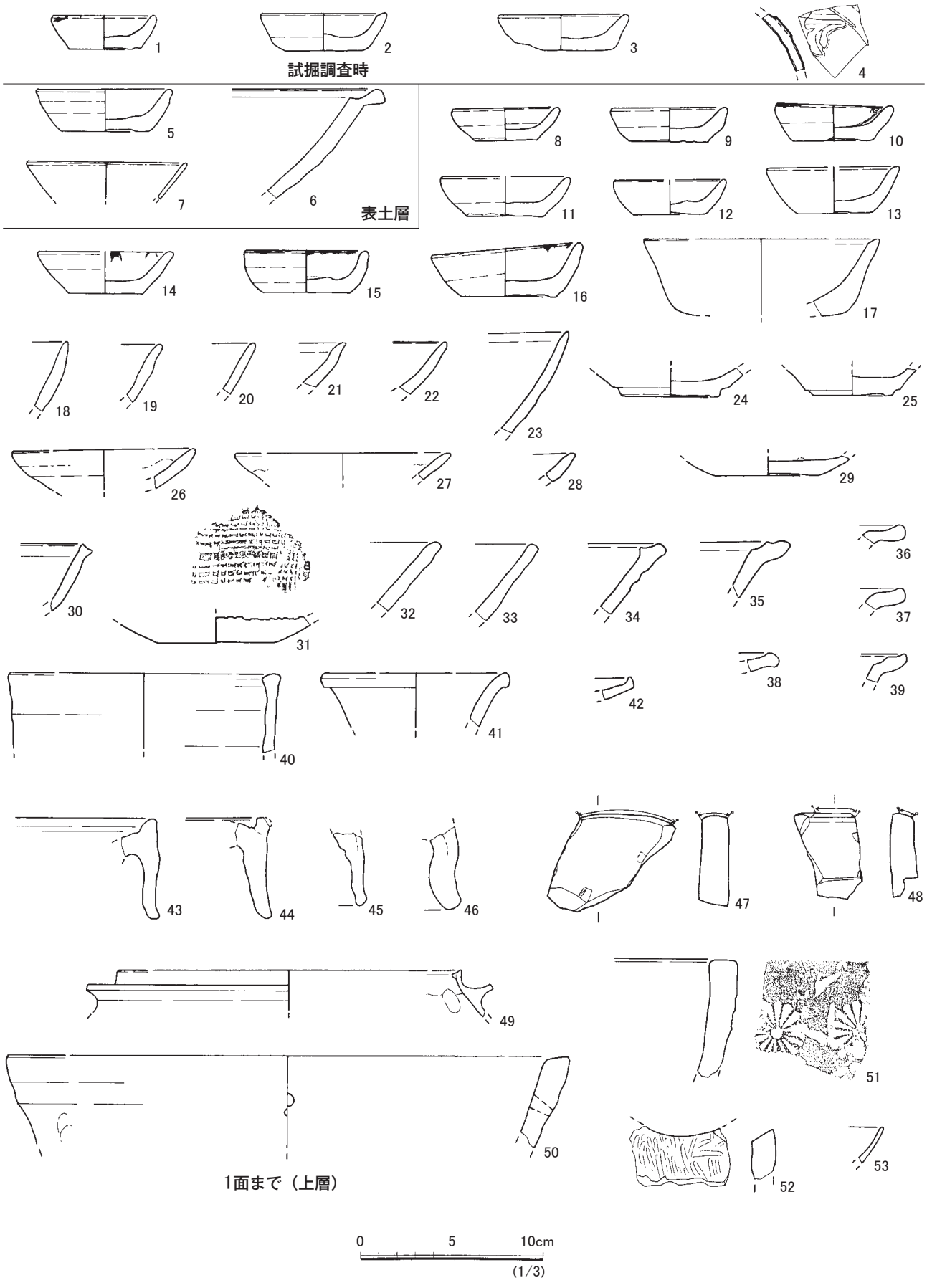


図６　出土遺物（1）

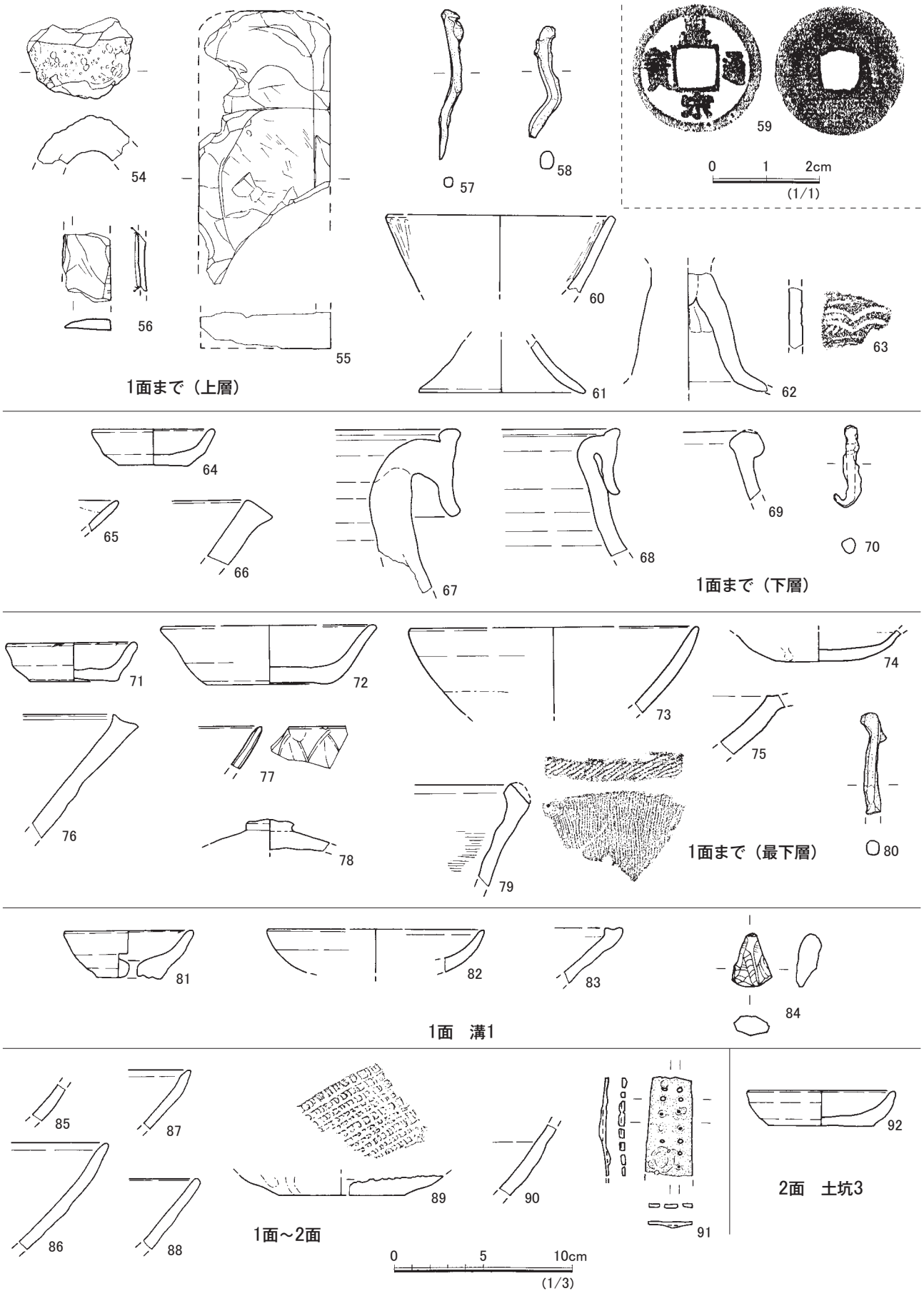

54
55
56
57
58
59
0 1 2cm
(1/1)
60
61
62
63
1面まで（上層）
64
65
66
67
68
69
70
1面まで（下層）
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
1面まで（最下層）
81
82
83
84
1面　溝1
85
86
87
88
89
90
91
92
2面　土坑3
1面～2面
0 5 10cm
(1/3)

図７　出土遺物（2）

表１　出土遺物カウント表

帰属遺構面	遺構	かわらけ						白かわらけ		土器				白磁				青白磁				青磁（龍泉窯系）											
		ロクロ 大		ロクロ 小		小片		手づくね 大		鍔釜		火鉢		口禿皿		碗皿		梅瓶		合子蓋		劃花文碗		蓮弁文碗		折縁皿（坏）		折縁皿（坏）		酒会壺		壺類	
		点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
	試掘時	9	75	7	125													1	10														
表土		11	90	4	45	8	35																										
0-1（上層）		533	4590	126	930	176	445	1	5	1	15	1	90	2	10	2	10	2	15	1	5	3	35	2	20	2	45	1	5	1	25	1	5
0-1（下層）		19	310	7	105	8	100																	1	10								
1	溝1	15	110	1	55																												
1-2		38	350	15	40																												
2	土坑3													1	5																		

帰属遺構面	遺構	舶載陶器						瀬戸・美濃																									
		天目碗		盤		壺類		天目碗		平碗		浅碗 小鉢		縁釉小皿		卸皿		折縁深皿		直縁大皿 卸目付大皿		擂鉢 鉢		碗形鉢		盤類		香炉		燭台		四耳壺（東濃）		瓶類	
		点数	重量																														
	試掘時																																
表土																		1	25														
0-1（上層）		1	10	1	25	2	15	5	38	13	137	3	44	12	95	5	110	8	200	7	136	2	34					4	122	1	6	1	18	5	100
0-1（下層）		1	5							1	33			2	30	2	20	2	116														
1	溝1																			1	27												
1-2		1	4							1	9					1	36	1	13	1	50	1	5	2	57	1	13						
2	土坑3																																

帰属遺構面	遺構	尾張・常滑								猿投?		東濃		瓦質土器				瓦						銅製品		鉄製品				石製品					
		甕		壺		片口鉢 I類		片口鉢 II類		転用片		壺		山茶碗		火鉢		風炉		平瓦 永-III以降		平瓦 不明		銭		釘		不明		黒曜石 石核		硯		砥石	
		点数	重量																																
	試掘時	7	235																														
表土		3	180					1	30																								
0-1（上層）		119	4950	1	35	3	100	14	630	1	70	1	30	1	5	21	640	1	30	5	210	3	155	1	5	6	55					3	225	1	10
0-1（下層）		15	1095					3	160																	1	15						
1	溝1	6	140			1	250											1	30											1	20			1	20
1-2		4	425					2	95							2	35											1	10						
2	土坑3																																

帰属遺構面	遺構	土製品・用材 鞴羽口		肥前系磁器 染付碗		人骨 焼骨	獣骨 ウシ・ウマ	土師器 盤状坏		土師器 相模型坏		土師器 坏		土師器 相模型甕		古式土師器 甕		古式土師器 壺		古式土師器 高坏		須恵器 坏		須恵器 坏蓋		須恵器 甕		須恵器 瓶類	
		点数	重量																										
	試掘時															1	30												
表土																		2	25										
0-1（上層）		1	45	1	5			1	15	1	25	8	55	3	30	61	495	21	248	8	315	15	90	1	5	6	120	2	15		
0-1（下層）							1			3	15					8	50	8	140					1	45	2	20				
1	溝1					1						2	15			6	50	10	200							1	15	1	15		
1-2										3	10					4	40	8	180												
2	土坑3																														

凡例
点数＝破片数
重量単位＝ｇ

表１　出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
出土遺物(1)（図6）						
1	土器	ロクロかわらけ小	5.5	3.9	1.9	4/5　胎土:角閃石　橙色　外底面に板状圧痕
2	土器	ロクロかわらけ小	(6.8)	4.0	2.1	1/3　淡橙色
3	土器	ロクロかわらけ小	7.0	(5.5)	2.0	2/3　胎土:白色針状物質　黄橙色　外底面に板状圧痕
4	青磁	花瓶	—	—	—	胴小片　淡緑色
5	土器	ロクロかわらけ小	(7.3)	(4.8)	2.3	1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色　外底面に板状圧痕
6	陶器	瀬戸折縁深皿	—	—	[5.9]	口小片　淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅱ
7	磁器	白磁口禿皿	(8.7)	—	[2.0]	口1/3　大宰府Ⅸ類
8	土器	ロクロかわらけ小	6.1	4.2	1.9	2/3　胎土:白色針状物質　明橙色
9	土器	ロクロかわらけ小	(5.8)	(3.4)	1.8	1/3　胎土:白色針状物質　明橙色　外底面に板状圧痕
10	土器	ロクロかわらけ小	6.2	4.2	2.0	2/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色
11	土器	ロクロかわらけ小	(7.0)	(4.2)	2.2	1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色　外底面に板状圧痕
12	土器	ロクロかわらけ小	(6.0)	(4.0)	1.9	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色、角閃石　外底面に板状圧痕
13	土器	ロクロかわらけ小	(7.0)	(4.0)	2.6	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色
14	土器	ロクロかわらけ小	(7.3)	(4.0)	2.3	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色　外底面に板状圧痕
15	土器	ロクロかわらけ小	(6.6)	(4.8)	2.3	1/4　胎土:白色針状物質　明橙色
16	土器	ロクロかわらけ小	8.1	5.1	2.6	3/4　胎土:白色針状物質　明橙色　外底面に板状圧痕
17	土器	ロクロかわらけ大	(12.8)	—	[4.2]	1/8　胎土:白色針状物質　黄橙色
18	陶器	瀬戸天目碗	—	—	[3.8]	口小片　胎土:緻密　灰黄色/黒色（鉄釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ
19	陶器	瀬戸小鉢	—	—	[3.2]	口小片　胎土:緻密　灰色/黒色（鉄釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
20	陶器	瀬戸平碗	—	—	[2.8]	口小片　淡灰黄色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅲ･Ⅳ
21	陶器	瀬戸平碗	—	—	[2.4]	口小片　灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
22	陶器	瀬戸浅碗	—	—	[2.9]	口小片　胎土:赤色粒　灰白色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ･Ⅱ
23	陶器	瀬戸平碗	—	—	[5.5]	口小片　胎土:赤色粒　淡灰橙色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ
24	陶器	瀬戸平碗	—	5.3	[1.6]	底2/3　胎土:赤色粒　淡黄橙色　古瀬戸後期様式Ⅳ古
25	陶器	瀬戸小鉢	—	4.4	[1.5]	底1/2　胎土:赤色粒　淡灰黄色/緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅱ･Ⅲ
26	陶器	瀬戸縁釉小皿	(10.9)	—	[2.2]	口1/8　淡黄橙色/黄緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅳ新
27	陶器	瀬戸縁釉小皿	(11.7)	—	[1.5]	口1/8　淡灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅱ
28	陶器	瀬戸縁釉小皿	—	—	[1.5]	口小片　淡灰黄色/暗褐色（鉄釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
29	陶器	瀬戸縁釉小皿	—	(5.7)	[1.1]	底1/3　淡灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅱ･Ⅲ
30	陶器	瀬戸卸皿	—	—	[3.7]	口小片　淡灰黄色/淡黄緑色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅲ
31	陶器	瀬戸卸皿	—	(6.8)	[1.4]	底1/3　淡灰黄色/淡灰緑色（内面灰釉）　古瀬戸中期様式
32	陶器	瀬戸直縁大皿	—	—	[3.8]	口小片　淡灰黄色/淡灰黄色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅳ古
33	陶器	瀬戸直縁大皿	—	—	[4.2]	口小片　淡灰黄色/淡灰黄色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
34	陶器	瀬戸卸目付大皿	—	—	[3.8]	口小片　胎土:赤色粒　灰白色/灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅳ古
35	陶器	瀬戸折縁深皿	—	—	[3.1]	口小片　灰白色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅱ
36	陶器	瀬戸折縁深皿	—	—	[1.0]	口小片　灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅱ
37	陶器	瀬戸折縁深皿	—	—	[1.5]	口小片　淡灰黄色/淡灰黄色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅱ

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
38	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	[1.4]	口小片　胎土:赤色粒　淡黄橙色/緑白色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅱ
39	瀬戸	瀬戸 折縁深皿	—	—	[1.5]	口小片　胎土:緻密　淡灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
40	陶器	瀬戸 筒形香炉	(14.8)	—	[4.3]	口1/8　胎土:赤色粒　淡灰橙色/灰緑色　古瀬戸後期様式Ⅳ古
41	陶器	東濃 四耳壺	(10.0)	—	[3.0]	口1/6　胎土:赤色粒　淡灰橙色/黄緑色（灰釉）　6型式併行
42	陶器	瀬戸 燭台Ⅱ類	—	—	—	受け皿部口小片、傾き曖昧　胎土:赤色粒　灰白色/淡灰緑色（灰釉） 古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ
43	陶器	常滑 甕	—	—	[5.5]	口小片　8型式か
44	陶器	常滑 甕	—	—	[5.6]	口小片　8型式か
45	陶器	常滑 甕	—	—	[3.8]	口小片　8型式か
46	陶器	常滑 甕	—	—	[4.5]	口小片　8型式か
47	陶器	常滑 転用研磨具	長さ 5.2	幅 5.6	厚さ 1.6	甕胴部片　割れ口の一辺が磨耗
48	須恵器?	転用研磨具	長さ 4.7	幅 3.3	厚さ 1.5	東海産須恵器or猿投窯産の壺頸部片か　割れ口の一辺が磨耗
49	土器	鍔釜	(19.0)	—	[2.6]	口1/8　白橙色　鍔下部に煤付着
50	瓦質土器	火鉢	(30.8)	—	[5.0]	口1/10　胎土:赤色粒、白色粒　灰黒色/淡黄橙色　ⅠB類
51	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.5]	口小片　胎土:白色粒　灰橙色　Ⅲ類
52	瓦質土器	風炉	—	—	—	胴小片、透かし窓部分か　胎土:赤色粒、白色粒　黒褐色
53	磁器	白磁 碗	—	—	2.0	口小片　胎土:堅緻　白色
出土遺物(2)（図7）						
54	土製品	鞴羽口	長さ [4.6]	外径 (7.0)	孔径 (3.0)	端部　炉体との結合部が熔解･ガラス化
55	石製品	硯	長さ [15.5]	幅 7.4	高さ [2.0]	胴小片　胎土:細砂質。角閃石　色調:褐色～黒褐色 胴部外面鋸歯状沈線区画内に単節LR縄文充填　文様帯以外はナナメハケ→ヘラミガキ
56	石製品	砥石	長さ [3.9]	幅 2.6	厚さ 0.6	仕上げ砥　両端欠損　表一面を使用
57	鉄製品	釘	長さ 8.3	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
58	鉄製品	釘	長さ [6.3]	0.8	1.0	端部欠損
59	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	皇宋通寶（真書）　中国北宋代、1038年初鋳
60	土師器	坩	(12.6)	—	[4.3]	口1/10　胎土:白色針状物質、角閃石　赤褐色（内外面赤彩）
61	土師器	高坏	—	(9.2)	[3.0]	脚1/4　胎土:白色針状物質、角閃石　淡橙色
62	土師器	高坏	—	—	[7.0]	脚部　胎土:白色粒　橙色
63	土器	深鉢?	—	—	—	胴小片　胎土:角閃石　黄橙色
64	土器	かわらけ	(6.6)	(3.8)	2.1	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石　橙色
65	陶器	瀬戸 緑釉小皿	—	—	[1.7]	口小片　淡灰黄色/緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
66	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[3.6]	口小片　7型式頃か
67	陶器	常滑 甕	—	—	[9.3]	口小片　7型式
68	陶器	常滑 甕	—	—	[7.2]	口小片　8型式
69	舶載陶器	緑釉陶器 盤	—	—	[3.8]	口小片　胎土:黒色粒　灰色/緑色（緑釉）　体部内面は無釉
70	鉄製品	釘	長さ 4.6	幅 0.8	厚さ 0.8	完形
71	土器	ロクロかわらけ 小	7.1	4.8	2.2	完形　50g　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色　外底面に板状圧痕
72	土器	ロクロかわらけ 大	(11.8)	(7.0)	3.3	1/6　胎土:白色針状物質、角閃石　橙褐色　器面全体に磨耗
73	陶器	瀬戸 平碗	(16.2)	—	[4.8]	口1/6　胎土:赤色粒　黄橙色/灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅳ古
74	陶器	瀬戸 緑釉小皿	—	(4.8)	[1.7]	底1/3　胎土:赤色粒　淡灰橙色/灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ

遺物番号	種別	器種	法量（cm）			その他の特徴
			口径	底径	器高	
75	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	—	口小片、傾き曖昧　胎土:赤色粒　淡灰橙色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ
76	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[6.9)	口小片　9～10型式
77	磁器	青磁 鎬蓮弁文碗	—	—	[2.4]	口小片　龍泉窯系Ⅱ-b類
78	須恵器	坏蓋	—	—	[1.8]	天井部　灰色　東海産か
79	土器	壺	—	—	[5.6]	口小片　胎土:角閃石　橙褐色　端面に単節LR縄文→棒状浮文
80	鉄製品	釘	長さ [5.7]	幅 0.7	厚さ 0.8	端部欠損
81	土器	ロクロかわらけ 小	7.2	3.7	2.7	2/3　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色　外底面に板状圧痕　底中心に穿孔
82	土器	ロクロかわらけ 大	(12.2)	—	[2.4]	口1/8　胎土:白色針状物質、角閃石　黄橙色
83	陶器	瀬戸 卸目付大皿	—	—	[3.2]	口小片　淡黄橙色/淡黄緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅳ古
84	石製品	石核	長さ 3.0	幅 2.2	厚さ 1.2	残存率不明
85	陶器	天目碗	—	—	—	体小片、傾き曖昧　胎土:緻密　淡灰褐色/黒褐色（鉄釉）　中国産ヵ
86	陶器	瀬戸 碗形鉢	—	—	[6.0]	口小片　胎土:赤色粒　淡灰黄色/淡黄緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ
87	陶器	瀬戸 平碗	—	—	[3.3]	口小片　胎土:緻密　淡灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅲ
88	陶器	瀬戸 碗形鉢	—	—	[4.0]	口小片　胎土:緻密　淡灰黄色/淡灰緑色（灰釉）　古瀬戸中期様式Ⅲ･Ⅳ
89	陶器	瀬戸 卸皿	—	(7.0)	[1.1]	底1/4　淡灰黄色/淡灰黄色（灰釉）　古瀬戸中期様式
90	陶器	瀬戸 折縁深皿	—	—	—	体小片、傾き曖昧　胎土:緻密　淡灰橙色/灰緑色（灰釉）　古瀬戸後期様式Ⅰ・Ⅱ
91	鉄製品	小札	長さ [5.1]	幅 2.7	厚さ 0.2	下端欠損、4/5ほど残存か
92	土器	ロクロかわらけ 小	(8.2)	(6.0)	2.0	1/3　胎土:白色針状物質、角閃石、赤色粒　黄橙色

・ロクロかわらけの底面調整は、[内底面ナデ・外底面板状圧痕] を基本とする。
・古瀬戸製品の器種判別と様式認定は、藤澤良祐氏による。

第五章　調査成果のまとめ

本地点では、2 枚の中世遺構面が検出された。1 面では山裾に沿って水切り溝が検出され、2 面では岩盤削平面上に土坑や浅い窪みが検出された。両遺構面とも非常に散漫な遺構分布で建物痕跡はなく、ここを居住域とした形跡は窺えなかった。遺物では、2 面土坑 3 の埋土から出土したロクロかわらけの小皿が本地点では最も古い様相を示しており、13 世紀後葉～ 14 世紀前葉頃の所産と見ている。2 面上～ 1 面の造成土からは古瀬戸後期様式のⅢ期まで下る灰釉平碗が出土しており、室町時代以降に新たな盛り土造成が進んだことが考えられる。1 面溝 1 や 1 面上に堆積する遺物包含層からは古瀬戸後期様式のⅣ期まで下る碗・皿が出土しており、15 世紀中葉～後半の年代観を示している。常滑甕は口縁部形態から 8 型式が主体と見え、古瀬戸製品よりは古い遺物様相である。この段階のかわらけはロクロ成形品のみで大・小とも器壁が厚く断面逆台形を呈する。他に瓦質土器の土風炉など、全体として 1400 年を前後する時期の様相である。よって本地点では、鎌倉時代末期～南北朝・室町期にわたって平場造成に伴う土地利用が開始・進展した状況が見て取れた。これは、台山遺跡における他の調査地とも概ね同様の傾向といえる。古瀬戸製品には燭台や香炉が含まれるものの、主体となるのは緑釉小皿や平碗、折縁深皿などの雑器類であった。遺構・遺物ともに少なく人口が増加したような形跡は窺えなかった反面、岩盤を削平しての平場造成は大規模な地形改変といえ、造成の労に見合った土地利用となっていない。消去法的な考察にはなるが、塔頭など小堂宇の建築のために造成が進められたものと理解したい。

付編　台山遺跡の花粉分析とプラント・オパール分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鎌倉市山ノ内 860 番 2 に所在する台山遺跡において、花粉分析用とプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析とプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

２．試料と方法

分析試料は、Ｉ区東壁セクションから採取された 3 点（①、⑧、⑬）である（表 1)。いずれも地業層の構成土と考えられている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

2-1．花粉分析

試料(湿重量約 3g)を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉・胞子を全て数えた。

表１　分析試料一覧表

試料No.	採取地点	性質	土相
①	Ｉ区東壁セクション	地業層構成土	にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト
⑧			暗褐色（10YR3/4）シルト
⑬			にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト

2-2．プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ（直径約 0.04mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ～ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、保存状態の良好な植物珪酸体を選んで写真を撮り、図版 1 に載せた。

３．結果

3-1．花粉分析

今回の分析試料にはほとんど花粉化石が含まれておらず、3 試料を検鏡した結果、イネ科とツリフネソウ属、ヨモギ属、単条溝胞子が検出されたのみである（表 2)。なお、花粉化石の産出量が極めて少ないため、花粉分布図は示していない。

表２　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	①	⑧	⑬
草本				
Gramineae	イネ科	－	1	－
Impatiens	ツリフネソウ属	1	－	－
Artemisia	ヨモギ属	1	－	－
シダ植物				
trilete type spore	三条溝胞子	8	3	5
Arboreal pollen	樹木花粉	－	－	－
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	1	－
Spores	シダ植物胞子	8	3	5
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	10	4	5

3-2．プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1g 当りの各プラント・オパール個数を求めた。一覧表を表 3 に、分布図を図 1 に示した。以下に示す各分類群の

プラント・オパール個数は、試料 1g 当りの検出個数である。

3 試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 7 種類の機動細胞珪酸体が確認できた。3 試料の組成に顕著な相違はなく、ともにイネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。それぞれの産出量はイネ機動細胞珪酸体が 24,200 ～ 39,800 個、ネザサ節型機動細胞珪酸体が 95,700 ～ 61,000 個、ササ属型機動細胞珪酸体が 1,200 ～ 5,000 個、他のタケ亜科機動細胞珪酸体が 19,900 ～ 32,400 個、キビ族機動細胞珪酸体が 60,000 ～ 87,300 個、ウシクサ族機動細胞珪酸体が 58,700 ～ 77,300 個である。それ以外では、イネの籾殻に形成される植物珪酸体（イネ穎破片）やポイント型珪酸体などの産出が見られた。

表３　試料 1g 当りのプラント・オパール個数

	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	ササ属型（個/ｇ）	他のタケ亜科（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	ポイント型珪酸体（個/ｇ）
①	33,700	3,700	79,800	1,200	32,400	2,500	87,300	77,300	3,700
⑧	39,800	3,700	61,000	5,000	19,900	5,000	66,000	75,900	1,200
⑬	24,200	3,800	95,700	2,600	30,600	1,300	60,000	58,700	5,100

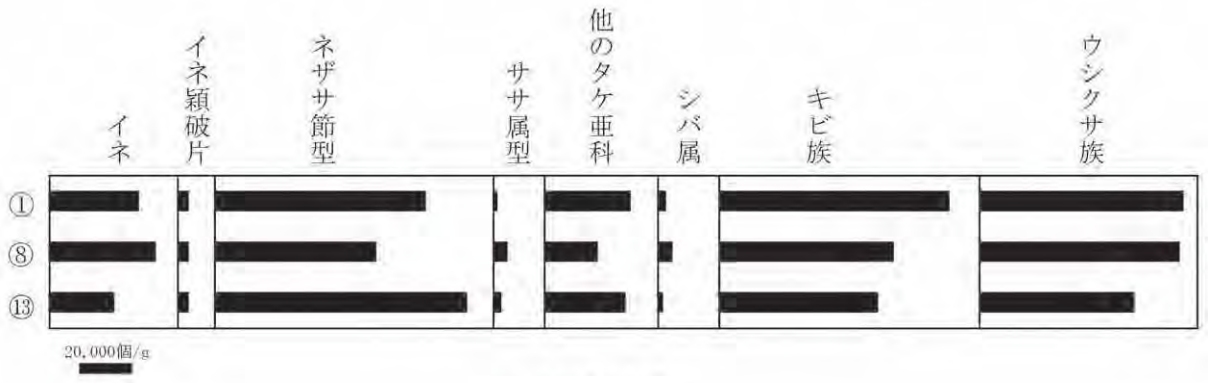
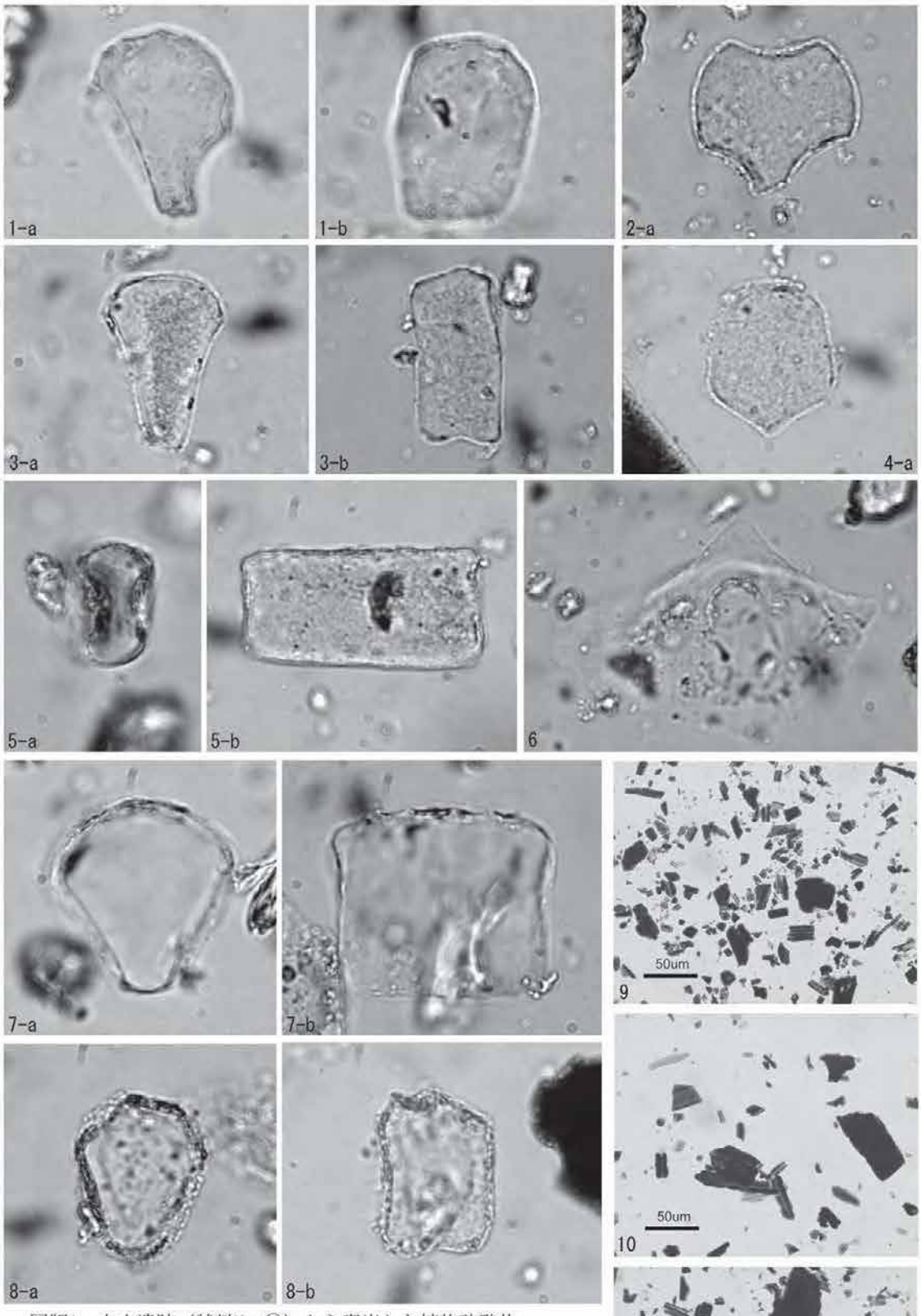


図 1　植物珪酸体分布図

4. 考察

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。遺跡は台地上に位置しており、試料は地業層の構成土から採取されているため、酸化的環境に晒される機会が多かったと推測され、それが花粉化石が残っていない理由と思われる。よって、花粉分析から古植生について言及するのは難しい。

一方で、乾燥状態に晒されても分解されない植物珪酸体は、分析試料から多く産出した。3 試料の珪酸体組成に顕著な相違はなく、いずれの試料においてもイネ機動細胞珪酸体やネザサ節型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。イネ機動細胞珪酸体の産出から、試料採取地点周辺におけるイネの葉身の存在が推測される。また、イネ機動細胞珪酸体とともにイネ穎破片の産出も見られ、イネの籾殻も存在していたと思われる。ネザサ節型機動細胞珪酸体については、遺跡周辺の林縁部などに生育していたネザサ節のササ類からもたらされたと思われる。また、キビ族機動細胞珪酸体については台地上に生育する野生種からもたらされたと思われる。ウシクサ族機動細胞珪酸体についても同じく台地上に生育していたススキやチガヤなど、乾燥的環境に生育するウシクサ族からもたらされたものであろう。



図版1　台山遺跡（試料No.①）から産出した植物珪酸体
および花粉分析プレパラート写真

1. イネ機動細胞珪酸体　2. シバ属機動細胞珪酸体
3. ウシクサ族機動細胞珪酸体　4. ササ属型機動細胞珪酸体
5. キビ族機動細胞珪酸体　6. イネ穎破片
7. ネザサ節型機動細胞珪酸体　8. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体
a. 断面　b. 側面
9. 試料No.①　10. 試料No.⑧　11. 試料No.⑬

１．調査地遠景（東から）

２．Ⅰ区 表土掘削状況（北西から）

３．Ⅰ区１面 作業風景（南東から）

４．Ⅰ区１面 全景（東から）

５．Ⅰ区１面 溝１（北から）

６．Ⅰ区１面 溝１（北東から）

７．Ⅰ区１面 溝１ 土層断面（北から）

８．Ⅰ区２面 全景（東から）

図版２

１．Ⅱ区 表土掘削状況（西から）

５．Ⅱ区南壁 土層断面（北から）

２．Ⅱ区１面 全景（東から）

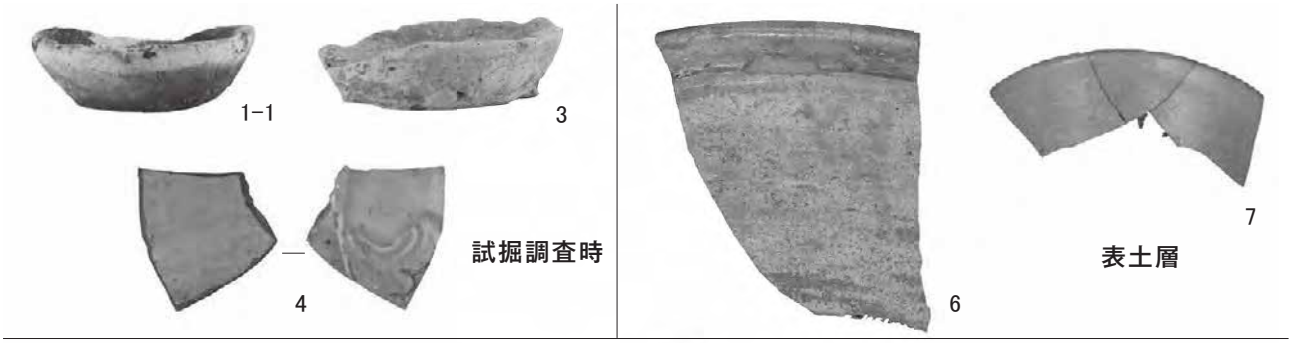
６．Ⅱ区２面 全景（東から）

３．Ⅱ区１面 溝１（南西から）

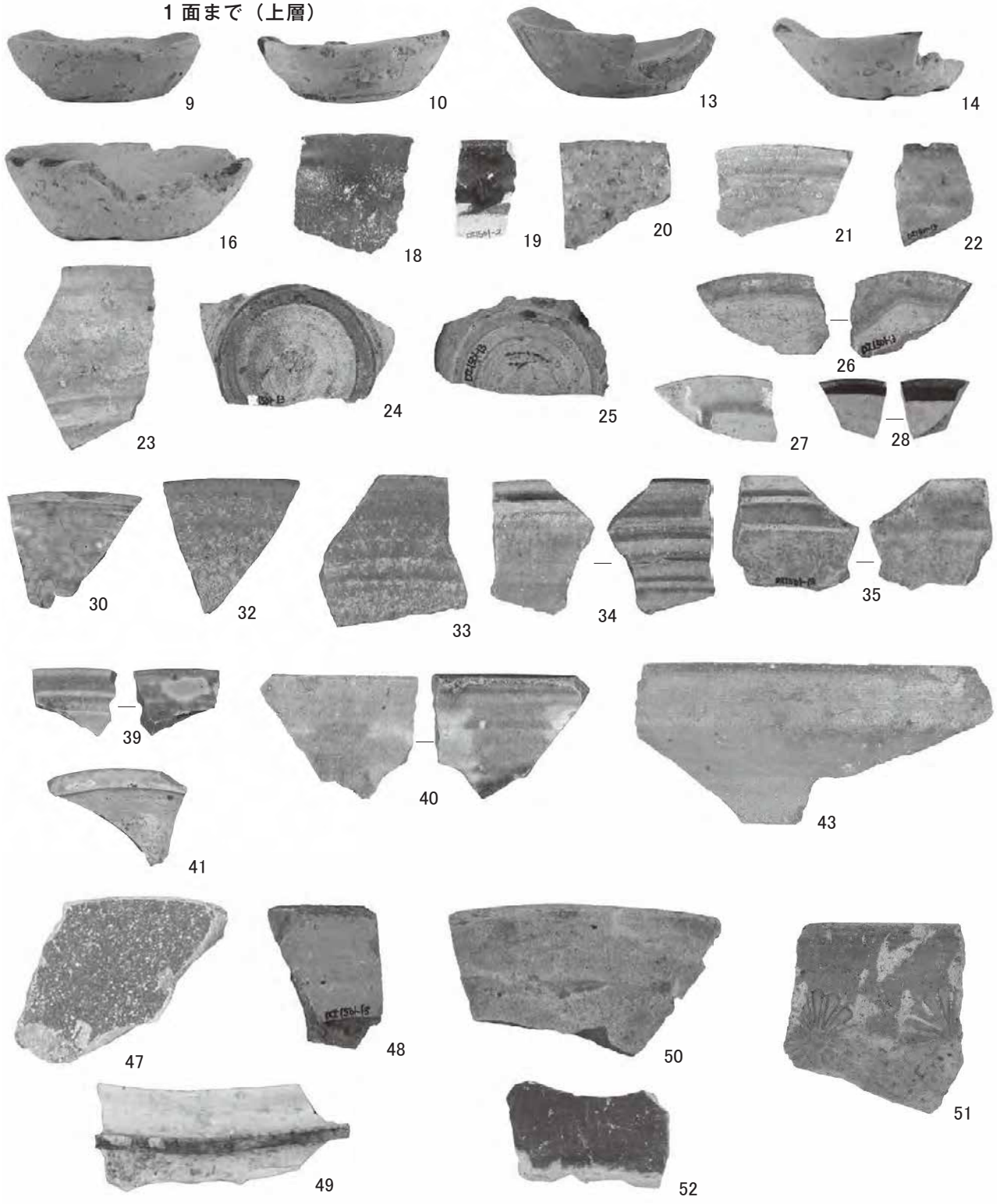
７．Ⅱ区２面 土坑３（南から）

４．Ⅱ区１面 溝１かわらけ出土状況（南東から）

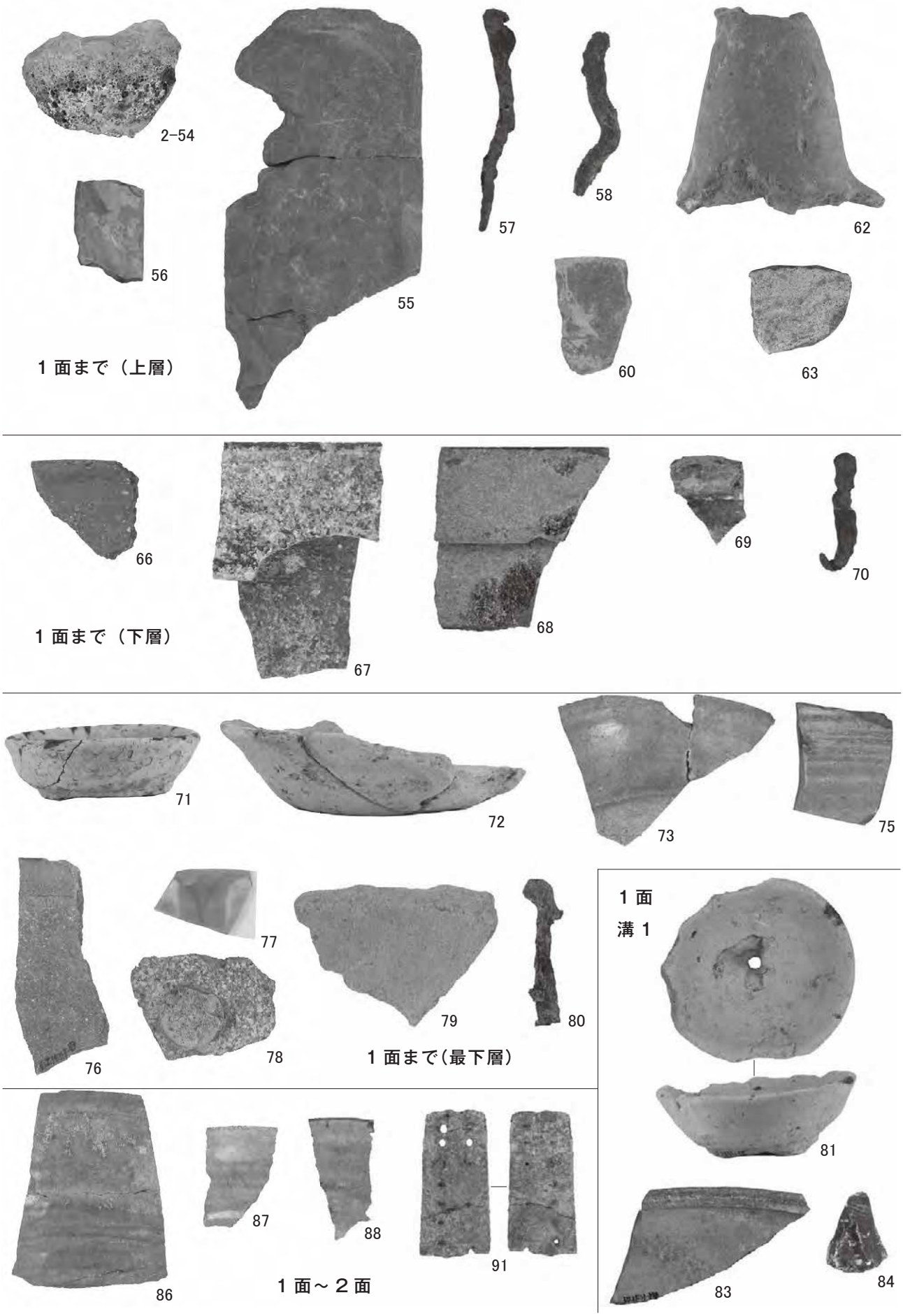
８．Ⅱ区 測量作業状況（南西から）


1-1
3
4
試掘調査時
6
7
表土層

１面まで（上層）


9
10
13
14
16
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
30
32
33
34
35
39
40
41
43
47
48
50
51
49
52

図版４


2-54
56
55
57
58
62
60
63
1 面まで（上層）
66
67
68
69
70
1 面まで（下層）
71
72
73
75
76
77
78
79
80
1 面まで(最下層)
1 面
溝 1
81
83
84
86
87
88
91
1 面～２面

報 告 書 抄 録

ふ　り　が　な	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書　名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副　書　名	平成２８年度調査報告
巻　次	３３　（第２分冊）
シ　リ　ー　ズ　名	
シ　リ　ー　ズ　番　号	
編　著　者	押木弘己／押木弘己／押木弘己／松吉里永子／押木弘己
編　集　機　関	鎌倉市教育委員会
所　在　地	〒２４８－８６８６　鎌倉市御成町１８番１０号
発　行　年　月　日	西暦２０１７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市 大町二丁目 2340番1	14204	245	３５° １８’ ４８″	１３９° ３３’ ２１″	20110425 ～ 20110708	72.00	個人専用 住　宅 （柱状改良工事）
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町六丁目 1506番11の一部	14204	231	３５° １８’ ５２″	１３９° ３３’ ５０″	20130415 ～ 20130531	55.00	個人専用 住　宅 （柱状改良工事）
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	神奈川県鎌倉市 雪ノ下一丁目 403番14	14204	282	３５° １９’ １９″	１３９° ３３’ ２１″	20131010 ～ 20131227	41.80	個人専用 住　宅 （鋼管杭工事）
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜三丁目 194番71	14204	194	３５° １８’ ４８″	１３９° ３２’ ２７″	20131101 ～ 20140307	140.00	個人専用 住　宅 （柱状改良工事）
だいやまいせき 台山遺跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内 860番2の一部	14204	29	３５° ２０’ １７″	１３９° ３２’ ３０″	20150428 ～ 20150623	69.60	個人専用 住　宅 （鋼管杭工事）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
こめまちいせき 米町遺跡	都　市	古　代 中　世 近　世	道路、井戸、溝、炉穴、土坑、ピット	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品、金属製品、石製品、土師器	中世は13世紀前半～14世紀前半で、東西道路と側溝、大型井戸などを確認。
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	屋敷跡	弥生時代 古墳時代 中　世	溝状遺構、ピット	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、土師器	中世遺構は13世紀後半～14世紀前半。弥生末～古墳前期の遺物は充実。
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	屋敷跡	中　世	溝、井戸、ピット列、土坑、カマド状遺構	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、金属製品、石製品	13世紀前半～14世紀前半の遺構を検出。溝＋柱穴列での土地区画・変遷を確認。
はせこうじしゅうへんいせき 長谷小路周辺遺跡	都市	古　代 中　世	竪穴住居 土坑、ピット	土師器、須恵器、金属製品、石製品 かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、金属製品、石製品	９世紀後葉頃と考えられる生活面を検出。13世紀後半から14世紀前半の生活面を検出。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　33
平成 28 年度発掘調査報告
（第 2 分冊）

発行日　平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行　　鎌倉市教育委員会
印　　刷　　株式会社ポートサイド印刷